

529-252



\*1200700748050\*

送初

菊

池

寛

集



新  
菊  
池  
寬  
集



新  
選  
菊  
池  
寬  
集



529

252

新選菊池寛集目録  
短篇小説

藤十郎の戀	一頁
船醫の立場	一四頁
笑ひ	二五頁
亂世	三四頁
俊寛	五〇頁
仇討三態	六七頁
恩を返す話	八四頁
三浦右衛門の最期	九三頁
頸縊り上人	一〇〇頁
西南奇聞	一〇八頁



I 種

W



\*1200700748050\*



ある抗議書	一一四頁
神の如く弱し	一三〇頁
死床の願ひ	一四四頁
島原心中	一五六頁
晩年	一七〇頁
たちあな姫	一八二頁
羽衣	一九二頁
戯曲	
敵討以上(三幕六場)	一九七頁
茅の屋根(一幕)	二二〇頁
岩見重太郎(一幕二場)	二三二頁
奇蹟(一幕)	二四四頁

浦の苦屋(一幕二場)	二五三頁
玄宗の心持(一幕)	二六四頁
世評(一幕二場)	二七八頁
貞操(一幕)	二八四頁
戀愛病患者(一幕)	二九四頁
兄の場合(一幕)	三〇七頁
舞臺に立つ妻(一幕)	三一六頁
ある兄弟(一幕)	三二五頁
時の氏神(一幕)	三三七頁
順番(一幕)	三五二頁
温泉場小景(一幕)	三六四頁
長篇小説 火華	三七三頁



# 藤十郎の戀

元祿と云ふ年號が、何時の間にか十餘りを重ねたある年の二月の末である。

都では、春の匂ひが凡ての物を包んで居た。つい此の間迄は、頂上の處丈は、斑に消え残つて居た叡山の雪が春の柔い光の下に解けてしまつて、跡には薄紫を帯びた黄色の山肌が、くつきりと大空に浮んで居る。その空の色迄が、冬の間の腐つたやうな灰色を、洗ひ流して日一日緑に冴えて行つた。

鴨の河原には、丸葉柳が芽ぐんで居た。その礫の間には、自然咲の菫や、蓮華が各自の小さい春を領して居た。河水は日増に水量を加へて、軽い藍色の水が、處々の川瀬にせかれ、涼々の響を揚げた。

黒木を賣る大原女の暢びやかな聲までが春らしい心を唆つた。江戸へ下る西國大名の行列が、毎日のやうに都の街々を過ぎた。彼等は三條の旅宿に二三日の逗留をして、都の春を十分に樂しむと、また大鳥毛の槍を物々しげに振立て、三

條大橋の橋板を、踏み轟かしながら、遙な東路へと下るのであつた。

東國から、九州四國から、また越路の端からも、本山参りの善男善女の群が、ぞろ／＼と都をさして續いた。そして彼等も春の都の渦卷の中に、幾日かを過すのであつた。

その裡に、花が咲いたと云ふ消息が、都の人々の心を騒がし始めた。祇園清水東山一帶の花が先づ開く、嵯峨や北山の花が之に續く。かうして都の春は、愈々爛熟の色を爲すのであつた。

が、その年の都の人達の心を、一番烈しく狂はせて居たのは、四條中島都萬太夫座の坂田藤十郎と、山下半左衛門座の中村七三郎との、去年から持越しの競争であつた。

三ヶの津總藝頭とまで、讃へられた坂田藤十郎は傾城買の上手として、やつしの名人として天下無敵の名を擡にして居た。が、去年霜月、半左衛門座の顔見世狂言に、東から上つた少長中村七三郎は、江戸歌舞伎の統領として、藤十郎と同じくやつしの名人であつた。二人は同じやつしの名人として、



江戸と京との歌舞伎の爲にも、烈しく相争はねばならぬ宿縁を、持つて居るのであつた。

京の歌舞伎の役者達は、中村七三郎の都上りを聞いて皆異常な緊張を示した。が、その人達の期待や恐怖を裏切つて七三郎の顔見世狂言は、意外な不評であつた。見物は口々に、「江戸の名人ぢやと云ふ程に、何ぞ珍らしい藝でもするかと思つて居たに、都の藤十郎には及び付かぬ腕ぢや」と罵つた。七三郎を識する者は、たゞ素人の見物丈ではなかつた。彼の舞臺を見た役者達迄も、

「江戸の少長は、評判倒れの御仁ぢや、尤も江戸と京とでは評判の目安も違ふほどに江戸の名人は、京の上手にも及ばぬものぢや。所詮物真似狂言は都のもの」と極はまつた」と、勝誇るやうに云ひ振れた。が、七三郎を識する噂が、藤十郎の耳に入ると、彼は眉を蹙めながら、

「われらの見る所は、また別ぢや。少長どのは、まことに至藝のお人ぢや。われらには、怖ろしい大敵ぢや」と、只一人世評を斥けたのであつた。

## 二

果して藤十郎の評價は、狂つて居なかつた。顔見世狂言にひどい不評を招いた中村七三郎は、年が改まると初春の狂言に、「傾城淺間ヶ嶽」を出して、巴之丞の役に扮した。七三郎

の巴之丞の評判は、すさまじいばかりであつた。

藤十郎は、得意の夕霧伊左衛門を出して、之に對抗した。二人の名優が、舞臺上の競争は、都の人々の心を湧き立たせるに十分であつた。が新しき物を追ふのは、人心の常である。口性なき京童は、

「藤十郎どの、伊左衛門は、いかにも見事ぢや。が、われらは幾度見たか數へられぬ程ぢや、去年の彌生狂言も慥か伊左衛門ぢや。もう伊左衛門には堪能いたして居るわ。それに比べれば、七三郎どの、巴之丞は、都には初ての狂言ぢや。京の濡事師とはまた違ふて、やさしい裡にも、東男のきつい所があるのが、てんと堪らぬ所ぢや」と口々に云ひ囃した。

動き易い都の人心は、十年譏嘆し續けた藤十郎の王座から、ともすれば離れ始めさうな氣勢を示した。萬太夫座の木戸よりも、半左衛門座の木戸の方へと、より、澤山の群衆が、流れ始めて居た。

春狂言の期日が盡きると、萬太夫座は直ぐ千秋樂になつたのにも拘らず、半左衛門座は尙打ち續けた。一月に入つても、客足は少しも落ちなかつた。二月が終りになつて、愈々彌生狂言の季節が、近づいて來たのにも拘はらず、七三郎は尙巴之丞の役に扮して、都大路の人氣を一杯に背負ふて居た。

「半左衛門座では、彌生狂言も「傾城淺間ヶ嶽」を打ち通すさうぢやが、かやうな例は、玉村千之丞河内通ひの狂言に、

なかつた。

## 三

と、云つて藤十郎は、妄に七三郎を恐れて居るのでは無い。もとより、團十郎の幼稚な兒騙しにも似た荒事とは違ふて、人間の眞實な動作を宛らに、模して居る七三郎の藝を十分に尊敬もすれば、恐れもした。が、藤十郎は藝能と云ふ點からだけでは、自分が七三郎に微塵も劣らなかりでなく、寧ろ右際勝りであることを十分に信じた。従つて、今迄足り満ちて居た藤十郎の心に不安な空虚と不快な動揺とを植ゑ付けたのは、七三郎との對抗などと云ふ事よりも、もつと深いもつと本質的なある物であつた。

彼は、二十の年から四十幾つと云ふ今迄、何の不安もなしに、濡事師に扮して來た。そして、藤十郎の傾城買と云へば、龍骨車にたよる里の童にさへも、聞えて居る。また京の三座の見物達も、藤十郎の傾城買の狂言と云へば、何時もながら惜し氣もない喝采を送つて居た。彼が伊左衛門の紙衣姿になりさへすれば、見物はたわいもなく喝采した。少しでも、客足が薄くなると、彼は定まつて、伊左衛門に扮した。而も、彼の伊左衛門役は、トラムブの切札か何かのやうに、多くの見物と喝采とを、藤十郎に保證するのであつた。

が、彼の心の裡で、何時となしに、自分の藝に對する不安

百五十日打ち續けて以來、絶えて聞かぬ事ぢや。七三郎どのの人氣は、前代未聞ぢや」と、巷の風説は、たゞ此の沙汰ばかりのやうであつた。

かうした噂が、かまびすしくなるにつれ、私に腕を拱いて考へ始めたのは、坂田藤十郎であつた。

三ヶ津總藝頭と云ふ美稱を、長い間享受して來た藤十郎は自分の藝に就ては、何等の不安もないと共に、十分な自信を持つて居た。過る未年に才牛市川團十郎が、日本隨一市川のかまびすしい名聲を擔うて東からはる／＼と、都の早雲長吉座に上つて來た時も、藤十郎の自信はビクともしなかつた。お江戸團十郎見しやいな」と、江戸の人々が誇る此の珍客を見る爲めに、都の人々が雪崩を爲して、長吉座に押し寄せて行つた時も、藤十郎は少しも騒がなかつた。殊に、彼が初めて團十郎の舞臺を見た時に、彼は心の中で竊に江戸の歌舞伎を輕蔑した。彼は、團十郎が一流編み出したと云ふ荒事を見て、何と云ふ粗野な興さめた藝だらうと思つた。彼の腹心の弟子の山下京右衛門が、

「太夫様、團十郎の藝をいかゞ思召さる、江戸自慢の荒事とやらを何う思召さる」と訊いた時は、憤ましかかな苦笑をしながら、「實事の奥義の解せぬ人達のする事ぢや。また事實の面白さの解せぬ人達の見芝居ぢや」と一言の下に貶し去つた。が今度の七三郎に對しては、才牛をあしらうやうには行か



を感じて居た。いつも、同じやうな役に扮して、舌たるい傾城を相手の臺詞を云ふことが、彼の心の中に、ぼんやりとした不快を起すことが、度重なるやうになつて居た。が、彼は未だ、いだらう、未だ、いだらうと思ひながら一日延ばしのやうに、自分の仕馴れた喝采を獲るに極つた狂言から、脱け出さうと云ふ氣を起さなかつたのである。

かうした藤十郎の心に、怖ろしい警鐘は、頭傳へられたのだ。また何時もながら伊左衛門か。藤十郎どの、紙衣姿はもう幾度見たか、數へ切れぬほどぢや」と、云ふ巷の評判は藤十郎に取つては致命的な言葉であつた。彼が、怖れたのは七三郎と云ふ敵ではなかつた。彼の大敵は、彼自身の藝が行き詰まつて居ることである。今迄は、比較される物のない爲に、彼の藝が行き詰つて居る事が、無智な見物には分らなかつたのである。彼は七三郎の巴之丞を見た時に、傾城買の世界とは、丸切り違つた新しい世界が、舞臺の上に、浮き出されて居る事を感じない譯には、行かなかつた。たゞ浮ついた根も葉もないやうな傾城買の狂言とは違ふて、一步深く人の心の裡に踏み入つた世界が、舞臺の上に展開されて來るのを認めない譯には行かなかつた。見物は、傾城買の狂言から、たわいもなく七三郎の舞臺へ、惹き付けられて行つた。が、藤十郎は、見物のたわいもない妄動の裡に深い尤もな理由のあるのを、看取しない譯には行かなかつたのである。

小手先の藝の問題ではなかつた。彼は、もつと深い大切な所で、若輩の七三郎に一足取残されやうとしたのである。七三郎の巴之丞が、洛中洛外の人氣を喰つて、彌生狂言をも、同じ藝題を打ち續けると云ふ噂を聞きながら、藤十郎は烈しい焦燥と不安の胸を抑へて、ちつと思案の手を拱ねいたのである。その時に、ふと彼の心に浮んだのは、浪華に住んで居る近松門左衛門の事であつた。

四

それは、二月の末のある宵であつた。四條中島の東の端、鴨川の流れ近く瀬鳴の音が、手に取つて聞えるやうな茶屋宗清の大廣間で、萬太夫座の彌生狂言の顔つなぎの宴が開かれて居た。廣間の中央、床柱を背にして、銀燭の光を眞向に浴びながら、どんすの鏡蒲團の上に、悠つたりと坐り、心持脇息に身を靠せて居るのは、坂田藤十郎であつた。茶せんに結つた色白の面は、四十を越した男とは、思はれぬ程の美しさに輝いて見えた。下には鼠縮緬の引かへしを着、上には黒羽二重の両面芥子人形の加賀紋の羽織を打ちかけ、宗傳唐茶の疊帯をしめて居た。藤十郎の右に坐つた居るのは、一座の若女形の切波千壽であつた。白小袖の上に、袖の上に紫縮緬の二つ重ねを着、虎膚天鷲絨の羽織に、紫の野良帽子をいたゞいた風

情は、宛ら女の如く艶めかしい。此の二人を圍んで、一座の道化方、くわしや方、若衆方などの人々が、夫々華美な風俗の限を盡くして居並んで居た。その中に、只一人、千筋の羽織を着た質素な風俗をした二十五六の男は、萬太夫座の若太夫であつた。彼は先刻から酒席の間を、彼方此方と廻つて、酒宴の興を取持つて居たが、漸く酩酊したらしい顔に滿面の微笑を湛へながら、藤十郎の前に改めて畏まると、恐る／＼酒盃を前に出した。

「さあ、もう一つお受け下されませ。今度の彌生狂言は、近松様の趣向で、歌舞伎始まつての珍しい狂言ぢやと、都の中はたゞ此噂ばかりぢやげにムります。傾城買の所作は日本無雙と云はれた御身様ぢやが、道ならぬ戀のいきかたは、又格別の御思案がムりませうなハ、と、巧な追従笑ひに語尾を濁した。と、藤十郎と居並んで居る切波千壽は、急に美しい微笑を洩し乍ら、

「ホンに若太夫殿の云ふ通りぢや。藤十郎様には、その邊の御思案が、もうちやんと付いて居る筈ぢや。われらなどは、たゞ藤十郎様に操られて傀儡のやうに動けばよいのぢや」と、合槌を打つた。

藤十郎は、若太夫の差した酒盃を、受け取りはしたものの、彼の言葉にも、千壽の言葉にも、一言も返しをしなかつた。彼は、酒の味が、急に苦くなつたやうに、心持顔を曇めなが

ら、グツと一氣にその酒盃を飲み乾したばかりであつた。

彼は、今宵の酒宴が、始まつて以來、何氣ない風に酒盃を重ねては居たものゝ、心の裡には、可なり烈しい藝術的な苦悶が、渦巻いて居るのであつた。

彼が、近松門左衛門に、急飛脚を飛ばして、割なく頼んだことは、即座に叶へられたのであつた。今迄の傾城買とは、裏と表のやうに、打ち變つた狂言として、門左衛門が藤十郎に、書與へた狂言は、浮ついた陽氣なたわいもない傾城買の濡事とは違つて、命を賭しての色事であつた。打ち沈んだ陰氣な、懸命な命を捨て、する濡事であつた。藝題は「大經師昔曆」と云つて、京の人々の記憶にはまだ新しい室町通の大經師の女房おさんが、手代茂右衛門と不義をして、粟田口に死刑する迄の、呪はれた命懸けの戀の狂言であつた。

藤十郎の藝に取つて、其處に新しい世界が開かれた。が、夫と同時に、前代未聞の狂言に對する不安と焦慮とは、自信の強い、彼の心にも萌さない譯には行かなかつた。

五

藤十郎の心に、さうした屈託があらうとは、夢にも氣付かない若太夫は、芝居國の國王たる藤十郎の機嫌を如何にもして取結ばうと思つたらしく、

「此の狂言に比べましては、七三郎殿の「淺間嶽」の狂言も



童たらしのやうに、曲もなう見えまするわ。前代末聞の密夫の狂言とは、道に門左衛門様の御趣向ぢや。夫に付けましても、坂田様にはかうした變つた戀のお覚えもムりましようなハ、と時にとつての座興のやうに高々と笑つた。

今迄、おし黙つて居た藤十郎の堅い唇が、綻びたかと思ふと、左様な事、何のあつてよいものか、と、苦り切つて吐き出すやうに云つた。「藤十郎は、生れながらの色好みぢやが、まだ人の女房と念ごろした覚えはムらぬわ」と、冷めたい苦笑を洩しながら付け加へた。若太夫は、座興の積りて云つた諧謔を、眞向から突き飛ばされて、興さめ顔に黙つてしまつた。

傍に坐つて居た切波千壽は、一座が白けるのを恐れたのであらう。取做し顔に微笑を含み乍ら、

「ほんに、坂田様の云はれる通りぢや。此千壽とても主ある女房と、念ごろした事はないわいな」と、云ひながら女のやうに美しい口を掩うた。

が、藤十郎は、前よりも一際、苦り切つたまゝであつた。彼は今心の裡で、僅か三日の後に迫つた初日を控へて、藝の苦心に肝膽を砕いて居たのである。彼に取つて其處に可なり危険な試金石が横はつて居る。あれ見よ、密夫の狂言とは、名ばかりで相も變らぬ藤十郎ぢや」と云はれては、自分の藝は水久に廢れるのだと、彼は心の裡に覺悟の腕を堅めて居た。

たゞ、相手の傾城が、人妻に變つたばかりで、昔ながらの藤十郎だとは、夢にも云はせてはならないと、心の裡に思ひ定めて居た。

が、夫かと云つて、藤十郎は、自分で口に出して云つた通り、道ならぬ戀をした覺はさら／＼なかつたのである。元より、歌舞伎役者の常として、色子として舞臺を踏んだ十二三の頃から、數多くの色々な色情生活を閱して居る。四十を越えた今日迄には幾十人の女を知つたか分らない。彼の繪姿を、床の下に敷きながら、焦れ死んだ娘や、彼に對する戀の叶はぬ悲しみから、清水の舞臺から身を投げた女さへない事はない。が、かうした生活にも拘らず、天性律義な藤十郎は、若い時から、不義非道な色事には、一指だに染めることをしなかつた。さうした誘惑に接する毎に、彼は猛然として、之と戦つて來て居る。彼が、役者にも似合はず「藤十郎殿は、物堅い御仁ぢや」と、云はれて、芝居國の長者として、周圍から尊敬されて居るのも、一つにはかうした譯からでもあつた。

従つて、彼は、自分の過去の經驗から、人妻を盗むやうな必死な、空恐ろしい、それと同時に身を燃くやうに烈しい戀に近い場合を、色々と尋ねて見たが、彼のどの戀もどの戀も極めて正當な、物柔かな戀であつて、冬の海のやうに恐ろしい戀や、夏の太陽のやうに烈しい戀の場合は、何う考へても頭に浮かんで來なかつた。

## 六

傾城買の經緯なれば、何んなに微妙にでも、演じ得ると云ふ自信を持つた藤十郎も、人妻との呪はれた惡魔的な、道ならぬ、然し懸命な必死の戀を、舞臺の上に何う演活してよいかは、ほと／＼思案の及ばぬ所であつた。之迄の歌舞伎狂言と云へば、傾城買のたわいもない戯れか、でなければ物眞似の道化に盡きて居た爲に、かうした密夫の狂言などに、頼れるやうな前代の名優の仕残した型などは、微塵も残つて居なかつた。夫かと云つて、彼はかうした場合に、打明けて智慧を借るべき、相談相手を持つて居なかつた。彼の茂右衛門に、おさんを勤める切波千壽は、天性の美貌一つが、彼の舞臺の凡てであつた。たゞ、藤十郎の指圖のまゝに、傀儡の如く動くのが、彼の演技の凡てであつたのだ。

藤十郎は、自分自身の肝膽を搾るより外には、工夫の仕方もなかつたのである。

藤十郎の不機嫌の背後に、さうした根本的な屈託が、潜んで居るとは氣のつかない一座の人々は、白け始めようとする酒宴の座を、何うかして引き立たせようと思つたのだらう、五十の手の届きさうな道化方の老優は、傍に坐つて居た二十を出たばかりの、野郎帽子を着た美しい若衆方を促し立てながら、おどけた連舞を舞ひ始めた。

藤十郎は、二人の舞を振向きもしないで、日頃には似ず大杯を重ねて四度ばかり、したゝかに飲み乾すと、俄に發して來た醉に、座には得堪へられぬやうに、つと席を立ちながら河原に臨んだ廣い縁に出た。

河原の闇の底を流れる川水が、ほのかな光を放つて居る外は、晦に近い夜の空は曇つて、星一つさへ見えなかつた。聲ばかりが飛び交うて居るかのやうに、闇の中に千鳥がち／＼と鳴きしきつて居た。

歌舞伎の長者として、王者のやうな誇を持つて居た藤十郎の心も、蹴合せに負けた鶏のやうに悄氣切つてしまつて居た。彼が、席を立つた爲に、上からの壓迫を取れたやうに、急にはづみかけた酒宴の席のさわがしいどよめきを、後にしながら、彼は知らず／＼靜寂な場所を求めて、勝手を知つた宗清の部屋／＼を通り抜けながら、奥の離座敷を志した。

母屋からは一段と、河原の中に突出て居る離座敷には人の氣勢もなかつた。たゞほんのりと灯つて居る、絹行燈の光の裡に、美しい調度などが、春の夜に適しい艶めいた静けさを保つて居た。藤十郎は、人影の見えぬのを心の中に欣んだ。彼は、床の間に置いてあつた脇息を、取り下すと、右の脇を靠せながら、身を横さまに伸したのである。

が、騒々しい酒宴の席から身を脱れた欣びは、直ぐ消えてしまつて、藝の苦心が再びひしひしと胸に迫つて來る。明日



からは稽古が始まる、肝腎の茂右衛門の行き方が、定まらないでは相手のおさんも其他の人々も何う動いてよいか、思案の仕様もないことになる。己が工夫が拙うては、近松門左が心を砕いた前代未聞の狂言も、あたら京童の笑ひ草にならぬとも限らない。かう思ひながら、藤十郎の胸の中に渦巻いて居る、もどかしさを抑へながら、一途に心その方へ振り向けやうとあせつた。

その時である。母屋の方から、とん／＼と離座敷を指して来る人の足音が聞えて来た。

## 七

折角、さわがしい酒席を逃れて、求め得た静かな場所、藝の苦心を凝らさうと思つて居た藤十郎は、自分の方へ近づいて来る人の足音を聞いて心持眉を顰めぬ譯には行かなかつた。

が、近づいて来る足音の主は、此處に藤十郎が居ようなどは、夢にも氣付かないらしく、足早に長い廊下を通り抜けて、此部屋に近づく儘に、女性らしい衣ずれの音をさせたかと思ふと、會釋もなく部屋障子を押し開いた。が、其處に横たはつて居た藤十郎の姿を見ると、吃驚して敷居際に立ち竦んでしまつた。

「あれ、藤様は茲におはしたのか、これは／＼いかい粗相

をし、云ひながら、女は直ぐ障子を閉ざして、去らうとしたが又立ち直つて「ほんに、このやうに冷える處でさうして御座つては。お風邪など召すとわるい。どれ私が夜のものをかけて進ませせう」と、云ひながら、部屋の片隅の押入から、夜具を取り下ろさうとして居る。

藤十郎は、最初足音を聞いた時、召使の者であらうと思つたので、彼は寝をべつたまゝ、起き直ろうとはしなかつた。が、夫が意外にも、宗清の主人宗山清兵衛の女房お梶である

と知ると、彼は起き上つて、一寸居すまひを正しながら、

「いや之は、いかい御難作ぢやのう」と、會釋をした。

お梶は、もう四十に近かつたが、宮川町の歌妓として若い頃に嬌名を謳はれた面影が、そのくつきりと白い細面の顔に、あり／＼と残つて居る。淺黄統の引かへしに折ひろうどの帯をしめ、薄色の絹足袋をはいた年増姿は又なく艶に美しかつた。藤十郎は、昔から、お梶を知つて居る。若衆方の随一の美形と云はれた藤十郎が美しいか、歌妓のお梶が美しいかと云ふ物争ひは、二十年の昔には四條の茶屋に遊ぶ大盡達の口に出つた事さへある。その頃からの馴染である。が、藤十郎は、今迄は、お梶の姿を心にとめて、見たこともない。たゞ路傍の花に對するやうな、淡々たる一瞥を與へ居たに過ぎなかつた。

が、今宵は、此の人妻の姿が、云ひ知れぬ魅力を以て、ぐ

ん／＼と彼の眼の中に、迫つて来るのを覺えた。密夫と云ふ彼にとつては、未だ踏んで見た事のない戀の領域の事を、此の四五日、一心に思ひ詰めて居た爲だらう。今迄は餘り彼の念頭になかつた人妻と云ふ女性の特別な種類が、彼の心に不思議な魅力を持ち始めて、今お梶の姿となつて、ぐん／＼と迫つて来るやうに覺えた。

藤十郎のお梶を見詰める眸が、異常な興奮で、燃え始めたのは無論である。人妻であると云ふ道德的な柵が取拂れて、その古木が却つて、彼の慾情を培ふ、薪木として投ぜられたやうである。彼は、娘や後家や歌妓や遊女などに、相對した時には、かつて懐いた事のないやうな、不思議な物狂はしい情熱が、彼の心と身體とを、沸々燃やし始めたのである。

## 八

藤十郎の心にさうした、物狂はしい風が起つて居ようとは、夢にも氣付かないらしいお梶は、押入れから白統の夜着を取出すと、藤十郎の背後に廻りながら、ふうわりと着せかけた。

白鳥の胸毛か何かのやうに、暖い柔かい、夜着の感觸を身體一面に味つた時、藤十郎はお梶に對する異常な興奮は、危く爆發しようとした。が、彼の律義な人格は、咄嗟に彼の慾情の妄動をきつぱりと、制し得たのである。藤十郎は、宗山

清兵衛の事を考へた。また、貞淑と云ふ噂の高いお梶の事を考へた。そして自分が、今迄色事をしながらも、正しい道を踏み外さなかつたと云ふ自分自身の誇を考へた。彼のお梶に對して懐いた嵐のやうな激動は忽ち和ぎ始めたのである。

お梶は、平素の通のお梶であつた。彼女は夜着を着せてしまふと「さあ、お休みなされませ。彼方へ行つたら女どもにも水なと運ばせませうわいな」と、愛想笑ひを残して足早に部屋を出やうとした。その刹那である。藤十郎の心にある悪魔的の思付がムラ／＼と湧いて来た。夫は、戀ではなかつた。夫は烈しい慾情ではなかつた。夫は、恐ろしいほど冷めたい理性の思付であつた。戀の場合には、可なり臆病であつた藤十郎は、宛も別人のやうに、先刻の興奮は、丸切り嘘であつたかのやうに、冷靜に、

「お梶どの、ちと待たせられい」と、呼び止めた。

「何ぞ、外に御用があつてか」と、お梶は無邪氣に、振り返つた。剃り落とした眉毛の後が青々と浮んで見える色白の美顔は、絹行燈の灯影を浴びて、ほんのりと艶めかしかつた。

「ちと、御意を得たいことがある程に、坐つてたもらぬかしかう云ひながら、藤十郎は、心持ち女の方へ膝をすませた。

お梶は、藤十郎の息込み方に、少し不安を、感じたのであらう。藤十郎には、餘り近寄らないで、其處に置いてある絹行燈の蔭に、踞まるやうに坐つた。



「改まつて何ぞいのおほよ」と、何氣なく笑ひながら、稍面映ゆげに藤十郎の顔を打ち仰いだ。藤十郎の聲音は、今迄とは打つて變つて、低いけれども、然しながら力強い響を持つて居た。

「お梶どの。別儀ではムらぬが、此の藤十郎は、そなたに二十年来隠して居たことがある。それを今宵は是非とも、聽いて貰ひたいのぢや。思ひ出せば、古いことぢやが、そなたが十六で、われらの二十の秋ぢやつたが、祇園祭の折に、河原の掛小屋で二人一緒に連舞を舞うたことを、よもや忘れはやるまいなあ。われらが、そなたを見たのは、あの時が初めてぢや。宮川町のお梶どのと云へば、いかに美しい若女形でも、足下にも及ぶまいと、兼々人の噂に聽いて居たが、そなたの美しさがよもあれ程であらうとは、夢にも思ひ及ばなかつたのぢや」と、かう云ひながら藤十郎はその大きい眼を半眼に閉ぢながら、美しかつた青春の夢を、うつとりと追うて居るやうな眼付をするのであつた。

## 九

「其時からぢや、そなたを世にも稀な美しい人ぢやと思ひ染めたのは」と、藤十郎は、お梶の方へ双膝を進ませながら、必死の色を眸に浮べて、かう云ひ切つた。

藤十郎に呼び止められた時から、ある不安な期待に、胸を

とどろかせて居たお梶は最初此の美しい男の口から、自分達の華やかな青春の目の、想出話を聴かされて魅せられたやうに、ほのほのと二つの頬を薄紅に染めて居たが、相手の言葉が、急な轉回を示してからは、その顔の色は刹那に蒼ざめて、蹲くまつて居る華奢な身體は、わな／＼戦き始めて居た。

藤十郎は、戀をする男とは、何うして受取れぬ程の澄んだ冷たい眼付で、顔さへ擡げ得ぬ女を刺し透す程に鋭く見詰めて居ながら、聲丈には、烈しい熱情に顫へて居るやうな響を持たせて、

「そなたを見染めた當座は、折があらば云ひ寄らうと、始終念じて居たもの、若衆方の身は親方の掟が厳しうて、寸時も心には委せぬ身體ぢや。たゞ心は、燒くやうに思ひ焦れても、所詮は機を待つより外はないと、諦めて居る内に、二十の聲を聞くや聞かずに、そなたは清兵衛殿の思はれ人となつてしまはれた。その折のわれらが無念は、今思ひ出して、此胸が張り裂くるやうでおぢやるわ」かう云ひながら、藤十郎は、座にも堪えぬやうな、巧みな身悶えをして見せた。が、さうして戀を語りながらも、彼の二つの眸丈は、相變らず爛爛たる冷たい光を放つて、女の息づかひから容子までを、恐ろしき迄に見詰めてゐる。

お梶の顔の色は、彼女の心の恐ろしい激動を宛らに、映し

出して居た。一旦蒼ざめ切つてしまつた色が、反動的に段々薄赤になると共に、その二つの眼には、熱病患者に見るやうな、直にも火が點きさうな凄まじい色を湛へ始めた。

「人妻になつたそなたを戀ひ慕ふのは人間のする事ではな」と、心で強う制統しても、止まらぬは凡夫の想ぢや。そなたの噂を聴くにつけ、面影を見るにつけ、二十年の其間、そなたの事を忘れた日は、たゞ一日もおぢやらぬわ」彼は、一語一語に、一句一句に巧な、今迄の彼の舞臺上の凡ての演戲にも、打ち勝つた程の仕打を見せながら、而も人妻をかき口説く、恐怖と不安とを交へながら小鳥のやうに辣んで居る女の方へ、詰め寄せるのであつた。

「が、此の藤十郎も、人妻に戀をしかけるやうな非道な事はなすまじいと、明暮燃え熾る心をぢつと抑へて來たのぢやが、われらも今年は四十五ぢや、人間の定命はもう近い。これ程の戀を——二十年来偲びに偲んだこれ程の想を、此の世で一言も打ち明けて、何時の世誰にか語るべきと、思ふに付けても物狂はしうなる迄に心が擾れ申して、かくの有様ぢや。のう、お梶どの、藤十郎をあはれと思召さば、たつた一言情ある言葉を、なあ」と藤十郎は、狂ふばかりに身悶えしながら、女の近くへ身をすり寄せて居る。たゞ戀に狂ふて居る筈の、彼の腫ばかりは双のやうに澄み切つて居た。

餘りの激動に堪へかねたのであらう、お梶は、

「わつ」と、泣き俯してしまつた。

## 一〇

恐ろしい魔女が、その魅力の犠牲者を、見詰めるやうに、藤十郎は泣き俯したお梶を、じつと見詰めて居た。彼の唇の邊には、凄じい程の冷たい表情が浮んで居た。が夫にも拘らず、聲と動作とは、戀に狂ふた男に適はしい熱情を持つて居る。「のう、お梶どの。そなたは、此の藤十郎の戀を、あはれとは思さぬか。二十年来、堪へ忍んで來た戀を、あはれとは思さぬか。さても、強いお人ぢやのう」かう云ひながら、藤十郎は、相手の返事を待つた。が、女はよ／＼と、す／＼泣いて居るばかりであつた。

灯を慕つて來た千鳥だらう。銀の鍔を使ふやうに澄んだ聲が、瀬音にも紛れず、手に取るやうに聞えて來る。女も藤十郎も、おし黙つたまゝ、暫くは時刻が移つた。

「藤十郎の切ない戀を、情なくするとは、さても氣強いお人ぢやのう。舞臺の上の色事では日本無雙の藤十郎も、そなたにかゝつては、たわいもなう振られ申したわ」と、藤十郎は淋しげな苦笑を洩した。

と、今迄泣き俯して居た女は、ふと面を上げた。

「藤十郎、今仰つた事は、皆本心かいな」

女の聲は、消え入るやうであつた。その唇が微かに痙攣し



た。

「何の、てんごうを云ふてなるものか、人妻に云ひ寄るからは、命を投げ出しての戀ぢや」と、いふかと思ふと藤十郎の顔も、さつと蒼白に變じてしまつた。浮腰になつて居る彼の膝が、かすかに顫ひを帯び始めた。

必死の覺悟を定めたらしいお梶は、火のやうな瞳で、男の顔を一目見ると、いきなり傍の絹行燈の灯を、フツと吹き消してしまつた。

恐ろしい沈黙が、其處にあつた。

お梶は、身體中の毛髪が悉く逆立つやうな恐ろしさと、身體中の血潮が悉く湧き立つやうな熱情とで、男の近寄るのを待つて居た。が、男の苦しやうな息遣ひが、聞えるばかりで、相手は身動きもしないやうであつた。お梶も居辣んだまゝ、身體をわな／＼と顫はせて居るばかりであつた。

突如、藤十郎の立ち上る氣勢がした。お梶は、今こそと覺悟を定めて居た。が、男はお梶の傍を、影のやうにすりぬけると、灯のない闇を、手探りに廊下へ出たかと思ふと母屋の灯影を目的に獸のやうに、足速く走り去つてしまつたのである。

闇の中に取残されたお梶は、人間の女性が受けた最も皮肉な残酷な辱しめを受けて、闇の中に石のやうに、突立つて居る。

x x x x x

た。

悪戯としては、命取りの悪戯であつた。侮辱としては此世に二つとはあるまじい侮辱であつた。が、お梶は、藤十郎から之れほどの悪戯や侮辱を受くる理由を、何うしても考へ出せないのに苦しんだ。夫と共に、此の恐ろしい誘惑のために、自分の操を捨てやうとした——否、殆ど捨て、しまつた罪の恐ろしさに、彼女は、嗚をすた／＼に切られるやうであつた。

一

酒宴の席に歸つた藤十郎は、人間の面とは思へないほどの凄じい顔をして居た。が、彼は、勧められるまゝに大盃を五つ六つばかり飲み乾すと、血走つた眼に、切波千壽の方を向きながら、

「千壽どの安堵めされい。藤十郎、此度の狂言の工夫が悉く成り申したわ」と云ひながら、聲高に笑つて見せた。が、その聲は、地獄の亡者の笑ひ聲のやうにしはがれた空つぼな、氣味の悪い聲であつた。

x x x x x

彌生朔日から、萬太夫座では愈々近松門左が書き下しの狂言の蓋が開かれた。藤十郎の茂右衛門と切波千壽のおさんとの密夫の狂言は、恐ろしきまで眞に迫つて、洛中洛外の評判かまびすしく、正月から打續けて勝ち誇つて居た山下座の中

村七三郎の評判も、月の前の螢火のやうに、見る影もなく消されてしまつた。

が、此興行の評判に連つて、京童の口にかうした挿話が傳へられた。夫は、藤十郎殿は、此度の狂言の工夫には、ある茶屋の女房に偽つて戀をしかけ、女が靡いて灯を吹き消す時急いで逃れたとの事ぢやが、遣は三國一の名人の心掛だけある」と云ふ噂であつた。

「偽にもせよ、藤十郎殿から戀をしかけられた女房も、三國一の果報者ぢや」と、艶めいた京の女達は、かう云ひ添へた。かうした噂迄が、愈が上に、此の狂言の人氣を喰つた。来る日も、来る日も、潮のやうな見物が明け方から萬太夫座の周圍に渦を巻いて居た。

彌生の半ばであつたらう。或朝、萬太夫座の道具方が樂屋の片隅の梁に、縊れて死んだ中年の女を見出した。夫は、紛れもなく宗清の女房お梶であつた。お梶は、宗清とは屋敷の萬太夫座に忍び入つて、其處を最後の死場所と定めたのである。その死因に就ても、京童は色々に口性ない噂を立てた。が誰人も藤十郎の偽りの戀の相手が、貞淑の聞え高いお梶だとは思ひも及ばなかつた。

たゞ、お梶の死を聞いた藤十郎は、雷に打れたやうに色を易へた。で彼は心の中で

「藤十郎の藝の爲には、一人や二人の女の命は」と、幾度も

力強く繰り返した。が、さう繰り返して見たもの、彼の心に出来た目に見えぬ深手は、折にふれ、時にふれ、彼を苛ますには居なかつた。

お梶が、樂屋で縊れた事までが、萬太夫座の人氣を喰つた。お梶が死んで以來、藤十郎の茂右衛門の藝は、愈々冴えて行つた。彼の瞳は、人妻を奪ふ罪深い男の苦惱を、あり／＼と刻んで居た。彼がおさんと暗闇で手を引き合ふ時、密夫の恐怖と不安と、罪の怖しさとが、身體一杯に溢れて居た。

其處には、藤十郎が茂右衛門か、茂右衛門が藤十郎か何の差別もないやうであつた。恐らく藤十郎自身、人の女房に云ひ寄る恐ろしさを、肝に銘じて居た爲であらう。



# 船醫の立場

一

晩春の伊豆半島は、所々に遅櫻が、咲き残り、山懐の段々畑に、菜の花が黄色く、夏の近づいたのを示して、日に／＼潮が蒼味を帯びて来る相摸灘が、縹渺と霞んで、白雲に紛れぬ濃い煙を吐く大島が、水天の際に、模糊として横つて居るのさへ、のどかに見えた。

が、さうした風光の裡を、熱海から伊東へ迎る二人の若い武士は、二人とも病犬か何かのやうに険しい、憔悴した顔をして居た。

二人は、頭を大東の野郎に結つて居た。一人は五尺二寸の小男だつた。顔中に薄い痘痕があつたが、目は細く光つて、眦が上り、鼻梁が高く通つて、精悍な氣象を示したが、そのゲツソリと下殺けた頬に、ぢり／＼生えて居る鬚が、此の男の風采を淋しいものにした。一人は、色の黒い眉の太い立派な體格の男だつたが、憔悴して居ることは、前者と異らない。

小男は、木綿藍縞の浴衣に、小倉の帯を締め、無地木綿のぶつさき羽織を着、鼠小紋の半股引をして居た。體格の立派な方は、雨合羽を羽織つて居るので、服装は見えなかつた。

小男の方は、吉田寅二郎で、他の一人は同志の金子重輔であつた。

二人は、三月の六日から十三日まで、程ヶ谷に宿を取つて、神奈川に碇泊して居る亞美利加船に近づかうとして、晝夜肝膽を砕いた。

最初、船頭を賺して、夜中潜かに、黒船に乗り込まうとしたけれども、いざその場合になると、船頭連が皆退込みました。薪水を積込む御用船に乗込んで、黒船に近づかうとしたけれども、それも毎船與力が乗込んで行くために、便乗する機會はなかつた。

八日の日には、米利堅人が、横濱村へ上陸したと聞いたので、兼て起草して置いた投夷書を手渡す機會もと、馳け付けたが、彼等は既に船へ去つて、米利堅人を見た村人達の、かまびすしい噂を聞いた丈だつた。

九日の日は、金子重輔が、舟が兎に角漕げると云ふのを幸に、漁舟を盗んで、黒船へ投しようとした。が、晝間舟の在處を見定めて、夜行つて見ると、舟は何人かが乗り去つたと見えて影もなく、烈しい怒濤が、暗い岸の砂を噛んで居る丈だつた。二人が、失望して茫然と立つて居ると、野犬が幾疋も集つて来て、けたましく吠えた。

「泥棒をするのが難しいことが初めて分つたぜ」

勝氣な寅二郎は、さう云つて笑つたが、雨が間もなく降り出し、保土ヶ谷の宿へ、丑滿の頃歸つたときは、二人の下帯まで濡れて居た。

十一日十二日と二人は保土ヶ谷の宿で、悶々として過した。

十三日は空がよく晴れ、横濱の沖は、春の海らしく和み渡つた。今夜こそはと思つて居ると、朝四つ刻黒船の甲板が、急に氣色ばみ、錨を捲く容子が見えたかと思ふと、山の如き七つの船體が江戸を指して走り始めた。海岸警衛の諸役人が、すはやと、思つて居ると、羽田沖で、急に轉回し、外海の方へ向けて走り始めた。

一雙はその儘本國へ、他の六雙は下田へ向つたと云ふ取沙汰であつた。

寅二郎と重輔は、黒船の動き出すのを見ると、口惜泣きに泣いたが、下田へ向つたのを知ると、直ぐ保土ヶ谷の宿を拂

つて、その跡を慕つた。

鎌倉、小田原、熱海と宿つて、今日三月十七日熱海を立つたのである。

二人が、伊東へ一里ばかりの海岸へ来たときに、道の兩側に蜜柑畑があり、その中には早しらじらと花の咲いたのがあつて、香ばしい匂が、鼻を衝いた。二人が蜜柑畑の中の畔に腰を降して、割籠を開かうとしたときだつた。蜜柑の畑の中に遊んで居たらしい子供が聲を上げた。

「やあ！ 千石船が通るぞ。やあ千石船よりも、まだ大きいぞ。しかも二艘ぢや。」

寅二郎は、何の氣もなく海上を見た。すると、海岸から一里も隔つて居る海上を、異様な怪物が、黒色の煙を揚げつゝ疾驅して居るのだつた。それは、夢にも忘れない黒船だつた。今日は、その三重の帆を、海鳥の翼の如く擴げ、しかもそれにも足りないで、兩舷の火輪を廻して、やゝ波立つて居る大洋を、巨鯨の如く走つて居るのだつた。

「見られい！ あの勢を。」

寅二郎は敵愾の心も忘れて、嘆賞した。

「毛唐め！ やり居る！ やり居る！ あのやうに皇國の海を人もなげに走り居る！」

慷慨家の金子は、なき身を口惜しむやうに、足指りしながら叫んだ。



「なに、今に米利堅へ渡つて、あの術を奪つてやるのだ。夷人の利器に依つて、夷人を追ひ拂ふのだ。」  
寅二郎は熱海の湯の宿で作つて呉れた大きい握飯をほゞばりながら叫んだ。

## 二

二人が、下田へ着いたのは、翌十八日の午後であつた。昨日途中で見た二艘の火輪船は、港口近くに碇泊して居つた。二人は、宿を取ると、直ぐ港を警備して居る役人達に會つて、それとなく黒船の容子を訊いて見た。

役人達の話に依ると、この二艘は先發隊で、大將彼理はまだ来て居ない。その上、漢語ばかりでなく、和蘭語を話す通辭さへ居ないので薪水積込の應答にさへ困つて居ると云ふことであつた。通辭が居ないとすれば、潜かに乗付けて、事情を陳べて、便乗することは、絶對に不可能である。二人は、彼理が乗つて居る將艦が、入港するのを待つより外はなかつた。

二十日の朝だつた。寅二郎は、自分の指の股や腕首に、四五日前から出来て居る腫物が、膿を持つて居るのに氣が付いた。

鎌倉の宿を立つた朝、彼は自分の指間や腕首や、肘に、小さいイボのやうなブツ／＼が幾つも出来て居るのを知つた。

と云ひながら二人は毎夜海岸へ出て、黒船の容子を窺つた。そして疲れると、その儘海岸で、露宿した。

二十五日夜には、下田の村を流れて居る川に、繋いであつた舟を盗み、川口の番船の眼を忍んで海へ出た。が、その夜は波が荒く、重輔の未熟な腕では、舟は同じ處を、ぐる／＼廻轉する丈で、何時まで経つても、沖へは出られなかつた。綿のやうに疲れて、柿崎の濱へ引返す外はなかつた。二人は、濱邊の辨天堂で、夜が明くるも知らず熟睡した。

その間も、寅二郎の疥癬は、少しも癒えないばかりでなく、どれもこれも、無氣味に白く膿んでしまつた。彼は、大事の前の些事としてなるべく氣にすまいと思つたが、身體中に漲る感覺的不快さをどうすることも出来なかつた。

二十七日の夕方、柿崎の濱邊へ出て見ると、意外にも、ミツスシツビイ船が、海岸から二町とない沖合に、碇泊して居るのを見た。それから、半町も隔てずに旗艦のボウワタンが、碇を降して居る。二三日前から、港内を測量した結果、碇泊の位置を變へたらしかつた。寅二郎と重輔とは、雀躍して欣んだ。その上、辨天堂の直ぐ真下の渚に、二隻の漁舟が繋ぎ捨てゝある。丁度その舟を盗めと云はぬばかりに。

二人は、直ぐ蓮臺寺村へ歸つて、夕食を認めた。下田の宿へ移ると云つて、航海の準備をした。寅二郎は、着換への衣類二枚と、小折本孝經、和蘭文典前後譯鍵二冊、唐詩選掌故

その夜小田原の宿で泊ると、小さいブツ／＼の各々が、蟲の匍ふやうな、いちりがゆさを與へた。彼は之れを幾度も掻いた。掻けば掻くほど、痒さが増した。

それが、三日と四日と経つ裡に、數が多くなり、殊に夕は痒さのために、よく眠られなかつたが、今朝見ると、白く膿を漙へて居るのが、幾つも出来て居る。それが、手指ばかりでなく、腹部にも腰の廻りにも、腿にも、數は少ないが擴がつて居る。紛ふ方もなく、疥癬である。

考へて見ると、保士ヶ谷の宿で、給仕に出た女中が、頻りに手指を掻いて居たのを思ひ出した。あの女中から、傳染されたのだと思つたが、どうすることも出来なかつた。彼は、大事を決行する前に、たとひ些細な病にしろ、かうした病に罹つたのを悔んだ。彼は、黒船に乗るまでには、少しでも治療して置きたいと思つた。彼は、下田から一里ばかりの蓮臺寺村にある湯が、疥癬や、疥癬に、いと云ふことを聞いたので、直ぐその日、蓮臺寺村に移つて入湯した。

翌二十一日の午後、彼理の搭乗して居る旗艦ボウワタン船は、他の三隻を率ゐて、入港した。

二十一日から、二十六日まで、寅二郎と重輔とは、日に夜を次いで、黒船に乗り込むことを計つた。二十四日の朝二人は下田の郊外を歩いて居る夷人を追かけて、豫て認めて居た投夷書を渡した。蓮臺寺村の湯の宿へは、下田へ行つて宿る

二冊、抄録數冊とを小さい振分の荷物にした。それが、千里の海を渡つて、亞美利加へ行く彼の荷物だつた。

夜の五つ刻、辨天堂の下の海岸へ出て見ると、降るやうな星月夜の下に、波は思の外に風いて居た。六隻の黒船は、銘銘に青い碇泊燈を掲げながら、小島のやうに、その黒い姿を並べて居た。二人の心は、躍つた。が晝間見た小舟を探して見ると、それは引き潮のために、砂濱高く打ち揚げられて居るのだつた。二人は懸命になつて、押して見た。が、それはピクとも動かなかつた。

潮が、再び満ちて来るのを待つより外はなかつた。二人は、辨天堂の中へ入つて、寝てしまつた。目が覺めたのは、入つて廻つた頃だらう。星明りの裡に、潮が堂の眞下まで満ちて居るのが分つた。

二人は欣び勇んで舟に乗つた。が、櫂を取つて、漕ぎ出さうとすると、肝心な櫂脚がないことが分つた。駭いてもう一つの舟に乗り替へて見た。が、その舟も同じだつた。周章た。が、咄嗟な場合、二人は下帯を脱して、櫂を兩方の舷へ縛り付けた。が、半町と漕がない内に、弱い木綿は櫂と舷との強い摩擦のために、摩れ切れてしまつた。二人は小倉の帯を解いて、櫂を縛り直す外はなかつた。

漕ぎ出して見ると岸に立つて見たときとは違つて、波濤が荒かつた。ともすれば、舟は波に煽られて、轉覆りさうにな



つた。その上、寅二郎は今まで、舟を漕いだことがなく、只力委せに權を動かすのだから、二人の調子が合はず、一番間近のミスシツビイへ向けた軸は、くるく廻つて、軸の前へ下田村の灯火が現れたり、柿崎の濱の森が現れたりした。舟は前へは進まないで、同じ所を廻つた。

二人の腕が脱けるやうになつたとき、やつとミスシツビイ船の舷側へ着いた。二人は蘇生した思がした。

「米利堅人！ 米利堅人！」

重輔は、小舟の舷に、足をかけながら、大聲に叫んだ。

船上に怪しい叫び聲が起り、人の氣勢がしたかと思ふと、ギヤマンの燈籠が舷側から吊し降された。見上ぐると、船上から數人の夷人が、見下して居る。寅二郎は矢立を取り出し、燈籠の光で懷紙に、「吾欲往米利堅君幸請之大將」と、手早く認めて、その紙片を持ちながら、舷梯をかけた。が、不幸にもその船には、通辭が居なかつた。老いた夷人は、寅二郎からその紙片を受取ると、別の紙に横行の字をかいて、二つの紙片を寅二郎に返しなから、ボウワタン船を指して、手真似であの船へ行くと云つた。二人には、その意味が直ぐ解つたけれども、乗つて來た小舟で、更に一町の沖合へ進むことは至難のことであつた。寅二郎は、船上に吊つてあるバツテイヤを指して、手真似であれて連れて行けと頼んだが、聽かれなかつた。

疲れ切つた身體で、二人はボウワタンまで漕いで行つた。

沖へ出れば出るほど、波が荒くなつた。寅二郎も重輔も、手掌に水泡が、いくつも出來た。が、舟は容易に、彼等の思ふ通にならなかつた。内側へ付けようと思つたが、外洋へ向つた波の荒い外側に付いてしまつた。しかも舷側と舷梯との間に挟まれ、烈しい波に煽られ、凄じい音を立てながら、舷側へ幾度も叩き付けられた。

船上に立つて居る番兵に、その音が聞えたのだらう。手に長い棒を持つた夷人が、怒り罵りながら、舷梯を馳け降りて來て、二人の乗つた舟を、その棒で突き出さうとした。突き出されては堪らないと思つたので、寅二郎は、素早く舷梯へ飛び移つた。重輔は繩を梯子に移つた寅二郎に、渡さうとした。が、夷人は容赦もなく、舟を突き出すので、重輔も周章で舷梯へ飛び移つた。そして、小舟の繩を手放してしまつた。

舟には、二人の大小と、荷物とを残してあつた。が、旗艦に乗つた以上、兎も角もなると思つたので、小舟の流れ去るのを顧みなかつた。むしろ、顧みる餘裕もなかつた。

二人を船上へ拉した夷人は、二人が船を見物に來たものだと思つたのだらう。二人に羅針盤を見せたりした。二人は首を振つて、筆と紙とを求めた。矢立も懷紙も小舟へ残して來たのである。

間もなく、日本語の通辭ウキリヤムが出て來、そして二人

は船室へ導かれた。ギヤマンの洋燈が、室内を眞晝のやうに、煌々と照して居た。

室内には、通辭の外に、二人の夷人が立ち會つた。一人は副艦長のゲビスで、他は外科醫のワトソンであつた。彼は、蘭語を解する上に東洋通であつた。

寅二郎は、生來初めての鵜筆を持つて、米利堅へ行きたいと云ふ志望を漢文で書いた。ウキリヤムは、早口の日本語で、それは何國の字ぞと訊いた。

寅二郎が、日本字なりと答へると、ウキリヤムは、笑つてそれは唐土の字ではないかと云つた。ウキリヤムの明晰な日本語と日本に就いての知識とが、寅二郎達を欣ばした。二人は、初めて慈母の手を探り得たやうな心持になつて、その心の内の火のやうな望みを述べ始めた。

### 三

間もなく、ボウワタン船の提督の船室で、二人の日本青年の希望を容れるか、どうかに就いて會議が開かれた。

彼理提督とその參謀と、ボウワタンの艦長と副艦長のゲビスと外科醫のワトソンと、通辭のウキリヤムが、それに加つた。

十一時を過ぎて居たが、事件が異常であるために、誰も彼も興奮して居た。殊に副艦長のゲビスは、二人の日本青年を

見て、その熱誠に動かされた丈に、誰よりも興奮して居た。「ぢや、我々は此の青年達の請を斥けた方が、無難だと云ふのですか」

會議の傾向が、拒絶に傾いて來ると、ゲビスは躍起になつて居た。

「我々は、こんな些細なことで、日本政府と事端を構へるのにはよくないことだと思ふ」

艦長は、先刻から拒絶を主張して居た。ゲビスは、艦長の言葉を駁さうとして思はず自分の席に立ち上つた。

「が、然し私は、縱令日本政府との間に、少しの面倒があつても、あの青年達の請を容れることが、どんなに正しいことであり、いゝ事であるか分らないと思ふ。私は、先日あの青年達が、我々の士官の一人に渡したと云ふ手紙の翻譯を讀んで、彼等の聰明な高尚な人格にどれ丈感心したか分らない、彼等の熱烈な精神は私の心を打つた。私は、有色人種の心の裡に、こんな立派な魂が、宿つて居るとは知らなかつた。その上、翻譯で讀んでも、その原文が、どんなに明勁であつて、理路が整然として居るかが分る。その頭腦の明晰さは、私にとつて、一つの驚異であつた。かうした聰明な青年を、我國へ連れて行つて、わが文化に接せしめると云ふこと丈でも、私の心は躍り上るやうな歡喜を感じる。私は提督閣下が、この青年の請に耳を假さんことを切望するものです」



まだ三十を越して間もない、ゲビスは若い眸を輝かし、卓を軽く叩きながら叫んだ。

「貴君は、あまりに興奮し過ぎる。貴君はもつと現實を見なければいけない。頸髯を蓄へた五十近い艦長は、若者を撫めるやうに云つた。貴君は、物事を表面丈で、解釋してはならない。彼等の申分はよい、我々の同情を得るに充分だ。が、然し彼等が、申分以外の卑劣な動機で、動いて居るかも知れないと云ふことを我々は、一應考へて見る必要がある。日本人との短日月の交渉に依つても、彼等がどんなに伶俐であるかと云ふことが分つた。しかも悪賢いと云つてもよいほど、伶俐であることが分つた。私は、先日の手紙を見た時から、こんな疑を起した。あの青年二人は、日本政府の間者ではないかと考へた。あんな立派な文章を書く日本青年が、日本政府に依つて、重用されて居ない譯はないと思ふ。彼等は日本政府の役人に違ひない。彼等は、見すほらしい青年に扮して、我々を試さんとして來たのである。日本の法律は、日本人の海外へ渡航するのを禁じてある。我々は、その事を横濱に、碇泊して居た頃、林大學頭から聞いて知つて居る。従つて、我々は此法律を遵守して日本人の海外渡航を扶助すべきではない。思ふに、彼の二人の青年は、我々が日本政府に忠實であるかどうかを試さんとして、送られたる間者である。若し、我々が彼等の志望を許したならば、直ちに日本政府から抗議

が來るだらう。そして、我々は日本政府に、不忠實なるものとして、折角平和の裡に得た通商の許可も取り消されないと限らない。」

「いや、貴下は疑ひ過ぎる。副艦長のゲビスは、毅然として屈しなかつた。貴下は、あの青年達を見ないから、そんなことを云はれるのだ。かの青年達の眼は、海外の知識を得ようとする熱心さで、血のやうに燃えてゐる。それは、決して間者の眸ではない。彼等の衣類は濡れ、彼等の手指には、無数の水泡を生じて居る。それは彼等が、潜かに本船に近づかんとして、どんな犠牲を拂つたかを語つて居る。もしも、彼等が日本政府の間者であつたならば、彼等のもつと容易に我々の所へ來たに違ひない。その上、彼等は本船へ乗り移るときに彼等に取つて生命よりも大切な大小を捨て、居る。彼等は海外へ渡航するために、生命をさへ拂はうとして居る……」

「併し、ゲビス君！ 平素は寡言な提督彼理が、重々しい口を開いた。「私も、あの青年達の希望を遂げさせたいと云ふ感情に於ては、君と異ならない。が、然し私は横濱に於て、合衆國の國家と日本の國家との間の條約を結んだ。その私は、私情を以て、日本の法律に背かうとする日本人を扶けることは出來ない。が、私は望む、知識に渴えて居る日本の青年が自由に我國へ到來する日が、間もなく來ることを。そして現在この二人の青年に對する庇護を拒むことは、却つてさう云ふ未

來の近づくのを早める所以ではないかと思ふ」

ゲビスは一寸頭を傾げたが、又直ぐ叫んだ。

「閣下、貴下の言葉は私を首肯させる。が、然し公明正大な好奇心に依つて、わが國へ渡航せんとする、此の愛すべき青年の身の上を考へてやつて下さい。われ／＼が、彼等を拒絶することは、彼等を斷頭臺へまで追ひ上げることを意味して居る。我々は、彼等を陸へ追ひやれば、彼等は直ぐ政府の役人に依つて捕縛されるだらう。そして、日本の峻嚴な法律は彼等の首を身體から、斬り放つたらう。我々合衆國人の渡航に依つて、好奇心を起し、我々の故國を慕ふものを、我々の手に依つて、斷頭臺の上へ、追ひ昇せることは、亞米利加合衆國の恥ではないか。われ／＼の大統領が、われ／＼を日本へ送つた所以は、形式的な條約を結ぶためでない。孤島の裡に空しく眠つて居る可憐な國民を、精神的に呼び覺すことではないか。然るに、今我々の喚問に、最初に答へた愛すべき先覺者、國民全體の觸覚とも云ふべき聰明叡知なる青年の哀願に、豊ひたる耳を向けると云ふことは、われ／＼が帯びて居る眞の使命に對する反逆ではなからうか。二人の青年を、日本政府の役人の眼から隠して、日本政府の感情を傷くることなしに、本國に送ることは、若しそれをやらうと思ひさへすれば、甚だ容易なことである。私は、提督がわが國建國以來の精神たる正義と人道との名に於て、此の青年の志望に耳

を假さんことを切望するものである」

ゲビスの熱辯は、凡ての人を動した。剛愎な、曾て自説を曲げたことのない艦長でさへ暫くの間は、黙つて居た。

提督の顔にも、著しい感動の色が浮んだ。彼の心が、二人の日本青年の利益のために、動いたことは確からしかつた。

彼は、やゝ青みかゝつて居る顔を上げて、一座を見廻した。

「外に意見はありませんか。ウキリヤムス君！ ワトソン君！」

そのとき、ワトソンはふと、先刻日本の青年の一人が洋燈の光て字を認めて居るときに、その手指に無數に發生して居た傳染性腫物のことを思ひ出した。

「私は船醫の立場から、たゞ一言申して置きたい。彼の青年の一人は、不幸にも Scabies impetigosa に冒されて居る。それはわが國に於て希有な皮膚病である。殊に艦内の衛生に取つては一つの脅威である。私は、艦内の衛生に對する責任者として、一言云つて置く。無論、私は此の青年に對して限らない同情を懷いて居るけれども」

ゲビスの正義人道を基本とした雄辯も、此の實際問題の前には、タヂ／＼となつた。

提督の顔色が再び動いた。彼は青年の哀願を拒絶するため、感ずる心の寂しさを紛らす、いゝ口實を得た。可なり長い熟考の後に提督は云つた。



「ゲビス君、私は此の青年に對する同情に於て、決して貴君に負けはしない。が、私は疑はしき人道よりも、もつと考慮しなければならぬものを持つて居る。その上、彼の青年達の志望よりも、艦内に於ける衛生の重んずべきことに就ては、諸君が一致して居て呉れるだらうと思ふ。それではウキリヤムス君！彼の青年達を宥めて、陸上へ返して下さい。ゲビス君！君は彼の青年達を送り返すために、短艇の用意を命じて呉れたまへ」

そして、その命令は即時に實行された。

外科醫のワトソンは二人の日本青年が、舷梯から降されるのを見た。二人は眼に涙を流しながら、合衆國人の仁義心に訴へたが、それが容れられないと知ると、穩かなわづかな抵抗を試みた後、その不幸な運命に服従した。彼等のつゝましい悪怯れない態度を見たワトソンはその夜船室の寢臺で、終夜眠られなかつた。

四

不幸な日本青年に就ての事件が起つてから、三日目の朝、ワトソンは、他の一人の士官と一緒に海岸に上陸した。

よく晴れた一日だつた。二人は海岸を散歩してから、市街の裏手の方へ廻つた。子供が五月蠅く隨いて來るので、手眞似て追ひ拂つたが、執拗に何處までも隨いて來た。

彼等はふと營所らしい建物の前へ來た。日本の兵卒らしい人間が、槍のやうなものを持つて、その門を守つて居た。

見ると、その營所を圍む木柵に多くの男女が集つて居た。ワトソンが行くと、彼等は此の異國人を恐れるやうに避けた。ワトソンは木柵に身を寄せながら、營所の中を覗き込んだ。木柵から、一間と離れないところに、獸を入れるやうな檻があつた。檻の中に、何かうごめいて居るやうな物があるのを見て、ワトソンはちつと見詰めた。すると、その格子の間から、青白い二つの人間の顔が現はれて、彼を見てニツと微笑した。

ワトソンは、恐ろしい戦慄が、身體を通じて、流れるのを感じた。彼は、その人間の顔を認知した。それは、紛れもなく、先夜自分達の船を訪れた彼の不幸なる日本青年達であつた。その檻は、二人の人間を容れるべく、あまりに狭かつた。二人は膝を付き合はしながら、窮屈さうに坐つて居た。

二人の可憐な有様が、ワトソンの心を暗くした。彼は思はず英語で、

「お、可憐な人々よ。君達は如何にして捕はれたか」と、大聲で叫んだが、無論通ずる筈はなかつた。

が、ワトソンが叫ぶのを見ると、二人の青年は、ワトソンが彼等を認めたのが分つたと見えて、可なり欣んだ。そして、二人の——かの *prisoners* を思つて居る青年は、自分の掌を直角に、頸部に當て、間もなく自分の首を切斷せられること

を示しながら、然も哄然と笑つて見せた。羅馬人カトウを凌ぐやうな克己的な態度が、ワトソンを壓服した。ワトソンは、木柵を擱んで居る自分の手が、ある畏怖のために、顫へるのを感じた。彼は二人の日本青年の生命を救ふために、どんな事でもしなければならぬやうな氣になつて居た。

ふと見ると、笑つた青年は、手で字をかく眞似をしながら、筆紙を呉れと云ふ意味を示した。ワトソンは、懷中を探つて、一本の鉛筆を探り當てた。が、身體中に何の紙片もなかつた。すると、一人の日本少年が、何處からか、薄い木片を拾つて來て呉れた。が、一間も隔つて居る檻へ、如何にして差入れようかと考へて居ると、老人の牢番が、それを受けつけて渡して呉れた。

彼の青年は、鉛筆を受取ると、それを不思議さうに一瞥した後、何の躊躇もなく、木版の上に流暢に書き始めた。十五分間の後、餘地もないほどに、字を書き詰められた木片がワトソンの手に返された。

ワトソンは、青年達に目禮し、心の裡で此の不幸な青年達の祝福を祈りながら、船へ歸つて來た。そして、その木片を支那語の通辭である廣東人羅森に示した。

羅森は次ぎのやうに譯した。

英雄一度その志す處に失敗せば、彼の行爲は、奸賊強盜の行爲を以て目せらる。吾等は衆人環視の裡に捕へられ、縛め

られ、暗獄の裡に幽閉せらる。村の長老は、侮蔑を以て、吾等を通し、吾等を虐待すること甚し。

六十餘州を踏破するの自由は、我等の志を満足せしむる能はざるが故に、我等は五大洲を周遊せんことを願へり。これ我等が宿昔の志願なりき。我等が多年の計策は、一朝にして失敗せり。而して今や我等は、監屋の裡に禁錮せられ、飲食、休息、睡眠凡て困難なり。我等は、此の囹圄より脱する能はず。泣かんか愚人の如し。笑はんか惡漢の如し。嗚呼、吾等は黙して已まんのみ。

提督彼理を初め、先夜の會議に列した人々は、揃つて此の譯文を讀んだ。そして、銘々に深い感激を受けずには居られなかつた。

「何と云ふ英雄的な、しかも哲學的な安心立命であらう」

提督は深い溜息と共にさう呟いた。

不意に歎歎の聲が、一坐を駭かした。それは、若い副艦長のゲビスであつた。

提督は、ゲビスの傍に進みよつて、その肩を輕打した。

「さうだ。君の感情が一番正しかつたのだ。君はこれから直ぐ上陸して呉れたまへ。そして、此の不幸な青年達の生命を救ふために、私が持つて居る凡ての權力を用ふることを、君にお委せする。」

ゲビスは、それを聞くと、勇み立つて出て行つた。



ワトソンは、心の苦痛に堪へないで、自分の船室へ歸つて来た。が、其處にも、ぢつとして居ることが出来なかつた。彼は、自分の船醫として主張した己言が、果して正當であつたかどうかを考へずには居られなかつた。彼の心には、*his*が、此の高貴にして可憐な青年の志望を、犠牲にしなければならぬほど、恐ろしい傳染病であるかどうか、疑はれて来た。彼は、皮膚病學の泰斗が、それに就いて、何う云ふ言説を爲して居るかを知つて、自分の烈しく動搖する良心を落着けたいと思つた。彼は悄然として船の文庫の方へ歩いて行つた。

笑

ひ

大御所秀忠公は、寛永九年正月二十四日亥の刻江戸城西丸の正寢にて、大漸した。わづか四五日の患ひであつた。病革まると、三代の君家光公を病床に召されて、土井大炊頭利勝、藤堂佐渡守高虎を侍座せしめて、何くれとなく遺詔を垂れた。會津正宗の脇差を、御片身として、家光公に譲られた。此脇差は、神君東照宮關ヶ原の陣に、御差料とせられたもので、徳川家に取りては二つとなき重寶であつた。

御發喪については、重臣の間に、議論があつた。今天下泰平とは云へ、元和の御世を去ること遠くはない、大御所の俄な御他界が、如何なる變事の緒になるやも測りがたい、暫らく秘して、相當の御手當をしてから、喪を發しても遅くはないと、井伊掃部頭などは、熱心に主張したそれに同ずるものが多かつた。が、關達な家光公は仔細なしとばかり使番を飛ばして、諸大名の家々に、急な薨去を觸れしめたのである。

遺骸は、親近の小姓頭小姓達の手で、湯灌があつて、「お肌付」と云ふお棺の中に收められた。同じ正月の二十七日三縁山増上寺へ移されるまで、薨去になつたと同じき表御休息の

間に安置せられた。親近の士や持志な諸大名のお棺前のお通夜が、毎夜續いた。

二十六日の晩の事である。城内のお通夜は、今日が名残であると云ふので、前夜よりも人数が倍にもなつて居た。

お小姓では、秋元但馬守泰朝の組下のものが、今宵はお通夜の順番に當つて居たのである。

十五になる光之丞も、お棺に向つて左側の襖近く席末に列つて居た。お小姓と云つても、今年の春から將軍家のお傍に召出されたので、西丸に居られた大御所には、まだお目見得さへ濟んで居なかつた。従つて、大御所のお顔も、御能上覽の折に、遠がけに見たばかりで、評判の大きいお耳が遠目にも見えたのを覺えて居る位である。大御所が死なれたことを、特別に悲しいとも何とも思はなかつた。たゞかうして、白緞子に掩はれたお棺の前に、煙々と燃えあがつて居る銀燭の火影や、その火影に照された諸大名からの供御の數多い櫛や、それを前にして黙々と正坐して居る伊達陸奥守政宗や、土井大炊頭利勝や、立花將監宗茂や、松平新太郎光政や、淺



野但馬守長晟など聞えた大名達のいかめしい物々しい顔を見て居ると、なんとなく神々しい心持がする丈である。

で、彼は神妙に申の刻から、坐り續けて居た。仲よしの天野左吉郎が、遅れて来て肩を並べて横に坐つて居るのだが、がヒソ／＼話一つしかけなかつた。黙つたまゝ神妙に坐り續けて居た。

が、半刻も坐つて居る中に、段々一座のいかめしい悲壯な容子にも馴れてしまつた。

初は、死なれたお御所様のことや、上様でも大御所様でも、萬人一様に免れ難い宿命である死と云ふことや、それに連れて長久手で忠死をした自分のお祖父様の新庄孫兵衛宗房のことや、つい此の間死んだお祖母様のことなどを、取り止めもなく考へて居たのであるが、そんな陰氣な考はいつの間にか消えてしまつて、大御所の薨去で當分の裡御法度になつた殺生が、何時になつたら許されて、好きな道鳥狩や鷹狩が出来るやうになるかしらなど考へて居た。白山の鷄聲ヶ窪の標林の中に、いつでも山鳥が澤山居ることを、ぼんやりと思ひ出したりした。さうすると、隣に坐つて居る、左吉郎が、此間手に入れた鷹の働き振が吹聴通であつたかどうかを、急に訊いて見たくなつた。左吉郎の袖を引いて、そつと訊かうと思つたが、左吉郎が案外眞面目に濟して居るので、つい話しかけることが出来なかつた。

お廊下に置いてあるお土圭が、九つを打つてから、いかめしく構へて居た人達も、何時の間にか居すまゐるを少しづつ崩して居た。光之丞の二間ばかり横に居る加藤肥後守忠廣などは――父親が餘り偉すぎて父子の段が違ひすぎた爲に、お城内でも時々後指を指されることを光之丞も噂に聞いて居たが――正坐して居る膝を、宵からモジ／＼させて居たが今では膝を横に崩してしまつて、倒れない爲に、支へて右の手を傍の火桶にもたせて居る。もつともひどいのは、伊達政宗である。

諸大名の前列にありながら、ドツカリと人も無げに、胡坐を組んで居る。が、此人は兼々禪宗に歸依して居る爲に、當人は座禪のつもりで居るのかも知れなかつた。一つしか開いてない眼をも、ピタリと閉ぢてしまつて、身動もせず坐つて居るらしい。お送葬萬端の、奉行を仰せ付かつて居る松平右衛門太夫正綱も、宵の謹儼一糸も亂れなかつた容子から見るとよつぽど形が崩れて居る。が、一座を見渡したところ、道に政宗にならつて、胡坐を組む者は、一人もない。が、皆正坐の形を崩さぬ範圍で、足を寛げようとする丈、工夫を凝らして居るのである。

九つのお土圭が鳴るのを合圖にお茶とお菓子とお坊主に依つて人々の間に配られた。宵からの坐り續けて疲れて居る人々は、殆ど飢えて居るやうにお茶を喫つた。それを機會に何處からともなく雑談の緒が、切られた。それが一座中に擴

がつて行つた。

大抵は、殉死をした森川出羽守の話で、持ち切つて居た。「遺書が、又一段と見上げたものぢや。辭世の歌か詩を残したいが、左様なことに手間取つて、お供に遅れてはならぬゆゑ、残さぬと云ふ遺言が、十首百首の辭世にも勝つて奥ゆかしい」と、光之丞の直ぐ前に坐つて居た旗本の松平五郎が隣に居る酒井長門守に話しかけた。長門守は、大きく肯きながら、「羽州殿はたしか、御生前には、久しく御勘氣であつた筈ぢやが」と訊き返した。

さう訊かれると、松平五郎は、會心の間に接したと云はぬばかりに、

「それぢや。七年と云ふ長い間の勘氣であつたのぢやが、御危篤になつてから、我々が最後の目見得を申したときに大御所様お自ら「森川は」と云ふお言葉があつたのぢや」

「なるほど」と、長門守は感に堪へたやうに云つた。「何様、お小さい頃からお遊び相手で、ふとした事から、お氣に觸れたものゝ、始終お心にかけて居られたのぢや。それを洩れ聞いた森川は、即座に殉死の心を決めたと思えるのぢや」と、松平五郎は、相手の長門守ばかりでなく、周囲の者にも、それとなく聞かせるやうに話した。四五人の者が、それに應じて、低い然しながら心の籠つた感嘆の聲を上げた。光之丞は、さうした話を聞いても、餘り感動はしなかつた。

それよりも、一座の空氣が寛大になつて、雑談が出来るやうになつたのが嬉しかつた。

「左吉郎殿」と、そつと友達の方を、呼んで見た。光之丞同様退屈し切つて居た左吉郎は、渡りに舟と云つたやうにそつと座をすべつて、光之丞の傍へ、あざり寄つて來た。

「あれから、お鷹に行つた？」

「うむ」と左吉郎は大きく肯いた。

「何う？ 今度の鳥は。鋭い？」前よりも、もつと低い聲で云つた。お通夜の席で、狩の話などしてはならないと思つたからである。

左吉郎は、得意さうに大きく肯いた。

「三羽ほど、鴻にかけて見た。一羽は取り逃したが、二羽は見事に仕とめた」

「ほう、う」と、光之丞は危く大きい感嘆の聲を出さうとした。どんな鋭い集でも、鴻にはしば／＼仕損じ勝てあるからである。

「御禁止が開けたら、お供しよう」と、左吉郎は、光之丞の耳許近くさゝやいた。

一座が、再び静になつたので、二人ともその儘口をつぐんだ。

お坊主に依つて、其處此處の燭臺のお蠟が嗣ぎかへられた。夜がだん／＼更けて行くことが、お壘の冷える事に依つ



てども分つた。火桶は、二人に一つ宛位の割に出されて居るのだが、量の少い埋火は六十疊に近い大廣間の空気を、温めるのには足りなかつた。早春の夜の空気は、可なり冷めたかつた。

松平右衛門太夫が、氣を利かして、お坊主が、上品にホンの僅かしか、炭をつがないのを、

「ずん」とつげ。十二分について廻はれ。寒氣が身に浸みて参つたほどに」と、注意したので、お坊主達は初て氣が付いたやうに、ありとある火桶に、炭をうづ高くついで廻つた。四半刻経つか經たぬ裡に、どの火桶もどの火桶も、桐の胸が焦げるばかりに、かつ／＼と炭がおこつて來た。

かうして、寒氣はやつと防いだものゝ、お通夜の席には、寒氣よりも禁物のものが、その代りに皆を襲ひ始めて居た。それは云ふまでもなく睡魔である。宵からの二刻三刻は、皆緊張した心で坐り續けた。が、九つを過ぎてからは、さうした緊張が、いつの間にかだらけてしまつた。その上に肉體上の疲労に搦て、加へて、急に温くなつた部屋の空気が皆の心にも、身體にも、ものうい倦怠を醸し始めて居た。がそれでも今夜初て、お通夜の順番に當つた秋元但馬守、組下の小姓衆などは、大事なお通夜だと云ふので、晝の間自宅で十分に眠つて來て居る。又、お名残りも云ふので、殊勝にお通夜を志願した松平安政や淺野長晟と云つた外様大名はやつぱり十

分に準備があると思えて、割合にハツキリとした容子をして居る。一番参つて居るのは、土井利勝や松平正綱や、勘定頭の伊丹播磨守と云つた連中である。大御所が薨去になつて、以來緊急の打合せや、御葬送萬端の事務で、夜も日もなく働き續けて居る。身體がグタ／＼になつて居る。松平正綱などは、御用繁多で二十四日以来、邸へは一度も歸らないほどである。が、今夜は御遺骸に取つては、江戸城におはす最後の夜と云ふので、最後の御奉公として、お通夜の席に列つて居るのである。が、眠いことは、連に眠いらしい。伊丹播磨守などは、その眠氣を拂はうとして、先刻から機會のある毎に御靈前に進んで居る。まだ十分盡きて居ない蠟燭を、つぎ代へたり、お焼香をしたり、何かと御靈前の世話を焼いて居るが、かうした人々にも劣らず眠いのは、一番前列に並んで居る僧侶達かも知れなかつた。餘の僧侶達よりも、一二寸高く大きい頭顱を聳て、居るのは、天海大僧正である。その右に坐つて居る、ずん／＼とした肩幅の廣い坊主は、金地院宗傳であつた。その左に坐つて居るのは、増上寺の良阿道山の二僧であつた。半刻毎に讀經が始まるのである。が、宵から見ると、その聲が半刻毎に、眠むさうなものうい聲に變つて居る。時々交代はしてゐるものゝ、二十四日以来のお勤で、どれもこれも綿のやうに疲れて居るのである。

丑の刻に、又觀無量壽經が上げられた。九つ頃までは、御

經が讀まれることが、皆の心持を幾何か引立て、居たのであるが、皆の倦怠と疲労とが加はるに連れて、逆にそれは子守歌のやうに皆の眠氣を誘ふのであつた。單調な變化のない催眠的な音聲を聴いて居ると、皆はつい足元から引きずり込まれるやうに、トロ／＼としか／＼つたりした。が、大事なお通夜であることを思ふとハツとして急に居ずまゐを正した。が、顔中に擴がつて居る砂を噛むやうな眠むたさは、何うにも拂ひ除けることは出來なかつた。

讀經の聲が止んで、又元の静けさにかへると、一座は前よりも一際烈しい睡魔に襲はれかけて居た。黙つて居ては、とても防げないと思つたのだらう、座中何處からともなく、又雑談の緒が切られて居た。

光之丞は少しも睡むたくなかつた。母親が、今日の勤仕を心配して、昨夜から早く床に就かされた。今朝も朝食を済ませると、直ぐ又寢床の中へ追ひやられた。その上、家を出る時に、大事なお通夜の席で、うたゝ寢するやうな粗相があつてはと云ふので出入りのお醫師に頼んで氣付樂を一服飲んで來て居る。従つて子の刻が來ても丑の刻が來ても、少しも眠むたくなはない。むしろかうした諸大名達と列席して居るので、何となく興奮して眼が冴えて行く位である。たゞ黙つて坐り續けて居るのが、如何にも苦痛な丈である。一座に雑談が始まつたので光之丞も相手欲しやで、隣に坐つて居る左吉郎の

方を見た。左吉郎も、常から大きい二つの眼をクル／＼と刮いて居る。

「眠うはない？」光之丞は小聲で訊いた。

「氣もない」と、左吉郎はハツキリとした聲で答へた。

「數多い一座の衆ぢや、何人おぢやるぢやらう」と、光之丞は話をしかけた。

「百人も、いや百五十人もおぢやるぢやらう。大名衆は二十人位は見える。あの白髮の背の高い人は、誰ぢやろ」と、左吉郎は、眼で土井大炊頭の直ぐ後に坐つて居る老人を指し示した。

「立花宗茂ぢやよ。筑後柳河の」と、光之丞は答へた。

「碧蹄館で手いたい戦さした御仁ぢやなう」と、左吉郎は一才感激した眼付をした。二人は又黙つた。その中に雑談の聲も亦、一齊に止んでしまつて居た。もう雑談などで紛らせないほどの眠むたさが、皆の心を襲つて居るらしかつた。

ふと見ると、座禪をして居る筈の伊達政宗の頭が、妙な動き方を始めて居る。頭が上下に三四回づつ動いたかと思ふとドツと前のめりにならうとすると、ハツと驚いたやうに直立する。さうした運動が、五六回繰り返されて、前へのめり方がよつほど烈しくなると、ハツと立直つて閉ざして居た一方の眼を開けて不思議さうに、周圍を見廻してからまた静に目をつぶる。が、暫くすると又頭を妙に、前後に動かし始める。



が、政宗のかうした妙な動き方に對して、周圍に坐つて居る人々は殆んど無關心であるらしい。直ぐ左に坐つて居る松平正綱も、頭をうつむけたまゝぢつとして居る。たゞ政宗のそれのやうに、頭が上下に動かない丈である。

光之丞は、政宗の眠むりこけて居るのが、如何にも可笑しなかつた。子供の時から、幾度政宗の勇名を聞かされたか分らなかつた。此正月初て本丸へ登城して、御廊下で政宗を遠目に見たときも、鎮西八郎爲朝や朝比奈三郎義秀の武者繪を見たやうに、勇ましいやうな頼もしいやうな心持がした。一つしかない眼が、爛々と光つて居るやう思つた。その勇ましいいかめしい政宗が、子供か何かのやうにタワイもなく眠りこけてゐる。光之丞は、それを左吉郎に教へてやりたくなつた。

「あれ、伊達殿を見られい！」と、左吉郎の袴の腰板をそつと突きながら云つた。

「うむ！知つて居る。伊達殿ばかりではない。大炊頭殿も、鳥居殿も、板倉殿も、先刻からやつておぢやる」と、左吉郎はニツコリ顔だけで笑ひながら云つた。さう云はれて光之丞も、左吉郎に名指された人々を、一通り見廻して見た。土井大炊頭も政宗ほど、烈しくはないが、うつら／＼と頭を動かして居る。板倉内膳正重昌も、ともすれば前へ落ちかゝる上體を時々ハツとして取り止めて居る。そんな人達を見て居る中に光之丞は眠りかけて居る人々を、物色することに興味を感じ

始めた。彼は、左吉郎に負けないやうに、一座の中で眠むさうな人々を、眼で探し始めた。

「見られい！小笠原左兵衛佐殿もぢや」と、彼はやつと新しいのを一人見付けたので、左吉郎に報告した。

「うむ！その後居る片桐殿もぢや」と、左吉郎も新しいのを見付けて居た。

二人は、いつも城中で、いかめしい物々しい顔をして居る諸大名や役人達が、タワイもなく眠りこけるのを見るのが面白くて堪まらなかつた。

此二人の興味を唆るやうに、此處にも彼處にも新しい催眠者が出来て居た。二人は、皆が眠りこけてしまつて、自分達二人だけが、醒めて居たら、どんなに愉快だらうかと思つたりした。

「あれ見られい！加藤肥後守を」と、左吉郎は何か大發見をしてもしたやうに、光之丞の袖を引きながら、教へて呉れた。いかにも、加藤肥後守は、他の人達と比べると、もう正體がないと云つてもよいほど、だらしがなかつた。身體の右に置かれて居る火桶に、右の脇を突きながら、上體をスツカリ火桶の上にもたせて居るのである。顔は十分見えないが、蠟燭に照されて居る横顔から察すると眼は、もうびつたりと閉ざされたまゝ動いて居ない事は、確だつた。そして、頭が左右に動揺しながら、段々下へ下がつて行く。政宗のそれよりも、

一段と下がり方が、ひどい。グツト下がつた、火桶にさしてある火箸に、額が當りさうになる。が、其處まで行くと、道に火桶の火氣が夢現にもあつく感ずるのだらう、頭がまたふらふらと上へ上つて行くのである。

青ぶくれの元來間の抜けたやうな顔が、殊更光之丞達の興味をそゝつた。二人は、まんじりともせず、ねむりこけて居る加藤肥後守を見詰めて居た。

「あゝ危い！あゝ危いもう少しだ」と、左吉郎は心配さうに、同時に何かを期待して居るやうな聲で云つた。光之丞が、氣が付いて見ると、如何にも肥後守の頭が、グツと下がつてしまつて、今にも火箸に突き當りさうになつて居る。

「もう少々！」さう云ひながら、左吉郎はクスリと笑つて、光之丞の腰板をつゝいた。さうされると、光之丞も可笑しさうが、口までこみ上げて來たが、大切な場所だと思つたので、グツト噛みしめた。が、今にも額が火箸に當りはしないかと、一心に加藤肥後守の方から眼を放さなかつた。頭は、だんだん下がつて、火箸まで一二分と云ふ所まで行つたが其處で暫らくたゆたつて、又ふら／＼と上がつて行つた。左吉郎と光之丞は、お互に顔を見合せて、ふつと吹き出さうとしたのを、やつと堪へた。

が、見て居ると、加藤肥後守の頭は、又ふら／＼と、タワイもなく下がつて行つた。横顔の筋肉がだらけ切つて、身體

全體が崩れさうになつて居る。

「今度は危い！」と、左吉郎がまた小聲で云つた。光之丞も今度こそ火箸に額を、ぶつつけるに違ひないと思つた。それを期待するやうな好奇心と、氣の毒だと云つたやうな心持が交じつて居た。が、全體としては可笑しさうが、一番勝つて居た。宥から退屈し切つて居た心がやつとなくさみを見付けたやうに、大事なお通夜の席に居ることなどは、つい忘れてしまつて、今か／＼と云つたやうに、その方を見詰めて居た。

「あゝもう、少々一分ばかり」と、常から剽輕な所のある左吉郎は、肥後守の頭の動くのに連れて、そんな註釋のやうな事を云つて居た。が、二人の少年の期待を裏切つて、加藤肥後守の額はなか／＼火箸に當らなかつた。

「やつぱり正氣が少しは残つて居るのだ。お場所がお場所だから」と光之丞は心の中で、そんな事を考へた。で、其の方を見て居るのにも飽いたので、眼を轉じて旗本の人達が集つて居る方を眺め廻はさうとしたが、丁度その時であつた。チヤリンと金屬と金屬の觸れ合ふかすかな音がしたと思ふと、左吉郎がクス／＼と笑ひながら自分の腰を、頻りにつゝいて居るのを感じた。

見ると、果して加藤肥後守殿は、到頭最後まで行つたらしい。而も、可なり強く打ち突けたと見えて、火箸が倒れた機みに、炭火が二つ三つ火桶の外へ飛んだと見え、必死的にな



つてそれを摘み上げようとして居る。が、他人に氣付かれな  
いやうに、手早くやらうと思つて居るので、可なり周章で切  
つて居る。火を摘み上げては、耳を摘んで居る。が耳を摘ん  
だかと思ふと、また火を摘み上げて居る。が周囲の人は、初  
からの徑路を知らないの、皆偶然火箸が倒れたのだと思つ  
て居る。眠むさうな眼で、氣の毒さうに見る。が、前からの  
筋道を知つて居る光之丞と左吉郎とは、それをちつと見て居  
るのには、堪へなかつた。左吉郎は、こみ上げて来る可笑し  
さを、噛み殺さうとして居るのだが、何うにも堪まらな  
見え、俯きながら、ク、ク、ク、と烈しい含笑ひを續けて居る  
が、剽軽な彼は、自分で笑ふことに苦しめられて居ながら尙  
右の手で光之丞の袴の腰をつゝいて居る。光之丞も初はグツ  
ト堪へて居たが、光之丞の含笑ひに誘はれると、何うにも辛  
抱が出来なかつた。必死になつて、右の股を捻ねつて見たが  
何うにも辛抱が出来なかつた。彼は、ぶつと吹き出さうとす  
るのを、やつと取止めたが、それが一寸高い含笑となつて洩  
れるのは、何うも仕様がなかつた。

丁度此の時に、加藤肥後守と同時に、居睡から醒めた者が  
ある。それは、お目付の松倉甲斐守であつた。彼は、つい居  
睡りしたのを、後悔しながら誰かに見付けられはしなかつた  
かと思つて周囲を見廻した、周囲の大名や旗本達は半醒半  
睡の有様で唯一人氣付いたものはないらしかつた。が、彼はそ

の時ふと、クス／＼と云ふ少年の笑ひ聲を耳にした。彼はき  
つとなつて其方を見た。自分の二間ばかり左に、二人の少年  
が面を伏せながらクス／＼と笑ひ續けて居るのであつた。彼  
は、自分の居睡が笑はれて居るのだと思つた。彼は可なり侮  
辱されたやうに思つて、暫くは其方を睨み付けたのである。

三縁山へ遺骸が送られてから、間もなく、新庄光之丞と天  
野左吉郎とは、大目付からの御用を受けた。御用の筋は思ひ  
がけなく、お通夜の席の彼等の行狀に於てのお尋ねであつ  
た。

「其方共は、台徳院様の御靈前で失笑いたしましたと申すものが  
あるが、屹度左様か」と、大目付の本多豊前守は二人の少年  
を見すゑながら、嚴然と尋ねた。

「失笑いたしました」と、光之丞は素直に手を突いた。  
「其方もか」と、豊前守は黙つて居る左吉郎に向つて云つた。  
「毛頭覺えムりませぬ」左吉郎は、やゝ頭へながら、さう答  
へた。豊前守は、

「左様か」と云つたまゝ、それを追求しようとはしなかつた。  
却つて再度光之丞に云つた。

「其方は覺えがあるのぢやな。しかと覺えがあるのぢやな。」  
豊前守の心が、少年の光之丞にも解らないことはなかつ  
た。が、光之丞は可笑くて堪らないことがあつたから笑つた

ので、又笑つた以上それをさう云ふのだと、心の中で思ひ定  
めたので、  
「しかと相違ありませぬ」と、ハツキリと返答した。

翌日、上使が立つて、新庄光之丞に死を賜ふた。罪狀には  
次ぎのやうな文句が書かれて居た。

台徳院殿様御大漸にて上下謹慎致し居る折柄、御恩顧蒙  
ること一方ならざる小姓の身にて御靈前お通夜の席にて  
不謹慎の振舞有之候條御時節御場所を辨へざる重々の不  
届にて、縛り首にも致すべき所、祖父新庄孫兵衛以來の  
勳功を覺召され罪一等を減じ、切腹仰付らるべきもの也

寛永九年二月七日

かうして、無邪氣な少年光之丞は、不臣の悪名さへ負うて  
弱年にして殺されてしまつた。

が、お通夜の席で、眠りこけて光之丞を堪らなく可笑しく  
させた諸大名や旗本達は、何のお咎もなかつた。それ丈では  
なく、皆口々に、お通夜の席で笑ひこけた不謹慎な少年を非  
難したことであらう。

卅

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）



亂 世

戊辰正月、鳥羽伏見の戦で、幕軍が敗れたと云ふ報知が、初めて桑名藩に達したのは、今日限りで、松飾りが取れようと云ふ、七日の午後であつた。

同心の宇多熊太郎と云ふ男が、戰場から道を迷つて、笠置を越え、伊賀街道を、故郷へと、走せ歸つて來たのである。一藩は、愕然とした。愕然としながらも、みんな爪先立てで、彼の報知を待つて居た。

公用方の築麻市左衛門が、歸つて來たのは、十日の午前であつた。彼は、本國への使者として、浪花表で本隊と離れ、大和伊賀を、さ迷つた末、故郷へ辿り付いたのである。従つて、彼は敗戦に就いて、もつと精しい報知を持つて居た。慶喜公が、藩主越中守、會津侯、その他僅か數名の近侍のものと、夜中潜かに、軍艦に投じて、逃がる、やうに江戸に下つたこと、幕軍を初、會桑、二藩の諸隊は、算を亂して、紀州路に落ちて行つたこと、朝廷では討幕の軍を早くも發向せし

めようとして居る事などが彼に依つて傳へられた。一藩は、色を失つた。薩長の大軍が、錦の御旗を押し立てて、今にも東海道を下つて來ると云つたやうな風聞が、頻りなしに人心を動かした。

桑名は、東海道の要衝である。東征の軍に取つては、第一の目標であつた。その上、元治元年の四月に、藩主越中守が、京都所司代に任せられて以來、薩長二藩とは、互に恨みを結び合つて居る。薩長の浪士達を迫害して居る。殊に、長州とは蛤門の變以來、恨が更に深い。彼等は、桑名が朝敵になつた今、錦旗を擁して、どんなヒドい仕返しをするかも知らない。

藩中が、鼎の湧くやうに、沸騰するのも、無理もなかつた。藩主も留守であつて、一藩の人心を統一する中心がない。その上、多くの家庭では、思慮分別のある屈竟の人達は、藩主に従ふて上京して居る。紀州路へ落ちたと云ふ噂で、今は何處を漂浪つて居るか分らない。留守を守つて居る人々は、老人でなければ、女子供である。さうした家庭では、狼狽し

て爲す所を知らないのも當然である。

市左衛門が、歸つて來たその夜、城中の大廣間で、一藩の態度を決するための、大評定が開かれた。

血氣の若武者は、桑名城を死守して、官軍と血戦することを中心とした。が、それが無謀な不可能な、たゞ快を一時に遣る方法であることは、誰にも分つて居た。隣藩の龜山も、津の藤堂も、勤王である。官軍を前にしては、脊後にしななければならぬ尾州藩は、藩主同志こそ兄弟であるが、前年來朝廷に忠誠を表して居る。何等の後立もなく、留守居の小勢で、血戦したところで、一揉みに揉み潰されるのは、定まつて居る。

死守説は、少數で直ぐ破れた。その後で、議論は東下論と恭順論との二つに別れた。東下論は、硬論であり、恭順論は、軟論であつた。

家老の酒井孫八郎や、軍事奉行の杉山弘枝は、東下論を主張した。彼等の主張はかうであつた。城を守つて一戦することとは、花々しいことではあるが、此の小勢では一日も支へがたい。が、それかと云つて、藩主定敬公が、まだ恭順を表されない前に、城を出て、官軍に降ると云ふことは、相傳の主君に對して不忠である。従つて我々の探る道は、今の場合一つしかない。それは、城を一旦敵に渡して、關東に下り、藩主越中守の指揮に従ひ、幕軍と協力して、敵に當るより外は

ないと云ふのだつた。

それに對して、政治奉行の小森九右衛門、山本主馬などが、恭順論を主張した。彼等は、天下の大勢を説き、順逆の名分を力説して、此際一日も早く、朝威に歸順するのが得策であると云ふのであつた。

恭順東下の議論は、二日に互つて決しなかつた。その裡に、鎮撫使の橋本少將、柳原侍従が、有栖川宮の先發として、京師を發したと云ふ報知が、早くも傳つた。

その報知に接して、評定の人々は、更に焦つた。が、諸士の議論は、容易に一致しなかつた。藩中第一の器量人と云はれて居る家老の、酒井孫八郎が、到頭こんなことを云ひ出した。今、敵は眼前に迫つて居る。必死危急の場合である。小田原評定をやつて、一刻をも緩ふすべき時ではない。昨日今日の容子では、この上幾何評定を重ねても、皆が心から折れ合ふことなどは望み得ない。その上、恭順がよいか東下がよいか、その孰れが本當に正しいかは、人間の力では判るものではない。それよりも、いつそ、東下と恭順との二つの籤を作つて、藩主定綱公以下を祭つた神廟の前で引いて見よう。その出た籤に依つて、一藩の態度を決しようではないかと、云ふのであつた。

議論に疲れて居た——また心の裡では、歸趣に迷ふて居た——多くの藩士達は、擧つてその説に賛成した。



かうして、箆は作られた。發案者の酒井が、撰ばれて、箆を引いた。引かれた箆は東下の箆であつた。東下の箆が出た以上、恭順論者も、諦めてそれに従ふ外はなかつた。藩老達は、一藩の士卒を城中に呼び集めて、評定の経過を語つた後、關東へ發足するに就いての用意を命じた。命ぜられた藩士達は、家財を取り片づけ、妻子を縁故縁故を辿つて、城下の町人在の百姓に預けるなど、一藩は激しい混亂に陥つた。

が、其處に思はざる反對が起つた。それは、お目見得以下の輕輩の士が、一致しての云ひ分であつた。彼等は、太平の世には、上士達の命令を唯々諾々として、聽いて居た。が、一藩が危急に瀕すると、其處に階級の區別は、段々薄れて居た。階級が物を云はずして數が物を云ふのであつた。三百名に近い下士達は、足輕組頭矢田半左衛門、松岡領右衛門、大塚九兵衛を筆頭として、東下論に、反對した。彼等の云ひ分は可なり筋道が通つて居た。

關東へ下ると云ふことは、將軍家及び藩主定敬公と協力して、官軍に當ると云ふのであるが、然し將軍家が、必ず官軍に反抗するとは定まつて居ない。否、將軍家も定敬公も、錦旗の旗影を見られると、直ぐ恭順せられるかも知れない。もし、さうした場合には、我々が捨てぬてもよい城を捨て、關東へ下つたことは、全然徒勞になる。その上、其處まで官軍に、

反抗するとなると、藩祖樂翁公が、禁裡御造營に盡された功績も、又近く數年禁関を守護して、朝廷に恪勤を盡した忠誠も、没却されてしまふばかりでなく、どんな嚴罰に處せられて、當家の祭祀が絶えてしまふやうなことが、ないとも限らない。さうした危険を冒すよりも、今日の場合には、一日も早く朝廷に謝罪恭順して、桑名松平家の社稷を全うすることが、何より大切である。それには、當家には先代の御子の萬之助様がある。當主定敬公は、美濃高須藩からの御養子であるが、萬之助様は、當家の正統である。定敬公が、禁関に發砲して、朝敵の悪名を被て居られる以上、萬之助様を擁立して、どこまでも朝廷に、恭順の誠を表すのが、得策であると云ふのである。

藩士達は、武士の面目の上から、東下を深しとし、恭順を斥けて居たものゝ、心の裡では皆、差し迫る妻子との離別を悲しみ、住み馴れた安住の地を離れて、生還の期しがたい旅に出る不安に囚はれ、銘々心の裡では、二の足を踏んで居たのであるから、多くの藩士達は、口には出さないが、下士達の絶對恭順論に、心を傾けずには居なかつた。神箆のために、嫌々ながら、東下論に従つて居た恭順論者は、再び自説を主張し始めた。かくて、一藩は又もや烈しい混亂の裡に陥つた。東下論の主張者である酒井孫八郎、杉山弘枝は駭いて、下士達の鎮撫方を、政治奉行の小森、山本に交渉した、二人は

彼等自身恭順論者でありながら、必死に下士達を撫めて、箆に依つて定まつた藩論に、従はしめようと焦つた。が、下士達はその主張を固守して、一步も退かなかつた。一方東下論者の酒井杉山は、神箆に依つて定まつた東下を、明日にも實行しようと迫つた。政治奉行の小森と山本とは、東下論者と、下士達の板挟みになつて、下士達の鎮撫不能の責任を負ふて、城中で屠腹してしまつた。それは十二日の午前であつた。二人の死を、轉機としたやうに――二人の死を全くの犬死にするやうに、下士達の恭順論は、何時の間にか藩論を征服して居た。東下論者は、聲を潜めてしまつた。藩老達は、同夜左の如き、一書を尾州藩へ送つて、朝廷へ歸順の取成しを、嘆願したのである。

今般大阪表の始末柄、在所表へ相聞え、深奉恐入候に付き、上下一同謹慎罷在候仰も尊王の大義は兼て厚く相心得罷在候處不圖も、今日の形勢に立至り候段、恐惶嘆願の外無御座候何卒平生の心事御了解被成下大納言様御手筋を以乍恐朝廷へ御取成寛大の御沙汰只管奉獻願誠恐誠惶謹言

酒井 孫 八 郎  
吉村 又右衛門  
澤 采 女

三輪 權右衛門  
大關 五兵衛  
服 部 石 見  
松 平 帶 刀

成瀬隼人正様

次いで、同月十八日 官軍の先鋒が鈴鹿を、越えたと云ふ報を聴くと、同文の嘆願書を、隣藩龜山藩へ送つた。

二十一日、鎮撫使からの御沙汰の掌控が、龜山藩の手を通して、桑名藩に致された。文面は、次ぎの通であつた。

先般松平越中守依願歸國被仰出候處豈料ラン闕下ニ向ツテ發砲始末全ク反逆顯然不得止速ニ桑城退治ノ折柄過ルニ二十一日石川宗十郎ノ家來ニ托シ嘆願ノ趣有之旁々萬之助並に重臣一同浪花ヨリ分散ノ諸兵ヲ引連レ四日市本營へ罷出御處置可承トノコト

追テ參上ノ義ハ二十三日夜五ツ時期限ニ候其節宗十郎一手ノ内ヲ以テ誘引可有之事

一藩の人々は愁眉を開いた。歸順が容れられたからである。が、一藩の人々が、愁眉を開いたと反對に、生命の危険を感じ始めた十三人の人々があつた。それは、鎮撫使からの掌控への中に、判然と名指されて居る「浪花ヨリ分散ノ諸兵」であつた。

七日に走せ歸つた宇多熊太郎、十日に歸つた築麻市左衛門



を筆頭とし、その後、数日の間に、近畿の間で、桑名藩の本隊と分れ、思ひ／＼の道を取つて、本國の桑名に歸つて居たものが、凡て十三人、彼等は所謂「浪花ヨリ分散ノ諸兵」であり、鳥羽伏見の戦場で、錦旗に向つて發砲したものに違なかつた。

鎮撫使からの御沙汰に依つて、彼等がその本營に召出される以上、彼等の運命は定まつたと云つてもよかつた。官軍では、桑名の投降を容れると同時に、錦旗に發砲したこれらの諸兵を斬つて、朝威を明にしようとして居るのだ——と、一藩の人達は考へた。十三人の人達が、他の人々よりも早く、それに氣が付いたのは無論である。彼等は當日、家を出るときに、銘々の妻子と水杯を揃み交はした。

幼年の主君萬之助の乗つた籠の後から、麻上下を付けて、白い鼻緒の草履を穿いて、トボ／＼と付き従ふて行く彼等を、一藩の人々はあはれな犠牲者として見送つた。萬之助主従は、四日市の町に入ると、瓦町の法泉寺で、四つ時まで、休憩した後、龜山藩士の名川力彌に導かれて、官軍の本營眞光寺に出頭した。萬之助と重臣達は式臺の上上ることを許された。十三人の敗兵達は、白州の上に蹲くまつて居た。

衣冠束帯に威儀を正した鎮撫使の橋本少將が、嚴そかな口調で、次のやうに云ひ渡した。

越中守反逆顯然無道至極今更申迄モ無之爲征討發向ノ處嘆願ノ趣有之勞々書面ノ通可心得

一、本城ヲ掃除シ朝廷ニ可奉差上事  
一、帶刀ノ者不殘寺院へ立退恭順可罷在事  
十三人に對して、定まつた處分は云ひ渡されなかつた。が、萬之助及び重臣達が、桑名に歸されずに、四日市の法泉寺に抑留されたやうに、十三人の敗兵は、鳥取藩士の警護に附されて、四日市の北、一里にある海村、羽津の光明寺に幽閉されてしまつた。其處からは、海藏川原の刑場が、つひ目の先に見えて居た。

二

桑名藩で、馬廻り使番を勤めて、五十石の知行を、取つて居た新谷格之介も、十三人の中に交じつて居た。

彼は、今年廿五才の青年であつた。父が、慶應元年の三月に死んだので、當時二十二になつた格之介が、跡目を相續した。翌慶應二年の春に、彼は妻のおもとを婚つた。

新婚の夢、圓かであつた格之介は、その夏不意に京都在番を命ぜられて、數人の同僚と出京して以來、所司代屋敷のお長屋の、むさくるしい部屋で、一年半に近い間を、滿されぬ月日を送つて居た。夜毎の寢覺に、本國に残して來た、うら若い妻を思ひながら。

鳥羽伏見で、敵方に錦旗が繰めくと同時に、味方の足が浮いて、何時となく總崩れとなり、淀の堤を、退却したとき、彼は何時の間にか、味方の諸隊と離れて居た。離れて居たと云ふよりも、意識して離れたと云つてもよかつた。彼は、此の道を取れば、味方に離れるかも知れぬと思ひながらも、田圃の中の小道を、南へ走つたのである。それが、奈良街道へ出たときも、彼は後悔して居なかつた。亂軍の場合に、道に迷つたと云へば、云ひ譯は立つ。本隊と一緒に落ちて行けば、薩長の太軍に、西と東とから取り圍まれるに違ない。本國へ退くにも、退かれない。烈しい切破詰まつた戦が、屢々繰り返されるのに違ない。さう考へると、彼は何うにも、味方の後を追ふて行く氣がしなかつた。

巨椋の池の堤に出たときは、戦場の銃聲も途絶えて、時々思ひ出したやうに、大砲の音が、かすかに聞えて來る丈だつた。本隊を離れたのを幸に、道に迷つたと云つて、本國へ歸らう。本國へ歸つて、世の靜まるのを待たう。さう考へると、故郷の家庭の有様が、マザノ／＼と眼の前に浮んで來た。舊臘京都を立つ前に、藩の御用飛脚から受取つた妻の消息の文面が、頭の裡に消しても消しても、浮んで來る。それに續いて妻の、初々しい笑顔が浮んで來る。結婚の當時、彼女は十六になつたばかりであつた。赤いてがらのかゝつた大丸髷が、彼には又なく、いぢらしく考へられた。彼の足は、矢も楯も

堪らないやうに、故郷の方へ向いて居た。彼は、奈良から、伊賀街道を伊勢に出て、桑名に達したのは、一月の十二日であつた。

彼は、故郷へ歸つて來たものゝ、心ひそかに藩からのお咎を恐れて居た。が、それ自身危急に瀕して居る藩は、かうした敗兵達に對する處分などは、思ひも及ばなかつた。むしろ、次ぎ／＼に、走せ歸つて來る敗兵達から、上國の形勢を聴くことを、欲して居たのであつた。

妻のおもとは、格之介の不時の歸宅を、雀躍して欣んだ。格之介も、自分の行動が、いゝ結果に終つたことを欣んだ。嚴密に云へば——うまく云ひ譯が立つても落伍の罪が、何のお咎もなく済んだことを、格之介は此上なき僥倖に思つた。差し迫る一藩の大事に脅びえながらも、蜜のやうな歡樂の日が、此の若い夫婦の間に、幾日か過ぎた。それが、再び恐ろしい不幸に依つて、滅茶々にされるまで。

敗兵お召出しの個條が、官軍からの御沙汰の中にあると聞いたとき、格之介は色を失つた。錦旗に發砲した以上、命がないかも知れない。さうした考が、ヒシ／＼彼の胸に迫つて來る。愛妻のおもとと、水杯を交はすとき、格之介は不覺にも涙を流した。

三



光明寺に、十三人が閉ぢ込められてから、數日経つた。本堂に續いた二十疊に近い書院が、彼等の居室に當てられた。住持の好意に依つて、手廻りの品物が、給せられた。警護の鳥取藩士は、彼等に可なり寛大だつた。が、生死の間に彷徨して居る彼等は、みな快々として樂しまなかつた。

人間は、何かの感情に激すると、臆病者でも可なり深く死ぬことがある。忠君とか愛國とか、憤怒とか慷慨とか、さうした感激で、人は深く死ねる。が、さうした感激がなく、死が素面で人間に迫つて来る場合には、大抵の人間が臆病になつてしまふ。十三人の場合が、さうであつた。彼等は、蛤門の戦や鳥羽伏見の戦には、可なり勇敢に戦つた人達である。が、戰場から本隊と別れて、故郷へ歸つて来て以來、忠節とか意地とか云つた感性的な心持が、心の裡に緩んで居る。其處へ、死は不意に彼等の顔を窺き込んで来たのである。宇多熊太郎、築麻市左衛門など、剛膽を以て聞えた武士までが、茲へ来て以來、可なり沈んで居る。まして、最初から餘り勇敢でない新谷格之介が、心の裡で脅びえ切つて居たのは當然である。

最初、彼等は自分達の境遇に就いては、何も話さなかつた。みんな注意して、それに觸れるのを避けた。それに觸れることが誰に取つても不快であつたからである。  
「萬之助様のお身上は、何うなつたであらう」

彼等の一人が云つた。

「本城の明渡しは、もう無事に済んだかしらん」

他の一人が云つた。  
「紀州へ落ちた人達は、あれから何うしたであらう。まさか、紀州家が見殺しにはしないだらう」

第三の人が云つた。

彼等は、努めて自分達以外の人々の身上を、心配して居るやうに、お互に見せかけた。が、そんな風な話を始めても、少しもはづまなかつた。銘々自分自身の裡に身分達の身上を思ふ心が、暗澹として居たからである。

一日經ち二日經ち、彼等の生死の不安が、益々濃くなつて来るに連れ、彼等はいもう他人のことなどは、話して居る餘裕が無くなつて居た。

廿七日の午後である。十三人の中では、一番輕輩の近藤小助と云ふ男が、到頭口を切つた。それは、皆が口に出したくて、而も妙な外見から、口に出せなかつた言葉である。

「時に、われ／＼は、一體何うなると云ふのだらう。もう四日にもなるのに、何の御沙汰もない」

彼は、小聲で同僚に、さう話しかけた。が、異常に緊張して居る十三人の耳は、小助の囁きを、聞き落さなかつた。みんなは、一齊に小助の方を見た。  
「さあ！ それぢやて」一番年輩の足輕小頭が、小助の間を

受けて答へた。「もう、何とか御沙汰がある筈ぢやが、もしかすると、京都へ一旦伺ひを立てたのかな。もしそれだと往復四日かゝるとして、御沙汰があるのは、今日か明日ぢやて。もう、どんなに遅くても二三日ぢや」

「首が飛ぶのかい？」

小助は、蒼白い顔に、苦笑を洩しながら、さう云つた。みんなは、デロリと小助の方を見た。その眼には、不吉な不快な言葉を、無遠慮に使ふ小助に對する非難が、一樣に動いて居た。

「いや、さうとは限るものか。朝廷の御主旨は萬事御仁慈を旨とせられると云ふから、取るに足らぬ我々の命を召さるゝ筈はない、取越苦勞はせぬものぢや」

足輕小頭は、小助を窺めるやうに云つた。

「いや、お言葉ぢやが、鎮撫使の參謀には、長州人が居ると云ふからな。長州人と我々とは、元治以來犬と狼のやうに噛み合つて居るからな。長州征伐の時、幕府の軍勢が、浪花を發向の節、軍陣の血祭に、七人の長州人を斬つたことが、御座るぢやらう。あれは、桑名藩で、蛤門の戦で捕へた俘虜だつた。あれを長州人は、ひどく恨んで居るさうぢやから、あの轍で、征東の宮が、伊勢をお通りになるときに、屹度われわれは、その血祭と云ふのになつてしまふのだ」

小助は、絶望したやうに、自棄半分に、一番彼等に取つて

不利な想像を、喋り散らして居た。が、みんなは、それを單に、小助の想像だと貶してしまふ譯には行かなかつた。

鎮撫使からの、手控への裡に「浪花ヨリ分散ノ諸兵」と、指摘されてある以上、それは彼等に對する有罪の宣告文であつた。彼等が刑罰を受けなければならぬことは明かだつた。刑罰を受けなければならぬ以上、彼等は死を覺悟する必要があつた。かうした亂世に在つては、死罪以下の刑罰は、刑罰ではなかつたからである。

「ああ、みんなこれぢや／＼。覺悟をして居れば、何も狼狽へることはない」

十三人の中では、一番身分の高い築麻市左衛門が、左の手で首筋を叩きながら、快活に笑つた。が、それに次いで、誰も笑ひ出す者はなかつた。いや、市左衛門の笑ひ聲までが、一種悲惨な調子を帯びて、消えて行つた。

格之介は、縁側の柱にもたれて、皆の話を聞かぬやうな顔をしながら、その辯一番氣にして聞いて居た。首だとか覺悟だとか云ふやうな言葉が、話されるごとに、彼は目の前が暗くなるやうな氣持になつて居た。

彼はどう考へ直しても、覺悟と云つたやうな心持を、想像することが出来なかつた。彼は、殺されると云ふ氣持を、頭の中に思ひ浮べても、身顛ひがした。

が、格之介が嫌がらうが、嫌がるまいが、死は刻々、十三



人の身上に、襲ひかゝつて来るやうに感ぜられた。

四

翌廿八日は、朝から快く晴れた。春が来たことが、幽囚の人達にも、感ぜられた。寺が高地に在るために、塀越しに伊勢灣の波が見えた。波の面までが、多らしい暗緑色を捨て、鮮かな緑色に風いて居た。

空を掩ふ椽の梢を洩れた日の光が、庭の蒼い苔の上を照して居た。庭の右手には、建仁寺垣があつて、垣越に墓地が見えた。山から出て来たらしいひたきが、赤と青との翼を、ひらめかしながら、午前中墓石の上を、アチコチ飛び廻つて居た。

墓地は、黒い板塀に圍はれて居た。塀の向ふには、草が蒼みかけようとする廣い空地があつた、其處で時々、警護の鳥取藩士が、調練をして居た。

一昨日あたりから、料紙硯を寺から借りて、手紙を認めるものが多くなつて居た。今日は、それが殊に烈しい。さうした手紙が、何う云ふ内容を持つて居るかは、みんなに分つて居た。

「木村氏、その後は拙者が拜借したい」と一人が云ふと、  
「その次ぎは、拙者に」  
第三の人が、傍から云ふ。

料紙と硯とは、次ぎから次ぎへと渡つた。さうして、午前中に五六人も、手紙を認めた。が、格之介はさうした心持になることが出来なかつた。彼は、覺悟とか遺書とか、さうしたことを出来る丈、考へまいとした。自分の頭が、さうした方面へ走しるのを、出来る丈制止した。王道を以て、新政の要義として居る朝廷が、妄りに陪臣の命を取るやうなことは、萬に一つもないと考へようとした。又、若し我々が斬られるのなら、四日市の本營に呼び出されたあの晩か、遅くともあの翌日には、斬られて居る筈である。今まで、捨て置かれる筈はない。

桑名藩を罰すると云ふのなら、藩主の定敬公か、鳥羽伏見の戦ひで、全軍を指揮した森彌左衛門を、斬るのが當然である。自分のやうな、五十石取の使番を。

彼は、一生懸命に出来る丈有利に、明るく考へようとした。が、同僚の誰彼が、遺書を認めて居るのを見ると、暗い穴の中へでも、引きずり込まれるやうな、イヤな心持がした。自分の明るい想像が、滅茶々に掻き亂されるのであつた。

午後の事である。格之介の前に立ちはだかつて、ちつと空地の方を見て居た徒士の木村清八が、獨言のやうに云つた。  
「あゝ、彼處へ家が建つのだな。段々暖くなるのだから、普請にはい、時候だな」  
木村の言葉を、聞く前から、格之介はそれに、氣が付いて

居た。先刻から、材木を積んだ一臺の車が、何處からともなく、空地へ引かれて来て居る。その材木を、大工らしい男が三人、車から下して居る。

茲に来てから、四日の間、ボンヤリ床の間や天井や、庭や墓地などを見て居た格之介は、さうしたものに、可なり飽き飽きして居た。彼はかうして新しい見物が出来たことを、欣んだのである。

「うむ！家を建てるのかな。が、こんな田圃の中にぼつたり建てる譯はない。木組をしてから、何處かへ運んで行くのだらう」

彼は、心の裡でそんな事を考へながら、ちつと大工達の働くのを見て居た。が、それを見て居るのは、格之介と木村清八と丈ではなかつた。どんなに、死が迫つて来て居る時でも、人間は退屈するものである。十三人の中で、先刻から碁を圍んで居る築麻市左衛門と宇多熊太郎との外は、みんな外へ出て大工の働くのを見て居た。

三人の大工は、材木を下してしまふと、銘々に手斧を使ひ始めて居た。手斧が、木に喰ひ入る音が、澄み渡つた早春の空氣の中に、暫らくは、快く響いて居た。

が、其の裡に縁側に立つて居る人々は、單純な大工の動作に飽いて、いつとなく部屋の中へは入つてしまつた。格之介

と清八と丈は、まだ縁側を離れなかつた。

大工は、その材木で幾本となく、高い柱をこさへて居るとは明かだつた。そして、一方の端を、土の中へでも打込むやうに、尖らせて居るのだつた。その裡に、さうした丸い柱の數も、格之介には分つた。

大工は、十本の柱を、作へ上げてしまふと、今度は車に積み残してあつた材木を、下しにかゝつた。見ると、それは幅が一尺位、長さが一間位あらうと思はれる板だつた。厚みは、一寸にも近かつた。板の數は、數へると五枚あつた。

「怪しいなあ。一體、何をこさへるのだらう」  
傍に居る清八が、首を傾しげながら、呟いた。格之介にも、それが不思議に感ぜられて居た。彼も、大工が何を作らうとするのか、少しも見當が付かなかつた。

その裡に、大工は銘々、一枚の板と二本の柱とを揃へると、板の兩端へ一本づゝ柱を當がつた。「おや」と、思つて居る内に、大工は道具箱から、一尺に近い鋸を取り出して、柱と板との繼目に當がうと、大きい金鋸へ、一杯の力を籠めながら、カーンと鋭く打ち込んだ。

今まで、好奇心丈で見て居た清八が、チラリと格之介の顔を振り返つた。清八の顔には、血の氣がなかつた。唇が、ピクピク動いた。それを見返した格之介が、もつとあはれな顔



をして居たことは無論である。二人は、先刻からウカ／＼と、獄門臺が作られるのを見て居たのである。

「こりやいかん！ 諸君、あんなものを作つて居る。あんなものを！」

清八は、救ひを求めるやうな悲鳴を擧げた。五六人駭いて、縁側に飛び出して来た。が、みんな一目見ると、色を易えてしまつた。誰も、何とも云はないで、縁側の上に釘付にされたやうに立つて居た。

碁を圍んで居た築麻市左衛門までが、立ち上つて来た。道の彼も、一目見ると、かすかではあるが、顔色が變つた。

「うむ！ 謎をかけ居つたな。われ／＼に、覺悟をせよと云ふ謎だな」

彼は重くろしい口調で、みんなの沈黙を破つた。一番おしまひに、出て来た宇多熊太郎は、一番動じて居なかつた。

「もう諸君！ 今夜がお別れぢや！ 刻限は明日の夜明だな、按ずるに」

彼は苦笑しながら、みんなを見返つた。

「五人丈は梟首か。拙者は免れぬな、あは！」

市左衛門が、さう云つた。彼も獄門臺の數を數へて見たのである。格之助は、先刻から、止めようとしても止まらない胴顛ひ

が、身體の何處からともなく、全身に傳はつて来るのである。獄門臺の數が五つ。それを數へたときに、彼は自分の死首

が、その上に載つて居るやうな氣がした。もうそれで、彼が殺されて、梟首されることは確だつた。十三人の中で、八人

まで輕輩の士である。お目見得以上の士は五人しか居ない。彼はその五人の中で、家の格式が丁度眞中に位して居る。

「五人丈は、獄門になるのは判つた。が、後の八人はどうなるのだらう。斬首かな、それとも命丈は助かるか知らん」

足輕の中で、一番年輩の男が、さう云つた。彼はまだ一縷の望みを、繋いで居た。

「助かる！ たわけたことを云はれる！ 今になつて、助かることを考へる。積もつても見るがよい。五人の方々が、梟首される以上、われ／＼が助かる筈があるものか。武士たるものに、梟首は極刑ぢや。五人の方々を、極刑にする以上、われ／＼を許す筈がない。打首丈なら、まだ仕合せぢや。御覽なされい！ 今にも、もう一臺材木を引いた車が參るから」

加藤小助が、地獄の獄卒で、もあるやうに、憎らしげにさう云つた。その辭、彼の顔色にも人間らしい色は残つて居なかつた。

八人の輕輩の人達は、加藤の言葉を不快に思つた。が、その眞實を認めない譯には行かなかつた。五人の上士達が、梟首される以上、残りの八人が、縱令梟首は免かれるにしても、

打首丈は確かな事實だつた。

殊に、五人の中には入つて居る格之介が、死を免がれ得るやうな理由は、少しも考へられなかつた。死は、たゞ時の問題として、彼の前に迫つて来た。彼も、何うにかして、死を待ち受ける準備を、しななければならなかつたのだ。

獄門臺が、スツカリ出来上つて、その氣味の悪い恰好を、ズラリと地上に並べて居る時だつた。燃ゆる赤熊の帽子を着た鳥取藩の士官が、空地へ現はれた。士官が、何か合圖をみると、大工達は一つの獄門臺を、三人で擔ぎながら、寺の方へ近づいて来た。何をするかと思つて居ると、寺の板扉の上へ、獄門臺の板が、ぬつと現はれた。見ると、今までは氣が付かなかつたが、板の丁度中央に、死首を突きさす釘が打つてあつて、それが夕日の光を受けて、キラ／＼と光つて居るのであつた。

それを見ると、宇多熊太郎は、縁側の板を踏み鳴らしながら怒つた。

「あゝ、あんないやな事をしやがる。あんな嫌がらせをするが、怒り得るものは幸ひだつた。格之介は、それを見ると、恥も外見もなく、身體がガタ／＼と顛え出した。

五つの獄門臺は、次ぎ／＼に扉に、立てかけられた。眞新しい材木が、古い板扉の上にマザ／＼と、夕日の中に浮んで

居る。

「あゝ、残念だ！ 諸君、こんな汚はしいものを見て居ないで、障子を閉めようでは御座らぬか。武士たるものを、罪人同様に恥しめ居る。あゝ、かうと知つたら、七首の一本位隠して居るところであつた」

宇多熊太郎は、忌々しさうに舌打した。

みんなは、部屋には入つて、障子を閉めた。が、格之介には、障子越しに、五つ並んだ獄門臺が、アリ／＼と見えた。

それ限り、夕食の時まで、誰も一口も、口を利かなかつた。夕食の膳が出ると、築麻市左衛門は、所化の僧に酒を所望した。

「各々方、今夜はお別れて御座る。我々に無禮を働く鳥取藩士への面當に、明日は潔い最後を、心掛けようでは御座らぬか。各々方が、平生の覺悟を拜見したう御座る」

十二人までは、道に悪びれた所はなかつた。盃が、しめやかに廻はつた。

が、格之介は、飯も咽喉へは通らなかつた。一杯喰つた飯が、もどしさうに、何時までも胸に悶へて居た。

彼は、何うしても死ぬ氣にはなれなかつた。切破詰まつて、死ぬにしても、もう一度妻の顔が見たかつた。もう一度妻と

——、妻と最後の名残りを惜しみたかつた。が妻など云ふことを考へないでも、死その物が、何うしても嫌だつた。彼



は、何うにかして死にたくなかつた。まして、殺された後に、自分の首が、獄門臺に洒されることを考へると、どんなことをしても死を免れたかつた。もう、とつぷりと暮れてしまつた障子の外の、闇の彼方に、白木の獄門臺が、ズラリと並んで居ることを考へると、水のやうな寒む氣が、全身を流れるのであつた。

その翌くる朝、桑名の藩士達は銘々、覺悟を定めて床を離れた。が、起き出たものは、十三人ではなかつた。格之介は、夜の裡に警護の者の目を盗んで逃亡してしまつて居たのである。

五

「臆病者！ 卑怯者！」

十二人は、口々に格之介を罵つた。が、中には、うまく逃亡した格之介に對する心の裡の羨望を、さうした言葉で現はして居るものもあつた。

築麻市左衛門から、格之介逃亡の旨を、警護の鳥取藩士に申出た。道に、その推定された逃亡の理由までは云はなかつた。敵となつて居る他藩の人に對し、同藩の者を臆病者にはしたくなかつたからである。

「有様は、關東へ下つて、慶喜公の旗下に加つて、一働き致さうとの、所存と見え申す。」

と思つたからぢや。それを、盗人か何かのやうに、夜中ひそかに脱走する……」

「云はれな！」市左衛門は、中途で烈しく妨ぎつた。それはほど、われ／＼を武士として扱ふと云はるゝ貴殿が、あの指圖は何事ぢや。われ／＼は町人百姓では御座らぬぞ。朝廷の御處置が定まつたら、何時にても首を差し伸べる覺悟は致して御座る。それをあの指圖は何事ぢや。貴殿こそ、われ／＼を盗人か無宿者同様に心得て御座る。あれが、武士を遇する道か。あれが、武士に對する寛大の取扱ひか。」

市左衛門の眼は、血走つた。もし、彼が帯刀を許されて居たならば、左の手はきつと、その柄頭を握りしめたに違ない。市左衛門に指ざされて、鳥取藩の隊長は、墓地を越えて、板塀の方を見た。彼の眼にも、黒い板塀と、ハツキリした對象をなして、ぬつと突き出て居る、獄門の首臺が、眼に映つた。それを一瞥したときに、彼は明に狼狽した。

「やあ！ これは／＼、いかい不念ぢや。許されい／＼、」  
詫びようとする隊長を押へて、市左衛門は勝ち誇つたやうに云つた。

「われ／＼は、武士で御座る。あのやうに、御親切に悟されても、腹を切る覺悟は、平生から致して御座る。今日か、但しは明日か、時刻をさへ知らして下されば、それで澤山ぢや。」

市左衛門は、格之介逃亡の理由を、かう説明した。

それを聞いた鳥取藩の隊長は、苦い顔をした。

「それは近頃、心外なことぢや。武士は、敵味方に別れても、相見互ぢやと存じたに依つて、かほど迄、寛大な取扱ひを致したのは、われらが寸志ぢやに、それが各々方に、判らなかつたとは、心外千萬ぢや。いや、よう御座る！ 鎮撫使から預つた大事な囚人を、逃したとあつては、拙藩の恥辱で御座るほどに、草を別けても探し出す所存で御座る。各々方を信用したのが、拙者の不覺で御座る。」

隊長は、可なり憤慨して、開き直つた。

市左衛門も、相手から寛大な取扱と云ふ言葉を聞くと、ムツとした。武士たるものに、汚はしい刑具を見せ付けて、侮辱を與へて置きなから、よくもそんなしら／＼しいことが云へると思つた。

「ふむ！ あれで寛大な取扱ひと申さるゝか」

彼は、吐き出すやうに云つた。

「いかにも」隊長は、屹となつて答へた。拙者の計ひで、各各方に、かほど自由を興へて御座るのが分らないのか。錦旗に發砲した朝敵ぢやほどに、手銃をかけ足銃をかけても云ひ分はない管ぢや。それを、起居も各々方の隨意にさせてある。番兵も付けず、看視も致さないのは、何の爲ぢや。武士たる各々方が、一旦恭順を表せられた以上、萬に一つ間違はない

市左衛門の憤慨を、肯きながら聞いて居た隊長は、彼の言葉の終るのを待つて、態度を改めた。

「それは、飛んでもないお考違ぢや。拙者の不念から、部下のもの、致した粗相ぢや。各々方にあのやうな不吉なものを見せて、何とも申譯が御座らぬ。お氣に止められるな。各々方を處刑、そのやうなお沙汰は、氣もないことぢや。いや、昨夜も本營へ參つて、聞いた噂に依れば、桑名藩の方は、主従とも何のお咎もなからうとの事ぢや。あの獄門臺で御座るか……」

さう云つて、彼は次ぎのやうな話をした。

丁度、有栖川宮の先發たる橋本少將、柳原侍従が、錦旗を擁して、伊勢へはいつたと同時に、近江から美濃へ入つた官軍の別働隊があつた。彼等は、赤報隊と稱して、錦の御旗を先頭に立て、二百人に近い同勢が、鎮撫使の萬里小路侍従を取り圍んで居た。彼等の、多くは、陣羽織に野袴を穿いて、舊式の六匁銃などを持つて居たが、右の肩口には、孰れも錦の布片を付けて居た。彼等は、美濃には入つてから、所在に農兵を募つた。美濃の今尾、竹腰伊豫守の城下に達したときは、同勢七百人に近かつた。小藩の今尾では、不意の官軍に駭いて、家老が城下の入口まで出迎へた。彼等は、今尾藩へ三千兩、城下の町人に二千兩の軍用金を命じて、一日悠々と、軍隊を休めてから、南に下つて、大垣の南八里の高須藩へ殺



到した。

高須の、松平中務大輔の藩中も、錦旗の前には、目が眩んでしまった。赤報隊は、其處でも、一萬兩に近い軍用金を蒐めた。今尾高須の二藩を、憎服させた赤報隊は、意氣揚々として、桑名藩へ殺到しようとして、桑名城の南、安永村に進んで、青雲寺と云ふ寺に、本營を敷いた。その夜である。鳥取藩と藝州藩の諸隊が、此青雲寺を取り圍んだのは、錦の布片を附けた同志が、烈しく戦つた。茲まで、附いて来た農兵隊は、蜘蛛の子を散らすやうに逃亡した。偽の萬里小路侍従は、流弾に斃れた。その場で、殺された者が五十人に近かつた。捕はれたものが十七人、それが明朝、海藏川原の刑場で、斬られると云ふのである。その裡で、偽の萬里小路侍従と他の四人の首級とが、梟首せられると云ふのであつた。

た。彼は、身を翻して、窻の背後の、二間ばかりの谷を飛び越えんと、雑木の生ひ茂つた山の中腹へ、逃げ込もうとした。「えい！ まだ逃げ居る！ 未練な奴ぢや。射て！ 射て！ かまはぬ、射て！」

隊長はいらつて叫んだ。二三人の兵士が、新式のゲーベル銃で、折敷の構をした。烈しい銃聲が、山村の静かな空氣を動かした。格之介のやせた細長い身體が、雑木の幹の間で、クル／＼廻つたかと思ふと、仰けざまに倒れたまゝ、動かなかつた。

越えて數日、海藏川原に、並んで立つて居た五つの獄門臺から、赤報隊の元兇達の首級は、取り捨てられて居た。そして、その後代りのやうに、その中央の獄門臺に、若い武士の首級が一つ、洒されて居た。捨札には達筆で次ぎのやうに書いてあつた。

桑名藩 新谷格之介

右者京畿ニ於テ錦旗ニ發砲シタルニ依ツテ羽津光明寺ニ謹憤被仰付候ニモ抑ラズ潜力ニ脱走ヲ企テ江戸ニ下向再ビ錦旗ニ抵抗致サントシタル段重々不埒至極依テ銃殺ノ上梟首スルモノナリ

六

その誤解は、うちとけた哄笑で、濟んでしまつたけれど、鳥取藩士の格之介に對する追窮は、それでは濟まなかつた。彼等は藩の面目にかゝはる一大事だから、何うあつても探し出すと揚言した。東海道筋には、官軍が滿ち／＼居る故に、江戸へ下り得る筈はない、近在に潜んで居るに違ないとあつて、十人二十人、隊を組んだ鳥取藩士は、四日市桑名名古屋を中心し、美濃伊勢尾張の、三國の村々在々を隈なく搜索した。その中の一隊は員辨川に添ふて、濃州街道を、美濃の方へ探して行つた。

桑名の西北六里、濃州街道に添ふて、石碑と云ふ山村があつた。山から石灰石を産するので、石灰を焼く窯が、山の中に幾つも散在した。一隊が、此村に達したとき、村人の一人は、此の石灰を焼く窯の一つに、武士體の男が、二三日來潜んで居ることを告げた。それを聞いた一隊の人々は、勇み立つた。彼等は庄屋に案内させて、その窯を、右と左から取り圍んだ。

戊辰二月

官軍參謀

格之介を除いた十二人の人々は、その年の四月、何のお咎もなく無事に、歸藩を許された。格之介の逃亡の理由が判るにつれ、桑名藩士も、官軍の人達も、格之介が風聲鶴唳に駭いて逃走を企て、捨てぬてもよい命を、捨てたことを冷笑した。が、何うして格之介を、嗤ふことが出来よう。彼は確に、自分の首が載る獄門臺が、作られるのを見て居たのである。



# 俊 寛

一

治承二年九月二十三日の事である。

若し、それが都であつたならば、秋が更けて、變り易い晩秋の空に、北山時雨が、折々襲つて来る時であるが、薩摩瀧の沖遙かなる鬼界ヶ島では、まだ秋の初めてでもあるやうに暖かかつた。

三人の流人達は、海を見降ろす砂丘の上で、日向ぼつこをして居た。ぽか／＼とした太陽の光に浴して居ると、折々破れほころびて居る袴を、着て居ても、少しも寒くはなかつた。

四五日吹き續いた風の名残が、まだ折々水沫を飛ばす波がしらに、現はれて居るものの、空は一杯に晴れ渡つて、漣のやうな白雲が、太陽をかすめて、棚引いて居る丈だつた。が、さうした晴れ渡つた蒼空から、少しの慰めも受けないやうに、三人の流人達は、疲れ切つた獸のやうに、黙つて砂の上に蹲まつて居る。康頼は、先刻から左の手で手枕をして、

横になつて居る。

康頼も、成経も、俊寛も、一年間の孤島生活で、その心も氣力も、スツカリ叩きのめされてしまつて居た。最初、彼等は、革命の失敗者として、清盛を罵り平家の一門を呪ひ、陰謀の周密でなかつたことを後悔し、悲憤慷慨に夜を徹することが多かつた。が、一月二月経つ裡に、さうした悲憤慷慨が、結局鬼界ヶ島の荒磯に打ち寄る波と同じに、無意味な繰返しに過ぎない事に氣が付くと、もう誰もさうした事を口にする勇氣を無くして居た。その上に、都會人である彼等に、孤島生活の惨苦が、ヒシ／＼と迫つて來た。毎日のやうに、水に浸した乾飯や、生乾きの魚肉のあぶつたものなどを口にする苦しみも、骨身に徹して來た。彼等は、さうした苦痛を壓倒するやうな積極的な心持は、少しも動かない。彼等は苦痛が重れば重るほど情氣切つてしまひ、飯を食ふ外は、天氣のよい日は、海濱の砂地で、雨の降る日は、仕方なくその狭い小屋の中で、たゞ溜息と愚痴との裡に、一日々々を過して居た。その裡に三人とも烈しい不眠症に襲はれた。その

裡では、神経質の康頼が、一番ヒドかつた。彼は、夜中眠られない癖が、付いてしまつたので、晝間よく假睡をする。先刻からも横になつたかと思ふと、もうかすかないびきを立てて居る。長い間、剃刀を當てない髯が、ぼう／＼としてその瘡せこけた頬を掩うて居る。その上、褪せた脣の下端には、涎が今にも落ちさうに湛へて居る。

成経は、成経で、妖怪に憑かれたやうな、キョトンとした眼附で、晴れた大空を、當度もなく見ながら、溜息ばかり吐いて居る。俊寛は、一緒に陰謀を企てた連中の、かうした辛抱のない、腑甲斐ない容子を見て居ると、自分自身までが情なくなる。陰謀を企てた人間として、今少しは男らしい、毅然とした所があつてもいい。刑罰の下に、かうまで、へこたれてしまはなくてはなかつてもいいと思ふ。彼は、成経がもう一度、溜息を吐くと、それを機會に、たしなめてやらうと思ひながら、ちつと成経の顔を見据えて居たが、成経はそれと悟つた譯でもあるまいが、クルリと俊寛の方へ、背を向けると海の方へ向いたまゝ、これもしばし、まどろむ積りだらう、黙り込んでしまつた。

二人の友達が黙つてしまふと、俊寛の心も張合が抜けたやうに、淡い悲しみに囚はれる。彼にも、島の生活が、堪らなく苦痛になつて來た。都へ歸りたい。さうした渴に似た感情で、胸を責められる。その上、成経康頼等の心持と、自分の

心持と、日に増しこぢれて來ることを感じた。人間が、三人寛まるときは、屹度その中の二人丈が、仲よくなり、一人丈は孤立する傾きのあるものだが、今の場合には、それが殊に烈しかつた。康頼も、成経も、彼等の生存が、苦しくなればなるほど、愚痴になつて來る。そして、過ぎ去つた謀反の企てを心の裡で後悔し始める。人間は如何なる場合でも、自分を怨まないで、他人を怨む。そして、陰謀の發頭人であつた西光を怨む。引いては西光と一番親しかつた俊寛を怨む。彼等を、かうした絶海の孤島で、悶えさせるのは、清盛の責任でなくして、本當は西光が、陰謀を發頭した爲めであるかのやうな事を云ふ。西光の人格や陰謀の動機を、よく理解して居る俊寛には、彼等のさうした愚痴が、癢に觸つて仕方がない。彼の神経は、日に増しイライラ／＼する。さうして、何かの機みから、つい氣色ばんで云ひ争ふ。二人は俊寛を煙たく思ひ始める。そして、剛愎な俊寛に、一致して反抗の氣勢を示す。そして、お互に心持を荒ませ合ふ。

此の頃、俊寛はよく、二人が意識して、自分を疎外して居るのを感じる。硫黄を採りに行く時でも、海藻を採りに行く時でも、よく二人限で行つてしまふ。その上、三人で居るときでも、二人はよく顔を寄せ合つて、ヒソ／＼話を始める。そんなとき、俊寛は堪らない寂寥と、不快を感じる。三人限の生活では、他の二人に背かれると云ふことは、人間全體か



ら背かれると云ふことゝ、同じことだつた。俊寛は、さうした心苦しさを免かれようとして、自分一人で、行動して見ようかと考へた。が、一日自分一人で、離れて居ると、烈しい寂しさに襲はれる。そして、意氣地なく成経と康頼との所へ歸つて来る、そして再び、不快な感情の裡に、心を傷けながら生活して行く。

今朝も、鹿ヶ谷の會合の發頭人は、誰だと云ふことで、俊寛は成経と、可なり烈しい口論をした。成経は眞の發頭人は、西光だと云つた。だから、西光丈は平相國が、直ぐに斬つたてはないかと云つた。俊寛は、いな御身の父の成親卿こそ、眞の發頭人である。清盛が、御身の父を都て、失はなかつたのは、藤氏一門の考へんやうを、憚つたからである。その證據には、備前へ流されると、直ぐ人知れず殺させたてはないかと云つた。父のことを、悪しざまに云はれたので、日頃は言葉少い成経も、烈火のやうに激して、俊寛と一刻近くも、烈しく云ひ争つた。二人が、口論に疲れて、傷けられた胸を懐きながら、黙つてしまふまで。

成経と、康頼とが、横になつて居る。いぎたない容子を見て居ると、俊寛は意地にも、その眞似をする氣にはなれなかつた。彼は、胸の裡の寂しさとムシヤクムシヤした鬱憤とを洩す所のないまゝに、腕組をしてちつと考へる。すると、何時もの癖であるやうに、妻の松の前や、娘の鶴の前の姿が、まぼ

ともすることが出来なかつた。

その裡に、疑深い俊寛の眸にも、遙か彼方の水平線に、浪に浮んで居る白鳥のやうに、白い帆を一杯に張りながら、折柄の微風に、動くともなく近づいて来る船の姿が、映らずには居なかつた。

俊寛も、狂氣のやうに走り出した。三人は半町ばかり隔りながら、懸命に走つた。お互に立ち止つて、待ち合せる餘俗などはなかつた。走るに従つて、白帆もだん／＼近づいて来るのだつた。それは、九州から硫黄を買ひに来る船のやうな、小さい船ではなかつた。

成経は、感激のために、泣きながら走つて居る。康頼もさうだつた。俊寛も、胸が暑くなるしくなつて眼頭が、妙にむづかくなつて来るのを感じた。見ると、船の軸には、一流の赤旗が、へんぼんと翻つて居る。平家の兵船だと思ふと、その船に救免の使者が、乗つて居ることが、三人に直ぐ感ぜられた。

船は、流人達の姿を見ると、軸を岸の方へ向けて、帆をひたひたと降ろし始めた。やがて、船は岸から、三反とない沖へ碇を揚げた。三人は、岸邊に立ちながら、聲を合せて欣びの聲を揚げた。道に、俊寛をも除外しないで、三人は、手を執り合つたまゝ、聲を揚げて、泣き始めたのである。

るしのやうに、胸の中に浮んで来る。それから、京極の宿所の釣殿や、鹿ヶ谷の山莊の泉石のたゞずまひなどが、髪髯として想ひ出される。都會生活に對するあこがれが、心を爛らせる。澤山使つて居た下僕の一人でも、今侍じやういて居て呉ればなどと思ふ。

俊寛が、かうした回想に耽つて居るとき、寢入つて居たと思つた成経が、急に立ち上つた。彼は悲鳴とも歡聲とも付かない聲を出したかと思ふと、砂丘を海の方へ一散に駆け降りた。

彼は、波打際立つと、躍るやうに両手を打ち振つた。「判官どの。白帆にて候ぞ。白帆にて候ぞ」さう云つて、康頼に知らせると、又悲鳴のやうな聲を揚げながら、濱邊を北へ北へと走つた。

康頼も、あわたゞしい聲に直ぐ起き上つた。俊寛も、白帆だと聞くと、直ぐ立ち上らずには居られなかつた。白帆が見えると云つて、成経が濱邊を走つたことは、これ迄に二三度あつた。彼はよく、白雲の影を、白帆と間違へたり、波間に浮ぶ白鳥から、白帆の幻影を見た。

康頼は、道に直ぐ後に續いて走つたが、俊寛は又かと思ひながら、無言のまゝ跡から隨いて行つた。成経と康頼とは砂濱を根よく走りつゞけた。俊寛も、彼等の熱心な走り方を見ると、自分の足並が、何時の間にか、急ぎ足になるのを何う

二

船は、流人達の期待に背かず、清盛からの赦免の使者丹左衛門尉基康を乗せて居た。が、基康の持つて居た清盛の教書は、成経と康頼とを、天國へ持ち上げると共に、俊寛を地獄の底へ押し陥した。俊寛は、狂氣のやうに、その教書を基康の手から奪ひ取つて、血走る眼を注いだけれども、其處には俊寛とも僧都とも書いてはなかつた。俊寛は、激昂の餘り、最初は使者を罵つた。俊寛の名が洩れたのは、使者の怠慢であると云ひ募つた。が、基康が、その鋒鏑を避けて、相手にしないので、今度は自分を捨て、行かうとする成経と康頼とに喰つてかゝつた。そして、成経と康頼とを卑怯者であり、裏切者であると罵倒した。成経が、それに堪へかねて、二言三言言葉を返すと、俊寛は直ぐ、カツとなつて、成経に掴みかゝらうとして、基康の手下の者に、取りひしがれた。

それから後、幾時間かの間の俊寛の憤りと悲しみと、恥とは喰へるものもなかつた。彼は、目の前で、成経と康頼とがその垢じみた衣類を脱ぎ捨て、都に在る縁者から、贈られた眞新しい衣類に着換へるのを見た。嬉し涙を滾しながら、親しい者からの消息を、讀んで居るのを見た。が、重料を赦免せられない俊寛には、一通の玉章をさへ受けることが許されて居なかつた。俊寛は、砂を噛み、土を掻きむしりながら、



泣いた。  
船は、飲料水と野菜とを積み込み、成経と康頼とを収めると、手を合して乗船を哀願する俊寛を、濱邊に押し倒したまま、岸を離れた。そして、俊寛をもつと苦しめる爲めの故意からするやうに、三反ばかりの沖合に碇を投げて、其處で一晩を明すのであった。

俊寛は、終夜濱邊に立つて、叫びつづけた。最初は罵り、中途では哀願し、最後には、タワイもなく泣き叫んだ。  
「判官どの、のう！ 今一言申し残せしことの候ぞ。小舟なりとも寄せ候へ！」

「基康どの、僧都をあはれと思召さば、せめて九州の端までも、送り届け得させ給へ！」  
が、俊寛の聲は、渚を吹く海風に吹き拂はれて、船へは少しも聞へないのだらう、闇の中に、一の灯もなく黒く籠つて居る船からは、應と云ふ一聲さへなかつた。

夜が更くるに付け、俊寛の聲はかすれてしまった。おしまひには、傷ついた海鳥が泣くやうな、かすかな悲鳴になつてしまつた。が、どんなに聲が、かすれても、根よく叫び續けた。

その裡に、夜はほの／＼と明けて行つた。朝日が渺々たる波の彼方に昇ると、船はから／＼と碇を揚げ、帆を朝風にはたはたと離かせながら捲き上げた。俊寛は、最後の叫び聲を

揚げようとしたけれども、聲は少しも咽喉から出なかつた。船の上には、右往左往する水夫どもの姿が見える丈で、成経康頼はもとより、基康も姿を現はさない。

見る間に船は、滑るやうに動き出した。もう、乗船の望みは、少しも残つては居なかつたが、それでも俊寛は船を追はずには居られなかつた。船は、島に添ひながら、北へ北へと走る。俊寛は、それを狂人のやうにこけつ、まろびつ追つた。

が、三十町も走ると、其處は島の北端である。其處からは、翼ある身に非ざれば追かけることが出来ない。折から、風は吹き募つた。船の帆は、張り裂けるやうに、風を孕んだ。船は見る／＼裡に小さくなつて行く。俊寛は、巖壁の上に立ちながら、身を悶えた。もう聲は、少しも出ない。たゞ、獸のやうに、巖壁の上で狂ひ廻る丈だつた。

船は、俊寛の苦悶などには、何の容赦もなく、半刻も經たない裡に、水平線に漂ふ白雲の裡に、紛れ込んでしまつた。船の姿を見失うたとき、俊寛は絶望のために昏倒した。昨夜來叫びつづけた疲労が、一時に發したのだらう、其儘茫として眠り續けた。

彼は、その巖壁の上で、昏倒したまゝ、何時間眠つて居たかは、自分にも分らなかつた。一度目覺めたときは、夜であつた。彼は、自分の頭の上の大空が、大半は暗い雲に掩はれ

て、そのわづかな切れ目から、二三の星が瞬いて居るのを見た。彼は烈しい渴と、全身を碎くやうな疼痛を感じた。

彼は、水を飲みたいと思ひながら、周囲を見廻した。が、巖壁の背後は、直ぐ峻峭な山になつて居るらしく、小川とか泉とか、ありさうにも思へなかつた。それでも、烈しい渴は、彼を一刻も、ちつとして居させなかつた。彼は、寝て居た岩から、身を剥がすやうにして立ち上つた。立ち上るとき、身體のもろ／＼の關節が、音を立て、軋るやうに思つた。彼は、それでも這ふやうにして、巖壁を降りることが出来た。彼は密間、それは昨日であるのか一昨日であるのか分らなかつたが、夢中で、走つた道を、二町ばかり引返した。彼は、密間其處を走つたとき、榕樹が五六本生えて居て、其の根に危く躓きさうになつたのを覺えて居た。彼の濁つてしまつて居る頭の中でも、榕樹の周囲を探せば水があるかも知れないと云ふ考が、ほんやり浮んで居た。

が、榕樹の生えて居る周囲を、海の水あかりで、二三度探して廻つて見たけれども、其處から一面に、唐竹が密生して居る丈で、水らしいものは、少しも見當らない。俊寛は、その搜索に残つて居た精力を費ひ盡して、崩れるやうに地上へ横はると、再び昏々として眠り始めた。

二度目に目覺めたとき、それは朝だつた。疲れ萎びて居る俊寛の頬にも、朝の微風が快かつた。彼が、目を開くと、自

分の身體の上に茂り重つて居る蒼々たる榕樹の梢を洩れた、清々しい朝の日光が、美しい幾條の縞となつて、自分の身體に注いで居るのを見た。道に、暫らくの間は、淨らかな氣持がした。が、直ぐ二三日の出来事が、悪夢のやうに歸つて來、そして烈しい渴を感じたので、彼はよろ／＼と立ち上つた。それでも、縹渺と無邊際に擴がつて居る海を、未練にもも一度見直さずには、居られなかつた。が、群青色にはろ／＼と續いて居る大洋の上には、信天翁の一群が、飛び交うて居る外は、何物も見えない。成経や康頼を乗せた船が、今まで視野の中に止まつて居る筈はなかつた。

彼が再び地上に身を投げたとき、身を焼くやうな渴と餓とが、激しく身に迫つて來た。  
彼は、赦免の船が來て以來、何も食つて居ないのだつた。基康は道に彼をあはれがつて、船の中で炊いた飯を持つて來て呉れたのであるが、瞋恚の火に心を焦して居た俊寛は、その久し振の珍味にも目を呉れないで、水夫の手から、それを地上に叩き落した。むろん、今でも自分の小屋まで歸れば、乾飯も澤山残つて居る。が、俊寛には一里も近い道を歩く勇氣などは、残つて居なかつた。

烈しい渴と餓とは、彼の心を荒ませ、自殺の心を起させた。彼は、目の前の海に身を投げることを考へた。さうして、何故基康の船が居る裡に、死ななかつたかを後悔した。基康や、



あの裏切者の成経や、康頼の目前で、死んだならば少しは腹癒せにもなるのだつたと思つた。今死んでは犬死であると思つた。が、死なうと云ふ心は變らなかつた。歸洛の望を永久に断たれながら、暮して行くことは、彼には堪へられなかつた。二十間ばかり向うの岸に、一つの岩があり、その下の水が、殊更に深いやうに見える。

彼が、決心して立ち上つたとき、彼はふと水の匂ひを嗅いだ。それは、眞水の匂ひであつた。極度に渴して居る彼の鼻は、犬のやうに鋭くなつて居るのだつた。彼は、水の匂ひを嗅くと、その方角へ本能的に走り出した。唐竹の林の中を、彼は獸のやうに、潜つた。十間ばかり潜つたとき、その林が盡きて、其處から岩山が聳えて居た。

ふと、其處に、大きい岩を背後にして、此の島には、珍らしい椰子の樹が、十本ばかり生えて居るのを見た。そしてその椰子に掩はれた蔭色の岩から、一條の水が、銀の糸のやうに滴つて、それが椰子の根元で小さい泉になつて居るのを見た。水は浅いながらに、澄み切つて、沈んで居る木の葉さへ、一々に數へられた。渴し切つて居る俊寛は、犬のやうに、つくばつて、その冷たい水を思ひ切り、ガブ／＼飲んだ。それが、何と云ふ快さであつたらう。それは、彼が鹿ヶ谷の山莊で飲んだ如何なる美酒にも勝つて居た。彼が、その清冽な水を味つて居る間は、清盛に對する怨みも、島にたゞ一人殘

された悲しみも、忘れ果てたやうに清々しい氣持だつた。彼は蘇つたやうな氣持になつて、立ち上つた。そして、椰子の梢を見上げた。すると、梢に大きい實が二つばかり生つて居るのを見た。俊寛は疲勞を忘れて、猿のやうによち昇つた。それを叩き落すと、傍の岩で、打ち碎き、思ふさま貪り食つた。

彼は、生れて以來、これほどの有難さと、これほどのうまさとして、飲食したことはなかつた。彼は、椰子の實の汁を吸つて居ると、自分の今までの生活が、夢のやうに淡く薄れて行くのを感じた。清盛、平家の一門、丹波少將、平判官、丹左衛門尉、そんな名前や、そんな名前に對する自分の感情が、この口の中の凡てを、いな心の中の凡てを、溶かしてしまふやうな木の實の味に比べて、全く空虚な、つまらないもののやうな、氣がし始めた。

俊寛は、口の中に残る快い感覺を、樂みながら、泉のほとりの青草の上に寝た。そして、過去の自分の生活のいろ／＼な暗な相を、心の中に想ひ出して見た。都に於けるいろ／＼な暗闘、陷擄、戰爭、擯勢の爭奪、それから来る嫉妬、反感、憎悪、さう云ふ感情の動くまゝに、狂奔して居た自分の淺ましさが、しみ／＼解つたやうな氣がした。船を追つて、狂奔した昨日の自分までが、餓鬼のやうにあさましい氣がした。煩惱を起す種のない、此の絶海の孤島こそ、自分に取つて、唯

一の淨土ではあるまいか。康頼や、成経が傍に居たために、都の生活に對する、いな人生に對する、執着が切れなかつたのだ。此の島を、假のすみかと思へばこそ、硫黄ヶ丘に立つ煙さへ、焦熱地獄に續くものやうに、ものうく思はれたのだ。茲こそ、つひのすみかだ、あらゆる煩惱と執着とを断つて、眞如の生活に入る道場だ。さう思ひ返すと、俊寛は生れ變つたやうな、ほがらかな氣持がした。

ふと、寢がへりを打つと、直ぐ自分の鼻の先に、撫子に似た眞赤な花が咲いた居た。それは、都人の彼には、名も知れない花だつた。が、その花の花弁が、何と云ふ美しさと、淨らかさを持つて居たことだらう。その花を、ぢつと見詰めて居ると、人間の凡てから知られないで、美しく香つて居る。かうした名も知れない花の生活と云つたやうなものが考へられた。すると、孤島の流人である自分の生活でさへむげに生甲斐のないものとは思はれなくなつた。彼は、自殺しようとした自分の心の淺さを恥ぢた。彼の心には、今新しい力が湧いた。彼は踊躍して、立ち上つた。そして、海岸へ走り出た。平素は、魂も眩むやうに、ものうく思はれた太平洋が、何と美しく輝いて居たことだらう。十分昇り切つた朝の太陽の下に、紺碧の潮が、後から／＼湧くやうに躍つて居た。海に接して居る砂濱は、金色に輝き、飛び交うて居る、信天翁の翼から、銀の光を發するかと疑はれ、平素は、見ることを厭

つて居た硫黄ヶ丘に立つ煙さへ、今朝は澄み渡つた朝空に、琥珀色に、やさしく棚曳いて居る。

俊寛は、童のやうなのびやかな心になりながら、両手を差擴げ、童のやうに叫びながら自分の小屋へ、馳け戻つた。

三

島に來て以來一年の間、俊寛の生活は、成経や康頼との昔物語から、謀反の話をしておしまひには、お互の境遇を嘆き合ふか、でなければ、砂丘の上などに昇りながら、浪路遙かな都を偲んで、溜息を吐きながら、一日を茫然と過してしまふのであつたが、俊寛はさうした生活を、根本から改めようと決心した。

彼は、努めて都のことを考へまいとした。従つて、成経や康頼のことを、考へまいとした。彼は、成経や康頼が、深切に残して置いて呉れた狩衣や刺貫を、海中へ取り捨てた。長い生活の間には、衣類に困るのは、解り切つて居たが、困つたら、土人のやうに木の皮を身に纏うても差支ないと考へた。

その上、三人で居た間は、肥前の國加瀬の莊にある成経の舅から平家の眼を忍んでの仕送り、ほそ／＼ながら、朝夕の食に事を缺かなかつた。その爲めでもあるが、三人は大宮人の習慣を持ち續けて、爲すこともなく、毎日暮して居た。



俊寛は、さうした生活を改め、自分で漁りし、自分で獵りし、自分で耕すことを考へた。

彼は、さう云ふ生活に入る第一歩として、成經や康頼の記憶が、付き纏つて居る今までの小屋を焼捨て、自分で發見したあの泉の畔に、新しい家を自分で建てることを考へた。

彼は、その日から、泉に近い山林へは入つて、樹を伐つた。彼が、持つて居る道具は、一挺の小さい鉞と二本の小太刀であつた。周囲が一尺もある樹は、伐り倒すのに、四半刻近くかゝつた。が、彼が額に汗を流しながら、その幹に鉞を打込むとき、彼は名狀しがたい壯快な氣持がする。清盛に對する怨などは、さうした瞬間、泡のやうに彼の頭から消え去つて居る。そして、その樹が鉞の幾落下に依つて、力盡き地を揺がせて倒れるとき、俊寛の焼けた顔には、會心の微笑が浮ぶ。彼は、さうして伐り倒した樹の枝を拂ひ、一本宛やつとの思ひで、泉の畔へ引いて来る。彼は、その粗な丸太を地面に立柱とした。小太刀や鉞で、穴を掘ることは、可なり骨が折れた。殊に、さう云ふ仕事に用ゐることで、是から先の生活に、どんな必要であるかも知れない道具の、破損することを恐れねばならなかつた。屋根は、唐竹で葺いた。此島の大部分を掩うて居る唐竹は、屋根を葺くには、藥よりも、遙に秀れて居た。樹の枝を、横に幾つも並べて壁にした。そして、近所から粘い土を見出して、その上から塗抹した。彼は、

此の新しい家を建てるために、二十日ばかりも懸つた。が、彼は自分の住む家を自分で、建てること、どんなに樂しみの仕事であるかが分つた。その間、清盛に對する怨や、妻子に對する戀しさ、焼くやうに胸に迫ることがある、そんなとき、彼は常よりも、二倍も三倍も烈しく働く。無論、島に夕暮が来て、日が荒寥たる硫黄ヶ丘の彼方に落ち、唐竹の林に風が騒ぎ、名も知れない海鳥が鳴くときなど、灯もない小屋の中に蹲まつて居る俊寛に、身を裂くやうな寂しさが、襲つて来る。が、晝間の烈しい労働が産む疲労は、直ぐ彼を、さうした寂しさから救つて呉れ、そして彼に安らかな眠りを與へて呉れる。

新しい小屋が出来たとき、彼はその次ぎには、食物のことを考へた。三人で、食ひ残した乾飯は、まだ二月三月は、俊寛一人を支へることが出来た。が、成經が居なくなつた今は、成經の舅から、仕送りがある筈はなかつた。今は、自分で食物を耕し作るより外はなかつた。俊寛は、新しい小屋から、二町ばかり隔つた處に、やゝ潤けた土地があり、硫黄ヶ丘に遠いために、硫黄の氣が少しもないことを知つた。彼は、其處を冬の間、開墾し、春が来れば麥を植ゑようと思つた。が、差し當つては、漁りと獵りをする外に、食料を得る道はなかつた。

彼は、堅牢な唐竹を伐つて、それに蔓を張つて弓にした。

矢は、細身の唐竹を用ゐ、矢尻は鋭い魚骨を用ゐた。本土ならばかうした矢先にかゝる鳥は、一羽も居なかつたらうが、此島に住んでゐる、里鳩、唐鳩、赤髭、青鷺などは、俊寛の近づくのを少しも恐れなかつた。半日山や海岸を駆け廻ると、運び切れないほどの獲物があつた。

今までの彼は、狩はともかく、漁りはむげに卑しいことだと思つて居た。只管に、都會生活に憧れて居た彼は、さうしたことを眞似て見ようと云ふ氣は起らなかつた。が、現在の彼は、土人に習つて漁りをして見ようと考へた。その頃の島は、鰻を取る季節であつた。永良部鰻は、秋から冬にかけて、島の海岸の暖い海水を慕つて来て、其處へ卵を産むのであつた。土人は、海水の中に、身を浸して、それを手捕りにした。俊寛も、それに習つた。最初は、幾度擱んでも掴み損ねた。土人は、あやしい言葉で、何か云ひながら、俊寛を嗤つた。が、俊寛は屈しなかつた。三日ばかりも、根よく續けて試みて居る中に、魯鈍で、一番不幸な鰻が、俊寛の手にかゝる。五日と経ち、七日経つ裡に、どんな敏捷な鰻でも、俊寛の手から、逃れることが出来なくなつて来る、彼は、何十疋と獲た鰻のアゴに、蔓を通し、それを肩に擔ぐ。蔓が、肩に喰ひ入るやうに重い。が、自分が獲つたのであると思ふと、一疋だつて捨る氣はしない。小屋へ歸つてから、彼は小太刀で、腹を割り、腸を去つてから、それを日向へ乾す。半月ばかり

鰻を取つて居る裡に、小屋の周囲は乾した鰻で一杯になる。その裡に鰻の取れる季節を過ぎ去つてしまふ。そして、冬が来た。冬の間、俊寛は畑を作ることに、一生懸命になつた。彼は、先づ畑の爲めに、選定した彼の廣潤な土地へ、火を放つた。そして、雜草や灌木を焼き拂つた。それから、焼き残つた木の根を掘返し、岩や小石を取去つた。彼の鉞は、今度は畑の用をした。道具がないために、彼の仕事は、捗らなかつた。土人の所に行けば、畑に似たものがあるのを知つて居た。が、報酬なしに土人が、何物をも貸さないことを知つて居た。道具のないために、彼の仕事は、捗らなかつた。が、彼の精根は、さうしたものに、凡て打ち克つた。冬の終る頃には、一町近い畑が、彼の力に依つて、拓かれた。彼は、今最も必要なことは、其處に蒔かねばならない麥の種であつた。彼は、麥の種を土人が容易に手放さないのを知つて居た。彼は、それと交易するために、自分の特物の中で、土人の欲しがらうなものを、いろ／＼考へて見た。土人の欲しがらうなものは、自分の生活にも、缺くべからざるものだつた。俊寛は、ふと鳥羽で別れるとき、妻の松の前から、形見に贈られた素絹の小袖を、今も尙そのまゝに、持つて居るのに氣が付いた。それは、現在の彼に取つて、過去の生活に對する唯一の記念物だつた。彼は、一晩考へた末、此の過去の生活に對する記念物を、現在の生活の必需品に換へること



を決心した。彼は、いとしい妻の形見を、一袋の麥に換へた。そして、それを彼が自分で拓いた、土地に蒔いた。自分で拓いた土地に、自分の手で蒔いた種の生えるのを見ることは、人間の喜びの中では、一番素晴らしいものであることを、俊寛は悟つた。ほのかな、麥の芽が確かな地殻から、オツ／＼と頭を擡げるのを見たとき、俊寛は嬉し涙に咽んだ。彼は跪いて、目に見えぬ何物かに、心からの感謝を捧げたかつた。

鬼界ヶ島にも春は廻つて来る。島の周囲の海が、薄紫に輝き始める。そして、全島には、椿の花が一面に咲く。信天翁が、一日一日多くなつて、硫黄ヶ岳の中腹などには、雪が降つたやうに集まつて居る。

生れて初めての自然生活は、俊寛を見違へるやうな立派な體格にした。生白かつた頬は、褐色に焼けて輝いた。去年着續けてゐた僧侶の平服は、いろ／＼のことをするのに不便なので、思ひ切つて、それを脱ぎ捨て、思ひ切つて、皮かつら身を纏つた。生年三十四歳、その壯年の肉體には、原始人らしい凡ての活力が現れ出した。彼は、生え伸びた髪を無難作に蔓で束ねた。六尺豊かの身體は、鬼のやうな土人と比べてさへ、一際立ち勝つて見えた。

彼は、時々自分の顔を、水鏡で映して見る。が、その變りな姿を、あさましいなどと思つたことはない。むしろ現

は、その魚から油を取つて、灯火の油にしようと思つたのである。

鱒は、群を成して、島の周囲を廻つて居た。俊寛は、その群を追うて、自分の小屋から一里近くも遠方へ出ることもあつた。

その日も、俊寛は、鱒を釣るために、硫黄ヶ岳の直ぐ麓の海岸まで行つた。其處からは、土人の部落が、半里とも隔つて、居なかつた。土人達は、本土の人間を恐れ嫌つた。三人で居たときは、土人達は三人の姿を見ると、遠方から避けた。俊寛一人になつてからは、恐れはしなかつた。が、一種氣味の悪いもののやうに、決して近づいては來なかつた。俊寛も、なるべく土人と交渉することを避けた。土人の部落へは、出來る丈け近寄らないやうにした。が、その日は、近所の海岸には、鱒の姿が見えないため、それを探しながら、到頭土人の部落近くまで、來てしまつた。

彼の釣に、その海岸で、今まで上つた事のないやうな大魚がかゝつた。それは、鱒としても珍らしい五尺を越える大魚だつた。彼は、その巖角で一刻近くも、それを釣り上げるために奮闘した。彼は魚が逸しようとするときには、それに逆はないやうに、手の中の蔓を延ばした。もう延ばすべき蔓が、無くなると、蔓は緊張して、水を切りながらキイ／＼鳴つた。

在の彼には、妻子が時々思ひ出される丈で、清盛の事などは、念頭になかつた。平家が千里の彼方で、奢つて居ようが居まいが、そんなことは、孰らでもよかつた。それよりも彼は、自分が植ゑ付けた麥が、成長するのが、一日千秋の思で待たれた。

麥の畑に生ふる雜草を取ることは、彼の半日の仕事として、十分だつた。が、午後からは海岸へ出て、毎日のやうに鱒を釣つた。絲は太い蔓を用ひ、釣は獸の骨で作つた。三四尺の大魚は、釣を入れると同時に、無難作に食ひ付く、それを引き上げるのが、どんなに壯快であつたらう。それは、魚と人間との格闘であつた。俊寛は危く海の中へ、引きずり込まれさうになる。それを、巖角へ足を、ふんばつて、ぐつと持ち堪へる。魚はそこにかかつた釣を脱ぎさうとして、波間て白い腹をかへしながら、身を悶える。さうした格闘が、半刻近くもつゞく。その裡に、魚の力が弱つて来る。それでも尙、身體を烈しく捻ぢ曲げながら、水面に引き上げられる。

此の豪快な鱒釣が、此頃の俊寛に取つては、仕事でもあり、娛樂でもあつた。四尺を越す大魚を、三四疋繋いで、砂の上を小屋まで引きずつて歸るのは苦しい仕事であつた。それを食ふると、新鮮な肉からは、香ばしい匂が立ち、俊寛の健啖な食慾を、いやが上にも刺戟する。

彼は、毎日のやうに、近所の海角に出て、鱒を釣つた。彼

彼は、魚が頭を自分の方へ向けたと知ると、その機を逸しないて、蔓を手早く手許へ繰り寄せる。一間ばかりの水底まで來た魚は、奇怪な姿を見せながら、狂ひ廻る。が、水際まで決して上らない。そして、俊寛の手が、少しでも緩むと矢のやうに、沖へ逸走する。彼は蔓を延ばしたり、緩めたりすることに依つて、水中の魚を疲らせようとする。半裸體のまま巖頭に立つて、活動する俊寛の姿は、目ざましいものであつた。

到頭、俊寛は、その五尺を越ゆる大魚を征服してしまふ。巖の上に釣り上げられた後も、尙跳躍して海に入らうとする魚の頭を、俊寛は傍の大石で、一打ちする。魚は尾や鰭を顛はせながら、死んでしまふ。俊寛は、その二十貫を越ゆる大魚の腹に、足をかけながら、初めて會心の微笑を洩す。

その時俊寛はふと、人の氣勢を感じた。魚を釣るために、夢中になつて居た俊寛は、氣が付いて周囲を見廻した。見ると、何時の間にか近寄つたのだらう。一人の土人の少女が、十間ばかりの後方に立ちながら、俊寛の姿を、おつと見詰めて居るのだつた。恐らく、俊寛の勇ましい活躍を先刻から見て居たのだらう。

年は、十六七であつたらう。が、背丈はすく／＼と伸びて、都の少女などには、見られないやうな、高さに達して居た。腰の周圍に、木の皮を纏つた丈で、よく發達した胸部を惜し



気もなく見せて居た。髪は梳らず、蔓草をさねかづらにして居た。色は、黒かつたが、腫が黒く人なつくく光つて居た。長い間、女性と接したことの無い俊寛は、この少女を一目見ると、自分の裸體が、氣恥しくなつて、思はず顔が赤くなつた。が、相手が少しの猜疑もなく、無邪氣に自分を凝視して居るのを見ると、俊寛はそれに答へるやうに、軽い微笑を見せて居るのを見ればなかつた。少女は、微笑はしなかつたが、見せずには居られなかつた。少女は、好意を示す表情が動いたその物珍らしげに刮つて居る眼に、好意を示す表情が動いたことは確かだつた。俊寛は、久し振りに人間から、好意のある表情を見せられたので、胸がきゅつとこみ上げて来るやうに感じた。

彼は、再び釣を海中に投じた。魚は、直ぐ食ひ付いた。その魚を引き上げる間、少女は熱心に見物して居る。そして第三番目の釣を投じて、少女は去らない。俊寛は、少女の方を振向きながら時々、微笑を見せる。少女は、硫黄を探るために来たのだらう。が、硫黄を入れる筈を傍へ置き捨てたまま、何時までも俊寛が鱈を釣上げるのを見て居る。到頭夕暮が来た。俊寛は、釣上げた魚を、引きずりながら、自分の小屋への道を通る。一町ばかり歩いて、後を振り返つた。少女は家路に、向はうとして立ち上つて居る。が、歩き出さないで、俊寛の方を、ちつと見詰めて居る。俊寛は、その日から自分の生活に、新しい希望が湧いたこ

とに気が付く。彼は、その翌日も、同じ場所に行つた。すると、昨日の彼女が、昨日彼女が蹲まつて居たのと同じ場所に、蹲まつて居るのを見る。俊寛の胸には、湧き上るやうな欣びが、感ぜられる。今日こそ、昨日よりも、もつと大きい鱈を釣り上げて、少女に見せてやらうと思ふ。が、昨夜の間に、鱈は此海岸を離れたと見え、幾何釣を投げても、手答がない。

彼はいら／＼して、幾度も／＼釣を投げ直す。が、幾度投げ直しても、手答がない。彼は、少女が退屈して、立ち上りはしないかと思ふといら／＼して来る。が、少女はちつと蹲まつたまま、身動きもしない。俊寛は、外の釣場所を探らうと思ふけれども、少女が若し隨いて来なからうと思ふと、此場所を動く氣はしない。その裡に、俊寛は疲れて、釣を水中に投じたまま、手を休めてしまふ。その時に、突然彼の少女が呼び始めた。俊寛は、最初彼女が、何か自分に話しかけて居るのではないかと思つた。が、少女は天の一方を見詰めながら叫んで居る。その裡に、俊寛はその叫び聲の中に、ある韻律があるのに気が付く。そして、此少女が歌をうたつて居るのだと云ふことが分る。それは朗詠や今様などは違つて、もつと急調な烈しい調子である。が、その聴き馴れない調子、意味の全く全らな詞の中に、此の少女の迫つた感情が、漲つて居るのを俊寛

は感ぜずには居られなかつた。

俊寛は、やるせなく此少女が、いとしくなる。歌ひ終ると、少女は俊寛の方へ、その黒い瞳の一瞥を投げる。俊寛は堪らなくなつて立ち上り、少女の方へ進む。すると、今まで蹲まつて居た少女は、急に立ち上つて五六間向うへ逃げる。が、其處に立ち止まつたまま、それ以上は逃げようとはしない。俊寛は、微笑しながら、手招きする。が、少女は微笑を以て、それに答へるけれども、決して近寄らない。俊寛は、じれて元の場所へ歸る。すると、少女も元の場所へ歸つて蹲まる。そして、時々思ひ出したやうに歌ひつゞける。

その翌日も、俊寛は同じ場所に行つた。その翌々日も、俊寛は同じ場所へ行つた。もう鱈を釣る目的ではなかつた。幾日も／＼、さうした情景が続いた後、少女は到頭その牝鹿のやうに、しなやかな身體を、俊寛の強い腕腕に委してしまつた。

俊寛は、孤獨ではなかつた。彼の少女は、間もなく俊寛のために、従順な愛すべき妻となつた。無論、土人達は彼等の少女を拉したのを知ると、大擧して俊寛の小屋を襲つて来た。二十人を越す大勢に對して、少しも怯む所なく、鉞を以て、立ち向つた俊寛の勇ましい姿は、少女の俊寛に對する愛情を増すのに、十分であつた。が、恐しい慘劇が始らうとする刹那、少女はいちはやく、土人の頭らしい老人の前に身を投じ

た。それは、少女の父であるらしかつた。老人は、少女から何事かを聴くと、怒り罵る若者を制して、事もなく引き上げて行つた。

その事件があつた後は、俊寛の家庭には、幸福と平和の外は、何物も襲つて来なかつた。手助けの出来た俊寛は、自分達の生活を、いろ／＼な點で、よくして行つた。都會生活の經驗のよい所丈を、妻に教へた。無智であつたが、惻愍な彼女は俊寛のいふことを理解して、少しづつ家庭生活を愉快に行つた。

結婚してから、直ぐ俊寛は、妻に大和言葉を教へ始めた。三月経ち四月経つ裡には、日常の會話には、事を缺かなかつた。蔓草のさわかづらをした妻が、閑雅な都言葉の口にするのは、俊寛に取つて、此上もない楽しみであつた。言葉を、一通り覚えてしまふと、俊寛はよく妻を、砂濱へ連れて行つて、字を書くことを教へた。淺香山の歌を幾度となく砂の上に書き示した。

妻は、その年の裡に、妊娠した。かうした生活をする俊寛に取つて、子供が出来ると云ふことは、普通人の想像も及ばない欣びだつた。俊寛は、身重になつた妻を嘗めるやうに、働るのだつた。翌年の春に、妻は玉のやうな男の子を生んだ。子供が出来てからの俊寛の幸福は、以前の二倍も三倍もなつた。



俊寛の知は毎年よく實つた。彼は子供が出来たのを機會に、妻に手傳はせて、小屋を新しく建て直した。もう、どんな嵐が来ても、ビクともしないような堅牢なものになつた。男の子が生れたその翌年に、今度は女の兒が生れ、その二年目に今度は又男の子が生れた。子供の成長と共に、俊寛の幸福は、限りもなく大きくなつて行つた。彼は、鬼界ヶ島に流されたことが、自分の不運であつたか、幸福であつたか分らないとまで、考へるやうになつて居た。

四

有王が、故主の俊寛を尋ねて、都からはる／＼と、九國に下り、其處の便船を求めて、硫黄商人の船に乗り、鬼界ヶ島へ来たのは、文治二年の如月半ばの事だつた。

壽永四年に、平家の一門は悉く西海の藻屑となり、今は源家の世となつて居るのであるから、俊寛に對する重料も、自然消え果てて、赦免の使者が、朝廷から到來すべき筈であつたが、世は平家の餘類追討に急がはしく、その上、俊寛は過ぐる治承三年に、鬼界ヶ島にて、絶え果てたと云ふ風聞さへ傳つて居たから、俊寛の事などは、何人の念頭にもなかつた。

たゞ故主を慕ふ有王丈は、俊寛の最期を見届けたく、千里の旅路に、憂き艱難を重ねて、鬼界ヶ島へ下つたのである。

行として時めき給ひし君の、かく變らせ給ふものか。」

有王は、さう叫びながら、さめ／＼と泣き伏した。が、最初の邂逅の涙は、一緒に流したが、然しその次ぎの咏嘆には俊寛は一致しなかつた。俊寛は逞しい腕を組みながら、泣き沈む有王の姿を、不思議さうに見て居た。

彼は、有王が泣き止むのを待つて、有王の右の手を握んで、妻を麾くと、有王をグ／＼引張りながら、自分の小屋へ連れて歸つた。有王は、その小屋で、主に生き寫しの二人の男の子と三人の女の子を見た。俊寛は、長男の頭を擦りながら、これが徳壽丸であると云つて、有王に引き合せた。その顔には、父らしい嬉しさが、隠し切れない微笑となつて浮んだ。

が、有王は凡てをあさまじいと考へた。村上天皇の第七子具平親王大世皇孫である俊寛が、南蠻の女と契るなどは、何事であらうと考へた。彼は、主が流人になつたため、心までが畜生道に陥ちたのではないかと嘆き悲しんだ。

彼は、その夜、夜を徹して、俊寛に歸洛を勧めた。平家に對する謀反の第一番である丈に、鎌倉に在る右府どのが、偕都の御身の上を、決して疎かに思ふまいと云つた。

俊寛は、平家の一門が、滅んだと聞いたときには、道に會心の微笑を洩し、妻の松の前や鶴の前が、身まかつたと云ふことを聞いたときには、涙を流したが、歸洛の勧めには、最

島へ上陸した有王は、三日の間、島中を探し廻つた。が、それらしい人には絶えて會はなかつた。島人には、言葉不通のため、訊き合はずべき、よすがもなかつた。その裡に、便乗して來た商人船の出帆の日が迫つた。今は俊寛が生活した舊蹟でも見たいと思つて、人の住む所と否とを問はず、島中を縫ふやうに馳け廻つた。

四日目の夕暮、有王は人里離れた海岸で、人聲を聞いた。それが思ひがけなくも大和言葉であつた。有王は、林の中を潜つて、人聲のする方へ、行つた。見ると、其處は、ひろびろと拓かれた畑で、二人の男女の土人が、並んで耕して居るのであつた。然も、彼等は大和言葉で、高々と打ち語つて居るのであつた。有王は、駭きの餘りに、畑の畔に立ち竦んでしまつた。有王の姿を見たその男は、直ぐその鋏を捨て、つか／＼と傍へ寄つて來た。

その男は、ちつと有王の姿を見た。有王も、ちつとその姿を見た。その男の眉の上のほくろを見出すと、有王は、「俊寛僧都のには、ましますぞや。」

さう叫ぶと、飛鳥のやうに、俊寛の手許に飛び纏つた。その男は、大きく背いた。そして、その日に焼けて、赤銅のやうに光つて居る頬を、大粒の涙が、ほろ／＼と流れ落ちた。二人の涙の裡に暫くは、言葉がなかつた。「あなあさまじや。などかくは、變らせ給ふぞ。法勝寺の執

初から首を横に振つた。有王が、涙を流しての勸説も、どうすることも、出来なかつた。

夜が明けると、それは有王の船が、出帆の日であつた。有王は、主の心に物怪が憑いたものとして、歸洛の勧めを思ひ切るより外はなかつた。

俊寛は、妻と五人の子供とを連れながら、船着場まで見送りに來た。

そこで、形見にせよと云つて、俊寛が自分で刻んだ、木像を呉れた。それは、俊寛が、彼自身の妻の像を刻んだものだつた。俊寛の歸洛を妨げるものは、彼の妻子であると思ふと、有王は其の木像までが、忌はしいものに思はれたが、主の贈物をむげに斥ける譯にも行かないので、船に乗つてから捨てる心算で、何氣なくそれを受取つた。

別れるとき、俊寛は、都に歸つたら、俊寛は治承三年に島で、果てたと云ふ風聞を決して、打ち消さないやうにして呉れ。島に生き永らへて居るやうなことを、決して云はないやうにして呉れ。松の前か、鶴の前が生き永らへて居たら又思ふやうもあるが、今はたゞひたぶるに、俊寛が死んだものと、世の人に思はずやうにして呉れ。そんな意味を云つた。その大和言葉が、可なり訛が烈しいので、有王は言葉通りには覺えて居られなかつた。

有王の船が出ると、俊寛及びその妻子は、暫らく海邊に立



つて見送つて居たが、やがて皆は揃つて、彼等の小屋の方へ歩き始めた。五人の子供達が、父母を中に挟んで嬉々として、戯れながら歸つて行く一行を、船の上から見居た有王は、最初はそれを獸か何かの一群のやうにあさましいと思つて居たが、その裡に何とも知れない熱い涙が、自分の頬を傳つて居るのに氣が付いた。

つて見送つて居たが、やがて皆は揃つて、彼等の小屋の方へ歩き始めた。五人の子供達が、父母を中に挟んで嬉々として、戯れながら歸つて行く一行を、船の上から見居た有王は、最初はそれを獸か何かの一群のやうにあさましいと思つて居たが、その裡に何とも知れない熱い涙が、自分の頬を傳つて居るのに氣が付いた。

### 仇 討 三 態

#### そ の 一

越の御山永平寺にも、爽かな初夏が來た。多の間、日毎日毎の雪作務に、雲水達を苦しめた雪も、深い溪間からさへ、その跡を絶つてしまつた。十幾棟の大伽藍を圍んで、轟々と天を磨して居る老杉に交じつて、枒や樺が、薄緑りの水々しい芽を吹き始めた。山櫻は、散り果てゝしまつたが、野生の藤が、樹々の下枝にからみながら、ほのかな紫の花房を、ゆたかに垂れて居る。惟念にも、僧堂の生活が、漸く慣れて來た。乍入當時の坐禪や作務の苦しさが今では夢のやうに淡く薄れてしまつた。曉天の坐禪に、とろとろと眠つて、巡香の驚策を受くることも、數少くなつた。正丑の刻の振鈴に、床を蹴つて起き上ることも、あまり苦痛ではなくなつた。午前午後の作務、日中諷經、念經、夜座も、日常の生活になつてしまつた。掛塔を免されたのが、去年の霜月であつたから、安居はまだ半年に及んだばかりであつたけれども、惟念の念頭からは、

諸々の妄念が、洗はるゝ如くに、消えて行つた。心事は元より未了であつたけれども、心澄み冴えた曉天の座などには、佛種子が知らず／＼増長して、かすかながらも、悟道に似た閃きが、心頭を去來することがあつた。親の敵を求めて、六十餘州を血眼になつて探ね歩いた過去の生活が、悪夢のやうに、思ひ出される。父親を討たれたときの激怒、復讐を誓つたときの悲壯な決心、それが今でもマザマザと思ひ出される。が、もう實感はない。四五年の間は、關東關西と校のやうに、馳け廻つた。が、その裡に、こんな焦つても、時機が來なければ討てるものではないと考へた。彼は、江戸に腰を落付けて、二年ばかりゆつくりと、市中を探ね歩いた。が、敵の噂をさへ聞くことが出来なかつた。彼はまた焦せり始めた。江戸を立つて久し振りに、東海道を上つたのが、元祿三年の秋で、故郷の松江を出てから、八年目、彼は三十の年を迎へて居た。畿内から中國、九州と探し歩いたそれからの三年間にも、彼は敵に廻り合はなかつた。江戸を出るときに、用意した百兩に近い大金も、彼が赤

つて見送つて居たが、やがて皆は揃つて、彼等の小屋の方へ歩き始めた。五人の子供達が、父母を中に挟んで嬉々として、戯れながら歸つて行く一行を、船の上から見居た有王は、最初はそれを獸か何かの一群のやうにあさましいと思つて居たが、その裡に何とも知れない熱い涙が、自分の頬を傳つて居るのに氣が付いた。



間ヶ關の旅宿で、風邪の氣味で、床に就いた時には、二朱銀が數へるほどしか残つて居なかつた。彼は、門付をしながら、中國筋を上つて、浪華へ出るまでに、半年もかゝつた。浪華表の倉屋敷で、彼は國許の母からの消息に接した。母は、自分が老衰のために、死の近づいたことを報じて、彼が一日も早く仇を討つて、歸參することを朝夕念じて居ると書いて居た。彼は、母の消息を手にして、心が傷んだ。十一年の間、空しく自分を待ちあぐんで居る痛ましい母の心が、彼を悲しませた。彼は新しい感激で、大和から伊勢へ出て、伊勢から東山道を江戸へ下つた。が、敵らしいものの、影をさへ見なかつた。探ねあぐんだ彼は、仕樣事なしに奥州路を仙臺まで下つて見た。が、それも徒勞の旅だつた。江戸へ引つ返すと、碓氷峠を越えて信濃を経て、北陸地に出て、金澤百萬石の城下にも、足を止めて見た。が、その旅も空しい辛苦だつた。近江から京へ上つたのが、元祿九年の冬の初である。國を出てから、十四年の月日が、空しく流れて居た。故郷の空が、矢も楯も堪らないやうに戀しかつた。二十二で、故郷を出た彼は、既に初老に近かつた。母が戀しかつた。安易な家庭生活が戀しかつた。無味單調な仇討の旅に、彼はもう飽き々々して居た。が、一旦仇討を志した者が、敵を討たないで、おめく／＼と歸れる譯はなかつた。行き暮れて辻堂に寝たときとか、汚い宿に幾日も、降り籠め

られて居たときなどには、彼はつく／＼敵打が、嫌になつた。彼は、一層京か浪華か、町人になり下つて、國許の母を迎へて、のどかな半生を過さうかとさへ思つた。が、少年時代に受けた武士としての教育が、それを許さなかつた。彼は自分の武運の拙さが、しみ／＼嘆ぜられた。それと同時に、自分の生涯を、これほど呪つて居る父の敵が、恨めしかつた。彼は、敵に對する憎惡を自分で振り起しながら、また／＼二年に近い間、畿内の諸國を探し廻つた。浪華の倉屋敷で、國許の母が死去したと云ふ知らせを得たのは、彼が三十八の年である。故郷を出てから十六年目であつた。恐ろしい空虚が、彼の心を閉した。凡てが煙のやうに、空しいことに思はれた。千辛萬苦の裡に過した十六年の旅が、馬鹿々々しかつた。敵に對する憎惡も、武士の意地も、亡父への孝節も、凡てが白々しい夢のやうに消えてしまつた。彼は間もなく、浪華に近い曹洞の末寺には入つて得度した。其處で、一年ばかりの月日を過してから、雲水の旅に出て、越の御山を志して來たのである。幽患の念が、洗はれた惟念の心には、枯淡な求の道の思しか残つて居なかつた。長い／＼敵打の旅の生活が、別人の生涯のやうにさへ思はれ始めた。

その日は、維那和尚から、蔣作務のお觸が出て居た、ほがらかな初夏の太陽が、老杉の梢を洩れて、しめつばい青苔の道にも、明るい日脚が射して居た。

百名を越して居る大衆に役僧達も加つた。皆は思ひ／＼の作務衣を着て、裏山へ分け入つた。ポロ／＼になつた麻衣を着て居るものも居た。袖のない綿衣を着て居る者もあつた。雲水達の顔が變つて居るやうに、銘々の作務衣も變つて居た。惟念には初ての蔣作務が、何となく嬉しかつた。彼は、僧堂の生活に入つて以來、兩腕に漲つて來る力の過剰に苦んで居た。

柚夫が、伐つてある生木を、彼は兩手に抱へ切れぬほどの束にした。二十貫に近い大束を、軽々と擔ぎ上げた。勾配の可なり烈しい坂を、馳けるやうに降つて來た。二十間ばかり勢よく走せ下つた彼は、前に行く雲水を追ひ越す譯にも行かないので、速度を緩めた。その男の擔いで居る束は、彼の束の三分一もなかつた。が、その男は、その束の下で、危う氣に足を運んで居る。

廣い道へ出るまでは、追ひ越す譯には行かなかつた。彼は、その男に隨いて歩いた。見るともう六十に近い老人である。同參の大衆ではなくして、役僧であることが直ぐ判つた。半町ばかり後から隨いて行く裡に、彼は老僧の着て居る作務衣に、氣が付いた。老僧の作務衣は、その男が在俗の時に着

た黒紋附の羽織らしかつた。その羽二重らしい生地が、多年の作務に、色が褪せて、眞赤になつて居る。紋の所丈は、墨で消したと見え、變に黒ずんで居る。惟念はつひ可笑しくなつて思はず、微笑を洩した。が、ふとその刹那に此の人も元は武士だつたなと思つた。彼は何氣なくその墨で黒ずんで居る紋を見詰めて居た。それは、殆ど消えかゝつて居るけれども、丸の内二つの鎌が、並んで居ると云ふ珍らしい紋だつた。

惟念の全身の血が急に湧き立つた。二つの鎌が、並んで居る紋、それは彼が過去十六年の仇討の旅の間、夢にも忘れなかつた仇敵の紋である。父の敵は、召し抱へられてから間もない新參であつた爲、部屋住だつた彼は、ただ一二度顔を合はした丈である。その淡い記憶が、幾年と經つ裡に、薄れてしまつて、他人から聞いた人相丈が、唯一の手がかりであつた。その中でも、敵の珍らしい紋所と、父が敵の右の頸に與へてある筈の、無念の傷跡とが、目ぼしい證據として、彼の念頭を離れなかつた。彼は前に行く武士、擦れ違ふ武士、宿り合はした武士、さうした人々の紋所を、血走しつた眼で幾度か、睨んだことだらう。

惟念は擔いで居る蔣束を放り出して、老僧の首筋を、グイと掴んで、その顔を振り向けた氣がした。彼の右の頸を見つけたのである。十六年の苦しい旅の朝夕に、敵に對して



懐いた呪咀と憎悪とが、ムク／＼と蘇つて来た。が、直ぐ彼に反省の心が動いた。一旦瞋恚の心を捨て、辨道の道に、いそしんで居る者が、敵の紋所を見たからと云つて、心を擾すべきではない。それは捨て去つた管の煩悩に再び囚はれることである。まして、廣い日本國中に、二つない紋所とは限つて居ない。故郷の松江でこそ珍らしい紋所でも、他國へ行けば、數多い紋所であるかも知れない。實際、江戸に町家住居をして居たとき、通りがりの若衆が、同じ定紋を付けて居るのを見て、驚破や敵の縁者とばかり、後を附けて行つて、彼が敵とは縁も、由縁もない、旗本の三男であることを、突き止めたことさへある。恐らく、この老僧も彼の若衆と同じ場合であらう。十六年の間、もがき苦しんでも邂逅し得なかつた敵に、得度した後、悟道の妨げになるやうにと、偶然會はせるほど、天道は無慈悲なものではあるまい。若しまたそれが、正眞の敵であつたとして、自分はどうしやうと云ふのだ。僧形になつてゐる身で、人を殺すことは出来ない。一旦還俗した後、僧形になつて居る敵を討つて、目出度く歸參をしようと思ふのか。おめ／＼と敵を討ち得ないで、出家した者が、敵が見付かつたからと云つて、還俗することは、その事自身に於いて卑怯である。歸參のときに、一旦僧形になつた云ひ譯が立つ譯ではない。

彼は、ともすれば擾れ立たうとする心を、ちつと抑へた。

主頭を、叩き碎いてやりたかつた。まだ、一年と安居をして居ない彼の道心は、ともすれば崩れかけた。彼は、足下の蒔束を茫然と見詰めながら迷つた。迷つた末に、彼は、辛うじて自分の妄執に打ち勝つた。

が、自分の心が不安でならなかつた。一旦は思ひ捨て、も、何う云ふ機會に、再び妄念に囚はれるかも知れない。どんな機みて、相手を打ち殺すかも知れない。彼は、自分の道心の勝利を、何かに誓つて置きたかつた。二度と再び、末練な亡執に囚はれないために、何かに誓つて置きたかつた。

それは、敵の老僧に打ち開けて置くより、いゝことはないと思つた。在俗の折の妄執として、話して置かう。そして、現在の自分が、それに打ち勝ち得たことを相手に話して置かう。そして、敵と手を執つて、心よく笑はう。敵にそれと明した以上、どんなに妄執の力が強くとも、東ねた言葉を破ることはないだらう。彼はさう思ふと、出来上つた蒔束を、瘠せた肩に、擔ぎ上げて、歩み去らうとする老僧を呼び止めた。

「何御用！」

彼は、敵の言葉を初て、耳にしたのである。又、心が亂れようとするのを抑へた。

「貴僧に訊きたいことがある」

「何ぢや」

老僧が、蒔束を右の肩に、擔いで居るために、右の顎が隠されて居るのを幸ひである。彼は、その右顎を見まいと思つた。丁度その時に、彼は廣い道へ出た。彼は老僧の方を振り向きもしないで、一目散に馳け抜けた。

が、天道は皮肉に働いた。午後の行齋が終つて、再び蒔束が始まつたときである。彼は、燃え上らうとする妄念の炎を制しながら、蒔束を作つて居た。彼は、不足して居る蒔束を蒐めようとして、周囲を見廻した。四五間彼方に生えて居る樞の樹の向ふに、伐られたその枝が、うづ高く積まれて居るのを見出した。樞の木の下を潜つて、彼が向ふ側へ出た時である。今までは、心付かなかつたその樹陰に、午前の老僧が俯向きながら、蒔束を束ねて居る。と思つた刹那、老僧は彼の足音を聞いて、上半身を上げた。彼は、嫌でもその右の顎を見ずには居られなかつた。傷が古いために、色こそ褪せて居たが、右の口元から顎にかけて、かすつた太刀先が、アリアリと残つて居る。

「おのれ！」

彼は、口許まで、そんな言葉が出かゝつた。が、彼の道心は勝つた。彼は、一瞬の間老僧を見詰めると、踵を蹴して自分の蒔束の所へ歸つた。

でも、彼の心は、容易には収まらなかつた。彼は、蒔束の中の太い棒を見て居ると、それを眞向に振り翳して、敵の坊

老僧は落着き返つて居る。

「餘の儀でない。貴僧はもと雲州松江の藩中にて、鳥飼八太夫とは申されなかつたか」

老僧の顔色は動いた。が、言葉は爽やかであつた。

「御言葉の通ぢや」

「然らば重ねて尋ね申す。貴僧は松江に在した時、同家中の山村武兵衛を討つた覺が御座らうな」

道に老僧の顔色は變つた。が、言葉は尙、神妙であつた。「なか／＼して、其許は何人に在すのぢや」

老僧は、可なり急ぎ込んだ。

惟念は、努めて微笑をさへ浮べながら云つた。

「愚僧は、今申した山村武兵衛の伴、同苗武太郎と申したもので、御身を敵と付け狙つて、日本國中を遍歴した事、十餘年に及んだが、武運拙くして會はざること、是非なしと諦め斯様の姿になり申したのぢや。」

老僧は、老眼をしばたゝいた。

「近頃神妙に存する。愚僧は、今右申した通の者ぢや。御自分の父を打つて、松江表を立ち退き、其後諸國にて身上を稼ぎ申したが、人を殺した報は、觀面ぢや。何處にても有付く方なく、是非なく出家致したのぢや。茲で御身に廻り合ふのは、天運の定まるところぢや。僧形なれども仔細は御座らぬ。存分にお討ちなされい」



老僧の言葉は、清々しかつた。  
惟念は淋しい微笑を浮べた。  
「討つ討たるは、在俗の折のことぢや。互に出家沙門の身になつて、今更何の意趣が残り申さうぞ。たゞ、御身に隔意なきやうにと、かくは打ち明け申したのぢや。敵を打つ所存などは毛頭御座らぬわ」

老僧は折返して云つた。

「いや、左様では御座らぬぞ。茲は、御自分能く覺悟あるべき所ぢや。われらは、身上の有付なきための、是非なき出家ぢや。御自分は違ふ。われらを打ち申されて、歸參なさるれば、本領安堵は、疑ないところぢや。その上、我等を許して、安居を續けられようとも、現在親の敵を、眼前に置いては、所詮は悟道の妨ぢや。妄執の源ぢや。心事の了畢などは思ひも及ばないことぢや。在俗の折ならば、中々討たれ申すわれらではないが、斯様の姿なれば、手向ひは仕らぬ。早々お討ちなされい」

老僧の言葉は、道理至極した。惟念は、老僧を討たうと云ふ烈しい誘惑を刹那に感じた。が、それにも、漸くにして打ち勝つた。

「は、は、は、何を申さるのぢや。此期に及んで、武儀の頼着は一切無用ぢや。愚僧は、もはや分別を究め申した。御身を敵と思ふ妄念は一切断ち申す。もし、貴僧にお志あらば、

亡父の後生菩提をお弔ひ下されい！」  
彼はさう、深く云ひ放つと、両手にも餘る蔭東を輕々と擔ぎ上げながら、御堂の倉庫を、指して一散に馳け下つた。

蔭作務があつたために、その夜は、「夜坐各寮」の觸があつた。それは、夜の禪坐の休止を意味して居た。が、惟念には、その夜は大事の一夜であつたから、自分一人單前に打坐した。隣單の雲水達が、相集つて法螺を吹いてゐるのも、耳にかへず、坐禪三昧に心を浸した。いかに出家の身であるとは云となつて心頭を去來したが、それがいつの間にか薄れてしまふと、神々しい薄明が、心の裡をほのかに照すやうな心持がした。初夏の來たことを報ずる更點の太鼓と共に、いつもは大眾と共に朗讀する「普勸坐禪儀」を、口の裡で唱へた。高祖開闢の靈場で、高祖の心血の御作たる「坐禪儀」を拜誦する有難さが、彼の心身に、ひし／＼と浸み渡つた。

彼が開枕板の鳴るのを合圖に、坐禪の膝を崩すまで、彼の心は、初夏の夜の空のやうに澄み渡つて、一片の妄念さへ痕を止めて居なかつた。

烈しい蔭作務の疲れの爲に、隣單の雲水達は、函櫃から、布團を取り出して、それに包まると間もなく、一齊に寢入つてしまつたのだらう。十四間四面の廣い僧堂の彼處からも、

此處からも安らかな斬の聲が、高く聞えて來た。が、惟念には、晝間の疲れにも拘はらず、眠はな／＼來なかつた。座禪のために、澄み切つた心が、いつまでも續いた。が、子の刻が近づくと、つひとろ／＼した。

彼は、夜半何事となくふと覺めた。宵から、右の肩を下にし續けて居た爲だらう。右半身が、痺れたやうに痛んだ。彼は、寢返りを打たうとした。が、不思議に彼の身體は動かかなかつた。彼は眼を開いた。彼は、自分の顔の上に、おぼろげながら、人の顔を見た。聖合龍の前の燈明の光しかな、ほの暗い堂内では、それが何人であるか、容易には分らなかつた。が、相手は彼が目覺めたのを知ると、明に狼狽した。

彼は、その狼狽に依つて、相手が晝間の老僧であることが、判つた。それと同時に、その老僧の右の手に、砥ぎ澄まされた剃刀が、ほの白く光つて居るのを見た。が、彼には、それを防がうと云ふ氣もなかつた。向ふから、害心を挟んで來たのを機會に、相手を討ち取らうと云ふ心も、起らなかつた。たゞ、自分が許し盡くして居るのに、それを疑つて自分を害さうと企てた相手を、憫む心丈が動いた。が、それも直ぐ消えた。彼には、右半身の痺れ丈が感ぜられた。

「愚僧は宵より、右肩を下につけ、痺れ申す。寢返りを許されい！」

彼は、口の裡で呟くやうに云ひながら、狭い五布の布團の

中で、クルリと向きを變へた。夢とも現ともない瞬間の後に、彼は再び深い眠に落ちて居た。

役僧の一人が、永平寺を遂轉したのは、その翌日である。

その 二

越後國蒲原郡新發田の城主、溝口伯耆守の家來、鈴木忠次郎、忠三郎の兄弟は、敵打の旅に出でから、八年振りに、親の敵和田直之進が、京師室町四條上るに、兒醫師の看板を掲げて、和田淳庵と云ふ變名に、世を忍んで居るのを探り當てた。

それを初に知つたのは、弟の忠三郎であつた。二度目に、上方へ上つたとき、兄弟は京と大阪に別れて宿を取つた。

別々に敵を探るための便宜だつた。  
弟の忠三郎が、三條通りを何氣なく歩いて居たとき、彼は町家の軒先に止まつた醫師のそれらしい籠を見た。籠の垂を、内から掲げながら、立ち出でた總髮の男を見たときに、彼は嬉しさの餘り、躍り上りたかつた。それは紛ぎれもなく和田直之進だつた。彼は、即座に名乗りかけて、打ち果したいと思つたが、兄のことが直ぐ心に浮んだ。八年の間、狙ひながら、肝心の場所に、居合はさない兄の無念を想像すると、自分一人で手を下すことは、思ひも寄らなかつた。彼は逸やる心を抑へながら、直之進が再び籠に乗るのを待つたのである。



彼は、敵の在所を突き止めると、雀躍りしながら、直ぐ京を立つて、伏見から三十石で大阪へ下つた。が、その夜遅く、兄の宿まつて居る高麗橋の橋の袂の宿屋を、尋ねたとき、不幸にも兄が大和から紀州へ廻ると云ひ置いて、三日前に出發したことを知つた彼の落膽は甚しかつた。彼は、油で煮らるるやうないら／＼して、兄の歸宿を七日の間空しく待ち明かした。それでも、兄の忠次郎は、八日目に漂然として歸つて來た。

兄は弟から、敵發見の知らせを聞くと、涙滾して嬉しがつた。兄弟は、その夜の裡に、大阪を立つて、翌朝未明に京へは入つた。

が、翌朝弟が、敵の家の様子を探ぐるため、その家の前を通つたとき、意外にも忌中の札が、半ば閉された、門の扉に貼られてあるのを見た。弟は、愕然とした。彼は、あはてふためきながら、隣家に就いて、死者の何人であるかを訊いた。死んだ者は、紛ぎれもなく和直直之進であつた。

弟は、最初それを容易には信ずることが出来なかつた。自分達に發見せられたのを氣付いたために、自分達を欺かうとする、敵の謀計ではないかと思つた。が、弔問の客の顔にも、近隣の人々の振舞にも、死者を悼む心が、アリ／＼と動いて居た。直之進の死を疑ふ餘地は、少しも残つて居なかつた。兄弟は、その夜三條小橋の宿屋で、相擁して動哭した。短

氣てわが儘な兄は、弟が見付けたときに、何故即座に打ち果さなかつたかを責めた。が、その叱責が無理であることは、叱責して居る兄自身がよく判つて居た。兄は、切腹する／＼と叫びながら、幾度も短劍を逆手に持つた。その度に、濃厚な弟が制した。果ては、兄弟が手を執つて動哭した。彼等の動哭は、夜明までも續いた。

八年の苦辛が、悉く水泡に歸した。張りつめた氣が、一時に抜けた。兄弟は、うつけ者の如く、たゞ茫然として數日を過した。

弟が、漸く兄を慰めて、郷里の新發田へ歸つて來た。弟は、京都を立つ前、私に所司代へ願ひ出て、敵直之進が、横死した旨の證狀を貰つた。

兄弟の家は、八百石を取つて、側用人を勤むる家柄であつた。藩では、道に此の不幸な兄弟を見捨てなかつた。兄忠次郎に舊知半石を與へて、馬廻りに取り立て、呉れた。

が、忠次郎は快々として樂しまなかつた。その上、兄弟に就いての世評が、折々二人の耳には入つた。それは、決してよい噂ではなかつた。二人は、敵を見出しながら躊躇して、得討たないで居る間に、敵に死なれたと云ふのは、まだよい方の噂だつた。悪い方の噂は、兄弟を可なり傷けて居た。和田淳庵と云ふ醫師が病死したからと云つて、それが直之進であるとは定まつて居ない。殊に、父が討たれたときに、弱冠

であつた忠三郎が、敵の面體を、確に覺えて居よう筈がない。その忠三郎が、一目見たからと云つて、淳庵が直之進であるとして定めてしまふのは、不穿鑿である。これは、兄弟には可なり手痛い非難であつた。が、もつとひどい噂があつた。兄弟は、敵打に飽いたのだ。わづか八年ばかりの辛苦で、復讐の志を捨て、しまつたのだ。和田某と云ふ名もない醫師が死んだのを、直之進が病死したのだと云ひ作らへて、歸參の云ひ譯にしたのだ。兄は、そんな流言を聞く毎に、血相を變へていきり立つた。彼は、さうした噂を云ひ振すものと、刺し違へて死なうと思つて居た。が、さうした流言は、誰が云ひ觸すともなく、風の如く兄弟の身邊を包んで流れるのであつた。

兄弟に取つて、一番悲しいことは、さうした世の疑を解くべき機會が、永久に來ないことだつた。

年が開けると安政四年であつた。兄弟にまつはる悪評も、やつぱり年を越えて居た。が、安政四年の秋となり、冬となると、道に、兄弟のことを取り立て、云ふ者もなくなつた。短氣な忠次郎も腹を立てる日が、少くなつて居た。

が、兄弟が喰ふべき非は、まだ盡きては居なかつた。

それは、安政四年も押し詰まつた十二月十日、同藩士の久米幸太郎兄弟が、父の仇瀧澤休右衛門を討つて、故郷へ晴がましい錦を飾つたことである。

それが、何と云ふ辛抱強い敵討であつたらう。兄弟の父の彌五兵衛が、同藩士中六左衛門の家で圍碁の助言から、瀧澤休右衛門に討たれたのが、文化十四年十二月長男幸太郎が七歳、次男盛次郎が五歳の時であつた。兄弟が伯父板倉留二郎の手に人と成つて、伯父甥三人、永の暇を願つて、敵打の旅に出たのが、文政十一年、兄幸太郎が十八歳、弟盛次郎が十六歳の秋だつた。伯父の留二郎は、四十二歳であつた。

三人は、文政から天保弘化嘉永安政と、三十年間、日本國中を探し廻つた。幸太郎が、安政四年に、陸奥國牡鹿郡折の濱の小庵に、剃髮して黙昭と名乗つて、隠れ忍んで居る休右衛門を見出したのは、安政四年十月六日の事だつた。

不幸にも、弟の盛次郎と伯父の留二郎は、幸太郎と別れて關八州を尋ねて居た。幸太郎は思つた。弟や伯父の三十餘年に渡る艱難も、たゞ此敵に一刀恨まんためである。自分が一人で打つたならば、二人が嘸本意なく思ふであらうと。が幸太郎は思ひ返した。二人は、今何處に居るのか、先に手紙を出したが返事がない。敵の休右衛門は七十を越した極老の者である。二人の音信を待つ裡に、何時病死するかも知れない。二人には、不義であらうとも、一日も早く多年の本懐を達するに若くはないと。幸太郎は、さう決心すると、翌七日黙昭を欺き寄せて多年の本懐を達したのである。

父の彌五兵衛が討たれてから、四十一年目、兄弟が敵討の



旅に出てから三十年目、兄の幸太郎は四十七歳、弟の盛次郎は四十四歳、伯父の留二郎は七十二歳の高齡であつた。兄弟が目出度く歸参したときは、新發田藩では、嫡子主膳正直博の世になつて居た。が、君臣は擧つて幸太郎兄弟が、三十年來の苦節を讃嘆した。幸太郎は、亡父の舊知百五十石に、新に百石を加へられた。盛次郎は、新に十五石五人扶持を給ふて近習の列に加へられた。

一番は兄弟に對する讚美で、鼎の湧くやうであつた。が、その中で、鈴木兄弟は無念の涙を呑んで居た。人々は、幸太郎兄弟を賞める引合として、きつと鈴木兄弟を貶した。

「鈴木忠三郎は、兄を迎へるために、便々と日を過したと云ふが、幸太郎殿の分別とは、雲泥の違ひや。敵を探し出しなから、おめく」と病死させるとは何と云ふうつけ者ぢや」

が、そんな非難はまだよい方だつた。

「三十年の辛抱に比ぶれば、八年の苦辛がなんぢや。」

「八年探して、根の盡きる武士に、幸太郎兄弟の爪の垢でも、煎じて飲ませたい。」

世評は、成功者を九天の上に、祭り上げると共に、失敗者を奈落の底へまで、突き落さねば止まなかつた。

幸太郎兄弟が、歸参してから十日ばかり経つた頃だつた。兄弟の歸参を祝ふ酒宴が、親類縁者に依つて開かれた。

幸太郎はそれを聞くと、つい愚痴になつた。無念の涙が、ハラ／＼と落ちた。

「お羨やましい。お羨やましい。何と云ふ御幸運ぢや。それに比ぶれば、拙者兄弟は何と云ふ不運で御座らうぞ。敵をおめおめと死なさせた上に、あられもない悪評の的になつて居るのぢや。」

忠太郎は、聲こそ出さないが、男泣きに泣いた。

幸太郎は、それを制するやうに云つた。力強く云つた。

「何を仰せらるるのぢや。一旦敵を持つたものに、幸せなものが御座らうか。御身様などは、まだいゝ。御身様は、物心付いた七歳の時から、四十七歳の今日まで、人間の定命を、敵打ばかりに過した者の、悲しみを御存じないのぢや。」

さう云つたかと思ふと、三十年間の櫛風沐雨で、銅のやうに、焼け爛れた幸太郎の双頬を、大粒の涙が、ホロ／＼と流れた。

忠次郎の傷ついた胸が、温い手でサツと、撫でられたやうに一時に和んで居た。

二人は、眼を見合はしたまゝ、しばらくは涙を流し合つた。

その三

寶曆三年正月五日の夜の事である。

幸か不幸か、鈴木忠次郎は、久米家とは遠い縁者に當つて居た。彼は、病氣と云つて、その席に連るまいかと思つた。が、悪意のある世評が、あれ見よ。鈴木忠次郎は、面目なさに、幸太郎殿の祝宴から逃げたぞよ」と、後指を指すことは、目に見えて居るやうに思はれた。

利かぬ氣の彼は、必死の覺悟で、その宴席に連つた。彼は初から、黙々として、一言も口を利かなかつた。一座の者の幸太郎兄弟に對する賞讃が、悉く針のやうに、彼の胸に、突き刺さつた。が、中座することは、彼の利かぬ氣が許さなかつた。

夜の更けると共に、一座の客は減つて居た。幸太郎は鈴木兄弟の不運を、既に聞き知つて居たのだらう。客の減るのを計つて座を立つかと思ふと、杯を持ちながら、忠次郎の前に來た。半知になつて居ても、忠次郎の方が、家格は遙に上であつた。

「貴殿からも、杯を一つ頂戴いたしたい。」

幸太郎は、忠次郎が蒼白な顔をしながら、指した杯を快く飲み乾しながら。

「御不運のほどは、既に聞き及んだ。御無念のほどはお察し申す。」

幸太郎の言葉には、眞摯な同情が、籠つて居た。自分でも敵を狙つたものでなければ、持ち得ない同情が含まれた。

江戸牛込二十騎町の旗本鳥居孫太夫の家では、お正月の吉例として、奉公人一統にも、祝酒が下された。

殊に、舊臘十二月に、主人の孫太夫は、新にお小姓組頭に取り立てられて居た。二十一になつた奥方のおさち殿が、この頃になつて、初て懐胎されたことが分つた。

慶びが、重つたので、家中が一入春めいた。例年よりは見事な年暮の下され物が、奉公人達を欣ばした。五日の晩になつて、年頭の客も絶えたので、奉公人一統に祝酒を許されたのであつた。

主人の孫太夫は、奉公人達の酒宴の興を妨げぬ心遣ひからであらう。日が暮れると、九段富士見町の縁類へ、年始のためだと云つて、出かけて行つた。

家老や用人達は、表座敷の方で、打ち寛いで居た。仲間や小者や女中などは、臺所の次ぎの間で、年に一度の公けの自由を享しんで居た。

二更を過ぎた頃になつても、酒宴の興は少しも衰へなかつた。若い草履取や馬丁は、此の時だと云ふやうに、女中に酌をして貰ひながら、グイ／＼と飲み乾した。

松の葉崩しや深川節を、歌ひ出すものがある。此頃流行り出した吾妻拳を打ち出すものがある。立ち上つて踊り出すものがある。

臺所で、立ち働いて居た料理番の嘉平次までが、堪らなく







「なるほど」

「うむ」

一座は片唾を呑んでしまった。それは今までのやうな、煽て半分の感嘆ではなかつた。それは、料理と云つたやうな人間として、武士としての末技に對する感嘆ではなかつた。武士そのものに對する感嘆だつた。嘉平次は、自分が本當の武士であり、勇士であるやうな幻覺を感じた。

一座の者は、みんな熱心にその詳細を知りたさうな顔付をして居る。彼は一座の者を満足させると同時に、もつと自分が英雄視せらるゝ快感を味ひたかつた。彼は舊主の鈴木源太夫が、朋輩の幸田某を打ち果した前後の様子を、古い二十年近い昔の記憶から探ぐり出して居た。が、舊主の源太夫の刃傷には、少しも武士らしいところはなかつた。朋輩の幸田某の妻に横戀慕をして、聴かれなかつた恨から、幸田の家を訪ねて對談中に、相手の油斷を見すまして、不意に斬りかけたのである。その上に、逃げ出さうとする所を、幸田の妻に追ひかけられて、一太刀斬り付けられたやうに覺えて居る。それをその儘に、話すことは、一座の不快と反感とを買ふことである。彼は、その話を訂正しながら話し始めた。

「口論の始まりと云ふのはな。その男が、槍術の自慢でな、その日も、俺と槍術の話になつたのぢやが、つひ議論になつてな。相手が、料理番の貴殿に、武術の詮議は無用ぢや」と、

口を滑らしたのが、お互の運の盡きぢや。武士として、聞き捨てならぬ一言と思つたから、料理番の刀が切れるか切れぬか、受けて見い！」と斬り付けたのぢや」

「うむ！」

「うむ！」

「うむ！」

一座の仲間達は、嘉平次の話振りに、スツカリ魅せられてしまつた。嘉平次は、自分の云つて居ることが、本當は嘘でなくして眞實であるやうな得意さを感じて居た。

「俺はな、小供の時から、竹内流の居合が自慢でなあ！」

彼はさう云つて、皆に氣を持たせた。

「うむ！」

「うむ！」

仲間達は、口々に呻つた。

「抜打の勝負ぢやハ、ハ、ハ、ハ、」

嘉平次は、浩然として笑つた。

一座はしーんとした。

「柄に手がかゝつたと思つたときには、もう相手の肩口から、迸つた血が、さつとまだ替へてから間もない青畳の上に散つて居た。」

實際嘉平次の頭の中にも、さうした光景が、マザ／＼と浮んだ。

「ほうー！」

「うむ！」

仲間達の感嘆は絶頂に達した。

「家人なども定めし、出合ひましたらうな」

仲間頭の左平の言葉使ひ迄が、スツカリ改つて居た。仲間達は、嘉平次が斬りかゝる仲間小者などを、左右に斬り拂ふ勇壯な光景を豫想して居た。が、嘉平次は、もつと別な點で、自分の武士を上げたかつた。

「いや、仲間小者などは、俺の太刀尖に恐れをなして、唯一人向つて來ぬ。が、道は連れ添ふ内儀ぢや。夫の敵とばかり、懐劍を逆手に俺に斬りかゝつて來た。」

話が急に、戯曲的な轉廻をしたので、一座はハツとどよめいた。嘉平次は、自分の話の効果を確めるやうに、悠然と一座を見廻した。

「不憫ながら、一刀の下におやりなすつたか。」

お庭番の仲間が、待ち切れないやうに訊いた。先刻のやうな煽て半分、擲擧半分の口調などは、微塵も残つて居なかつた。

「さうは思つたが、餘りに不憫でな。しかも、まだ縁付いて來てから、一年にもならない若い内儀ぢや。殊に、深い宿意があつて、打ち果したと云ふ敵ぢやなし、女房の命迄も取るのは無益だと思つたから、斬りかゝる懐劍の下を、潜つて相

手の利腕を捕へた。ハ、ハ、ハ、その時にな、女と思つて油斷をしたために、つい薄手を負つたのが、此の二の腕の傷ぢや。」

彼は、自分の腕を捲くつて二の腕の傷を見せた。それは、彼が丸龜を退散して、京の四條の茶屋の板前を勤めて居たとき、血氣の朋輩と喧嘩をして、お手の物の庖丁で、斬り付けられた傷である。彼は、それを時にとつての證據として、自分の話に動かせない眞實性を加へたのであつた。彼は、自分の當意即妙に、自分で感心した。

「どれ！ どれ！」

一座の者は、杯盤の間を渡つて來て、彼の傷に見入つた。もう、誰一人として、彼の話を疑つて居るものはなかつた。

「それで、その内儀はどうなすつた！」

皆は、話の結末を聴きたがつた。

「持つて居た懐劍を放させて、其處へ突き放したまゝ、悠々と出て來たが、道に誰も後を追ふて來るものはなかつた。その足で、直ぐ退轉いたしたが、もう二十年に近い昔ぢや。今から、考へると短慮だつたと云ふ氣もするが、武士の意地でな。武士としてこれ堪忍ならぬところぢや！」

「道理ぢやなあ。が、御身様の仕儀に、一點の怯いところもない。それを云ひ立て、立派な主取りでも出來る位ぢや」

「料理人などをさせて置くのは、全く以て惜しいものだ！ 推擧さへあれば、その腕で三十石や、五十石は直ぐぢや！」



嘉平次は塵揚に笑つた。「かう年が寄ると、仕官の望みなどは、毛頭ないわ。御身達に、かうして昔話などをするのが、何よりの楽しみぢやハ、ハ、ハ、ハ、」

「嘉平次殿のお杯を頂戴しよう」  
 皆は次ぎ／＼に嘉平次の杯を貰つた。

彼は、生れて六十幾年の間に、今宵ほど、得意な時はなかつた。彼は、平生の大酒に輪をかけて、二升到近い酒を浴びて居た。

その夜、大酔した嘉平次が、蹣跚として自分のお長屋へ歸らうとして、臺所口を出たときだつた。

「親の敵！」と云ふ悲痛な叫びと共に、匕首が闇に閃めいたかと思ふと、彼は左の脇腹を抉られて、臺所口の敷居の上に、のけ様に轉倒した。

家人達が、銘々酔顔を携けて、走せ集つたとき、つい先頃奉公に上つたばかりの、召使ひのおとよと云ふ女が、半身に血を浴びながら、

「親の敵を打ちました。親の敵を打ちました」と、絶叫して居た。

幸田とよ女の敵打は、丸龜藩孝女の仇討として、寶曆年間

の江戸市中に轟き渡つた。江戸の市民は、まだ二十になるかならぬかの、かよわい少女の悲壯な振舞ひを讚嘆し合つた。

とよ女の仇討談が、讀賣にまで歌はれて居た。それに依ると、父の幸田源助が、打たれたときとよ女は、母の胎内に宿つてから、まだ三月にしかなつて居なかつた。母は、夫の横死の原因が、自分であることを知つて居たために、亡夫のために、貞節を立て通した。とよ女が、十六のときに、母は不幸にして、他界した。彼女は、死床にとよ女を呼んで、初て父の横死の仔細を語つて、仇討の一儀を誓はしめたと云ふのであつた。貞節悲壯な母子に對する賞讃は、江戸の隅々にまで傳はつた。

嘉平次が、敵の鈴木源太夫であることに就いては、誰人も疑を挟まなかつた。町奉行の役人が、検屍の時、念のためにと云ふので、丸龜藩の屋敷へ人を迎へにやつたが、丁度藩主が、在國して居たので、定府達の間には、鈴木源太夫を見知つて居るものは、一人も居なかつた。

たゞ、當人のとよ女丈には、敵の傷の場所が、母の遺言の通り、眉間になくして、二の腕に在つたのが、一寸氣になつた。が、直ぐ母は夫を打たれたときに、氣が動轉して居たために、相手の眉間に、飛び付いて居た血潮を、手傷だと思ひ違つたのだらうと思ひ直した。

とよ女の孝節が、藩主の上聞に達して、召し還された上、

藩の家老の次子を、婿養子として、幸田の跡目を立てられて、舊知の倍の百石を下し置かれたのは、同じ寶曆五年の九月のことである。



## 恩を返す話

寛永十四年の夏は、九州一圓に、近年にない旱炎な日が続いた。其上に又、夏が終に近づいた頃、来る日も、来る日も、西の空に落つる夕陽が、眞紅の色に燃え立つて、人心に不安な期待を、植え付けた。

九月に入ると、肥州温泉ヶ嶽が、數日に互つて、鳴動した。頂上の噴火口に、投げ込まれた切支丹宗徒の、怨念の爲す業だと云ふ流言が、肥筑の人々を慄れしめた。

兇兆は尙續いた。十月の半になつたある朝、人々は、庭前の梅や櫻が、時ならぬ蕾を持つて居るのを見た。

十月の終になつて、之等の不安や、恐怖の高層が遂に到來した。夫は、云ふ迄もなく、島原の切支丹宗徒の蜂起である。

肥後熊本の細川越中守の藩中は、天草とは、唯一脈の海水を隔つるばかりであるから、賊徒蜂起の飛報に接して、一藩は忽ち、強い緊張に囚はれた。

而も一揆が荷めの、百姓一揆と違つて、手強い底力を持つて居る事が知れるに従つて、一藩の人心は、愈猛り立つた。

受けて以來、力攻めを捨てて、兵糧攻めを企てた。が、夫も長くは續かなかつた。十二月二十八日、江府から松平豆州が上使として、下向したと云ふ情報に接すると、内膳正は、烈火の如く怒つて、原城の城壁に、自分の身體と、手兵とを、擲げ付けやうと決心した。

細川家の陣中へも、總攻めの布告が來た。然し翌二十九日は、冬には稀な大雨が降り續いて、沼池の水が溢れた。三十日は、昨日の大雨の名残りて、軍勢の足場を得かねた。

翌くる、寛永十五年の元朝は、敵味方とも、麗らかな初日を迎へた。内膳正は、屠蘇を汲み乾すと、立ちながら、膳を踏み碎いて、必死の覺悟を示した。

此日は、夜明け方から、吹き募つた、烈風が砂塵を飛ばして、城攻には屈強の日と見えた。正辰の刻限から、寄手は息もつかず、韓々と攻め寄せた。

神山甚兵衛も、出陣以來、待ちに待つた日に、逢ふ事を喜んだ。彼は、少年の折から、一度は實地に使つて見たいと望んで居た、天正祐定の陣刀を、振り被りながら、難所を撰んで戦ふた。

然し寄手は、散々に打ち惱まされた。内膳正が、流丸に當つて倒れたのを、機會に總敗軍の姿となつて、引き退く後を、城兵が城門を開いて、慕ふて來た。

此時である、甚兵衛は他の若武者と共に細川勢の殿をして

家中の武士は、元和以來、絶えて使はなかつた、陣刀や、半弓の手入れをし始めた。

松倉勢の敗報が、瀕々と傳へられる。然し、藩主忠利侯は在府中である上に、妄りに、援兵を送る事は、武家法度の堅く、禁ずる所であつた。國老達の協議の末、藩中の精銳四千を川尻に出して封境防備の任に當らしめる事になつた。

わが神山甚兵衛も、此人數の裡に加つて居た。成年を越したばかりの若武者であつたが、兵法の上手である上に、銅色を帯びた、双の腕には強い力が溢れて居る。

國境を守つて、松倉家からの注進を聞きながら、脾肉の嘆を洩して居る内に、十餘日が経つた。愈々十二月八日、上使板倉内膳正が到着した。細川勢は、抑へに抑へた河水が、堤を決したやうに天草領へ雪崩れ入つた。が、然し一揆等が、唯一の命脈と頼む原城は、要害無双の地であつた。搦手は、天草灘の波濤が、城壁の根を洗つて居る上に、大手には、多くの丘陵が起伏して、其間に泥深い、沼澤が散在した。

板倉内膳正は、十二月十日の城攻に、手痛き一揆の逆撃を

戦ひながら退いた。其時に、敵方の一人が執念く、彼に付き纏つて來た。六十に近い、右の頬に、瘤のある老人である。

彼は鎧の胸ばかりを付けて居た。目の裡は異様に輝いて、熱に浮かされたやうに『サンタ、マリヤ』と掛聲をしながら打ち込んで來る。息切れて苦しがりながら、懸命に打ち込んで來る。敵を倒す事も、自分が斬られる事も、念頭にない。たゞ無性に大刀を振る事が、宗教的儀禮の一部であるやうに見える。

甚兵衛も、かゝる老人に對しては、何等の闘志もなかつたが、餘りに執念く、付き纏ふので、仕方なく一刀を肩口に見舞うた。

老人は、血を見ると、一種の陶酔から覺めて命が惜しくなつたらしく、忽ち悲鳴を擧げながら逃げ出した。すると甚兵衛も夫に釣られて、十間ばかり、追ひかけやうとした途端、

一人の壯漢が彼の行手を遮ぎつたのである。

其男は、南蠻風の異様な服装をして居た。そして甚兵衛には解せぬ呪文を高らかに、唱へながら、大刀を廻して、切つて掛つた。甚兵衛は、中段で受け止めたが、相手の腕の牙えて居る事は、其の一撃が充分に證明した。甚兵衛は朝からの戦で、可なり疲れて居て、胃の重さが、ひし／＼と應へるのに

其男は、輕装して居る爲に、潑刺たる動作を爲した。おまけに、大刀を打ち合ふ毎に、其男が胸に釣るして居る十字架が



甚兵衛の眼を射た。彼は其十字架に不思議な力が籠つて居るやうに、思つて一種の魅力をさへ感じた。甚兵衛の大刀先を相手が避けて、飛び退つた機みに、二人の位置が東西になつたと思ふと、敵の十字架に折柄入りかゝる夕陽が煌めいて、燦然輝いたと思ふ突端、甚兵衛は頭上に強いシヨクを感じて、アツと思ふ間もなく昏倒した。

「甚兵衛どの、甚兵衛どの」と呼ばれる聲に彼はふと、自分に歸つた。目を開くと桶側胸の鎧を着た若武者が、自分の傍に立つて居るのを見た。そして其足許には、十字架を掛けた以前の壯漢が斬られて間もないと見え、時々弱い痙攣を血にまみれた全身に起して居る。

「惣八郎、助太刀を致した」と其若武者は云つた。其男は、まぎれもない、同藩の佐原惣八郎であつた。甚兵衛は、頭を一振り振つて、初て意識の統一を取返した。彼が壯漢の爲に一撃を受けて昏倒した處へ、惣八郎が馳け付けて、危急を救つて呉れた事が、彼の頭の裡には明瞭に分明した。彼は惣八郎に對して命を助けられた、感謝の言葉は云はねばならなかつた。然し夫が何うしても、口に出なかつた。

「良き兜で御座るな。」と惣八郎は何氣なく云つて、死骸から例の十字架を放つて、自分の物にしてしまふと、  
「さあ、はや參らう。残つて居る者は、われ等ばかりぢや

と云ひ捨てたまふ、小さい溝を飛び越えて畔道を跡をも見ずに、急いだ。

甚兵衛は、獨り取残されて、深い溜息を洩した。彼は困つた事になつたと考へた。何うして、一刀の下に、斬り殺されなかつたかを、悔んだ。自分の兜の良いのと、敵の刀の切味の鈍いのが恨まれた。

彼は、惣八郎から恩を着る事を欲しなかつたのである。彼が昏倒した時に、若し意識が残つて居て、其儘殺されるのが良いか、惣八郎に助けられるのが良いかと、尋ねられたら彼は、即座に死の方を撰んだであらう。

甚兵衛と惣八郎とは、犬猿も當ならぬ仲と云ふのではなかつた。然し、甚兵衛は、惣八郎が何となく嫌であつた。磊落な甚兵衛には、ツンと取り濟した惣八郎が氣に入らなかつた。其上、甚兵衛が惣八郎に含んで居る事が一つある。夫は外でもない惣八郎と甚兵衛とは、兵法の同門であつた。三年前、産土神の奉納仕合に、甚兵衛と惣八郎は、顔が合つた。其時に甚兵衛は破れた。が夫以來、甚兵衛は其敗戦を償ふ爲、身を碎いて、稽古をした。そして、惣八郎と今一度の手合せを願つて居る。所が惣八郎は色々な口實で、夫を避けた。惣八郎のと、甚兵衛どのとは、腕前に於て執れが上ぢやなど云ふ懸案が同門の間に、提出せられる度に、惣八郎は「われらが如き」と云つて謙遜した。しかし、その言落の後に、洩す

微笑は、その言葉の文字通りの意味を、取り消して居ると噂された。が二人は、道で逢へば、會釋もした、同席の場合には、言葉も交した。然し甚兵衛は、一時の勝利の効果を永く保存しやうとする惣八郎を、可なり含んで居て、何時かは目に物見せやうと、心掛けて居た。其對手から、彼は意外にも恩を着たのである。

彼は、強い衝動の爲に起つた、頭の痛みを感じながら、惣八郎に依つて、無意識の裡に着せられた恩を悔んだ。惣八郎の、甚兵衛の持て餘した敵を打ち取つた。甚兵衛は、日頃大口を叩くが、戦場では殊の外手に合はぬ男ぢやと云ふ噂が、陣中に傳つたら、何うしやうかと、考へた。其上、自分の嫌な男を、一生、命の恩人として、持つて居る事は、如何に不快であるかを考へた。

彼は力なく、立ち上つて、陣へ退く途中で色々と、頭を悩ました。そして、到頭、この不快を取り除く第一の手段は、早く恩返しをする事だと考へ付いた。惣八郎の危難を助けしやればよい、彼に受けた丈の恩を返してやればよいと思つた。其上、今は戦場である。そんな機會が、幾度も来るに違ないと思つた。すると、餘り屈託をした、自分が馬鹿らしくなつて來た。彼は元氣を可なり取り返す事が出來た。

陣中へ歸つて見ると、同輩は何とも曰はなかつた。惣八郎は今日のと、見ると篝火の火影で、鐮を使つて居た。惣八郎は今日の

出來事を、誰にも、披露しなかつたのだと、思つた。が、甚兵衛の心の裡には夫に對する感謝の心は湧かなかつた。彼は二重に恩を着たやうな心がして、心苦しくさへ思つたのである。

其後も、惣八郎が、金の十字架を分捕つたと云ふ話をする者はあつたが、然し其の出來事に就ては、誰も一言も曰はなかつた。甚兵衛は、自分を憚つて云はぬのかと思つた。が然し、夫は彼の邪推である事が、間もなく分つた。

甚兵衛は、一心に報恩の機會を待つた。惣八郎とは、陣中で朝夕顔を見合したが、惣八郎は何とも、其日の出來事に就ては、云はなかつた。甚兵衛の方でも、自ら其日の出來事に就て語るのを避けた。彼は惣八郎から恩を受けた事を、惣八郎に對して公認する事がいかにも不快であつた。今日にも、恩返しをしてやると心の裡で思つて居た。

やがて、正月五日になると、上使松平伊豆守が天草表へ到着した。甚兵衛は、華々しい城攻めが近づいて來た事を欣んだ。然し伊豆守も、亦、兵糧攻めの策を採つて、いたく甚兵衛を落膽させた。

無爲な日が續いた。細川の陣でも、時々物見の者を出すばかりであつた。甚兵衛は、毎日のやうに惣八郎と顔を見合せた。そして惣八郎の言語や、笑の裡に自分に對する侮蔑が交



つて居はせぬかと、氣を廻した。其上に、惣八郎と同座をして居ると、命を助けられたと云ふ意識が、一種の壓迫を感じしめて、可なり不快であつた。

二月八日に、絶えて久しき城攻めがあつた。甚兵衛は今日こそと勇み立つた。彼が戰場に向ふ動機は、今迄とは全く違つて居た。

功名をする爲でもなければ、主君の爲でもなかつた。一途に恩を返す事を念としたのである。彼は無論惣八郎の後を付けた。惣八郎は其日も懸命になつて戦つた。敵は大抵百姓である上に、兵糧が段々乏しくなかりかけて、居た爲か、惣八郎の手に立つ者としては、一人も居なかつた。無論甚兵衛の助太刀を要するやうな機會は來なかつた。

たゞ一度、惣八郎は敵と渡り合つて居る裡に足を滑べらせた。が、片膝を着くと共に、付け入ろうとした相手を、腰車に見事に斬つて捨てた。

甚兵衛は、其日殆ど大刀打をしなかつた。自分の前に進んで行く惣八郎が烈しく戦つたからである。彼はそうして、終日惣八郎の痛みを戦を見事するばかりであつた。

二月二十八日は慈々、總攻めの日と定まつた。城を圍んで居る、九州諸藩の軍勢四萬三千の裡原城の陥落を望まなかつたものは、恐らく甚兵衛一人であつたらう。無論寄手の裡に交つて居る、切支丹宗門の者や徳川幕府に恨を含んで居

る者は、一揆の長く持ち堪へる事を望んで、居たかも知れない。然し、そうした宗教的な、政治的な動機を離れて、自分の獨自の心で、甚兵衛は原城の陥らぬやうにと、祈つて居た。

「もう、軍も今日限りぢや。城方は兵糧がない。上に、山田右衛門作と申す者が、有馬勢に内應の矢文を射た」と、云ふ噂が人々の心を引き立たせた。功名も今日限りぢや。身上を起すには今日を逸してはならないと寄手は勇み立つた。

甚兵衛も今日限りだと思つた。今日を逸して泰平の世になつたら、命を助けて貰つた程の、恩を返す機會は、絶對に來ないことを知たからである。

其日惣八郎は、やはり細川勢の魁であつた。何時も必ず魁をする甚兵衛が、惣八郎に位置を譲つたからである。

戦ひは烈しかつた。宗徒どもは「サンタ、マリヤ」と口々に叫びながら、刀槍、弓矢を初、鐵、鎌などをさへ手にして、戦つた。三の丸が陥ちてから、城方の敗勢はもはや何うともすることが出来なかつた。素肌の老幼などは、一撃の下に倒された。彼等は倒れると、倒れたまゝに、十字を切つて從容と神の國へ急いだ。

惣八郎は手に立ちそうな相手を撰んでは、撫ぎ倒した。甚兵衛は、朝來惣八郎の手柄を見て歩いた。時々彼は彼も亦、自ら戦ひたい慾望に、馳られて手を下したが、かうして大事な機會が過ぎ去るのが、惜しまれたので、敵を巧に避けては惣

八郎の後を追つた、

午の刻を過ぎた。諸方から燒き立てられた火の手は、到頭本丸に達した。原城の最後の時が來た。城樓の燒け落ちる音に交つて、死んで行く切支丹宗徒の最後の祈禱や悲鳴が聞えた。

其處には、血と炎との大なる渦巻があつた。流石の甚兵衛も、惣八郎を見失つてしまつた。夕闇の迫つて、來るに従つて、益々丹の色に燃え盛る原城を見詰めながら、彼は不覺の涙を流したのである。

三月の二日、細川の軍勢は、熊本に引き上げた。翌上巳の日に、從軍の將士は忠利侯から御盃を頂戴した。甚兵衛も惣八郎も、百石の加増を賜つた。其日、殿中の廊下で甚兵衛は惣八郎に逢つた。惣八郎は晴々しい笑顔を見せながら、

「御同様に、お目出度い事で御座る」と云つた。甚兵衛は、戰場で「良い兎て御座る」と賞められた時と、同じ程度の侮辱を味つた。

泰平の日が始まる。

が、甚兵衛は、戦中と同じやうな、緊張した心持で、報恩の機會を狙つた。宿直を共にする夜などは、惣八郎の身に危難が迫る場合を色々に空想した。參勤の折は、道中の驛々に、何等かの事變の起るのを、夫となく俟つた事もある。

然し、惣八郎は無事息災であつた。事變の起り易い狩場などでも、彼は輕捷に立ち廻つて、怪我一つ負はなかつた。其上に、忠利侯のお覺もよかつた。

二、三年経つ裡にも、機會が來ないので、彼は焦ら立つた。彼は自分で惣八郎を、危難に陥し入れる機會を作らうかとさへ考へた。然し夫には、彼の心に強い反對があつた。

彼は又恩を受けたと、云ふ事實を忘れやうかと、考へて見た。然し夫が徒勞である事は、直ぐ分つた。家中の若者が一座して、武邊の話が出る時は、必ず島原一揆から例を引いた。殊に、慶長元和の古武者が死んで行くに従つて、島原て手に合ふた者が、實戦者としての尊敬を擡にするやうになつた。

「甚兵衛殿は、島原ての覺があらう。太刀は凡そ、何寸が手頃ぢや」などと云ふ質問がよく、甚兵衛に向けられた。其度に彼は不快な記憶を新にした。

其上に、惣八郎は秘藏の佩刀の目貫に、金の唐獅子の大きい金物を付けて居た。夫を彼は自慢にして居るやうであつた。誰かに來歴を訊かれると、

「之で御座るか、天草一揆の折分捕つた十字架を鑄直した物で御座る」と、彼は得意らしい微笑を洩した。夫以上の詳細な、説明はしなかつたが、傍で聽いて居る甚兵衛は、席に居た、まらぬ迄に赤面するのを常とした。

寛永十八年に、藩主忠利侯が他界して、忠尙侯が封を繼い



だ。夫を唯一の事變として、細川藩には封建時代の年中行事が恙なく、繰り返されるのみであつた。

甚兵衛が三十の年を迎へた時、かうして居ては、際限がないと思つた。之迄とは全然別な、手段を探らうと決心した。夫は蟲の好かぬ惣八郎と、努めて入懇にならうとする事であつた。若し、夫が成功したら、嫌な人間から恩を受けて居るのではなくして、入懇の友人から、受けて居る事になると思つた。そして、彼は稍夫に成功した。ある口實があつたのを機會に、家傳の菊一文字の短刀を惣八郎に贈らうとした。彼は自分の家に、無くてはならぬ寶刀を、失ふ事に依つて恩を、幾分でも返したと云ふやうな、心持を得たいと思つたのである。が、惣八郎は、眞正面から、夫を拒絶した。甚兵衛は、又其事を快く思はなかつた。惣八郎は、故意に恩を返させまいとするのだ、彼は一恩人としての、高い位置を占めて、黙の裡に、一生自分を見下さうとするのだと甚兵衛は考へた。夫ならばよい、意地にも返して見せる、命を助けられたのだから、見事に助け返してやると思つた。二人の間は見る見る裡に、又元に戻つた。

然し、途中で逢へば、惣八郎は大抵言葉を掛けた。甚兵衛は、多くは黙禮を以て之に對した。その裡に、二、三年は又無事に過ぎ去つてしまふ。金の唐獅子は相不變惣八郎の佩刀の柄に光つて、甚兵衛の

氣持を悪くした。

その目貫は、甚兵衛には惣八郎に恩を負ふて居る事を示す、永久の表章のやうに思はれた。惣八郎は、故意にその目貫を愛玩するのだとさへ、甚兵衛は思つた。

甚兵衛が四十になつた時、甚兵衛と惣八郎とが相番で、殿中に詰めて居た。その夜、白書院の床の青磁の花瓶が、何者の仕業ともなく、壊はされた。細川家の重器の一であつた。甚兵衛は素破事こそと思つた。此のお咎めを自分一人て負ふて腹を切つて、惣八郎の命を助けやうと思つた。

然し、藩主忠尙候は、彼が息込んで言上するのを聞いた後「あれか、大事な、餘の器を出して置け」と何氣なく云はれた。

彼は餘りに焦立しい時には、一層惣八郎と打果して死なうかとも思つた。然し夫は自分が、恩を返す能力のない事を自白するのと同じだと思つた。

寛文三年の春が來た。甚兵衛は、明けて四十六の年を迎へた。天草の騒動から、數へて二十六年になつた。其間報恩の機會は遂に來なかつたのである。

彼は半生の間、たゞ一心に其事ばかりを、考へて居たので、身後の計をさへ、して居なかつた。配偶のきさ女との間には、

一人の子供さへ無かつた。が、恩返しのために、一命を捨てる時などに心残りのない事を結句喜んだ。

今年の春から、彼は朝毎に、咳をした。其度に暫くは止まなかつた。彼は初て、腫げながら死を豫想した。前途の短いを知つてからは、是非爲さなければならぬ報恩の一儀が、愈々と心を悩した。

所が、時は遂に到來した。此年三月二十六日、甚兵衛は、藩老細川志摩から早使を以て城中に呼び寄せられた。

志摩は、老眼をしばたきながら、「甚兵衛、大切な上意ぢやぞ」と前置をして、「此度、殿の思召に依つて、佐原惣八郎放打の仕手其方に申付くるぞ」と云つた。

甚兵衛はハツと平伏したが、その心の裡には何とも知れぬ感情が汪洋として躍り狂つた。彼はやつと心を静めて

「惣八郎奴、何様の科に依りました」と訊いた、すると志摩は稍聲を厲して、

「夫は、其方の知る事ではない、其方は仕手を務むれば良いのぢや、相手も天草で手に合ふた者ぢや、油斷すな」と云ひながら苦笑した。

甚兵衛は周章て、はならぬと思つた。

「とてももの事に殿直々の上意を」と乞ふた。

志摩は快く夫を許可した。「至極ぢや」と云ひながら、志摩

は甚兵衛を睨いて先に立つた。やがて甚兵衛は忠尙候から「志摩が申した事良きに計らへ」との有難い上意を受けたのである。

上意打の仕手になる事は、平時に於ける武士の最大の名譽であつた。然し甚兵衛は、もつと大きい喜びがあつた。二十六年狙つて居た機會が來た。彼が明暮望んで居た通り、恩人に大なる危害が迫つて居る。而も其危誓の絲を引く者は、實に彼自身であつた。

彼は命を捨て、掛らうと思つた。永く自分を苦しめた、壓迫を今日こそ、地に擲つ事が出來ると思つた。

然し尙残つて居るのは、手段の問題であつた。彼は最初上意と名乗りかけて、却つて自分が打たれやうかと思つた。然し、夫では自分を犠牲にする事が先方に分らぬと思つた。彼は二刻もの間考へ迷つた末、次ぎのやうな手書を認めた。「一書進上致しそ、今日火急の御召にて登城致し候處、存じの外にも、其許を手に掛け候やう上意蒙り申候、されど其許には、天草にて危急の場合を助けられ候恩儀有之、容易に双を下し難く候に就いては此狀披見次第、申の刻迄に早急に國遠なざるべく候、以上」。

そして心利いた、仲間を使に立てた。やがて暮に近い頃彼は近頃ない、晴々しい心地で惣八郎の家を訪ふた。

が、其處には何等の混亂の跡がなかつた。塵一つ止めてな



い庭には、打水の痕がしめやかであつた。彼は意外の感に打たれながら、案内を乞ふと、支關へ立ち現はれたのは、疑ぎれもない惣八郎自身であつた。惣八郎は物静な調子で、「先刻より待ち申して御座る」と挨拶した。甚兵衛は返す言葉がなかつた。主客は怖しい、沈黙の裡に座敷へ通つた。すると、惣八郎の妻女が、靜に七口の載つて居る三寶を持つて現はれた。

惣八郎は居坐りながら、七口を取り上げて、甚兵衛に目禮した。

「いざ、介錯下されい、御配慮に依つて、萬事心残りなく取置きました」と云ひながら、左の腹に靜に七口の切先を含ませた。

甚兵衛は茫然として立ち上り、茫然として刀を振つた。

然し、打ち落した首を見て居ると、憎惡の心がムラムラと湧いた。報恩の最後の機會を、惣八郎の爲に無残にも踏み躪られたのだと、甚兵衛は思つた。

惣八郎の書置きには「甚兵衛より友誼を以て自裁を勧められたに依り、勝手ながら」とことはつてあつた。

君命にも背かず、友誼をも忘れざる者と云ふので、甚兵衛は、一番の賞め物となつた。そして殿から五十石の加増があつた。彼はその五十石を惣八郎から、受けた新しい恩として死ぬ迄苦悶の種とした。

其後、享保の頃になつて、天草陣惣八覺書と云ふ寫本が、細川家の人々に讀まれた。其裡の一節に、  
「今日計らずも、甚兵衛の危急を助け申候、されど戰場の敵は私の敵に非ざれば、恩を施せしなど夢にも思ふべきに非ず、右後日の爲に記し置き候事」とあつた。

### 三浦右衛門の最後

駿河の府中から遠からぬ田舎である。天正の末年で酷い盛夏の一日であつた。もう十日も前から同じやうな日ばかりが續いてゐた。その炎天の下を、玆から四五町ばかり彼方にある街道を朝から、織田勢が幾人も續いて通る。みんな盛に汗をかいて居る、その汗には、こりが附いて黒い顔が更に黒ずんで見える。然しかう物騒な世の中ではあるが、田の中に居て雑草を抜いたり、水車を踏んだりして居る百姓は割合に落着いて居る。一は見渡す限り掠奪に逢ひそなな農作物は一つもないからである。どんなに織田勢が意地が汚くつてもまだ花が咲いて居るばかりの稻を刈り取りはしまいと云ふ安心があるのと、二つには戦さわぎに馴れ切つて英國の商人達のやうに business as usual と悟りすまして居たのであつた。

府中の館が陥ちたといふ噂が晝頃傳つて來た、日中であるからハツキリとは聞えなかつたが、戦のさけびが聞えたり、火事の煙がほのかに見えた。お館が亡びるのだと百姓は思つた。自分の家の上に掩ひ覆ふさつて居た大木の倒れたやうに明るくなつたやうな氣持もするし、何だか残り惜しいやうな氣持

もした。然し織田になつても武田になつても、氏元ほどの誅求はやるまいと皆が高をくつて居るので、今川氏の盛衰を思ふよりも畔に植えた枝豆の出來榮を氣にして居た。その田の中には幅半間位の道がある。道に添ふて小さい溝が流れて居て底は一杯の泥でこの暑さでブク／＼と泥が幾度も湧き上つた。泥館が居る。ゐもりが居る。素裸體の子供が、五六人も集つてガヤ／＼云つて居る。夫は草を畏にしてゐもりを釣つて居るのである。不氣味な朱色をして居る小さい動物は幾つも溝の中から釣り上げられては、土の上に投げ付けられて居る。投げつけられる度に、身體をもがく勢が弱くなつて、終ひにはどんなに強く投げつけられてもビクともしなくなる。するとまた新しい草を引きぬいて新しい畏をこさへる、小供の群の前後には赤い腹を白い灰のやうな土の中に横へた醜い小動物の死骸が幾つも／＼ころがつて居る。

「高天神の城へはどう行くのちや」と云ふ陽揚な聲がした。子供は皆あはてたやうな顔をしてその聲の主人公を見た、夫は十七ばかりの少年であつた。前髪を二つに分けた下から美



しい眸が光つてゐる、男らしさの裡に女らしさがあり、稔々しさの裡に狡猾らしさがあつた、肌は素絹の襦袢を着て綾の単衣を着て居る、姿は國持大名の小姓であることを語つて居る。見ればはいて居る白足袋はほこりて鼠色になつて居る。腿立を取つたために見えて居る右の脍に一寸ばかりの傷があつて血が絶えず流れて居る。

「高天神の城へはどう行くのぢや、教へてたも」とやゝせき心になつて繰り返した。然し子供は皆ボカンとして居る、此頃の小供は義務教育などで早熟されて居ないから、誰もハキハキと物が云へない、知らねば知らぬと云へばいゝのだが、夫が却々云へない。皆ボカンとして居る、少年は三度間を重ねた、すると一番年かさの子供がやつと口を開いて、

「天神さんの事けえ」と云ふた、この聲をきくと若衆は一寸でも足を止めて、聞いて見たのが馬鹿らしくなつて「たわけ者め」と子供達に浴びせながら通り過ぎやうとした、所が生憎一人の子供が、マゴ／＼して行く手を立ちふさいだので足蹴にした、其の子はヨロ／＼よるめいて溝の中へ尻餅をついてワツと泣き出した、その痛くもなかつたやうだし、裸體だから衣物の汚れた譯ではないのだからそんなに大きく泣く必要はないのだが、可なり大きく泣いた。子供達は憤然とした、此頃の子供は凡ての野蠻人に共通して居るやうに言に怯にして行に勇なるものであつた。いざ喧嘩だとなると、身構

が違つて居る、蝸のやうに少年に飛びついた。少年はハツと身を變して腰の一刀を抜かうとした、此の意志は此場合、非常に適當であつたが、實現はせられなかつた、一人の子供が猛然として身を躍らし、柄を握つた少年の手に思切り噛みついたからである。他の小供も最も適當な場所を攻撃したので少年は手もなく其所へ引き据ゑられてしまつた、子供達は專制者を倒した革命黨のやうに得意であつた。

少年は身をもがいて逃れやうとした、然し子供の数は十人にも近い、而も各員が皆有機的に働いて居るので何うともする事が出来ない。

「奴にゐもりを喰はしてやるけ」と一人の子供が思付を云つた、子供達は皆ニヤリと悪意のある笑顔を交した、が其處へ一人の老人が來たので、少年はゐもりを喰ふ必要はなくなつた。老人を見ると子供は皆口々に聲を揃へて訴へた、安阿彌を足蹴にしたで」と云ふのである。老人は一瞥してこの少年が今川の落人であることを知つた、當代の今川家には多少恨があつたが然し何と云つても、先代の仁政に對する感謝が何處かに残つて居る。その上に美しい少年で、落人の身である、老人は當然子供に手籠になつて居るこの男に同情して、やには子供達を叱り飛ばした。之は自分の子供が他人と交渉を開いた時に理非曲直を問はず子供を叱り飛ばす今の親達の取る手段と同じである。少年は耻と憤との交じつた顔付きをし

て起き上つた。その時には子供達は復讐を怖れて十間も向ふの丸葉柳の下へ集つて逃仕度をして居たが、村の若者が五六人ばかりその代りに少年を取圍んだ。一番前に出て少年の顔をジロ／＼見て居るのは、彌惣次と云ふて落人狩を専門にして居る男である。此男は戦争があると云ふ噂を聞くと何時も村中から、また隣村から仲間を狩り蒐めて出かけて行つて、どさくさまぎれに掠奪をやつたり、落人に槍をつけたりした。今度も出かけて行く筈であつたのが、一月ほど前に負傷をしたのが癒えないので、今でも左の手を釣つて居る。彼は先刻から少年の腰の物の値踏みをして居るのだ、夫は黄金作りの素晴らしい品物である。彼は今迄二、三百本の太刀を泥棒したが作り丈でも金三、四十枚に當る代物は未だ曾て見たことがなかつたのである。

少年はそう云ふ物騒な人間が直ぐ前に居るとは知らなかつた、彼は目から口惜し涙を二、三滴こぼしながら聲を頼はせて、

「館の三浦右衛門をよくも手籠に逢はせ居つた」と云ふ致命的な獨言を云つた。

「おのしが右衛門か」其處に居るものは一齊に口を開いた。夫ほど彼の名は聞えて居る。彼は今川家のカンカアだと云はれて居る。氏元が豪奢遊蕩の中心は彼だと云はれて居る。義元の時よりは二、三倍の誅求があるのも、皆彼の爲だと云

はれて居る。義元恩顧の忠臣が續々と退轉したのも彼の爲だと云はれて居る。今川家の心ある人々は彼の名を呪つて居る。彼の悪評は駿河一國の隅々に迄響いて居る。其の悪評を耳にしないのは恐く彼自身丈であつたかも知れない。實際右衛門には何の罪もないのだが、右衛門の寵幸と今川家の類廢とが同時に起つたので、單純な世人は其間に因果關係があると思つたのである。實際彼は一の無邪氣な少年に過ぎない。彼は十三の時に京の西洞院に佗住居をして居た兩親の手から今川家へ見小姓に召上げられたので、夫以來はたゞ主居や周圍からせられる事を受動的に甘受して居た丈で自分の意志を働かしては、何一つした事もない、が氏元の彼に對する寵幸があまりに極端なので、彼が巧みに主君を操つて居るやうに見える丈である。

彌惣次は右衛門の名を聞いた時には之は待つて居たよ機會が來たと思つた。無下に刺ぎ取つては傍の者が承知しまいと先刻から手を出しかねて居たのであつた。彼は急に威丈高になつて「右衛門奴ならなぜ館のお供をせぬのぢや」とのゝしつた。右衛門は之を聞いて顔色を變へた。實際彼は主君を捨て、逃げて來たのである。府中を落ちて二、三里も行つた時彼等の一群を追かける織田勢の甲冑が四、五町後の街道に光るのを見た時に彼は死を怖るゝ心より外の考慮は何もなかつた。彼は馬に乗ることは頗る不得手なので先刻から一行に



屢々乗り遅れて居る。若し敵に追ひ付かれたら一番先きに片付けられるのは、自分でなければならぬと思ふと、今にも背中に敵の槍首が突き通りそうて、生きた心持とはなかつたのである。彼は幾度も躊躇した後左手の林の中に馬を乗り入ると直ぐ馬を乗り放して、夫から遮二無二逃げたのである。彼はこう云う弱味があるので、グウとも云へなかつた。

「見せしめに刺いてしまへ」と彌惣次が怒鳴つた。之は頗る不當な結論ではあるが、戦國では此の位な物言ひが先づ理窟のある方であつた。三、四人の若者は右衛門に飛びかゝつた。子供にさへ手籠めになるのだから、今度は更に造作がなかつた。兎のやうに皮を剥がれた。彼の美しい肉體は六月の太陽の下に忽ち色が變つて行くほど白かつた。

「右衛門なら殺してもえ」と彌惣次が怒鳴つた。此頃は強い者が弱い者を殺すのは當り前の事であつた。

「百姓を苦しめたのは其奴ぢや、一しめにしめてしまへ」と云つた。若者の一人は土にへたばつて居る右衛門の首を一寸締めて見た。右衛門は苦しがつて烈しくせきををした。その時老人はまたあはれを催した。

「命をとる迄もない、赦してやれ」と云つた。若者にも餘り異存はなかつた。彌惣次は一步前へ出て右の足をあげて右衛門の肩にかけながら、  
「命が惜しい、命ばかりは助けて下されと云へ、云はずば赦

すまいぞ」と云つた。右衛門は口惜し涙をボロ／＼とこぼした。若者はいかに若氣で居ても武士ぢや程に勇ましい捨身の言葉を吐くかと思つて居た、が右衛門は低い聲で「命が惜しい、命ばかりは助けて下され」と云つた。

「頭の下げやうが足りない」と彌惣次はどなつた。右衛門は土につくほど頭を下げた。先刻から再び集つて居た子供は一齊に嗤つた。

「さあ、はやう失せ居れ」と二、三人に突き飛ばされて右衛門はよろ／＼と立ち上つた。美しい顔を泣き腫しながら、ただ鼻端だけを身に纏ふてトボ／＼と夕日の下を西の方へ歩いて行つた。百姓共は皆この臆病者をあざ嗤つた。しかし裸て歩くことが殊更に輕蔑の一原因となつたと思つてはいけな。此頃の少年は、夏は大抵轆鼻禪一つて歩いたものであるから。

高天神の城へ右衛門の着いたのは、二日目の晩であつた。

城將の天野刑部が三年前に今川氏に人質となつて居た時に右衛門は數々の好意を與へてやつた。ある時刑部は右衛門の前に兩手をついて此の御恩は生涯忘れぬと云ふた。右衛門はその言葉を信じて遙々高天神の城を頼つて來たのである。彼が城へ着いた時は無論裸體ではなかつた。彼は誰に合力を受けたのか、粗末ではあるが衣物を着て居た。刑部は此珍客の來

たのを見て幾干か興味を起したらしい。夫に氏元の生死は尙不明である。もし北條と武田とが氏元に合力する事があつたならば駿河一國を取り返すのは何でもない。其場合には氏元の寵臣を助けた自分の位置は、頗る有利になるだらうと考へた。右衛門も普通の人間が吐く位の偽はつくことが出來た。彼は亂軍の中で主人と別れ／＼になつた不幸を初とし世を忍ぶ爲に物具を自分で捨てた話などを、言葉巧みにした。刑部は之を疑ふ材料もなかつたので一室に請じて萬一の場合後で苦情を云はれぬ位には歡待した。

刑部は織田と今川との中間に位して居るので歐洲戰爭の希臘のやうに何方へも付かずにはうまくやつて居たのである。三浦右衛門を養ひながら彼は手を廻して氏元の消息を探つた。所が氏元は織田勢に追ひ詰められて腹を切つて死んだと云ふ事が分つた。その報知の挿話として氏元の寵を一身に集めた三浦右衛門は府中落城のその日に早くも主君を捨て、逐電したと云ふ事が添へられた。この報知を聞いて刑部の考へつた政策は頗る常識的であつた。右衛門を首にして織田氏に差し出して自分に二心のないことを知らせる事であつた。右衛門を殺すには主君に對する亡恩の罰を責めて夫を口實にすればいゝと思つた。

右衛門は忽ちに縛り上げられた。その時代は縛り上げる力さへあれば理由は要らなかつたのである。右衛門は刑部の前

に引き出された。刑部は戰爭を始める時の歐洲の文明國のやうに正義を一寸借りて來た。

「右衛門おのれは館を見捨てた覺があらう、不忠不義者の首を刎ねて館に向けるのぢや」

此位立派な理由は、戦國時代の殺人に就ては稀有な事である。然し幾干理由が通つて居ても殺される者の苦しさは同じである。否理由があつて殺される方が無法に殺されるよりも苦しい事がある。ともかく右衛門は殺されなかつた。彼は烈しく戰慄し始めた。二三日前に百姓に殺されかけた時には對手の方に幾干かの威嚇が加つて居たが、今日の宣告は眞實でまぎれもない實現性を帯びて居る。彼は何う考へても死ぬと云ふ事が嫌であつた。彼の過去の生活は安逸と愉快とに充ちて居た。彼は此の世の中ほど面白い所が外にあるとは思へなかつたのである。彼は全身で死を嫌がった、刑部が、  
「太刀は惣八郎取れ」と云つた時には聲を上げて泣き出した。刑部はあざ笑つて、

「右衛門命は惜しいか」と云つた。

この返事を考へる必要は彼にはなかつた。前の日に彌惣次から教はつて居るからである。

「命は惜しうも、命ばかりは助けて下され」と云つた。刑部の家臣は人間の内にこんな命を惜しがる者が居るのが不思議で堪らなかつた。彼等は勇ましく死ぬと云ふ事が一の見



得であつた。だから小さい時から飛行家が曲乗を研究するやうに、他人をアツと云はせる曲死の方法を研究して居た。此頃の武士道の問題は如何にして生命を安價に捨てるかと云ふことであつた。彼等には生命以外のものは何でも貴かつたのである、生命は何と交換しても惜しくないものであつた。だから右衛門の哀訴は彼等にとつて、實に奇蹟であつた。彼等は一齊に笑つた。刑部はまた嘲笑つて見たくなつた。

「右衛門命は惜しいか、惜しければ手を突いて、惜しいと申せ」と云つた。皆はまさか武士ともあるべきものが之ほど侮辱を受けてまで命乞ひをすまいと思つた。然し夫は思つた者の誤解である。右衛門は涙を流しながら手を突いて、

「命は惜しうム」と云つた。また君臣の高い嘲弄の笑聲が響き渡つた。刑部の心の裡には右衛門の哀訴をきいて更に弄ばうと云ふ悪魔的な心が生じた。

「夫ほど命が惜しければ助けて得さそう、然し、唯は助けられぬ、命の代りに腕一本所望ぢや、夫れ承知とあらば助けてやらう」と云つた。太刀取は右衛門の傍近く寄つて、

「殿のお言葉を聞いたか、否か應か返事せい」と云つた。右衛門は返事の代りに縛られて居る左の手を動かした。

「ならば左の手を切れ」と刑部が云つた。太刀取の刀が閃めくと右衛門の手は鈴ヶ森の舞臺で樺八に切られた雲助の手のやうになつた。

「片手でも命は助かりたいか」と刑部がまた聞いた。右衛門は恐ろしい苦悶を顔に現しながら肯いた。刑部の君臣はまたどつと笑つた。刑部はまた口を切つて、

「片手では安い、両手を切つてなら助けてやらう」と云ふた。右衛門にも言葉の意味は分つたらしい、太刀取は、

「否か、應か」と聞いた。右衛門は僅に肯いた。太刀取の聲が再びかゝると彼の右の腕は血糊を引きながら三間ばかり向ふに飛んだ。

右衛門の姿は我々にとつては可なり殘酷に思はれるが、戦國時代にはこの位な光景を見て憐憫を起す人間は一人も居なかつた。刑部はまた叫んだ。

「両手でもまだ安いわ、右の足も所望ぢや、右の足を切つてなら命丈は助けやう」と云つた。生きた填輪のやうに血の中に座らされて居る右衛門の顔は眞蒼になりながら泣き續けて居る。然し緊張した神經には、刑部の言葉は分つたのであらう。彼は切れんに「命ばかりは助けて下され」と云つた。

刑部の君臣はまたどつとあざ嗤つて、この人間の最高にして至純なる欲求を侮辱した。太刀取は左の手で右衛門の身體を上へ持ち上げるやうにして右足を剪いだ。太刀が餘つて左足へ半分斬り込んだ。

「右衛門それでも命が助かりたいか」と刑部が云つた。然しもう右衛門には聞えなかつたらしい。太刀取は右衛門の耳に

口を奇せて、

「命が惜しいか」と云つた。右衛門は口をモグ／＼させた。其時刑部は「それ」と目配せをした。太刀取は四度太刀を振り直してえいと首を刎ねた。首は砂の上を二、三尺ころ／＼と轉げて、止まつた所で口をモグ／＼させた。肺臓と離れて居なかつたらキツト「命が惜しうム」と云つたに違ひない。

戦國時代の文獻を讀むと攻城野戰英雄雲の如く、十八貫の鐵の棒を芋殻の如く振り廻す勇士や、敵將の首を引き抜く豪傑は澤山居るが、人間らしい人間を常に 目撃して居た自分は淺井了意の犬張子を讀んで三浦右衛門の最後を知つた時初めて「There is also a man」の感に堪へなかつた。



## 頸縊り上人

小原の光明院に、寂真法師と云ふ上人が住んでゐた。何某の大納言の叔父君に當つてゐる上、學問も秀れ戒行も拙たなくなかつたから、あつばれ上人やとて、歸服し奉る僧俗も、數少くはなかつた。

その頃の習ひとて、上人も忍んで通つて居る兒が、五條あたり在つた。眉目いと美しかつたが、志はさらに深かつた。一年、卯月の末つかた、ほとゝぎすが、鳴きしきる夕暮、上人は輿を、卯の花ほのじろうにほへる垣根のほとりに寄せ、久しく打ち絶えたる兒を訪ふたことがあつた。

兒は上人の顔を見ると「夏衣」と云つたまゝ、面を伏せて、とみには物も云はなかつた。上人も、鼻じろみて、おはしたが、そのまゝ席を立つて、歸らうとした。

兒は、あはてゝ上人を、止め、  
「などで物ものたまはて、歸り給ふぞ、情なし。」  
と恨んだ。

上人は兒の顔をのぞいておはしたが、しばしありて、  
「情なしとは、わが恨むべき言の葉ぞ。稀に問ひたるわれに、

上人の嘆きは、世の常ではなかつた。宛ら、掌中の玉の見る露と消え、翳しの花の忽ち、嵐に吹き折られた思がして、心地生きぬべうもなかつた。

上人は、今年六十五であつた。あまりに生き永らへばこそかゝる悲しき思もするのだ。いとしきものを、先き立て、命永らへて何かはせんと思つた。法師としても、僧正にこそなつてはゐないが、世の覚え、人の聞えも、限なくいみじき身であるから、もうこの上の望はない。いとしきものゝ先立ちしこそ、早く寂光淨土へ往生せよと如來の結縁したまふなるべしと思つた。

上人は、さう考へて來ると、悲しみの心の裡にも、ほのぼのと光明が、射して來るやうな氣がして、如來の來迎とはかかることをや云ふなるべしと思つた。

上人は、いろ／＼考へた末、三七日の間無言して、結願の日に、首を縊りて、往生せんと思ひ企てた。最初、上人はそれを、自分ひとりて、わきまへて行はんと思つたが、かくては心變はりすることあるべし。一定往生せんには、人にもきこえて、おのが心のいましめとせんと思つたから、ある夜ひそかに小原の僧正なる顯眞上人を、訪ひまゐらせて、志のほどを打ちかたつた。

僧正は、初はいと心得ぬ氣に、聞いておはしたが、上人の志の動しがたいのを見ると、あまたゝび感嘆して、

夏衣と宣ひたる、必定「止めても止まらぬ春もあるものを云はぬに來る夏衣かな」の心なるべし。かくばかり、うとんじおはする方に、などてしも止るべき。」と云つた。

兒は、非常になしがつて答へた。  
「存じも寄らぬことを承るものかな。夏衣われは一重に思へども人の心に裏やあるらむ」と申す本歌の心にて、久しく打ち絶えたるを恨み申せしなり。」

と云つた。  
上人み氣色斜ならず、その後は志もいやまさりて、通うてゐた。

が、生者必滅老少不定の例を、目のあたりに見するやうに、この兒が今年の九月に急に死んでしまつた。病氣はひどい瘧疾であつた。典藥頭大江實房にも、私のつてがあつたので、診て貰うたし、もろ／＼の加持祈禱も修し、おしまひには上人自身、肝膽を碎き、諸天諸尊を駭し、責めに責めて祈られたが、露ばかりも、效顯がなくて、九月五日と云ふに、つひに空しくなつてしまつたのである。

「いみじくも思ひ立たれつるかな。さばかり、思ひ立たせたもふを、止めんも心なれば思のまゝに執り行はせたまへ。極樂に往生し給はんこと、ゆめ疑はじ」と勵ましてくれた。  
上人は、心の裡が、秋の空のやうに、澄みわたる心地がした。煩惱の雲名残なく晴れ、雜念の嵐跡を絶ちて、往生の朝の一日も早いことを待つて居た。

顯眞僧正は、上人の企てを誰人にも云ふつもりではなかつたが、古しへにも後世にも、ためし稀なほど、有難く尊いことだと思ふに付けても、自分一人の心裡に、隠してゐることが、勿體ないやうに思はれ、往生の一事があつた後にははれさる有難き生佛ならば、姿をも拜み奉るべかりしになど、諸人の怨みつらんほど考へられたので、おのづと噂が立つやうにもてなして寺中の人達に知らしてしまつたのである。

寺中の兒、法師達の駭きは、一方でなかつた。觀音菩薩の生身のお姿が、現はれたか何かのやうに打ちどよもして口々にあがめ奉らぬはなかつた。

上人は、寺中のどよめきを外に、四五日は行ひ澄ましてゐたが、齊を參らせる兒などの上人に對する容子が、とみに革まつて、宛ら本尊の大日如來の前にでも、出たやうに、いみじくをろがみ奉つたから、上人はかたはらいたくは思つたが、さてわるい氣持がするほどでもなかつた。ひとり、給仕に出る兒ばかりではない。廊下で行き交ふ役僧や、青法師さ



てはやんごとなき上人までが、あはれ末代にも、逢ひがたき人にて、おはすかな。いみじく思し立たれたりなど、向ふさまに賞め奉つた。初は、いと面伏せに思はれたが、だんだん人が賞めて呉れるのが、當り前のやうになつて居た。

が、噂は、寺内丈に止つて居なかつた。一人二人、參詣の人が聞き知ると、忽ち霜月の野を焼く火のやうに、忽ち都の内にはひろがつてしまつた。

「小原には、目のあたりに、極樂に往生し給ふと云ふめてたき上人おはします。行きて結縁し奉らばや。」

と、都の人々が、老いも若いも、男も女も數を盡くして小原へ集つて來た。小原の僧正も、佛縁を結ぶには、又となき時と思つたので、一七日の間、往生講を催し、都の名僧を數多請じて、別時念佛を始めた。その騒ぎが、光明院始つて、空前絶後と云ふほど、いみじいものだつた。

都より小原まで、人垣を作りて詣うて來る人、日に千萬と云ふ數を知らず、檢非違使の廳より、一人の長に數多の放免を附けて、非違を警しめるほどになつてしまつた。

上人は自分の投げた礫が、あまりに大きい波紋を描いたので、少し空恐しう思はれたが諸人にかくまで、をろがまれることの、こよなくうれしかりければ、仔細に行ひ澄して、日に五度と、數を定めて、出て、拜まれるのであつた。が、同法の上人の中には、出て、拜まれるなど、云ふことは、少し

やり過ぎてゐる。いさゝか、興行めきて居て、穩當でないと思ふ非難があつたが、さばかりにと慕ひまつりて、造々と來る人々を、むげに返しぬる事やあるとて、讀けて拜まれるのであつた。

その裡に、日が經つて、後一七日ばかりになつてしまつたが、參詣の群衆は、一日と數が増してゆくばかりであつた。

上人は、初めは往生の心が、ほがらかに澄み渡つて、障害の雲の立ちのぼるべき、山の端さへないやうだつたが、僧俗男女に、あがめらるゝまゝに、名聞の心は、はしなくも萌した。かくばかり、人々にあがめられて、世を過ぎばいかばかり、楽しくうれしがるらんと、思ふにつけても、結願の日の近づくことが、少し物憂く思はれるやうになつた。

折しも、九月の半で、毎夜のやうに、月が澄み渡つた。これまでは、いつでも、見える月今年見なくても、來年は見られる月だと思つて、そんな心にも、止めて見なかつたが、一七日の後には、死ぬるべき身に、これや今生の月の名残りと思へば、白銀の光とか冴えかへりて、あはれいやまさり、彌陀の淨土の無量光の光と云へども、これにはよも過ぎずと思ふにつけても、あわただしくも去る浮世の名残が、だんだん悲しまれるやうになつて來た。どうせ、老先のない身體だから、自分で往生を急ぐにも及ばなかつたのだと思つた。

その上、一番いけないことは、兒が死んだのを悲しむ心が、だん／＼薄くなつてゐることだつた。初めは、今日にも往生して、なつかしき面影を見むと思つて居たが、そんな心も、だん／＼無くなつた。その上、兒が自分の言葉にも背き、念佛なども、唱へた事のないのを思ひ合はすると、必定極樂にて、廻り合はんと定つてゐない、そんなことを考へると、いよ／＼往生するのが、心細くなつて來た。

が、それにも拘はらず、一日一日結願の日は、近づいて來る。そして、一日一日參詣の老若男女の數が殖えて來る。「はや四日にて、ありがたき往生の姿を見奉らんぞ。あはれ、紫の雲や虚空にたなびき渡らむ。樂の音や雲間にひゞかなむ。」

など、上人の耳ちかく眩くものさへあつた。上人は、無言の業を修しながらも、いよいよ堪らなくなつて來た。などてかくは、人々のかしましくひしめき合ふならむ。自分一人、往生の素懷を遂げやうとするのに、何も他人が、こんなにざわめかなくつてもいゝではないか。これと云ふのも、顯眞座主が、自分のそつと相談したことを、公けに洩らされたのが、わるいのだと、今は心の裡でそつと、恨み奉るやうになつてゐた。

群衆は、日毎日毎に増して來て、お天氣のよい日などには、坊の周圍に、蟻の甘きに付くやうに、むらがつてゐた。

中には、物賣る翁さへ交じつてゐる。その人達の擧ぐる念佛の聲や讚嘆の聲が、上人の耳におどろ／＼しく聞えて來る。

結願の二日前には、これまではない群衆だつた。そのうちに、いとうつくしき女車二つまで、交じつてゐた。何某の内親王のあまりに、尊くや思はれけむ、ひそかにまゐりたまふぞと聞えて、道俗どもの、のゝしり騒ぐ聲、かまびすしく聞えて來た。

上人は、願を起した始には、心もほがらかにおはして、自分自身發心のことであるから、いさみはげみておはせしが、世の人に聞えて、道俗男女の、打ちさはぐまゝに、今はこれらの人々に追ひやられて、無理矢理に首を縊らされるやうに、考へられて來て、心が鉛のやうに重くなつてゐるのである。

結願の日は、二日三日と迫るまゝに、上人は、ます／＼惱みもだへて來た。兒に對する追慕の心などは、自分の惱のためにも、もうとつくに忘れてしまつた。とにかく、今しばし生き永らへて、何うにでもならう。何か生き永らへる方法はないかしらんと考へた。天變地妖などの出てよかし、畿内中國などに、いみじき謀反人の起れよかし。都に大火事が起らないかしらん。この坊も、潰ぶれるやうな大地震もふるへかし。そんな風な大事件に、取りまぎれて、世間の人々が自分のことを、忘れて呉れよばいよのだがと思つたが、何うして上人



の望みは叶ひさうもなかつた。世は太平が、打ち續いて、時津風枝も鳴らさず、諫鼓若深しと云つた有様で、殊に今年は稀なる豊年である。都に鬼の出る噂もなければ、小さい彗星さへ出ない。ただ、上人がふと考へついたことは、中宮の御懐胎だと云ふ一事である。ついこの間、それに就いて、叡山や三井寺などでも、安産のお祈があつたやうである。あはれ、男皇子などの一日もはやく、産れませよかし。そのおよろこびや、そのお祝ひで、きつと勅詔に依つて、今しばらく往生を、延ばせよと云ふことになるに違ない。さうなれば、堂々と公けに、晴がましく生き永らへることが出来る。道俗の尊仰を、一身に受けながら、生き永らへることが出来る。どうか、さうなつて欲しい。さう考へると、往生せんと念佛する心は無くなつて、たゞ一心不亂に、中宮の御安産を祈つてゐた。が、いかばかり法力のおはしませばとて、まだ身ごもりて六月にならぬ中宮の、などて四日五日の裡に、皇子産みまさいと笑止であつたが、そんなことに氣がつかぬほど、上人は心狂しくなつてゐたのである。

その裡に、結願の日の前日になつてしまつた。上人は、最初自分が死なうと思つて居た頃は、死ぬのがそんなに恐くなかつたが、今は何萬何千と云ふ人の力が加つて、自分の肩や腰を押しながら、ひたぶるに「死ねよ。死ねよ」と、催促されて見ると、死ぬことが恐しくなつて、目が眩み氣が遠くな

たが、さはなくてあまたたび、禮拜された後に、「急ぎ候かひありて、うれしくも、御最期に逢ひまつりしものかな。伯父君のおん姿のかがうしきこと、生身の觀世音もよもすぎじと覺え候ぞ。あはれかゝる貴き生佛と、縁にながること、頼文の過世いみじき果報なれ。なほこの上は、尊き往生の姿をも見奉りて觀念修業のたよりとせむ。」と、いと涼しげに申されければ、上人今は盲龜の浮木に離るゝ心持して、苦しく惱しく思はれた。

その裡に、いよ／＼結願の日が來た。上人は、前の夜心惱ましく、睡むれなかつた。ただ、曉頃にふとまどろみけるに、坊の外に大勢の足音よと覺えて、夥しく轟き聞えけり。あやしや誰やらむと、見給ひけるに、はや中門の中に込み入りぬ。庭上には、猛火烈々たる火の車を、遣り据てあつた。炎の中に、鐵の札の立てるが、おぼろげに見えけるが、無間地獄の罪人とかきたり。時に、青赤黄白黒の鬼共、大床に飛び上つて、上人を引き立てんとす。上人駭き怖れて、

「こは何處へつれ行くぞ。年頃の戒行をあはれみて、ゆるさせ給へ」と叫んだが、會釋もなく、掻い擱んで、火の車に抛げのせ、刹那の間、空中を翔ると見て、夢さめたり。その間の苦しさを噓ふべきものもなかつた。額には、あぶら汗が玉のやうに浮んでゐた。あはれ、死んで地獄に落ちる正しきしらせだと思ふと、上人の心も肝も、身に添はず、ただ烈しく顫

るやうであつた。そんなに集つて來る人の中には上人の弟子もあり、俗縁の人もあつた。その中に、一人位は、もう少し生き永らへてこの世の名残りを惜しめと、云つて呉れる人が、ありさうに思つてゐたが、みんな眞面目くさつて、よにも有難氣に上人を、禮拜する丈で、上人に別れるのが悲しいからしばし止まれと云つて呉れる者はなかつた。上人は、げにも頼みがたきは、人の心なりと、ひそかにかこちおはせども、無言の行を修したまへば、それとなく自分の心持を、口に出して云ふことさへ出来なかつた。

ただ、右大臣の頼文卿のみは、最後の命の綱と思つて頼んで居た。これは、上人の姉の子である上に、幼少のときは上人に就いて、學文をした上、人となりたまひし後も、師檀の契が深かつたから、この君こそ、きつと、自分の死ぬのを止めて呉れるに違ない。さいつ頃より、熊野へ詣うてたまへるを、一日千秋の思で、歸洛を待つて居られたが、昨日歸洛あつて、今日は小原へ來ると云ふことづてがあつたから、上人はこれを彌陀の來迎よりも、ありがたく心を躍らせて待つてゐた。

午の刻ばかりに、いと美しく裝ぞくして、お見えになつた。上人は、頼文卿の顔を見ると、涙が湯のやうに、ほとび出すのを、抑へることが出来なかつた。自分の涙を見ると、屹度自分の心裡を、いくらか察して呉れるに違ひないと思つて居るばかりであつた。

よしなき往生の思を起したゝめに、却つて思ひがけぬ妄執に囚はれて地獄へ落ちるかと思ふと腸が掻きむしられるやうに悲しかつた。

その裡に、結願の朝はシラ／＼と明けた。前の晩から、大雨が大嵐になつたら、それを口實に一日でも延ばすつもりであつたが、晩秋の空なごりなく晴れて、西の山の端に、あを雲が、少したなびいてゐる丈であつた。

夜が明けぬ裡から、老若男女が、廣い境内に、一杯にみちみちて、念佛の聲を擧げてゐた。その聲が、集つてゐる僧俗の耳には、いとすが／＼しく聞えて、今にも極樂が、まのあたり出現するやうに思はれたが、上人の耳には、夢で見た五色の鬼が、口々にのゝしり騒いでゐるやうにしか聞えなかつた。

殊に、上人が首を縊る筈になつてゐる榎木の周圍には、青法師どもが、群れつどひて、聲高く讀經してゐたが、その榎木が、上人には地獄に在りと聞く、劍の樹のやうにしか見えなかつた。

亥の刻近くなると、群衆の有様は潮が、満ちて來るやうだつた。乗り捨てゝある鞍の車さへ、敷へがたいほどだつた。未明から來てゐる連中は、樹の蔭や坊の縁などで、割籠を開いてゐるものさへもあつた。かれ飯を出して喰つてゐるもの



さへあつた。午の刻には群衆の数が、五萬以上に達したと、役僧達が云つてゐる。坊へ落ちるお布施だけでも、大變だらうと云ふので、僧正以下おほ欣びである。雲林院の菩提講のときの群衆だつて、この半分もないだらうとは、皆の一致した見方であつた。

正午が過ぎると、群衆が少し待ちくたびれて、催促する聲が、所々に、起つて來た。今は、然るべしとて法師どもが上人を、促したが、上人は魂がぬけたやうに、本堂の一段高い所に、坐つたがりて、返事さへしないのであつた。

所が、茲に覺正法師と云ふ同法の上人が、一人おはした。學文も、戒行も、上人と相匹敵して、何事にも並び立ちおはせしが、上人が往生の志を起してからと云ふものは、上人の噂文が、世にかまびすしく聞えて、坊内の尊敬も一方でなく、今まで寂寞覺正と、並び呼ばれてゐたものが、一人は九天の雲よりも高く、一人は縁の下の土くづのやうに、聞えなくなつたので、心安からず思ひて、いかにもして、寂寞の往生を妨げんと、腹黒く企みておはせしが、午の刻も過ぎて、上人が抄々しくも、仕度をしなぬのを見ると、今こそと思つたのであらう。さりげなく云ふのは、

「これほどの義になりて、別の仔細あるまじく候へども、凡夫の心は、刹那の間に、とにかく變る習にて候へば、もし妄執も残り、他に思召す事もあらば、仰せられよ。今は無言も

詮なく候。」

と云つた。日頃、快くも思はなかつた覺正法師の言葉が、上人の胸にしみわたるやうにうれしかつた。上人は、溺るゝ者が、薬を掴むやうに、その言葉にしがみ付いた。

「いしくも云ひたまひしものかな。われも思ひ立ちし時は、心も勇猛なりき。志厚かりし者の、とみに失せ候ひし時は、一日もとく／＼臨終して、かゝるうき事も、聞かじばやなんと思ひしが、今は心もゆるみて、いそぎ死せばやとも覺えぬぞ。」

と、力なく云つた。それを、聞いて居た上人の弟子の一人が、怒つた。この弟子は、年來、秘藏の弟子で、在家法師であつたから、都に住んで居たが、上人の深き志を聞いて、欣びいさんで、京から來て居たが、身分がら道場では疎せられるので、少し不平であつたが、上人のかうした述懐を聞くと、諸人に聞えるやうに、聲高く云つた。

「ものゝ義などあげつらふは、定まらぬ時の事也。これほどに、のゝしり披露して、時日も定まり、結縁の人々もあつまり、往生の様をおがまんとするに、なまこざかしき、さかしら異儀の出來候こと返す返すもあるまじきことなり。御往生をさまたげんとする天魔の所爲にこそ、とく／＼御行水まゐらせて、いそぎたまへ、時刻延びなんぞ。」

上人も、かやうにのゝしられて、今はこれまでだと思つた

のだらう。漸く行水をして、新しき法衣に換へて、さて榎木の下に、立つたが手足に顫ひ出て、なよ／＼として、ふらめくので、伴の僧が肩を押し腰をいだいて、やつと榎木に近づけまいらせたが、年は取つて居るし、木は高し、かねてしつらへてある梯子にも、上りかねたので、また腰を押しやうやう定の枝の所まで、のぼらせた。老いさらばへたる法師の、人の手に取られ、足を押され、ふるひをのゝきつゝ、梢にありたるさま、極樂往生の尊き姿はなくて、魔の應の罪人が、牛頭馬頭に追ひたてられ、刀山劍樹に追ひ上せらるゝに異ならず、人々最初は念佛して、いと神妙に見物してありしが、あまりにあさましかりければ、念佛の聲もうすらぎ、いと興さめてありける。上人とみに首を凝りたまはず、何か思案して時うつりしかば、見物どよめきて、

「今更怯れたまふか。」

など、青侍などの、のゝしりければ、いよ／＼怯れたまふと見え、繩を取る手のふるひわな／＼きて、繩の首にかゝりたまはざるを見て、見物は口々にのゝしり始めれば、あわてたまふと見えて、繩の首にかゝらざるに、足を踏みはづしければ、首はくびれず、大地の上に、地ひゞき立て、落ちたまふた。

見物どよめきて笑ひぬ、起き上りたまふかと見えしが、打ちどころ悪かつたのだらう、そのまゝ息が絶えてしました。

見物のゝしりさわぐこと、しばらくは止まらず。

「とにも、かくにも往生はしたまひぬ。同じ死にたまふならば、などでやまともには首をくゝりたまはざる！」

など、嘲けり笑つた。

が、群衆が、嘲けりの聲のやまぬ裡、西に落ちかゝつてゐた夕日が、にはかに光明をましたかと思ふと、夕焼の雲が、みな紫に輝き始めて、虚空に、そこはかとなく、妙樂がきこえて來るのだつた。すると、今まで蛙のやうに、ひしがれてゐた上人の身體から、異香が薫んじほとばしつて、その匂が群衆の間に、充ち満ち、極樂往生の證、今はかくれなければ、諸人嘲けりの心須ち消えて、稱名の聲、しばらくは、大地をふるはせて起りにけり。

上人の臨終の不始末で、面目を失ひ、蒼くなつてゐた小原の僧正は、この奇瑞を見るとこよなう有難がつて、衣の袖をかきつくらひながら「必定往生せんとして、惱み苦しみたまへるをなごてか、彌陀如來のあはれと思召さん。首をくゝらんとて、えく／＼りたはざるこそ、ありがたき臨終の相なれ。」と云つたので並居る、上人達、みな袖になみだを、ほとびらせたまふた。



## 西南奇聞

自分の伯父は、西南戦争の時に、死んだのです。が、死んだと云ふのは、簡単にさう云つたままで、本當は行方不明になつたまま、四十年後の今日まで、其の儘になつて居るのです。さう云ふと、或る人達は云ふかも知れない、日清戦争でも、日露戦争でも行方不明は幾何でもある。戦争に行方不明は、付き物だ。捕虜になつて居なければ殺されたのに、定まつて居ると。

所が、伯父の行方不明は少しは、事情が違ふのです。と云ふのは、伯父は軍人として、戰場へ出たのではないのです。官軍でも、賊軍でもないのです。たゞ一個の旅客として、戰場を通つて居る時に、行方不明になつたのです。

伯父が、戦争中に九州に行つたことに就いては、未だ曾て世間に知られて居ない秘密が潜んで居るのです。伯父はその當時、司法省の若手の官吏として、可なり前途を囑望されて居た有爲の青年であつたのですが、少年時代から世話になつた某大官の命を受けて、其當時熊本城外に賊兵を指揮して居た西郷南洲に會ひに行つたらしいのです。伯父が、行方不明

になつたまま、四十年にもなる今では、それが何う云ふ用向きであつたか、一向分らないのです。西郷南洲に會ひに行つたと云ふことも、私の家に云ひ傳へてある丈で、歴史上の文獻などに、さうした痕跡が、少しでも残つて居る譯ではありません。が、その某大官と云ふのは、薩閩の出で、殊に西郷隆盛とは師弟に近い關係があつたと云ふのですから、其處には後世に傳はり得ないやうな秘密が、伏在して居たのかも知れません。が、幾何師弟の關係があるにしろ、政府の大官が、妄りに賊の巨魁に、款を通ずべき譯ではなく、またその使者に、政府の官吏が、官を廢して行く譯もありませんから、或は某大官が時の政府の意を擲けて、さうした行動に出たかも知れません。で、ないと伯父が爲したやうに、官賊兩軍の戦線を突破することが出来ない筈です。伯父は兎に角、明治十年×月×日頃、丁度賊軍の攻圍の力が盡きようとする頃に、此の危険な旅行を企てたらしいのです。何でも田原坂や植木邊の戰場を避けて、菊地郡の隈府から、大津と云ふ小さい町を通り、白川を傳うて熊本に近づいたらしいのです。云ひ忘

れて居ましたが、伯父は一人ぢやなかつたのですが、何でも幸田健作と云ふ十七になる少年を伴うて居たのです。

伯父が西郷隆盛とどんな風に會見したか、また會ふた結果が、何うであつたか、今では少しも分りません。幸田健作は、その後だん／＼出世して、今では某控訴院の判事を務めて居ますが、何でも伯父に、茲で待つて居ると云はれて、小さい神社の縁の下で午後七時から、翌朝の四時まで、待ちあぐんで居る中に、子供心に恐ろしさも忘れて、ぐう／＼寝込んで居るところを伯父に起されたさうですから、多分伯父と南洲との會見は、夜中極秘に行はれたらしいのです。

それまでは、至極無事だつたのです。それまでは賊軍の勢力範圍に居ながらも、伯父は可なり落着いて、生命の危険などは少しも感じて居なかつたらしいのですが、それからと云ふものは、妙にそわ／＼して、誰かに付き纏はれて居るやうな様子を見せたさうです。そうして、少年の健作の衣類の襟の中に、小さい紙片を縫ひ付けて、

「若し、俺がやられたら、お前は何も知らないで、跟いて來たと云つて、云ひ脱けるのだぞ」と、幾度も／＼繰り返したさうです。何でも熊本を後にして、大津と云ふ小さい町へ來たときには、夕暮で伯父も少年の健作も、グタ／＼に疲れて居たさうです。見渡したところ、町の中には賊軍らしいものが一人も居ず、町人に聞いて見ても、五六日前に、一小隊ば

かりの人数が通つた外は、一人も見たことがないと云ふものです。から伯父もつい安心したと見え、ついその町の小さへ旅籠屋へ宿ることにしたさうです。

所が、あくる朝起きて見て、いざ立たうとすると、賊軍の士卒が、三々五々熊本の方へ落ちて行くさうです。伯父はそれを見ると、急に出發を見合せたさうです。それで、宿の一室で、主従は小さくなつて、日の暮れるのを待つて居たさうです。午後から、賊兵の影が途絶えて夕暮までに、ただ一人も通らなかつたさうです。さうすると、伯父は急に立たうと云ひ出したさうです。

何でもスツカリ仕度が出来て、愈々宿を出たのが、夜の八時頃だつたさうです。所が、宿を出てから、丁度二町ばかり來た時です。伯父は、急に、

「アツ！」と、叫んださうです。健作も、伯父の叫び聲が、たゞならぬに驚いて、

「何うしたのです。何うしたのです！」と、訊いたさうです。すると、伯父は、頻りに舌打をしながら、

「しまつた！ しまつた！」と、云つて居ましたが、暫らく考へた末、

「健！ 一寸待つて居るんだ。忘れ物をしたから」と、云つたまゝ、宿の方へ引返したさうです。

四十年も昔の田舎街で、殊に戦争中ですから、灯一つ見え



ない暗い道で、健作は顔へ乍ら伯父の歸るのを待つて居たさうです。所が、十分経つても、伯父は歸りません。三十分待つても伯父は歸りません。仕方なしに、健作は恐々ながら宿屋まで引返して見たさうです。ところが、意外にも伯父は其處に居なかつたさうです。健作は、そんな筈はないと幾度も念を押して訊いたのです。が、宿屋の主人は——小さい宿屋で、主人夫婦の外は五つになる女の子一人しか居なかつたさうです——あなたの御主人は、先刻あなたと一緒に出たさうで、決して歸つて来ないと飽くまでも云ひ張つたさうです。十七になる健作は、其處で全く途方に暮れたさうです。今ならば、直ぐ警察へ訴へるところですが、戦争最中で、町は無政府同様なのです。彼は、宿屋から先刻主人と分れた場所との間を、主人の名を大聲で呼びながら、馳せ廻つたさうです。宿屋の主人も、一緒に出て来て、手傳つて捜して呉れましたが、到頭伯父は何うなつたか、皆目分らなかつたさうです。

健作は、少年に似合はず伯父に對しては可なり忠實であつたと見え、伯父の生死を確めるために大津の町に滞在する決心をして、同じ宿屋に宿まつて、寢食を忘れて、伯父の行方を捜したさうです。

ところが、その事件があつてから、丁度三日目に熊本城の圍みが解けると共に、官軍が此の大津の町へもは入つて来た

却つて投降を勧めるなど、怪しからぬことだと、某大官の態度に激怒した結果、その憤憤を露らすために、その使者たる伯父を殺してしまつたらしいと云ふのです。

が、その想像説は、非常に自然であります。たゞ一つ不審なことは、もしそんな事情で殺害したならば、たゞ伯父の命丈を絶てばよいのですから、屍體は當然見付からなければならぬと云ふのです。健作と分れて宿屋へ取つて返すまでの道路の何處かに、屍體が横はつて居なければならぬと云ふのです。が、實際は屍骸はおろか、血一滴こぼれて居なかつたさうです。

一月もの間、健作はその地に止まつて、捜索しましたが、何等の手がかりもありませんでした。警察の方でも、日が経つに従つて、愈々熱心に（政府からの特別の命令をても受けたやうに）人数を増して、捜索したさうですが、到頭何の効果をも擧げえなかつたさうです。

所が健作が愈々大津を立たうと云ふ前日に、大津の町の直ぐ傍を流れる白川の流に、伯父が着て居る白い飛白の單衣が、見付かつたと云ふのです。何でも小供が川端へ降り立つて、岸に近い浅い水の中で、小魚か何かを追ひ廻して居る中に、ふと砂の中から、はみ出して居る着物が目に付いたさうです。子供は、何氣なく、それを掘り出して岸へ上げたところへ、大人が通りかゝつたさうですが、當時大津の人々は、

さうです。従つて町の秩序も恢復し、警察も開かれるやうになつたので、健作はその町の分署長にまで、捜索方を願ひ出たさうです。

分署長からは、縣の當局へ上申したと見え、縣の當局からは極力捜索をするやうな命令が下つたさうです。多分伯父の身や使命の大體が、判明した爲だらうと思ひます。

が、警察で極力盡力して呉れたにも拘はらず、伯父の行方不明は、到頭知れなかつたさうです。

伯父が、何うして行方不明になつたかに就いては、その當時、こんな想像説があつたさうです。伯父は、多分某大官の内命を受けて、當時戦勢の振はなかつた南洲に、投降を勧めに行つたらしいと云ふのです。無論、その大官の肚では、何うかして南洲を助けたく、降伏さへすれば、何うにかして、生命の安全丈は計ると云つたやうな、内意を伯父に傳へさせたらしいのです。それを豪氣な南洲翁に、一言の下に斥けられると同時に、南洲の周圍の隼人連に、「何を生意氣な」と云つたやうな憤慨を買つたらしいと云ふのです。その場で、「殺つてしまへ」と、逸り出す者があつたのを、南洲が極力制止した爲に、伯父は無事に歸途に付くことが出来たのだが、歸りには、伯父が何物かを恐れて居たのは、多分かうした原因の爲だらうと云ふのです。ところが、一方南洲のために制せられた隼人連は、薩摩の出身でありながら、南洲に味方もせず、

みんな伯父の行方不明を知つて居たものですから、これが何かの手がかりではあるまいかと警察へ持つて来たのださうです。

如何にも、それは伯父が着て居た衣服に相違なかつたさうです。しかも、その背の所に、丁度心臓あたりに、二個所刀で抉つたやうな傷が、付いて居るのです。が、不思議に血に染むだ痕跡は少しもないのです。警察の意見では、多分川水の中にある裡に、スツカリ洒されて血が落ちたのだらうと云ふことでしたが、それにしては、布の地質が傷んで居ないのださうです。一月も川水の中に浸つて居たものとは、何うしても思はれなかつたさうです。

伯父の着て居た衣物が出たので、健作も警察も、勢を得て、懸命に捜索を續けたのですが、それぎりまた何の手がかりもなかつたさうです。

で、止むを得ず、健作は十日ばかりの後、大津を立つて、長崎へ出、そこから汽船で横濱まで来て、東京へ歸つて来たさうです。

健作が東京へ歸つた後でも、捜索は可なり長い間續いたさうです。その中、賊が平げられたので、捕へた薩兵に付いても、伯父を暗殺した者があるか、何うかと云ふことをいろいろ調べて見たさうですが、賊軍の方でも、當時は熊本を引き上げるドサクサ最中から、一個人を暗殺すると云つたやう



な、仕事に没頭して居られるやうな時ではないと、云ふやうな結論になつたさうです。

伯父の父、即ち私の祖父は、秘藏見のしかも前途有爲な若い子の行方不明を、非常に残念がつたと見え、西南戦争が済んだ翌年、自身大津へ行つて、三月もの間苦心して、捜索したさうですが、やつぱり何の手がよりもなかつたさうです。

何しろ、戦争の大混戦の最中ですから、人間一人の生死位、分らなくなるのも當然だつたかも知れません。

その後、警察の意見では、伯父が可なり路用として、大金を持つて居たところから、或は強盗か何か、殺されたのではないかと云ふ捜索方針を立てたさうです。が、さうした方針の捜索も、何物をも、もたらさなかつたさうです。

が、一體一度宿を立つた伯父が、何を取りに引返したたらうかと云ふことは、皆の疑問になつて居るのです。伯父ほどの人間が、しかも注意に注意して、危険地を旅行して居る伯父が、果して何を忘れたかと云ふことは、可なり疑問だつたさうです。しかも、宿屋の中の伯父が宿まつた室を極力捜索しても、伯父が忘れたらしいものは、紙片一枚なかつたさうです。

伯父に對する捜索が、徒勞に歸してから、三十年も経つた、明治四十年のことでした。

急に、熊本の警察署から、私の父宛に、書状が來たのです。

備ふやら、可なり金のかゝることをしたと云ふのです。當時は、何しろ戦亂中で、無警察の状態であつたのですから、根が悪人の宿屋の主人が、伯父の大金を見て、ムラ／＼と悪心を起したのではないかと云ふのです。

父は、さう云ふ警察の話聞いてから、伯父の骸骨だと云ふ骸骨を一見したさうです。が、父には、それがどうも、自分の伯父だとは思はれなかつたさうです。伯父は五尺六寸はあらうと云ふ長身ですのに、その骸骨は五尺二三寸位しかなかつたさうです。それに、伯父の體格は、もつと堂々とガツシリして居る筈だと思つたさうです。

父は、その考を警察へ云つたさうですが、警察では、仲々承服しなかつたさうです。「いやそれは、貴君の思慮だ。貴君が若かつたから、兄さんが高く見えたのだ」と云つたさうですが、父には何うしても、その骸骨が肉親の兄のそれであるとは、思へなかつたさうです。

が、それは兎に角、その骸骨が伯父のものでないにしろ、その宿屋の主人がさうした屍骸を縁の下に埋めて置くやうな人間である以上、伯父の最後に、又別な有力な想像が加へ得ることは確なことです。

生き残つたと云ふその宿屋の女房は、その當時警察で、調べて見たさうですが、残念なことに四五年前熊本市で、死ん

それに依ると、伯父の遺骨らしいものが、見付かつたから生前伯父を熟知して居る者に、ゼヒ來て貰ひたいと云ふのです。父は、取る物も取り敢ず、熊本へ急行したのです。熊本へ行つて、よく事情を訊くとかうなのです。父が宿まつた宿屋は、その後一時繁昌したが、日清戦争に、主人が死ぬと同時に、そのころ二十三になつた娘が、續いて後を追つたので、残された女房は、家を賣つて、商賣を止めたのだが、その後が料理店になり、それが、ずつと、引き續いて商賣をして居るところ、今度は大改築をすることになつて、家を崩したり、土地を掘り返したりして居る中に、薬所の床下から、人間の骸骨が出たと云ふのです。しかも、その骸骨の後頭部の骨が、斧か何かで、打つたやうに、滅茶苦茶に碎かれて居たさうです。他殺に違ひないと云ふことになつて、いろ／＼調べて居る中に、町の故老の中に、伯父の失踪事件を知つて居る者があつて、伯父の骸骨に違ひないと云ふことになつたのです。而も骸骨の様子が、丁度三十年位経過して居ると云ふ鑑定らしいのです。骸骨の發見された事からの推測に依ると、伯父が何かを忘れて、取り返しに來たときに、兼て伯父の路用の大金に眼を付けて居た宿屋の主人が、伯父の油断を見済して、背後から一打に、擲ぐり殺したのではないかと云ふのです。さう云へば、町の老人の話に依ると、その宿屋は西南戦争で儲けたとか云つてその後店を擴げるやら、女中を

それには、よく事情を訊くとかうなのです。父が宿まつた宿屋は、その後一時繁昌したが、日清戦争に、主人が死ぬと同時に、そのころ二十三になつた娘が、續いて後を追つたので、残された女房は、家を賣つて、商賣を止めたのだが、その後が料理店になり、それが、ずつと、引き續いて商賣をして居るところ、今度は大改築をすることになつて、家を崩したり、土地を掘り返したりして居る中に、薬所の床下から、人間の骸骨が出たと云ふのです。しかも、その骸骨の後頭部の骨が、斧か何かで、打つたやうに、滅茶苦茶に碎かれて居たさうです。他殺に違ひないと云ふことになつて、いろ／＼調べて居る中に、町の故老の中に、伯父の失踪事件を知つて居る者があつて、伯父の骸骨に違ひないと云ふことになつたのです。而も骸骨の様子が、丁度三十年位経過して居ると云ふ鑑定らしいのです。骸骨の發見された事からの推測に依ると、伯父が何かを忘れて、取り返しに來たときに、兼て伯父の路用の大金に眼を付けて居た宿屋の主人が、伯父の油断を見済して、背後から一打に、擲ぐり殺したのではないかと云ふのです。さう云へば、町の老人の話に依ると、その宿屋は西南戦争で儲けたとか云つてその後店を擴げるやら、女中を

で居たさうです。



ある抗議書

司法大臣閣下。

少しの御面識もない無名の私から、突然かゝる書状を、差上げる無禮をお許し下さい。私は大正三年五月廿一日千葉縣千葉町の郊外で、兇悪無残な強盜の爲に惨殺されました角野一郎夫妻の肉親のものであります。即ち一郎妻とし子の實弟であります。私の姉夫婦の悲惨な最期は、當時東京の各新聞にも精しく報道されましたから、「千葉町の夫婦殺し」なる事件は、閣下の御記憶中にも残つて居ることゝ存じます。私は肉親の姉が受けた悲惨な運命を、回想する度毎に、今でも心身を震ふ戦慄を抑へることは出来ません。人間の女性の中で、姉ほどむごい死方、否殺され方をした者はないと思ひますと、私は今では胸の中が掻き廻はされるやうに思ひます。私は、當時の色々な記憶を頭の中に浮べることさへ、不快に思はれます。が、私は此の書状を於て、申上ぐる事の前提として、當時の事を一寸申上げて置かなければなりません。私の義兄の角野一郎は、大正三年の三月迄東京で雑誌記者を致して居りました。が、その頃痲疾の肺がだん／＼悪くな

りかけましたので、轉地療養の爲、妻の實家即ち私の家の所在地なる千葉町へ参つたのであります。そして、私の父母とも相談の上、海に近い郊外に六疊に四疊半に二疊の小さい家を借りまして、そこで病を養ふことになつたのであります。私の父母は、今迄東京に住んで居た爲に、月に二度しか逢ふ機會のなかつた姉が、つい手近に移つて來た爲に、毎日のやうに顔を合せることが出来るのを非常に欣んで居たやうでありました。幸ひ義兄の病氣も、夏に向ふに連れて段々快方に向ふやうで、一夏養生を續けたならば健康を恢復するだらうと姉夫婦も私達の父母も、愁眉を開いて居たのであります。が、かうした小康を欣んで居た時、あの怖ろしい運命が姉夫婦を襲ひかけて居たのであります。忘れも致しません。夫は大正三年の五月二十一日の夜と申しても、正確に云へば、翌二十二日午前の四時頃でありました。私の家の表戸を割れるやうに烈しく亂打するものがありました。私が、驚いて戸を細目に明けますと、警察署の印が付いた提灯が眼に付きました。私は巡査か、てなければ探偵

だと思ひましたので、何事が起つたのかと胸をとどろかせました。が、その男は巡査でもなく探偵でもなく法被を着た警察の小使らしい男なのです。その男は私の戸を開けるのも待たず、息をはづませながら、「此方は、角野さんの御親類でせう。今角野さんの御宅が大變なのです。直ぐ誰か來て下さるやうに」と、云ひながら、その男は、スタ／＼と駈け出さうとしましたので、私は追ひ縋るやうに、

「大變つて、一體何うしたのです。何うしたのです」と、訊き返しました。後から考へますと、小使は姉夫婦が殺されたことは、知つて居たのでせうが、さうした怖ろしい慘事を、自分の口で知らせると云ふ嫌な仕事を避けたのでせう。「何でも強盜が、はいつたと云ふ事ですが、私は精しいことは知りません。何しろ、早う來て下さるやうにとの事でした」と、云ひながらドン／＼歸つて行きました。私は強盜と云ふ言葉を聴くとある怖しい豫感に胸を閉ざされてしまつて、兩足にかすかな慄へさへを感じました。支關へ取つて返しますとそこに父と母とが寢衣のままに立つて居ました。母はもうスツカリ慄へを帯びた聲で、「何うしたの／＼」と、オゾ／＼訊きました。私が、「姉さんの家へ強盜が、は入つたんです」と、云ひますと、母は、

「ひえ！」と、云つたまゝ父の肩にすがり付きながら、ガタ慄ひ出しました。氣丈な父は、道に色も更へずに「走つて行け。直ぐ行け。わしも直ぐ後から行くから」と、申しました。私は慄へる手で、衣服を着換へると、用心の爲に臺所にありました櫛の棒を持つて家を駈け出しました。振りかへると母は最愛の娘を襲つた變事の爲に烈しい激動を受けたらしく、口もろく／＼利けないやうに目をバチ／＼させながら、支關に腰をかけたまま、慄ひ續けて居たやうでありました。

私の家から、姉の家迄は十五町位隔つて居りました。千葉の町を離れて田圃の中の道を十町ばかり行くと、松林が道の兩側にあつてその松林を過ぎると、姉の家を初め、二三軒の家が並んで居りました。私は、その十五町の道を後考へれば十分位で駈け付けたと思ひますが、その夜はその歩き馴れた道が何時もの二倍も三倍もの長い道のやうに思はれました。が、私は、姉の家へ急ぎながらも、姉夫婦が殺されたとは、夢にも思ひませんでした。たゞ強盜に襲はれた爲に、氣の弱い姉夫婦が、何んなに強い激動を受けたらうかと、そればかりが心配でした。殊に、その爲に義兄の病氣が重りはしなかなど、心配して居ました。姉夫婦の衣類などの中で目覺しいものは、皆私の家へ預けてありましたから、盜られたとしてもホンの小遣錢位だらうと思ひましたから、その點は、少



しも心配いたしました。姉の家になんか近づくに連れて気が付くと、姉の家の雨戸が一枚開いて居て、其處から火光が戸外へ洩れて居るのが見えました。私は、姉夫婦が強盗に襲はれた跡始末をして居るのだと思ひました。私は一刻も早く顔を見せて、姉夫婦に安心させてやらうと思ひまして、勢よく姉の家の門の中へ飛び込みました。すると、いきなり門の中の闇から、

「コラッ誰だつ！」と、云つて聲をかける人がありました。私は強盗でないかと思つて、ハツと身構へをしました。私は夫でも擬勢を張つて、

「貴様こそ誰だつ！」と、怒鳴りました。

すると、闇の中から私に近づいて来た鳥打を被た男があら

ました。前と丸切り違つた落着いた聲で、

「千葉署の刑事です。貴君は」と、訊きました。さう聴くと私はホツと安心して、

「さうですか。何うも御苦勞です。私は角野一郎の妻の實弟です」と、云ひました。すると、刑事は、

「それならば、何うかお這入り下さい。が、まだ検屍が済んで居ませんから、手を觸れてはいけませんよ」と、申しました。私は、刑事にかう云はれた時、頭から冷水を浴せられたやうにぞつとしました。

「えつ！ 検屍！ 誰が殺されたのです、角野ですか、妻で

すか」と、私は急ぎ込んで訊きました。

「まあ！ 行つて御覽なさい。お氣の毒な事です」と、職業柄、かうした被害者を見馴れて居る刑事さへ、心から同情を表して居るやうでありました。

私は、心の中で義兄かそれとも姉かと、思ひました。義兄が抵抗した爲に斬られたのであらうと思ひました。肉親に對する私の利己的愛は、やつぱり被害者が義兄であつて姉でないことを、心私かに祈つて居ました。

門から、支關迄は四間位ありました。私は支關の格子を開けると、

「姉さん」と、呼んで見ました。内からは、寂として何の物音も聞えないのです。その癖、電燈はアカ／＼と灯つて居るやうなのです。

「兄さん」と、私は繰り返して見ました。が、やつぱり何の物音も聞えないのです。私は何だか冷めたい固くるしい物が、咽喉からグ／＼胸の方へ下つて行つて、胸一杯に擴がるやうに思ひました。格子を持つて居る私の手が、ブル／＼頭へた爲でせう。格子が無氣味に、ガタ／＼と動きました。私は、障子一枚の向ふに姉夫婦の死骸が横はつて居るのを、マザ／＼と感じました。私は必死の覺悟を固めて支關の障子をあげました。が、その二疊の間には、何の異状もありませんでした。私は、怖る／＼次の四疊半の襖を開けました。そ

の四疊半にも何の異状もありませんでした。が、ふと四疊半と六疊との間の襖が二尺ばかり、開かれて居る間から六疊の間を見ました時、私は思はず「姉さん！」と、悲鳴に似た聲を出しました。夫は、確に姉の足です、敷かれてある布團から斜に疊の上に投げ出されてある色白な二つの足は、姉の兩足に相違ありませんでした。その二つの足を見ると、私は今迄の恐怖を丸切り忘れて、一氣に六疊の間に馳け込みました。そこで私が如何なる光景を、目撃したらうか。その當時から、足掛五年になる只今も私はその光景を思ひ出す毎に、胸が裂け四肢の戦くやうな、恐ろしさと怨とを感ぜずには居られないのです。

司法大臣閣下。——閣下は、閣下の肉親の方が兇悪なる人間に慘殺された現場を御覽になつたことがありますか。否少くとも、閣下の肉親の方が他人に依つて慘殺されたと云ふ御經驗をお持ちでせうか。若しかうした經驗がお有りにならなければ、私とその光景に依つて感じた怖ろしさと怨と悲しみとの混じつた名狀しがたい心持は、とても御想像も及ばないだらうと思ひます。

私の姉は、私のたゞ一人のとし子は、ついその前日私を微笑を以て送迎した姉は、髪を振り亂したまゝ布團の上に投げ出されたやうに倒れて居ましたが、その首に捲かれて居る細い紐を見ました時、私の全身は烈しい暴風のやうな怒の爲に、

ワナ／＼と慄へるのを覺えました。私は刑事が手を觸れてはいけないと云ふ言葉も忘れていきなり、姉の頸からその呪ふべき紐を解かずには居られませんでした。姉のあさましい死状や、烈しい苦悶の跡を止めた死顔の事などは申上げますまい。回想するさへ私には恐ろしいのです。姉のあさましい死體に、私は兩手をかけて、號泣しようと思ひました。私はふと義兄の安否を思ひました。私が目を上げて室内を見廻すと縁側へ面する障子が開いて居る事に氣が付きました。丁度六疊間に足だけを置いて、身體の大部分を縁側の上に投げ出して寝そべつて居るのは、義兄に違ひありません。私は、姉の屍體を捨て、義兄の方へ馳け寄りました。が、兩手を後手に縛られた義兄は、姉と同じやうに絞殺されたと思ひました。眼に死際の苦悶を見せながら、もう全身は冷たくなりかけて居ました。私は、その後手に縛られた兩手を見ました時、腸を切り苛むやうな憤と共に、涙が、——腹の底から湧き出すやうな涙が、潜々として流れ出ました。私は、狂氣のやうに家から飛び出すと其處に居た刑事に、

「誰が殺したのです。犯人は／＼」と、叫びかけました。刑事には、私が狂亂したやうにも見えませんでした。私は、また右の手から離して居なかつた櫂の棒を握りつめながら、此の刑事にても飛びかゝりさうな氣勢を示しました。刑事は、道に氣の毒に思つたのでせう。



「いやお察し申します。先刻見えました警部さんなども、大變氣の毒がつて居たやうです。非常線を張りましたから、犯人は案外早く上るかも知れませんが、云ひました、が、私は姉夫婦を殺された無念と悲しみとで一刻もぢつとして居られんやうに思ひました。が、何をしようか何う行動してよいのか丸切り夢中で、たゞ異常に興奮するばかりでした。私は息をはずませながら、

「犯人は強盗ですか、それとも遺恨ですか」と訊きました。「いやまだ判りませんが、多分は強盗でせう。長生郡と遺口が、同じだとか云つて居ましたよ」刑事は答へました。私はさう答へる刑事も職業的な冷淡さが、癪に觸るやうにさへ思ひました。姉夫婦が、悲惨な最期を遂げたのも、つまりは千葉警察の怠慢であるやうに思ひまして、私は此の刑事を頭から罵倒してやりたいやうないら／＼した氣持をさへ感じました。その時、私の父は、近所の俵屋を起したと見え綱引で馳付けて來ました。私は父の顔を見ると、一旦止まつて居た涙が再び流れ出るのを感じました。父は、私の顔を見ると、しやがれた聲で、

「どうだ。おとしには怪我はないか」と、申しました。夫には、子を思ふ親の慈愛が、一杯に溢れて居ました。私は、父の言葉を聴くと、胸が閉がつて言葉が出ないのです。「何うだい。一郎もおとしも怪我はないのかい」と、訊き直

「夫婦二人揃つて、殺されるなんて、何と云ふ因果な事か：と、云ふかと思ふと無念に堪へられないやうに齒噛みをしたしたやうでありました。丁度、その時に戸外に、數臺の車の音がしたかと思ふと、先刻の刑事がは入つて來て、今豫審判事が出張になりました」と、云ひました。私は、夫でも豫審判事が來たことを頼もしい事のやうに思ひました。その人達の手に依つて此の凶悪な犯人が一日も早く捕はれることを祈らずに居られませんでした。

夫から後のことは、簡単に申し上げませう。私達は、尙、姉のあさましい死を、姉を何物にもまして愛して居た母に告げると云ふ、心苦しい仕事をしなければなりません。夫を聴いた時の母の狂亂に近い悲痛な有様は、今でも何んなに精しくても申上げることが出來ます。父は母が必死に頼むにも拘はらず、姉夫婦が惨死の現場へは、母を行かせませんでした。棺に収めた姉の死體に對し、僅かな名残りを惜しませた丈でありました。

母は、姉の非業の死を聞いてから、三日の間は一食も咽喉を通らせない程でありました。その時丁度六十一でありましたが、元來瘦せて居た身體は、僅か二三日の中に、ゲツソリと衰へ、たゞ二つの大きな眼だけが狂人のそのやうに血走つて、絶えず不安な動き方をいたして居りました。夜も娘の死を思つて、易々とは寢付かれなと見えまして、ウト／＼と

しました。私は、すすり泣きながら、

「姉さんも、兄さんも、やられた」と、云ひました。父は道に聲を立てませんでした。老眼をしばたきながら、黙つて家の中へは入つて行きました。私が父の後から引返して見ますと、父は姉の死體を半ば抱き起しながら、

「おとし／＼」と、背中を力強く叩いて居りました。が、そんな事で姉が蘇る筈もありませんでした。父は、姉の死體を放すと義兄の死體を抱き上げながら、

「一郎／＼」と、同じやうに背中を叩いて見ました。が、兄の唇はもう紫色に變つて居ました。父は、スゴ／＼と立ち上ると老眼をしばたきながら、

「おのれ！ 酷いことをしやがる。酷いことをしやがる」と云ふかと思ふと、瘠せた右の手の甲で老顔を幾度も／＼こすりました。私は父の悲憤を眼にしますと、再び胸の裡が湧き返るやうな激怒を感じました。

「俺は、諦めるが、お信は何う思ふだらう」と云ひました。さう云ふのを聴くと、私は家に残つて最愛の娘の安否を氣遣つて居る老年の母を思はずには居られませんでした。母がどんなに姉を愛して居るかを、知つて居る私は此の惨事の報道が母に對して何れほど、致命的であるかを考へずには居られませんでした。父は、姉と義兄との死體を等分に見て居ましたが、

したかと思ふと、「おとし／＼」と、叫んで、狂氣のやうに跳ね起きて布團の上に端座して、何やらブツ／＼と申すかと思ふと、又さめ／＼と泣き伏すのでありました。

姉が病氣で死にましたならば、いくら氣の弱い母でも、之ほどの悲嘆には暮れなかつたのでせうが、夫婦諸共凶悪な強盗の爲に惨殺されたと云ふ恐ろしい激動は、母には堪へられなかつたのでありませう。その事件があつて以來、ボンヤリとしてしまつて日に衰へて行つたやうであります。

姉の頭に纏ひ付いて居た細紐を見、義兄の後手に縛られた兩手を見た時に、私は犯人の肝を喰はねば満足しないやうな烈しい憎悪を感じずには居られませんでした。私は、犯人が捕まつたら最先に馳け付けて行つて、思ふ存分踏みにじつて姉と義兄との無念を晴してやりたいと思ひました。私は、昔の人間が肉親の殺された場合、敵打に出て幾年もの艱苦を忍ぶ心持が充分に解つたやうに思ひました。私は、今でも復讐が許されるならば、土に喰ひ付いても犯人を探し出して、姉の無念を晴したいと思はずには居られませんでした。若し姉夫婦の殺された原因が、遺恨だとか痴情などでありましたら、夫は姉夫婦にも何等かの點に於て、少しは責任があることですから、私の無念は之れ程でもなかつたでせうが、殺された原因が、全く強盗の爲であつて、その凶漢は罪も怨もない姉夫婦の命を、何の必要もないのに、不當に非道に、蹂み



騙つたものであることを知つてからは、私達の無念は二倍にも三倍にも深められぬ譯には行きませんでした。殊にその夜張つた非常線が、何の効果もなく三日経つても五日経つても犯人の手懸りが、少しも無いのを知ると、私は警察の活動が愈々まだるつこいやうに思はれて、じつとして居られないやうないら／＼した心持に、ならずには居られませんでした。父は道に心の裡の悲憤を口には出しませんでしたが、母はよく口癖のやうに、

「おとしの敵はまだ捕まらんのか」と、申して居りました。が、私達の一家が、一日も早く犯人の捕はれるのを祈つて居りましたにも拘はらず、一月と経ち二月と経つ間、警察からは何の音沙汰もありませんでした。その中に、警察の方でも新しい事件が起れば、その方へも力を割くと云ふ譯で、時日の経つと云ふことは犯人逮捕の可能性を段々、少くして居るやうでありました。私は、待ち遠いやうな心に驅られて、時々知り合ひの警部の家を探ねました。警部は私の顔を見ると、一寸氣の毒さうな顔をしながら、

「もう少し待つて下さい。之が遺恨などの殺人でなく強盗丈に、一寸擧りにくいのですが、なあに、その中に貴方方の御無念を晴して上げますから。今年中には、屹度です。東京の警視廳へも、よく頼んでありますから」と、申しました。それは姉が殺されてから、三四月を経たその年の十月頃でし

た。私は今年中には必ず逮捕してやると云ふ警部の證言を、セメての慰とし、母に傳へて居たのであります。

所が、その年も押しつまつた十二月の半ばでした。姉の遭難以來、生きた屍骸のやうになつて居ました母は、腎臓炎を起して僅か四日か五日で倒れてしまひました。姉が、生きて居ましたら、まだ三年や四年は生き延びたやうと思ひますに付けても、私は姉夫婦を殺した強盗は同時に私の母の生命をも縮めて居つたのだと、思はれずには居られませんでした。私は、名も知らぬその獸の如き人間に對して、更に倍加した憎悪と恨みとを持たずには居られませんでした。

母は、死際にまで姉の事を、グド／＼と申して居りました。

「まあ可哀相な事ぢや。夫婦揃うて殺されるなんて、あの子はよつぽど不幸せな子ぢや」と申して泣くかと思ひますと、

「えい憎い畜生め！ ようもおとしを殺したな」と、申して怒り罵りました。そして、口癖のやうに、

「まだ捕まらんのかな。人を殺した人間が、大手を振つて歩いて居るとは神さまも佛さまもないのかな」と、恨んで居りましたが、又諦めたやうに、

「まあ！ えいわ。あんな極悪な人間は、此世では捕まらんでも、死んだら地獄へ落ちるのぢや。地獄で、ひどい目に逢ふのぢや」と、申して居りました。かうして、母は、娘を殺された恨みと悲しみとに悶えながら、十二月の廿日でしたか、

最愛の娘の後を追うて死んでしまひました。犯行の表面では、姉夫婦が殺されたことになつて居ますが、私は母もその同じ犯人に惨殺されたものだと思ふ感銘を受けずには居られませんが。母と姉とを非道に殺された私と父とは、不快なあさましい記憶から絶えず心を苛なまされながら、快々としてその日を暮して居りました。千葉町の夫婦殺し」と云ふ題目も、一段世間からばかりでなく、警察當局者の記憶からも薄れて行つたと見え、犯人捜索に尤いての消息なども、新聞紙上に行つても出ないやうになりました。私と父とは、段々心細く思はずには居られませんでした。夫と共に、かゝる凶悪無残な悪徒を、逮捕し得ざる警察を呪ひ、またかゝる悪徒の横行濶歩して居る世の中が嫌になりました。

所が、時運到来と申すのでういませうか。大正五年の十月でした、犯人坂下鶴吉は——私は、その時初めて姉を殺した兇悪な人間の名を知りました——警視廳の手に依つて逮捕されました。何でも舉動不審の爲に拘引されたのですが、訊問の結果、多くの兇行を自白しました。その多くの兇行の中でも、私の姉を殺した事件が、丁度烏の黒い身體の中でも、その兇悪な眼が一番怪しい光を放つやうに、あの事件が一番恐ろしい光彩を放つて居りました。「千葉町夫婦殺しの犯人捕はる」と、各新聞は報道しましたが、彼は此の事件ばかりの犯人ではありませんでした。新聞紙の報する丈でも、彼は十指

に餘る人間の命を絶ち、多くの子女の貞操を蹂躪し、數多の良民をして無念の涙に咽ばせて居るのでした。

父は、犯人逮捕の通知を、警察署から受けると久し振に晴しく笑ひました。そして、

「之でおとしも、お信も浮ばれるわい」と、申して非業に倒れた娘と、悲嘆に死した妻とを弔うて居りました。その夜は佛壇に燈明を灯して、姉と母との靈に、犯人逮捕の欣びを告げました。

私は、初て現代の日本の警察制度に感謝しました。そして天網疎にして洩さずと云ふ古い言葉にも、深い人間の世の攝理を知つたやうに思ひました。

私達が坂下鶴吉の公判の經過に至大の注意を拂つたのは、勿論でありました。が、道に恐ろしい悪黨である丈に、諦めもよいと見え、地方裁判所で死刑の宣告を受けると、控訴もしないで、大人しく服罪しました。その判決のある日でありました。私は、私達の一家の運命に、殘虐な打撃を與へたその男の顔を、一目見たいと思つて、わざ／＼傍聴に參りました。

あの公判廷の被告箱の中に、傲然と屹立して居る男を見ました時、私は姉夫婦の惨死の光景を見た時と同じやうな戦慄を感じずには居られませんでしたが、骨組の如何にも逞しい身體、眼は血走つて眉毛は飽く迄も濃く、穢悪な大きな低い鼻



と云ひ、太く横に走つた唇と云ひ、人間の悍猛な獸性が、身體全體に溢れて居るやうな男でありました。こんな男の手にかゝつては、あのかよわい姉夫婦は一溜りもなかつたのも無理はないと思ひました。

が、道に弾悪らしい此の男も、裁判長から嚴かな死刑の云ひ渡しを受けると、顔の色をサツと易へて、頭を低くうなだれました。私は、正當な刑罰が、否彼の犯した罪惡に比ぶれば輕過るが、然し現在の刑法では極刑に當る刑罰が宣告され、その男が刑罰に對する相當な恐怖を感じた時、私は初めて私の限りなき憤忿の心が和らげられたのを感じました。が、私の本當の感情から云へばまだ、之位の事では、私の憤や恨は充分に晴らされたとは思ひ出しませんでした。

私は死刑と云ふことが、かゝる場合に充分な刑罰であるか何うかを考へて見ました。此の坂下鶴吉は、私の姉夫婦を加へて、丁度九人の人間の命を奪つて居ます。が、彼が奪つて居るものは單に九人の被害者の生命だけではありません。私の姉が殺されたに付いて、私の母の怖ろしい精神上の打撃を受けた如く、他の八人の被害者の父なり母なり兄弟なり姉妹なりが同じやうに怖ろしい打撃を受けて居るに相違ありません。九人の被害者の爲には、四十人五十人の肉親の者が親なり子なり兄弟なり姉妹なりを殺された無念の涙に咽せんで居る筈です。生命を奪はれると云ふことも人生の悲惨事には相

違ありません。が、肉親の父なり母なり子なり兄弟姉妹なりを、何の罪もなくして絞殺され斬殺されるのを見、夫から受けられた怖ろしい激動を、生涯持ち續けて行くと云ふことも、同様に人生の悲惨事でありませぬ。殺人の場合、被害者は單に殺された當人丈ではありません。その被害者の親なり子なり兄弟なり姉妹なりは命こそ奪はれないが、精神的には、恐ろしい打撃を受けるのです。坂下鶴吉が殺したのは、僅か九人かも知れませぬ。が、彼の兇惡な所業の爲に苦しんで居るのは、私達親子の者ばかりではありますまい。さうした點から、考へて行くと、死刑など、云ふことは輕すぎる位、輕いと思ひます。九つの命と一つの命。私は數學的な數の點から云ふのではありますせん。坂下鶴吉が宣告の日から、處刑の日迄、獄中でどんなに苦悶しても、彼の爲に苦しんで居る數多くの人達の感謝の十分の一をも、償ふことは出来ませぬ。殊に不當に絞殺され斬殺された被害者達の末期の無念と苦悶との百分の一をも償ふには足りませぬ。従つて私は、坂下鶴吉の如き重惡人に、死刑以上の刑罰を課し得ないと云ふが如きは司法制度に於ける文明主義の缺陷でないかと思ふのです。何等の理由もなく、責任もなく、何等の豫期もなく、不當に不意に強盜に慘殺される被害者の斷末のやるせない心外さ、限りなき苦痛、燃ゆるやうな無念を考ふれば、死刑囚の苦しみの如きは、餘りに輕すぎると思ひます。自分の犯せる罪惡の

爲に、殺されるのですもの、其處には充分の諦めも付き、覺悟も定まるだらうと思ひます。

が、現代の刑法の下には、私達は坂下鶴吉の死刑を以て、満足せざるを得なかつたのであります。従つて、私は死刑囚の苦痛と云ふことを色々に、想像してやつと姉夫婦の慘死に對する無念を晴すこととして居ました。

どんなに兇惡な人間でも、國家の鐵の如き腕に依つて禁獄され、不可抗力の死を宣告され、否やでも應でも死に對する覺悟を定めなければならぬ恐怖と苦痛とを想像したり、又日一日と處刑の日が近づくにつれ、生に對する執着が却つて一段強くなり、必至の運命から逃れんとする無益な然しながら懸命の身悶えなどを考へると、私は姉夫婦の横死以來積積して居た悲憤を漸く洩すことが出来ました。

殊に、毎朝々々、今日は死刑の執行される日ではないかと怖れををのゝく心持、執行の手續をする爲に何時看守の扉を開きはしないかと期待する恐ろしい不安などを考へると、たとへ充分とは云へない迄もある程度迄も、姉達の無念が償はれると思ふやうになつて居ました。

さうして居る裡に坂下鶴吉が死刑を宣告されてから、半年も経つたてせう。私はある朝新聞で「夫婦殺し犯人」處刑と云ふ三號表題の記事に依つて、愈々坂下鶴吉が此の世界から驅逐されたことを知りました。私は長い間の緊張から逃れた

やうに、安易なホツとした心持を感ずると共に此の惡人に對しても、僅かな憐憫の情を催さないこともありませんでした。

私は之で萬事了つたと思ひました。私の心を長い間苦しめた憎惡の心も全く取拂はれて、私は普通の人間と同じやうになだらかな平和な心持を持つことが出来るやうになりました。私は再び現在の司法制度なり刑法なりに對し、ある感謝の心持を懷かすには居られませんでした。

司法大臣閣下。  
若し事件が此の儘で終つたならば、私はかゝる書狀を閣下に呈出する必要は少しもなかつたのであります。

所が坂下鶴吉が處刑されてから一年も経つた此の頃であります。私は新聞の廣告に依つて、ふと「坂下鶴吉の告白」なる一書が、ある辨護士の助力に依つて、上梓されたのを知りました。私は、坂下鶴吉なる人間の痕跡が世の中に公々然と發表されることが少し不快でありました。被害者の多くが彼の兇害なる打撃に依つて、世の中から永劫に葬られ、墓穴の下に黙々たる無名の骨を朽ちさせて居るのにも拘はらず、坂下鶴吉の告白なるものが兎に角書冊の形式に依つて公表され、彼が如何なる形式に於ても彼の思想を披瀝し得ると云ふことは、私にとつては可なり不當のやうに思はれましたが、そんなことは何でもありません。私は「坂下鶴吉の告白」なる



ものを、讀むに當つて、私は國家の刑罰なるものが、此の男に依つてその効果を蹂躪され、彼は彼自身に適はしい耻多き苦しみ多き刑死を遂ぐる代りに、欣びに溢れ光榮に輝き凱旋的に此世を去ることを知つて、私は憤忿の念に堪へないのてあります。

彼の手にかゝつた被害者の凡てが、無念の中に悲憤の中に、もたえ死、もがき死んだにも拘はらず、彼坂下鶴吉は、欣々然として絞首臺上に立ち、國家の刑罰そのものに對して何等の恐怖を示さず、何等の羞恥をも示さず、自若として死んだことを知つて私は實に憤忿の念に堪へないのであります。然かも典獄なる人迄がその最期の情景を叙べて「罪の重荷を投げ下して戀しき故郷に旅立ち歸る心持にて、喜色滿面勇み立つたその姿は、坐ろに立會の官吏達を感歎せしめざるはなかつたと申します」云々と、まるで決死隊の勇士を送るやうな讚嘆の言葉を洩して居ます。若しも私の義兄の角野一郎、此の坂下鶴吉に後手に縛り上げられ、絞殺されてもがき死んだ私の義兄の角野一郎が、此の處刑の情景を見たらば何と申しませう。自分の目前で夫を絞め殺され、相次いで自身を絞め殺された私の姉が、此の情景を見たら何と申しませう。彼等を殺した罪人が、彼等よりも十倍も百倍も幸福な死を國家の看視の下に送つて居ることを知つたら何と申しませう。こんな不公平な不合理な處罰が世の中にあるてせう。

か。

若しも、坂下鶴吉の欣々然たる最期が、——國家の刑罰に對して何の恐怖をも感じない態度が、彼の悪人としての根性から自發的に出たものならば、私は何とも申しませぬ。九人の人間を殺しながら欣々然として絞首臺上に立ち得るやうな恐ろしい人間に姉夫婦が殺されたことを、不幸中の不幸と諦める外はありません。が、坂下鶴吉のかゝる態度は彼の自發的のものではなくして、彼が在監中キリスト教に改宗した結果なのであります。私は、今茲でキリスト教そのものに對して何の非難をするのではありません。キリスト教が罪人の教化に努めようとすることは、當然なことかも知れませんが、キリスト教の感化が、本當に効果を示して坂下鶴吉の場合の如く、絞首臺に上ることを天國へ行く梯子段にでも上るやうになつては、夫て刑罰の目的が達せられるてせうか。世の中に於て、多くの人間を殺し、多くの婦女を辱しめた悪人が、監獄に入ると、キリスト教の感化を受け、死の苦悶を少しも感ぜず、天國へも行く心持で、易々と死んで行つては、刑罰の効果は何處にあるのです。キリスト教にとつては、如何にも本懐の至りかも知れませんが、その男に依つて、殺され辱しめられた多くの男女、若しくは私の如き遺族の無念は何處で晴らされるのです。幸にして凡ての被害者やその遺族が悉く基督教徒である、左の頬を打れた時には右の頬を出すや

うな人や、敵を愛し得るやうな人であれば坂下鶴吉の改宗を欣び、彼の欣々然たる死刑を欣んでせうが、私の如く姉夫婦を鶏か何かのやうに慘殺され、母までをその爲に失つたものに取つては、坂下鶴吉が刑罰の効果に適當に受けることは内心の絶對な要求であります。私は國家の善良な臣民として其事を、要求する権利があると思ひます。刑罰の効果が、宗教的感化に依つて薄弱となつては堪らないと思ひます。世の中に「死ぬ者貧乏」と云ふ諺があります。坂下鶴吉の殺した人達は、私の知る限りでは、國家の良民であります。然るに被害者なり被害者の遺族なりが國家の手に依つて毫頭慰藉を受けて居ないのにも拘らず、悪人でも、坂下鶴吉の如き悪人でも生きて居る者には、宣教師との接見を許し、その改宗を奨励し、死刑の精神上に及ぼす効果を緩和してやると云ふことは甚だ不當な片手落なことだと考へずには居られません。坂下鶴吉はその告白の中に、こんな事を申して居ります。「私は今日では、有難い事には主イエスキリストの御慈愛に依りてこの身も心も共に救はれた爲に、今日の監獄生活は他の在監者が日々夜々煩悶に苦痛を重ねて、心の中では男泣きに涙を滾して居りますが、私はそれと反對に日々夜々何一つの不安をも感ぜず、喜ばるゝばかりでいます。これと申しますのも、曩に申しました通り他人様から御覽下されば、何も有せざるに似たれども凡ての物を有するのであります。そこ

で私達が造つた品物や金錢は使へば無くなりませんに依つて、限りがあります。が、神様から私は頂きました凡ての物がありますから、如何程澤山に使ひましても、それは無くなると云ふことはなく無限であります。以上申述べましたのは、私の肉體上の生死を述べたものではございません。肉體の生死と云ふことは今日では頭に置きませぬ」と、又かうも申して居ります。

「基督教信者は神様より外のものは、如何なるものにて、恐れませぬのは、私がただ口實を以て申すのではございませぬ。マタイ傳に『身を殺して魂を殺すことは能はざる者を懼るゝ勿れ』と、あります。之が確かな宣言でございませぬ。」

以上、坂下鶴吉の言葉に依りますと、彼は監獄に在つてキリスト教の信仰を得た爲に、彼の強盜時代よりも、もつと幸福に暮したやうであります。そして死刑を少しも恐れて居ないことは、「身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るゝ勿れ」と、申して居ること明かであります。若し國家の監獄が基督教の修道院でありますれば、之て結構であるかも知れませんが、監獄が國家の刑罰の機關である以上、監獄に繋ぎながら、囚人を彼等の罪惡時代よりも幸福にし、刑法を、身を殺して魂を殺し得ざるものとして「何等の威なからしめて夫て監獄の目的死刑の威力が發揮せられるてせうか。私は、よくは解りませんが、ある法學者から刑罰の目的に



就いては、相對主義と絶對主義と、二つあるのだと云ふやうな事を聞いたことがあります。キリスト教の信仰さへ得れば監獄も幸福に、死刑も懼るに足らずと云ふことになつても刑罰の目的は立派に達せられて居るのでせうか。又囚人が幸福に禁獄され欣々然として處刑されると云ふやうな心持を、典獄なる職務にある者が讚美しても差支へないものでせうか。禁獄とか死刑とか現世的な刑罰が、宗教の信仰に依つて其の効果を減茶減茶にされて居るのに拘はらず、その現世的刑罰の執行機關に長たるものが感賞の言葉を洩してもよいものでせうか。「坂下鶴吉の告白」なる本に依りますと、典獄とか検事とか云ふ連中が、坂下鶴吉の信仰を獲たことを宛も猫が鼠を取つたのを賞めるやうに、賞めそやして居ります。國家の刑罰なるものは、肉體にさへ課すれば、その囚人が心の中ではその刑罰を馬鹿にして居ようが欣んで居ようが、措いて問はないものでせうか。犯罪なるものが、被害者の肉體のみならず、精神をもどんなに困しめるかを考へたならば、囚人が刑罰の爲に肉體的にも精神的にも困しむと云ふことは、至當なことではないかと思ひます。私の如き遺族の數多くが肉親を殺された爲に悶々の苦しみに苦しんで居るにも拘はらず、その加害者が監獄の中でも幸福な生涯を送り、絞首臺上に欣然として立つたことを、典獄迄が讚美するに至つては被害者なり被害者の遺族なりは一體何う思へばよいのでせうか。

殊に、此書に「看守と巡查とに説教なる一項があります。キリスト教の立場から云へば會心のことかも知れませんが、國家の刑罰機關の役員が、刑罰の客體から、説教を受けるなどに至つては、寧ろ醜體ではありませんまいか。

坂下鶴吉が、國家の刑罰を受けて悪人に適はしい最期を遂げただらうと、想像することに依つて、僅かな慰めを受けて居た私は、此の告白を讀んで、自分の感情を散々に傷けられてしまひました。姉夫婦の恨みや、私達遺族の無念は何處に晴されて居るのでせうか。刑罰の目的に就ての學説は何うか知りませんが、私達の復讐心が、國家の刑罰機關の活動に依り、正當に適法に充たされることだと信頼して居た私達良民の期待は、全く裏切られてしまひました。私の姉夫婦を殺した人間は笑つて絞首臺の上に立つて居るので、懺悔をして居るのだ、許してやつては何うかと云ふ人があるかも知れません。私は基督教徒でありません。殊に坂下鶴吉の如き悪人を許せよなど云ふ人は、未だ自分の親愛なる人間を、強盜に依つて殺された経験のない人です。自分の肉親の姉が虚空を掴み、目を刮き舌を噛み、衣服もあらはに殺された現場を見た私に取つて、その兇惡な下手人を許すなどと云ふことは、夢にも思はれない事です。愛も仁もない劣等な人間だと云はれても平氣です。私は姉の無念が、又自分の無念が正當に晴されることを、良民の一人として國家に要求する權

利があると思ふのです。若し坂下鶴吉が、國家の手に依つてあんな安易な氣樂な死を送るのであつたならば、私は外にもつと決心があつたと思ひます。私は彼を公判廷で瞥見した時に、彼を倒さないまでも、セメて恨みの一撃を與へなかつたことを今更痛切に後悔します。

私が、此の告白を讀んだ時に、最切は「坂下鶴吉の奴め、芝居をやるのだな」と、思ひました。もうどうせ、死刑は免れないのだから、全く改心して基督教徒になつたやうな顔をして、典獄はじめ周囲の同情を得て、華々しく死刑になつたのではないかと思ひました。

此の告白に依ると、此の坂下鶴吉は、一度千葉の監獄で、善行の結果残りの刑期を免除されて放免になつたと書いてあります。而も、善行の結果、刑期を短縮された坂下鶴吉は、放免になつてから九人の人間を殺して居るのです。千葉監獄の典獄が、此の男の善行を認めなかつたならば、私の姉などは少くともまだ世の中に生きて居られた筈です。善行に依つて、残りの刑期を免除された男が、出獄後直ちに罪を犯したばかりではなく、僅か六ヶ月の間を置いて、私の姉夫婦を殺したのです。坂下鶴吉は、その夜の事を次の様に申して居ります。廿一日の夜ある家へ忍び込みて、家人を縛りまして、妻君に金を出せと脅迫いたして居りますと、主人が盜賊と大聲を發しますから、隣の人に聞えては悪いと思ひまして、

その場にあり合せたる手拭にて首を締めるのを、妻君が見て居りまして、妻君が精一杯の大聲を發して人殺しと呼びましたから、又其の場に在り合せた細帯にて遂に二人共殺してしまひました。目の前に夫が、締め殺されるのを見て居る妻君の心持は何んなに恐ろしく思はれたでせう」と、呑氣な事を書いてあります。此の犯行の後を見ますと此の男に人間らしい處が、何處にあるのです。而かも、此の男でも、監獄では善行を爲し得るのです。私は、かうした男の刑期を、監獄内の善行なるものに依つて、短縮した當局者の不明を痛嘆するのですが、然しそれはそれとして置いて、坂下鶴吉の善行がこの程度の善行であつた如く、彼の監獄内の信仰なるものも、やつぱりかうした種類の信仰ではなかつたかと思ふのです。彼が、善行遊戯をして、千葉監獄を、まんまと放免されたやうに、今度はとても免れないと思つて、信仰遊戯をして、周囲からやんやと喝采を受けながら、死んだのではないかと思ふのです。坂下鶴吉の善行なるものが、如何なるものであつたかは、直ぐ正體を現したのですが、今度は彼と一緒に天国若しくは地獄へ同伴するものがない丈に、彼のヤマは以前よりももつと成功したと思ひます。彼の信仰を、ゴマカシと見、絞首臺上で欣々然たる容子をしながらその實は差し迫る死の前に戦慄しただらうと想像することが、私のセメてもの慰めです。



が、佛教にも悪人成佛と云ふ言葉があるやうに、彼坂下鶴吉が、背負ひ切れぬ罪惡を背負つて居たことは、却つて眞の信仰を得る機縁であつたかも知れぬと思ひます。従つて、私は坂下鶴吉の信仰を、心から全然輕蔑することは出来ないのです。彼は、彼の告白する通り、本當の基督教徒となり、基督教徒の信ずるが如く神の手に迎へられて、天國へ行つたかも知れないと思ふのです。彼坂下鶴吉の信仰が本當のものだとすれば、彼自身「人の世の罪の汚れを淨めつゝ、神のみ國へ急ぐ樂しさ」と、辭世に述べてある如く、天國へ行ける積であつたと思ふのです。

基督教の教義を眞實とし、坂下鶴吉の信仰を眞實のものだとする時は、坂下鶴吉は、明かに天國へ行つて居るのに違ひありません。が、坂下鶴吉は天國へ行つたとして、彼の被害者は、何處へ行つたてせう。

私の義兄にしろ、姉にしろ、平常から何の信仰も持つて居ません。また縱令、如何なる信仰を持つて居たにしろ、咄嗟に生命を奪はれた、死際の刹那を苦悶と忿怒との思で魂を擾したものが極樂なり天國なりへ行かれようとは、思はれませんが。よくは、知りませんが、基督教では死際の懺悔を、非常に大切なものとされて居るさうですが、姉夫婦の如く虐殺されては懺悔どころか後生を願ふ心も、神を求める心も影だに射さなかつたと思ひます。殺される刹那の心は、修羅の心

です。地獄の思です。若し、基督教の教義が本當なれば、地獄の底に陥ちるより外はなかつたと思ひます。姉夫婦ばかりではありますまい。彼の爲に、殺された他の七人の人達も、その人達の信仰は兎も角、死際の苦惱の爲に天國なり、極樂なりへは、決して行かれなかつたと思ひます。然るに、彼等の生命を奪つたばかりでなく、その魂さへ地獄へ墮した筈の坂下鶴吉は、さうした罪惡を犯した事が却つて懺悔の材料となり、天國へ行けると云ふことは、少くとも私にとつては奇怪至極な理窟のやうに思はれます。まるで、坂下鶴吉に殺された者が、脚臺になつて此の悪人を――基督教徒には聖徒を天國へ昇せてやつて居るやうではありませんか。基督教徒が彼等の教旨の爲にどんな事をしようが、夫は彼等の勝手に、彼等の方には充分な理窟があるかも知れませんが、現世的な刑罰機關の長なる典獄迄が、その便宜を計り、夫を獎勵するに至つては、被害者達の魂は浮ばれやうもないではありませんか。

昔、ある伊太利人は「愚人聖職に上り、ガリレオ獄中に在り」と云つて嘆息したさうであります。若しも天國の存在が本當だとすれば、加害者天國に在り、被害者地獄に在りです。宗教の立場から云へば、現世的な法律的區別は、何うでもいゝのでせうが、國家の司法當局が、その現世的な職務を忘れ、加害者を天國に送る、事を獎勵し、讃美するに至つ

ては、私の如き被害者の遺族は、憤懣に堪へないのであります。

況んや、その信仰の告白を發表し、國家の刑罰機關の効果が、キリスト教の信仰によつて蹂躪されたことを公表し、併せて被害者の遺族の感情を傷けることを許すに至つては司法政策の上から考へても如何なるものでまいませうか。刑罰の目的は改過遷善に在り、など云ふ死刑廢止論者などは、自分の妻なり子なりを強盜にでも殺されて見れば、私の憤懣がどんなに自然であり、正當であるかを了解するだらうと思ひます。

私は此書狀を了るに當つて、はしなくも坂下鶴吉の逮捕を見ずして、娘を殺された悲しみに倒れた私の母の事を想ひ出しました。母は、死際に「あんな極惡な人間は、此世では捕まらんでも死んだら地獄へ落ちるのぢや。地獄で、ひどい目に逢ふのぢや」と申して居りましたが、母の考へなどは丸切り違つて、坂下鶴吉氏は(典獄や辯護士などはかう呼んで居る以上、どんな極惡人でも改心した以上罪人扱ひには出来ないのかも知れませんが)此世では捕まつた代りに、先きの世では天國へ行つたことになつて居ます。私は、母の愚かな期待を思ひ出す毎に、彼女の無智を憫む潛々たる涙を抑へることは出来ません。



# 神の如く弱し

雄吉は、親友の河野が、二年越の戀愛事件以來——それは失戀事件と云つてもよい程、失戀の方が主になつて居た——事々に氣が弱くてダラシがなく、未練がじめ／＼と何時迄も續いて居て、男らしい點の少しもないのが、はがゆくて堪まらなかつた。

河野の愛には報いないで、人もあらうに、河野には無二の親友であつた高田に、心を移して行つた令嬢や、又河野に對する軽い口約束を破つてまで、それを黙許した令嬢の母の8未亡人に對する河野の煮え切らない心持は、雄吉から考へれば不甲斐なき限りであつた。

雄吉が、若し河野であつたならば、斬つたり突いたりするやうな事は、自分の教養が許さないにしても、男らしい恨みをもつと端的に現はせる筈だのと思つた。それなのに河野は、ぐた／＼となつてしまつた許すはなく、令嬢の愛が自分にはないと知ると、自分の身を犠牲にして、戀の敵手と云つて

もよい高田と、自分の戀人とを、仲介しようとするやうな、自己犠牲的な行動に出ようとした。河野は、それを人道主義的な、高尚な、行動でもあるやうに思つて居た。雄吉は、さうした河野のやり方を、蔑すんだ。自分が捨てられると、今度は直ぐ、自分の戀人と、憎まねばならぬ管の戀の敵手とを、仲介しようとする、それでは至醇と思はれて居た管の河野の最初の戀までが、イカサマな贖物のやうに思はれるではないかと、雄吉は思つた。

而も、河野のさうした申出が、相手の高田から「大きなお世話だ」と云ふやうに情なく斷られると、今度は最後の逃げ道として、歸郷を計畫しながら、而も國へ歸つたかと思ふともう三日振りには、淋びしくて堪らなくて、東京へ歸つて來たのであつた。

それに、自分獨りで、グツと踏み堪へる力がなくて、毎日のやうに友人を代りばんこに尋ねて同じ愚痴を繰り返して、安價なお座りの同情で、やつと淋びしさをまぎらして居るやうな、河野の態度も、雄吉には堪らなくはがゆかつた。

それも、細木だとか雄吉など云ふ極く親しい友人が、河野の愚痴を聴き飽いて、もう新鮮な同情を與へなくなると、今度は高等學校時代の舊友や、一寸した顔馴染の人達を囚へて、河野は相變らず、同じ事を繰り返して居るやうであつた。「若し、河野があゝの失戀をグツと踏み堪へて居て、田舎で半年もぢつと黙つて居て呉れ、ば、我々はどれほど河野を尊敬したかも知れない。河野だつて、何れほど男を上げたかも知れない」と、雄吉は細木などに、よくそんな事を云つて居た。

河野の失戀は、その腐つたやうな尾を、何時迄も、引いて居た。そして、その尾は何時の間にか、放恣な出鱈目な、無檢束な生活に變つて居るのであつた。彼の生活の何處にも、手答へがなかつた。性格から、凡ての堅い骨を抜き取つてしまつたやうに何事をするにも強い意志がないやうに見えた。そして、おしまひには、今迄の親友の群を放れて、何時の間にか、遊蕩生活をさへ始めて居た。そして、自分に對する友人達の尊敬や信頼を、自分で塗り潰して居た。

その頃の雄吉は、細木や藤田などに逢ふと、定まつて河野に對する悪口を云つて居た。細木などと、久し振に會つて、三時間も四時間も、立てつゞけに喋つた後で、總勘定をして見ると、會話の三分の二までが、河野の過去や現在のだらしない行爲や生活に對する非難で持ち切つて居た。失戀當時

の弱々しい未練たつぷりの態度や、それによつての妄動や現在の彼の生活の頹廢して居ることを、掛合で喋つて居るのであつた。それに氣が付くと、雄吉は淋びしかつた。親しい友人の悪口を、蔭でさん／＼に云ひ合ふ。その事自身が、可なりいやしい厭はしい事に違ひなかつた。が、會話の途中で、つひその事に氣が付いて、

「あゝさう／＼。又河野の悪口を云つて居た」

と、お互に制し合ふ場合には、きつと其の後の話には、一時の澤山の禁句が出来たやうに、妙な窮屈さを感じた。そして、何時の間にか話しが河野の悪口に、後戻りして居るほど雄吉たちは、河野の生活に對する非難で、心が一杯につまつて居た。

雄吉は思つた。我々の親しい友達の間では、今迄蔭口などは、決して利いた事はなかつたのに河野に對してのみは、皆が平氣で少しも良心の苛責を受けずに、いくらでも悪口を話し續け得るほど、河野は友達に對する威嚴を無くしてしまつたのだと。友人に對する威嚴や、友人からの信頼を、無くしてしまふ事、それは無くする當人から云つても無くされる友達から云つても、可なりの悲劇に違ひないと思つた。

殊に、雄吉は細木などから、「何うだ。やつぱり、君が新聞小説なんかを、書かせるからいけないのだ。河野を貧乏にして置いたら今頃は困まつて居



るにしても、健全に清浄な生活を送つて居るぜ」など、云はれる度にすぐつたいやうな不快を感じた。河野が失戀に苦しむと同時に物質生活の不安に脅かされて居る時、多くの友人の抗議を排して、新聞小説を書かせたのは、雄吉であつた。河野が、細木や吉岡などの烈しい反對に逢つて、到頭書かないことを決心して、斷りの返事を、雄吉の所へ持つて來たとき、敢然として再考を求めたのは雄吉であつた。

河野と同じやうに、無資産の貧乏人である雄吉は、細木や吉岡などよりも、河野の心持はよく判つた。失戀と同時に、凡てに元氣を失つた彼には、貧乏人には付物である物質上の不安が、何時よりも猛烈に、感ぜられて居たのだ。その不安を取り去ることは、失戀に對する對症法ではなくとも、彼の心持を少しでも軽くする事に依つて、間接に幾何かは、彼の苦惱を癒するものと信じて居た。雄吉のさうした考も、一時は誤つて居ないやうに見えた。

「僕は、新聞小説をかいた事に依つて、やゝ救はれたと云つても、いゝ位だ、あの頃の友達の忠告の中では、君のが一番適切だつた」と、河野は後になつてから、雄吉に感謝の意を洩したこともある。それに對して、雄吉も内心多少の得意は感じて居た。それなのに、河野の生活が、此頃のやうに放埒になつてからは、宛もその原因が、新聞小説をかいた爲に得た比較的豊かな、物質上の自由にあるやうに解釋されて、從

つてそれを書く事を勧めた雄吉迄が、細木などから軽い非難の的になつて居た。その事も、雄吉としては、快い事ではなかつた。

その上、その頃は雄吉の知人と、同時に河野を知つて居る誰かに逢ふと、その人はきつと河野に對する報告を、聞かせて呉れた。丁度、子供が何かの悪戯をしたのを、それを監督する責任のある父兄に、告口でもするやうに、

「君！ 河野君が此間の晩にね……」とか、  
「君が。まだ知らないとは駭いたね」と云ふやうな冒頭で、河野があゝしたかうしたと云つたやうな事を、いくらか誇張したやうに、話して呉れた。どの話を聞いても、河野は決していゝ役廻りをして居なかつた。河野が人が好くて、氣の弱いのに付け込まれて、散々に利用されて居て、しかも蔭では馬鹿にされて居ると云つたやうに結論せられる話ばかりであつた。そして彼等はきつとおしまひに、

「君達から、少し忠告するといゝんだ」と、親切ごかしに、付け加へて呉れるのであつた。

雄吉も、細木や藤田などの極く親しい間丈では、河野に對する非難を、いくら繰り返しても、さう不快でもなかつたが餘り自分たちと、親しくない者から、彼に對する非難や侮蔑を聞くとやつぱり不愉快であつた。もつと、何うかして呉ればいゝと、思はずには居られなかつた。もつと、シャンと

して呉れゝばと、思はずには居られなかつた。

河野は、生活の調子を、ダラシなくしたばかりでなく、創作の方面でも、同人雑誌をやつて居た頃の向上的な理想などは、悉く振り捨てゝしまつて、婦人雑誌の中でも一番下品な雑誌へ續き物を、書く約束などを始めて居た。藤田などは、それを知ると目を丸くして、駭きかつ悔いた。

「僕は、河野が放蕩を始めたからと云つて、それを彼は云はうとは思はない。いくら、遊蕩してもいゝが、創作の方面でもつと眞剣であつて呉れゝば文句はないのだ。また創作の方面を投げやりするのなら、もつと實生活の方でシツカリした眞面目な生活を送つて呉れゝばいゝんだ。河野は、生活も創作も兩方とも、投げやりして居るから、救はれないと思ふんだ。どんなに放蕩してもいゝ。いゝ物を書いてさへ呉れゝば、僕達はグウの音も出さないんだ」と、雄吉は細木に云つたことがある。

河野の生活が、だん／＼その調子を狂はしてからは、雄吉たちとの交際も、だん／＼疎遠になつて來た。夕方の五時から、どんな所用があつて、尋ねて行つても、在宅して居ることは、殆どなかつた。

「河野の所へは、何時行つても居ない」と、雄吉たちは口々に云ひ合つた。家に居ないことまでが、何も河野に、道徳的責任がある譯でもないのだが、幾度も重つて居る中には、さ

う云ふ事からしても、妙な感情上のコチレが出来かけて居た。

其中に、河野は雄吉などの連中とは、全く違つた遊び友達を、作つて居た。

「君達は、酒が飲めないから、駄目だよ。僕にはやつぱり、飲み友達と云つたやうなものが必要だよ」と、河野はよくそれを辯護した。又、人が好くて、我を出さないで、殊に酔ふと、益々無邪氣になる河野は、誰にでも友達として、直ぐ受け容れられて行くのであつた。

「あの連中との交際は、第二義第三義の交際だよ。君達がやつぱり第一義だよ」と、河野はそんな事を云つた事もある。が、然しさうは云ふものゝ、河野がだん／＼今迄の友達と放れ、新しい——同時に交際の興味も新しい——友達に、親しみかけて居るのは事實だつた。相對する高臺と高臺とに、住んで居ながら、河野は雄吉を尋ねて來ることなどは、殆どなかつた。何時行つても不在なので、雄吉の方から、訪問する氣も起らなかつた。

今年になつてから、仲間中丈で、組織して居る會で、雄吉達は久し振に河野に會つた。河野の生活に對する非難が銘々の心の中で、白熱して居た。河野は、入つて來た時から、險惡な空氣に包まれて居た。細木と藤田とは、つひ妙な話の機みから、河野に對する平生の非難を、口に出してしまつた。



それは、蔭で云つて居る河野の悪口のホンの餘沫が出たのに過ぎなかつた。それでも、河野には可なりの致命傷であつたらしかつた。雄吉は、蔭では河野の悪口を眞先に云つて居る癖に、いざと云ふ場合になると、一口も云へなかつたことが耻しかつた。誰に對してもいゝ子だと思はれたいと云ふやうな、利己的な心持から、黙つて居たのではないかと、自分でも耻しかつた。やつぱり、細木や藤田などの方が、あゝした直言をするほど、自分などよりも、河野に對して、熱誠を持つて居るのだ。何も云はないで、黙つて居た自分が、河野に對して、一番冷淡なのではないかと思つた。

が兎に角、偶然の機みから、少しは場所柄がよくなかつたにしろ、河野に對する苦言が與へられたことを、欣ばずには居られなかつた。

あれで、少しでも河野の生活が、引きしまつて呉れ、ばいと思つた。が、さう思つたのは、雄吉の空しい望であつたことが、直ぐ判つた。

河野は、細木や藤田などの忠告を「友達が悪い」と云ふやうに、うすつべらに解釋して新しい友達の今井などに云つたので、今井などが細木や藤田などに對して、悪意を持つやうになつたと云ふ事實を、雄吉は新聞のゴシップで知つた。それを知つた時に、雄吉は河野に對する最後の愛想を盡かさず

には居られなかつた。

細木や藤田などの、河野の生活の根柢そのものに觸れた非難を、小學校の生徒同志の忠告か何かのやうに、誰それさんと遊ぶな」と云ふやうに解釋して、しかもその誰それさんに直ぐ云ひ付けに行く態度を、憤慨せずには居られなかつた。

交友が悪いと云ふやうな忠告は、小學生少くとも中學生、大負けに負けて、高等學校の生徒迄位に對してのみ、與へられるべきものだ。もう三十にも近く、創作でもしようと思ふ人間に、友達の善惡などが問題になるものかと思つた。みんな自分自身の問題ではないか。自分の生活の心臓に、指し向けられた非難を、正當に受け入れる勇氣がなくて、それを罪も報もない遊び友達に指し向けようとす河野の男らしくない弱者の態度を、雄吉は賤しきには居られなかつた。こんな事は、自分自身の腹の中で、グツと堪へて居ることではなからうか、それを自分一人では辛抱が、しきれなくて、遊び友達を非難の渦中に、捲き込んで、彼等に纏り付くことに依つて、細木などの忠告から受くる淋びしさや苦悶を、免れようとして居るらしい河野の弱さを、雄吉は賤しきには居られなかつた。それと同時に、用でもなく、満更知らない仲でもない今井など、細木や藤田などの間柄を、傷けるやうな河野のやり方を、雄吉は心の中で可なり烈しく非難した。細木などの苦言を受けて、全く情氣で居た河野には同情し

た雄吉も、かうなつては少しの好意も残つて居なかつた。彼のやり方を詰責する手紙を送つてやらう。その爲に河野との友情が害はれても仕方がない。何うせ、こんな調子で、推移して行けば、早かれ遅かれ、おしまひには破れてしまふのだからと思つた。

が、雄吉がさうした手紙を書かうと思つて居た時であつた雄吉は、河野から、こんなハガキを受け取つた。

〇〇座の一行と川越に來て居る。今日一座の者と一緒に町廻りをした。ふと、振り返つて見ると、僕の乗つて居る車にも、河野秀一と云ふ旗が立つて居るのには駭いた。

と、云ふ簡単な文句が、書いてあつた。雄吉は、之を見た時、河野らしい反抗だな」と思つた。

「君達が、忠告すればするほど、ダラシなくなつてやるのだ田舎で役者と一緒に町廻りなどをすれば、君達は又鹿爪らしく非難する事だらうよ」と云つたやうな河野の棄鉢的な反抗が、マザ／＼と見え透いて居るやうに思はれた。雄吉は、河野の氣持が、こんなにかぢれてしまつて居る以上、詰問などをしてしても、甲斐がないことだと思つた。その儘に思ひ止まることにしてしまつた。それに、河野は川越から歸ると、又直ぐ大阪の方へ遊びに行つて、其處から又「俺は大に遊んで居るよ」と、云ふやうなハガキをよこした。それで、大阪から歸る汽車の中で、風邪を引いたにも拘はらず、帝劇の初日に可なり

の發熱を感じながら、見に來て居たと云ふやうな噂を、其後誰からともなく、雄吉は聴いて居た。

「あの人は、あゝした賑やかな場所へ來ることが、何よりも好きらしいな。この頃は、自分の家などには、淋びしくて居たまらないらしいのだよ。この間の初日なども、河野君にとつては、別に顔出しをしなければならぬ譯はないのだがそれでも顔を出さずには居られないんだね」と、その男は附け足をした。

x x x x

かうした心持で居たから、雄吉は雄吉達の友達である鳥井の結婚式があると云ふ日の午前に、河野から、

「流行性感冒にかゝり、昨夜以來、發熱四十度、今日の鳥井の結婚式には、とても出られない。鳥井によろしく云つて呉れ。」

と云ふ速達のはがき——それも誰かの代筆らしいのを、受け取つた時、友人の急な重態に駭くのと同時に、心の底の何處かで「いゝ氣味だ」と、云ふやうな氣がするのを、何うしても打ち消すことが出来なかつた。自分達の河野の生活に對する非難が、かうした偶然の出來事に依つて、代辯されたやうにさへ思つた。無論、河野の放恣な出鱈目な無檢束な、生活が、直接には發病の因を、成しては居なかつたらう。が、雄



吉は若し河野が、一月ほど前に、細木や藤田などが與へた苦言を幾らかでも聴いて、もつと慎ましい秩序のある生活をして居たならば、かうした危険な病勢などを、未然に防ぎ得ただらうと思はずには居られなかつた。

「あの忠告は、本當に時宜的忠告だつた。今度のことて、少しは思ひ知るがいゝ」と雄吉は思つて居た。

## 二

お互の感情が、どんなに荒さんで居たとしても、それは、河野が壯健で跳ね廻つて居る時のことて、生命の危険さへ伴つて居る病氣になつては、見舞に行かないと云ふ譯には行かなかつた。

鳥井の結婚式が済むと、雄吉は細木と連立つて、下谷の河野の家を尋ねた。

取次に出た河野と同じやうに、人の好いお母さんの眞蒼な顔には、脊負ひ切れぬ心配が、満ちわたつて居た。二三日櫛を入れならしい髪のはつれ毛が、一層この年とつた母親をいたましく見せて居た。子供の危い生命を、全身で纏りついでども、取り止めようとするやうな此の母親の姿を見ると、雄吉は悲哀と敬虔な尊敬とが、交じつて居るやうな心持で、いたゞしく見詰めずには居られなかつた。

「ほんとうに、何うなる事かと心配して居ます。熱が昨日か

ら、ちつとも下らないので御座います。それに、秀一は常から心臓が、わるいので御座いますから、本當に何うなる事かと心配して居ます」

お母さんの低い聲は、低いながらに、小さく顫へて居るやうにさへ思はれた。

「何方様も、支關てお断りして居るのですが、秀一に訊いて見ますから」

さう云つて奥には入つた、お母さんは座敷に寝て居る河野に訊いて居るらしかつた。

痰がからんだやうな河野の低い聲が、かすかに聞えた。再び、顔を出したお母さんは、

「お目にかゝりたいと申して居ります」さう云つて、雄吉たちを、病室へ案内して呉れた。

雄吉は、河野には、一月も逢つて居なかつた。が、健康であれば、少しも變つて居ない筈の河野が、殆ど別人のやうな蒼ざめた顔をして、氷嚢を頭に載せたまゝ、死人のやうに床の上に横はつて居た。

「あゝ死相が現はれて居る」雄吉は、心の中でさう思つた。

いつも、赤みが、つて居る河野の顔には、あの臨終の人にあるがちな黒い陰翳を持つた青みが、塗り付けたやうに、漲つて居た。唇は紫色にかはつて居た。河野が、いつか、俺の眼は澄み切つて居るだらう」と自慢して居た昨丈が、明るい電

燈の光のもとに、ますゞ澄み切つて居るやうに思はれた。その顔は、河野の半生には、夢にも見られないやうな清浄さと、けだかさとを供へて居た。雄吉と細木との顔を、上目を使つて、チロリと見た河野は、

「ありがたう」と、口の裡で微かに云つて、何か云ひ續けようとしたが、咽喉へからんで居る痰の爲だらう、苦しさを咽喉元を、顫はしたまゝ、何も云はなかつた。

雄吉も細木も、病氣見舞と云つたやうな、ありふれた御座なりを、友達が瀕死の場合に云ふのは、如何にも空々しく見えるので、何も云はないで黙つて居た。

が、常でない河野の、神々しいと云つてもいゝやうな顔を見て居ると、河野の過去一年の凡ての行爲が、今度の病氣に依つて、スツカリ淨化されたやうに思はれて、河野に對して懐いて居た感情のこぢれを、悉く忘れはてようとして居た。十年に近い間、いろ／＼さま／＼な生活を、一緒にして来た友達に對する、純な感情がしみ／＼と、蘇つて来るやうに思つた。

雄吉は、その晩自分の家へ歸る道で、この瀕死の友達のため、出来る丈の事をしてやらねばならないと思つた。

河野が、病氣になつたに就いて、一番困まつて居ることはやはり金ではないかと思つた。新聞小説を書いて得た収入は入るに従つて散じてしまつたやうだし、その小説を出版して

得る印税は、前借までして使つて居たし、その上、河野は最近になつてから、急に身の廻りの物を、整へ初めて、身分不相應ではないかと思はれるほど、立派な洋服と外套とを、新調して居たし、雄吉の考では、借金こそあれ、餘分の金は一文もないやうにさへ思はれた。殊に、河野が倒れて居る以上月末には入る原稿料などは、一文もは入つて来る筈はないのである。

雄吉は、友達同志で醸金して、せめて百圓か二百圓かの纏つた金を、河野の爲に蒐めてやらうと思つた。が、實際その積で、蒐めかけて見ると、雄吉ほど氣乗りのしない友達を見出したり、友達の中に河野同様悪性感冒にかゝる人が出来たりして、思つたほど手軽に纏りさうもなかつた。

それで、到頭その方は思ひ切つて、先輩や友達仲間の傑作選集を出版して、その印税を河野に贈ることにした。その方法は、誰にも大した迷惑をかけることなくして、纏つた金を作り得る簡易な方法であつた。自分の古い作品の中から、著作集にも入れてしまつたものゝ中から、選集のために、一篇を割くと云ふことは、作家に取つては、たゞ一寸した好意丈で、出来る事だつたから。

河野の病氣は、危篤と云つても、いゝ位な重態のまゝで、四五日の間持ち合つて居た。醫者は、弱い心臓を保護するため、あらゆる手段を盡くして居るらしかつた。



さうした危険な河野の重態を、憂慮しながらも、雄吉は細木と相談して、選集を出す計畫を進めて居た。この選集で得られる印税が、河野に對する香奠になるのではあるまいかと思ふほど、河野の病状は險悪であつた。

丁度、その頃であつた。

雄吉は、ある日突然吉岡の訪問を受けた。吉岡は河野とは可なり親しかつたが、雄吉とはまだ友達とは云はれない位な知合であつた。お互に訪問したり、訪問せられたりする程の親しい間柄ではなかつた。

従つて、雄吉は此場合、吉岡の訪問を、一寸意外に思はずには居られなかつた。

「いや！一寸失禮するよ。一寸君に相談する事があつてね」と吉岡は出迎へた雄吉にさう断りながら、二階に通つた。

吉岡は、座に着くと、ロク／＼落着きもしない裡に、「いや、實は外から一寸、聴いたのだがね。河野君が、病氣のために金に困まつて居るらしいので、君たちが河野君のために金を蒐めて居ると云ふやうな事を聴いたが、本當かね」と、やゝ性急だと思はれる位口早に訊いた。

雄吉は、吉岡が何のためにそんな事を、訊くのだから分らなかつたが、多分吉岡自身應分の金を出して呉れるだらうと思つたので、

「蒐めようと云ふ計畫もあるのだが……」と、答へた。

吉岡は、一寸云ひ出しにくさうにして居たが、

「話が可なり突然になるのだが、實はS家でね、若し河野君が金に困まつて居るのなら、療養費は幾らでも出さうと云ふのだがね。實はそれで、先刻河野君の家へ行つてそれとなく様子を視たのだが、人事不省同様で誰にも會はせられないと云ふから歸つて來たのだ。それで、君が一番適任者だと思つたから、相談に來たのだが、一體何うしたものだらう」と、吉岡は持前の、明快な口調で、早口に云つた。

雄吉は吉岡の云ふことを、何氣なく聴いて居る中に、それが思ひがけなくも、可なり重大な問題であるのに、氣が付いて、緊張せずには居られなかつた。

雄吉は、河野の代理として、かうした惠與を、受くるべきか、斥くべきかの判断をする、重大な責任を感じた。

表面丈から云へば、S家は河野の愛に背き去つた戀人の家ではあるにしろ、二年前に死んだ主人と河野とは、先づ師弟と云つてもよい間柄であつたのだから、S家で河野の急場を救ふと云ふことは、さう大して筋違ひのやうではなかつた。が、然し——問題はさう簡單でなかつた。

河野とS家とは、お互に義絶の通知をこそしないけれど、今では可なり烈しい確執を懷き合つて居る間柄だつた。河野は未亡人の約束の破棄を恨んだやうな、それに報ゆるやうな意圖を藏して居る作品を、昨年以來幾つも發表して居た。

さうした不和な間柄でありながら、河野の大病を聞き知つて、金を出さうと云ふ、それは今迄の行きがかりを悉く忘れて、河野が作品の中で、示した反抗的な復讐的な態度を、少しも意に介さないで、敵を愛すと云つたやうな、恩を以て怨に報ゆると云つたやうな、美しい醇な心の發露であるかも知れなかつた。が、然し——と雄吉は思つた。善意に解釋すれば、如何にも美しい事には違ひないが、ホンの少しの邪推を交へて考へると、それが全くアベコベに考へられないことはなかつた。今迄、自分に双方向つて來た敵が、窮狀に落ちて居るのを、見済まして、のつびきならぬ救助を與へて、敵の今後の反抗をいや應なしに、封じてしまふと云ふ、卑怯な邪しまな意圖が働いて居ると、考へ僻められないことはなかつた。

雄吉は、無論S家の動機が、凡ての行きがかりを捨てた純な厚意から、出て來るのだと信じたかつた。が、然しその動機は、善悪孰れにもせよ、あゝした確執を結んで居る間柄でありながら、相手が如何に大病で死にかゝつて居るにもせよ、如何に金に困まつて居るにもせよ、金を與らうかなどと云ふ申出は、それがどんなに至醇な動機からであらうとも、相手に對する可なり重大な侮辱を、意味して居ないだらうか。お互に憎んで戰つて居る相手から、さうした申出を示された時、少しでも氣概のある男であつたら、オメ／＼と受けるだらう

か。若し雄吉が河野であつたならば、さうした救助の手を、憤然として拂ひ除けるに、躊躇しないと思つた。拂ひ除けるばかりでなく、相手のさうした侮辱に對し、相當な復讐をさへ企圖するかも知れぬと思つた。

吉岡は、雄吉が黙つたまゝ考へて居るのを見ると、説明をするやうに語を次いだ。

「僕は、河野君にそれとなく話して見ようと思つたのだが、何にしろ人事不省に近いことだし、そんな話をして激動を與へては悪いと思つたから、黙つて歸つて來たのだ。何なら、河野君に對しては、S家の名は云はなくもいゝのだ。ある特志家が河野の窮狀に同情して、金を出すと云ふ名義でいゝのだが、何うだらう」と、吉岡は雄吉の返事を促した。

雄吉は決心して云つた。

「僕は不賛成だね。S家の厚意は感謝するよ。そして、その心持も判らないことはないがね。が、然し角に兎、あゝした關係になつて居るだらう。まあ、義絶と云つてもいゝだらう。若し、さうした救助を受けて置いて、もし人事不省で居る河野が恢復して、俺はS家の厚意なんか死んでも受けるのぢやなかつたと云つたら、取り返しが付かないことになると思ふのだ。又、河野としては、當然さうなければならぬと、僕は信ずるのだ。従つて、彼奴が生きて居る裡は、さうした金は、お断りしたいと思ふね。然し、死ねば別だよ。あゝ云ふ重態



だから死ぬかも知れぬと思ふが、死んだ時香奠として下さるのなら、僕は河野の代りに、欣んで受けようと思ふのだ。死ねば、あゝ云ふ行きがかりも消えてしまふ事だし、あのお母さんをよくして上げるのには、少しでも金が澤山あつた方がいいと思ふから……」と、雄吉は實際河野の死んだ場合を豫想しながら云つた。

「が、然し生きて居る中は、お断りしたいね。河野が貰ふと云つても、僕は忠告して止めさせたい位だ。まして、僕が、人事不省で居る河野の代りに、貰つてもいゝとは何うしても云はれないね」と、雄吉は可なり真剣になつて云つた。そして、瀕死の親友のために、立派に正當に、代理を務めてやつて居るのだと云ふ感激をさへ、感じて居たのであつた。

「それに、萬策が盡きてしまつて、金の出所が少しもないと云ふのなら、兎も角だが、河野が金に困まつて居るだらうと云ふ事も、僕達の老婆心から出た推測で、河野が自身で金に困ると云つた譯ぢやないんだ。もし又困まつて居たにした所が、友人もあることだし、親類もある事だし、S家の世話などになる前には、僕達で出来る丈の事をしてやるのが、當然ではないかと思つて居るのだが」と、雄吉は云ひつゞけた。

吉岡は、雄吉の謝絶を、あまり感情を害さないで、割合平靜に聴いて居たが、

「あゝさうかい、いや！ よく判つたよ。僕も最初から何う

かと思つて居たのだが」と、穩やかに受け入れた。

雄吉は、此事を病床に居る河野に、聴かせたら、きつと憤慨するに違ひない、此方の弱身に付け込んで、侮辱的恩恵を施さうとするのだと云つて、S家の態度を憤慨するに違ひないと思つた。そして、雄吉が河野の代りに、敢然として、此の申出を謝絶したことを必ず感謝するに違ひないと思つて居た。

「それで、君達で金を蒐めようとして居るのかい」と、吉岡は暫くしてから、訊いた。

「いや、金を蒐めようと思つて居たのだが、金だと十圓にしろ二十圓にしろ、一寸苦痛を感じる人もあるだらうから、僕達の仲間の傑作選集と云つたやうなものを、出さうと思つて居るのだ。それなら、誰にも迷惑をかけないで、済む事だから」

「そりや名案だね」と、吉岡は可なり感心したやうに云つた。

「金なんか貰つたり、やつたりして居ると、後々喧嘩なんかした時に、お互に不快だからね。選集はいゝよ、それに君達のものなら引き受ける本屋はあるだらう」と、續けた。

雄吉は、吉岡が不用意の裡に犯して居る自家撞着に、氣が付かずには居られなかつた。それと同時にそれに依つて自分の取つた態度を、更に肯定されたやうに思つた。吉岡は、將來萬一起るかも知れない不和の場合を恐れて、友人間の金の

惠贈を、避けたいと云ふのだ。所が、河野とS家との不和は、ホンの僅かな可能をしか、持つて居ない將來の事ではなくして、嚴として眼前に横はつて居る事實なのだ。將來の萬一の不和を怖れて、金の惠贈を避けると云ふのなら、その何百何千倍の強さを以て現在の不和のために、金の惠贈を避けるべき筈ではないかと思つた。

憎んで居る相手から、金を受けると云ふことは、恩恵や厚意を受くることではなく、一つの侮辱を受くることではないかと、雄吉は思つた。

吉岡も本心では、此の申出の不合理に、氣が付いて居るのだが、S家に對する義理の爲に、仕方なく行動して居るのだと思つた。

さう思ふと雄吉は、瀕死の友人のために、萬人が認めて正當とする、處置を取つたのだと云ふ確信と、それから来る満足とを持たずには居られなかつた。

X X X X

その中に、河野はだん／＼恢復して行つた。最初恐れられて居た心臓の弱さも、杞憂であつたことが判つた。豫後は、随分長くかゝつた。それでも、發病してから、三月目の初には、もう常人と變化しないほどの健康に、近づきかゝつて居た。

その間雄吉は、吉岡から聴いた話を、河野に傳へなかつた。河野に云へば、きつと不愉快を感じるだらう、病氣のために可なり氣を腐らせて居る時に、話してはならない、病床にある間は黙つて居ようと思つて居た。

が、兎に角、河野の代理にやつたことだから、一應は河野に話して、その事後承諾を得なければならぬと思つて居た。

同時に河野からの感謝を得たいといふ心持もあつた。

ある晩、河野は珍らしく雄吉の家を尋ねて來た。もう夏之初であるのに、まだ外套を着て居た。

「夜外出して見たのは、今日が初てなのだ。もう大抵大丈夫だと思つたから、試験的に君の家まで来て見たのだ」と云つた。

もう全くの健康だつた。少し位いやなことを聴いても、ビクともしないやうな感情と身體とを、取り返して居るやうに思はれた。雄吉はもう話してもいゝと思つた。

世間話が一寸途切れた時に、雄吉は心持言葉を改めながら、

「君、今だから話すがね。君が人事不省だつた二月の二十日頃の事さ。吉岡が僕の家へ突然やつて來てね、何の事だらうと思ふとね、S家で君が金に困まつて居るやうなら、いくらでも出さうと云ふのだ——」かう云ひながら、雄吉は河野の顔を見た。河野は、顔を赤くしながら、可なり緊張した顔付で、雄吉の顔をぢつと見詰めて居た。



「無論、僕は断つたよ。君の代りに敢然として断つたよ。僕は、可なり君を侮辱して居ることだと思ふのだ。下品な言葉で云へば、金で面をはると、云つたやうなやり方ぢやないかね。さう此方で思はれないこともないからね……」と、雄吉は河野の憤慨を喰ふやうに、自分自身興奮してしまつた。

「僕は、少し怪しからんことだと思つたんだ。よくもそんな事を云つて来られると思つたんだ。今更、そんなことを云つて来られる義理ぢやないんだらう」と、云ひながら雄吉は、河野がきつと烈しい憤慨を洩らすだらうと待つて居た。

が、河野は雄吉の豫期とは、全く違つて居た。彼は、顔を一層赤くしながら、俯き加減に、ぢつと疊の上を、見詰めて居たやうだつたが、その眸は濕んで居るやうにさへ、雄吉には思はれた、暫くすると、やつと、顔を擧げたかと思ふと、「君はさう憤慨するけれども、先方はさう悪意でやつた事ぢやないよ」と、云つた。道に、自分自身の弱さを恥ぢるやうであつた。が、その顔には、ある感激をさへ認めた。

雄吉は、自分が壁だと思つて突き當つて行つたものが、ヘナヘナと崩れてしまつたやうな拍子抜けを感じて、暫くは茫然として河野の顔を見詰めて居た。そして心の裡には急に方角を見失つた男のやうに、ボンヤリとしてしまつた。

雄吉が、若し河野であつたならば、どんなに憤慨したかも知れないやうな侮辱を、河野は憤慨どころか、ある感激を以

て、受け入れて居る。河野自身が「怪しからぬ事だ」と云つて、憤慨するところを、第三者の雄吉が、マア〜と云つて和めるべき筈のものが、丸切りその反對になつて居る。雄吉から考へれば、可なり重大な侮辱だと思ふことを、河野はさうは思はない。相手の行爲に潜んで居るかも知れない悪意などは、全く無視してしまつて、善意だけを出来る丈汲まうとする。あれほどB家に對し恨みを懷いて居るやうな事を云ひながら一寸S家から好意——それも、あつた關係に於ては侮辱と思はれる——を示されると、平生の意地も恨みも忘れて、先方の好意丈感ずる。何と云ふ意氣地なだらうと思つた。何と云ふ弱さだらうと思つた。が、雄吉は之迄の河野の弱さは、大抵輕蔑したり、冷笑したりして来た。が、弱さがかうまで、徹底して人間ばなれのした、人間の普通の感情では、律せられない所まで、行つて居ると、頭から輕蔑することは出来なかつた。河野の徹底した弱さ、人から蹂躪されたながらもまだ蹂躪にじる足の中から、何かの好意を、見出さうといふやうな心持は、弱さが徹底して無邊際の際と云ふ所まで行つて居るのではないかと思つた。従つて、河野は人間として雄吉のやうな、普通の感情や道徳で、行動して居るものよりは、數段かけはなれた高い所に居るのではないかとさへ思つた。さう思ふと、雄吉の感情で、河野の弱さを、メチャクチャに冷笑して居た自分が、不安にならずには居られ

なかつた。それと同時に、河野の限のない弱さに對して、尊敬に似たある心持を懷かすには居られなかつた。

雄吉は、豫期した通に、河野から承認や感謝を、得られなかつたことに、軽い失望を感じながらも、自分の前に、ぢつと俯向いて居る河野の顔を——十年近くも見馴れて居る顔を、別人を見るやうな目新しい心持で、暫くは見詰めて居た。そして心の裡で「神の如き弱さ」と云ふ言葉を、何時の間にか思ひ浮べて居た。



死床の願ひ

私は、つい今年の初めに死んだ私の妹のために、此一篇をかいたのです。物心ついでから死ぬ迄世の中の太陽の當らぬ片隅に、蒼白な顔をして坐り續けて居たやうな、あはれな處女——と云つても、もう二十七にもなつて居たのですが——のために、此世の中で女らしい営みは、何一つしなかつた彼女のために、彼が短い一生の間、虐げられた小さい弱い心の影を、茲にかきつけて置かうと思ふのです。いぢけたまゝに、萎び朽ちてしまつた女らしい心のために、茲に慣ましやかな紙碑を建て、やらうと思ふのです。

優しい女らしい慣ましい心を持ちながら、それを戀人に向つて注ぎかけることも出来ず、またそれを以て可愛い子供達を育くむことの出来なかつた——女としての愛も母としての愛も、二つとも持ち得ずして、短い一生を終つた女性には、幾人もあることとせう。私はそれらの多くの薄命な女性の一々にも、一掬の涙を惜しむものではないと云へません。が、然しさうした人々の生涯には、彼等の短命を悲しむと共に、白百合の花に見るやうな、神々しい清々しさを感ぜずには居られませ

ん。童貞のままに、世を去つて行くこと、性と性との交渉から起る人間の世の諸悪を少しも見もせず、知りもせずして、處女のまゝに死んで行くこと、それはその死床を圍む親兄弟姉妹に取つては、悲しいことには相違ないとしても、又そこに精神的な清浄さのあることを感ぜずには居られません。

私の妹は處女のまゝで死んだのです。もし、たゞ事が、それ丈で止まつて居るのなら、私の悲しみも世間普通の兄が、その早世の妹に對して、感ずるのと、同じ程度の悲しみで終つたてせう。私が小説家を職業として居るからと云つて、別に妹の生涯を取り立て、考へて見るやうなことは、しなかつたと思ひます。が、妹の場合は少し違ふのです。

私の妹は處女で死んだと申しました。が、夫は嫁ぐべき年齢に達して居なかつたとか、恰好の相手がないために、つひつひ結婚が、延び／＼になつて居たために、處女のまゝで、死んだと云ふのではないのです。恐らく妹は此先五年十年生き永らへて居たとしても、やつぱり處女のまゝで死んだらうと思ひます。彼女は、生れながらにして、處女のまゝで死ぬ

べき運命を持つて居たのです。運命と云つても、それは不可抗的なものでなく、半分は外面的でありましたが、半分は彼女の性格の中に内在して居たとも云へるのです。もし、妹のやうな境遇に生れた女でも、彼女ほどの羞恥と彼女ほどの傷つき易い感受性とを、持つて居なかつたら、恐らく容易に結婚して妹よりも、もつと幸福な生涯を送り得たに違ひありません。

妹が結婚し得なかつたのは、肉體上の缺點のためですが、それかと云つて、手が一本ないの、足が一本ないと云ふのではありません。手の指も足の指も、人並秀れてしなやかに完全に發達して居ました。その他目鼻立や四肢の均齊などに何一つ不足な所はありませんでした。妹の悲しみは、彼女の一生を暗灰色に塗り潰してしまつた不幸は、彼女に何か不足して居る爲ではありませんでした。逆に、彼女の不幸は餘分な物があることとす。無くてよいものがあつたことです。妹の肉體上の缺點をかき立てる兄の悲しみをお察し下さい。色白の、兄のひいき眼では十人並秀れて居ると思はれる妹の顔が、丁度そのほつそりとした頸筋に續かうとする堺目に、普通の人間には見られない一つの隆起物がありました。ありふれた言葉で云へば、一つの瘤があつたのです。私はそのことを今申し上げるに當つても、胸がふさがるやうに思ひます。その瘤は、醜いと云ふほど、そんなに大きいものではありません。

せんでした。が、その小さい肉の塊が妹の半生を粉砕し、彼女の傷つき易い心を、さん／＼に蹂にちり、少女らしい華やかな浮揚的な心持を、悉く奪つてしまつて、彼女に人生の痛苦をしみ／＼と味はせたのです。

私の妹のために、醜い瘤を持つた妙齡の少女を想像して見て下さい。そして彼女が、どんな事を考へどんなことを感じたであらうかを、想像して見て下さい。

でも、彼女も十一二になる迄は、普通の少女と同じやうに幸福であつたやうに思ひます。妹と四つ違ひの私も、その頃は妹の頸にある小さい肉の塊が、妹の生涯にどんな陰影を投ぐるかを知りませんでした。無論、頭はない當人が夢にも知らう筈はありません。

私は妹といさかひをすると、よく「瘤チン！ 瘤チン！」と云つて擲擲つて居ました。すると妹は負けぬ氣で、

「大頭の兄さん！ 大頭の兄さん！」と云つて擲擲ひ返して居ました。私は、大頭と云はれるのが、大變嫌でありましたから、さう云はれると、飛びかゝつて行つて、

「何だ、此の瘤チンめ」と云つて妹のその小さい隆起物を、掴み上げたりしました。その頃の私は妹の頸の瘤も、私の大頭と同じ程度の肉體上の缺陷だと、思つて居たのです。が、二年経ち三年経ち、私の體軀がだん／＼大きくなり、私の頭



の大きいことなどは少しも目立たなくなつたのと反比例に、妹の瘤はだん／＼目に立つやうになつて來ました。その上、その瘤が、妹の心の上に投げる陰が、周囲の者にもだん／＼感ぜられるやうになつて來ました。尋常小學の四年頃までは、快活な、どちらかと云へば、お轉婆であつた妹は、高等小學(舊制度ですが)の一年頃からは妙に口數の少い淋しい少女になつてしまひました。私は、此の急激な妹の性格上の變化の、標的となつて居るやうな事柄を、かすかに覚えて居ます。それは、私が中學には入つた年の秋の終だつたと思ひますが、學校から歸つたが、いつもは母の前に坐つて、その日の教室で起つた事件を、こま／＼と報告する筈なのに、その日に限つて、彼女の居間に當てられて居た茶室の三疊には入つたまま、夕飯の時迄出て來ないのです。いつもは、

「お母さん、御飯まだ？」など、云つて、母をうるさがるせる彼女が、その日に限つて、私などが茶碗の音をさせながら膳に附いた後も出て來ないのです。

母は、妹の名を二三度呼んで見ました。が、何とも返事をしないのです。母は自烈つたがつて、

「お前！ 見ておいで！」と、私に云ひました。

私は、茶の間から縁側つゞきに、奥庭の方へでも行つたのではないかと思つたので、妹の名を聲高く呼びながら、直ぐ奥庭の方へ行かうと思ひましたが、念のためと思ひました

から、一寸三疊の間をのぞいて見ました。五時頃でしたが、晩秋の頃ですから、部屋の中は、もう薄暗くなつてしまつて居るのです。

「静坊！」と、呼んで見たが、返事がありません。が、薄暗の中を暫く見詰めて居ると、小さい一閑張の机に、身體を投げかけたやうに靠れたまゝ、ちつと動かずに居る妹の姿を見付けました。

「おい！ 静坊！ 御飯だよ。何をして居るんだい、そこで！」と、呼びかけましたが、それでもまだ動かうとはしないのです。私は不思議に思つて、ツカ／＼と傍へ寄つて、

「おい！」と、云ひながら、妹の上半身を引き起しました。が、私が手を放すと、死んだやうにまたグタ／＼と、崩れてしまひました。その時、私は妹のすゝりなきの聲に氣が付いたのでした。妹は學校から歸つて來ると、その部屋へは入つたまゝ、二時間も泣き續けて居たのです。まだ、十二三の少女が、母親にも訴へずして、たゞ一人泣きつゞけて居たその時の妹の心を思ふと、私は今でも涙が、直ぐ湧いて來るのを感じますが、その時は腕白盛りの少年でしたから、そんな同情はある筈なく、

「お母さん！ 静坊は泣いて居ますよ」と、立ち歸つて、母に報告すると、その儘喰べかけの御飯を喰べました。母は、私の言葉に駭いて、

「何うしたのだらう？」と、云ひながら茶の間へ行きました。母が、何かしきりにクド／＼と云ひながら、妹を皆が御飯を喰べて居る臺所の所へ連れて來ました。

その頃、まだ生きて居ました父や祖母は、

「お静坊何故泣くの？」など、慰め顔に聴きました。が、妹は母の手を、スルリと抜けると、向ふの壁にくつゝいたましましく／＼と泣き續けて居るのです。誰が、何と云つても返事をしないのです。皆が、慰め顔に何か云へば云ふほど、泣き募つて行くばかりでした。

「何うしたの、學校で何かあつたのかい！ お前先生に叱られたのぢやないの？」と、母は訊いて見ました。が、そんな事があらう筈はありませんでした。妹は尋常の一年以來、優等で善行賞を貰ひつゞけて居たのです。妹は首を横に振りませんでした。

「ぢや、お友達と喧嘩をしたのかい」と、父が訊きました。妹は暫くしてから、首を横に振りしました。

「ぢや、何うしたの、何か恥かしい事があつたのかい？」と、母が訊きました。さう云つて訊いて居る母の顔に、暗い影が浮んで居るのに、私はふと氣が付ききました。

妹は、じつとして居りました。

「何か恥かしい事があつたのかい」と、母が繰り返して訊きました。妹は、ちつとして居りました。が、しかし妹が母の間

を肯定して居ることが、明かに判りました。

母は心配さうな顔をして、父の顔をチラリと見ました。父は、ワザと母の視線をさけて、毎日定まつて居る晩酌の杯を、グツと飲み干しました。父と母とは妹が何のために、恥かしい思ひをしたか、餘りによく判つて居たのでせう。父と母とは、どんなに妹が彼女自身の顔面の異常を、自覺する日の來ることを、怖れかつ憂へて居たこととせう。が、その晩は、彼等の怖れかつ憂へて居た丁度その日でした。

妹の一生が、腐れ蝕む最初の日であつたのです。

父も母も黙つて居ました。彼等は妹の悲しみを慰める何等の言葉もなかつたのでせう。殊に生涯去りがたき不幸を傳へた、彼等自身の責任に、どんなに怖れ戦いて居たこととせう。暗い、人の心を押しつけるやうな沈黙が、食卓の上に掩ひかかつて居ました。妹のすゝりなきの聲が、皆の心を、抉ぐるやうに聞えて來るのでした。祖母が、到頭その沈黙を破りました。

「さう／＼、お静坊の瘤は十五六になつたら、療治が出来る云ひよつたのう。もう、おつ付けお醫者様に見て貰ふとええ」

と、祖母は何氣ないやうに云ひました。

父も母も、祖母のかうした發言をどんなに感謝したこととせう。皆、その事を考へながら、而もその事が餘りに痛い現



實であるために、觸れることが出来ずに居たのでした。  
「あゝさう／＼。十五になつたら、お醫者に見せいと云つて  
高阪さんが云つて居つた。もう／＼一二年したら、綺麗に療  
治が出来ると云ふや」と、父が續けて云ひました。

私も、その事は薄々聽いて知つて居たのです。妹が生れた  
時、母は直ぐ外科醫者に頼んで、彼女の無用な隆起を取り除  
いて貰はうとしたのですが、不幸にも彼女の瘤は、右の頸動  
脈の丁度眞上にあるために、手術の結果どんな大變を、引き  
起すかも知れないと云ふ憂慮のために、醫者は手術を拒んだ  
のです。

「そんなにお小さい時は、何うする事も出来ません。まあ暫  
くお待ちなさい。赤ちやんの時は、こんなもの位あつても、  
何の邪魔にもなりませんから。その中、五つ六つになれ  
ば何うにか方法があるでせうから」と、云つたさうです。が  
愈々來年から、小學校へ上げると云ふ年になつて、母は妹を  
再び外科醫者の所へ連れて行きました。が、醫者は前と同じ  
やうな理由と口實とで、手術することを引き受けませんでした。

「まあ暫くお待ちなさい。何分お小さいから、萬一の事があ  
るといけませんから。少しお恥かしいと云ふ事が、判るやう  
になつてから、手術なさつても遅くはありません。十五六ま  
でお待ちなさい」と、云つたさうです。

妹には、瘤のことなどは、なるべく考へさせないやうにと、  
そんなことは少しも知らせてありませんでしたが、私は知つ  
て居たのです。

祖母や父の口から、かうした慰めの言葉が、發せられると、  
妹はその目初めて心の奥深くまで感じたらしい不幸の原因  
が、必ずしも永久的のものでなく、もう二三年もすれば、取  
り除けられると云ふことを、子供心に簡単に、信じた爲でせ  
う。だん／＼すゝり泣きの聲を収めて、涙を眼に一杯溜なが  
らも、夕食の膳に着いたのであります。が、然しその晩から  
妹の容子は、歴々として變つてしまつたのです。二三年もす  
れば彼女の悲しみの原因が取り去られると云ふ希望は、妹の  
心を絶望の深淵に陥ることから、一時救つて居たとは云ふも  
のゝ、毎日／＼現在の状態から感ずる恥かしさや、友達との  
交際などで感ずる引け目は、小さい彼女の胸では包み切れぬ  
ほどの物であつたのです。

私も、その頃は妹の不幸が、明かに判つて來た爲でせう。  
もう以前のやうに「瘤チン！」などと呼ぶことは、決してあ  
りませんでした。が、何かの拍子に、私は——まだ中學の一  
二年でしたから——冗談に、妹の瘤に觸つてやつたことがあ  
りました。

私は少年時代のいろ／＼な行爲の中で、その時の行爲を、  
一番悔いて居ます。妹のなくなつた今は、殊に死床の妹の願

ひを聽いた今は、その悔に心を苛まれて居ます。

私が「瘤チン！」と、云つて擲擲つて居た頃の彼女は、擲擲  
はれても平氣で居るほど、無邪氣でありましたが、もうその  
頃の妹は、自分の不幸に心を腐らせて居たのです。私の手が、  
その柔かい隆起物に觸れた瞬間です。妹の顔はサツと蒼ざめ  
てしまひました。そして、チラツと私の顔を見た眼は、肉親  
の妹の眼でありながら、正視するに堪へないやうな色を持つ  
て居ました。それは、單なる忿怒の眼ではありません、單な  
る悲哀の眼でもあります。妹が自分の不幸に對する満心の  
恨みを、双の眸に現はし切つたと思はれるほど、悲痛な眸で  
ありました。惨じい眸と云へば、私はつい四五年前こんな事  
件に遇つたことがあります。それは脚氣にかゝつて、品川の  
ある病院へ通つて居た頃の事です。ある日のこと、私が患者  
控へ室で待つて居ますと、四十五六のデツブリと肥つた男が、  
十八九の女を連れては入つて來ました。二人は、私の直ぐ前  
に坐りました。病院へ男女連れて來ることが、少し變に思は  
れましたので、私はその二人をそれとなく注意して居ました。  
すると、この病院の助手らしい男が、この肥つた男と知り合  
と見えて、男の顔を見ると、笑顔をしながら傍へやつて來た。  
「何うしたのです、何處か悪いのですか」と、訊きました。  
男は無難作に、

「いや、私ぢやありません。此れが、娼妓になりますので、

健康診断を願ひたいのです」と、云ひました。恐らく貸座敷  
の主人か、何かであつたのでせう。が、それよりも、自分が  
娼妓になることを、見も知らぬ他人の前で、披露せられたそ  
の女の顔です。女はチラリと顔を上げて私を見ましたが、そ  
の眸の惨じさは、今でも忘れることが出来ません。が、その  
時、私の受けた激感も、妹の瘤に觸つて妹から見詰められた  
時の激感の、半分迄も行かなかつたでしよう。恐らく、相手  
が最愛の妹であつたために、心のどん底まで、彼女の眸の力  
に刺し貫かれたためでせう、私は、それ以來、妹の面前では  
コブのコの字も云ひませんでした。妹と向ひ合つて話して居  
る時でも、なるべくその瘤を見ないやうに努めました。が、  
さうされることは、妹に取つては却つて淋しい事だつたか知  
れません。

妹が高等小學の二年を了へた時です。父と母とは妹に女學  
校へは入るやうに極力勧めました。が、妹は何うしても行か  
うとは云はないのであります。違つた學校、殊に見知らない  
先生や、見知らない上級生などの澤山居る所へは、何うして  
も行かないと云ふのであります。父と母とは、口を酸くして  
説き伏せようとしました。尤も父と母との心の裡では、顔に  
かうした缺陷のある上は、何うしても縁遠いのに違ひない、  
そのためには高等師範にでも入れて、生涯獨立の出來るやう  
にしてやりたいと思つた爲に是非にも女學校へ入れてやりた



かつたのでせうが、妹はもう此の上何人にも自分の顔を見せたくなかつたのでせう。初めての人と顔を合はす場合に、先方が自分の顔の異常な物に気が付いて、オヤと軽い駭きを表情に示し、それが同情なり憐憫なりに——可憐な彼女に對して、侮蔑に變つて行くやうな事は決してあるまいとは思ひますが——變つて行くのを感じるのは、妹に取つては堪へられないことであつたのでせう。小學校時代には先生も古い馴染で妹の恥かしい急所に觸れないやうにと、最善の注意を取つて呉れたので、それは醫つて居ても、何處か薄暖い幸福がまだ妹に残されて居たのでせうが、さうした古い馴染と馴れた環境とを見捨て、未知な人々ばかりの居る女學校へは、何うしても進めなかつたのでせう。私は今でも妹がもつと純感でもつと勝氣であつたならば、彼女自身の爲にも親兄弟のためにも、何れ丈幸福だつたか分らないと時々残念に思ふのです。が彼女ほどんな光線にでも、直ぐ感じてしまふ乾板のやうに、傷き易い感受性を持つて居たのです。しかも、それが肉體上の不幸のために、益々鋭敏にされて居たのです。新しい一人の人から、自分の顔の下半部をちつと見詰められる代りに、彼女は自分の生命の一年なり半年なりを欣んで割いただらうと思ひます。

両親が、幾何勸めても、妹は首を縦には振りませんでした。父親などは、つい荒々しい言葉を使はうとしましたが、妹の

悲しい心持は充分判り切つて居ることですから、父も母もおしまひには、口を緘む外はなかつたのです。

「お前が女學校へ行かんと云ふ譯はお母さんにも、よう判つて居るが、それならその顔の綺麗に療治が出来たら行きますか」

妹は、その時十三でした。まだ醫者に云はれた十五六と云ふ年齢には、間があつたのですが、母は是非とも女學校へ入れるためにも、此際たとへ手術の年齢が少し早すぎても、治療を試みようと思つたらしいのです。妹は、無論異存はありませんでした。妹は口に出して催促こそしませんでした。治療の日を一日千秋の思で待つて居たのです。

妹は、母に伴はれて知合の外科醫のところへ行きました。まだ差支へない／＼と云つて、手術を先きへ／＼と延ばして居たあの外科醫です。外科醫は母のクド／＼と續いた訴へと、その後に着白な顔をして、佇んで居る妹の無言の訴へを聞いた後も、やつぱり手術をしようとは云はなかつたのです。今度はこんな口實を云つたのです。

「まあ！ お嬢さんが、それほど恥しがられるのなら、手術も止むを得ません。が、只今もよく拜見して見ますと、非常に危険な位置にあるのです。手術の際、ちよつと洋刀が外れると取返し付かないことになるかも知れないのです。いや

洋刀が、外れなくても、手術そのものが直ぐ生命に拘はるかも知れないのです。それでも是非とも手術を御希望ならば、京都大學の病院へ入らつたら如何です。外科部長の峰島博士に私が御紹介しますから」

醫者のかうした言葉に、妹の心がどれほど壓し潰されたかは想像して下さることと思ひます。その日歸つて來てから、二三日は御飯もロク／＼咽喉を通らないやうでありました。

父と母とが、相談の結果私の故郷からは百里に近い京都まで、父が妹を連れて行くことになりました。所が、その時は三月の終で女學校の入学試験が、つい二三日の後に迫つて居たのです。両親は妹をなだめ諭して、試験文は受けさせることにしました。試験文は受けて置いて治療が出来た場合の準備にし、また手術が失敗しても、無理やりにも入学させようと思ふ、父や母の心算であつたらしいのです。

京都への旅は、妹の不幸が、定まる運命の岐路で、あつたかも知れません。いやもう不幸の運命は、定まつて居たと云つた方が、よいかも知れません。たゞ最後の望み、否破るるに定まつて居る最後の幻覺で、あつたかも知れません。あの外科醫者は、妹が生れた時から、病の切除が到底不可能のものであることを知つて居たのかも知れません。たゞ、さうした宣告を下すのが嫌さに、手術の時期を遠き未來へ遠き未來へと延ばして行つたのかも知れません。母からの退引なら

ぬ頼みにあつて、到頭やり切れなくなつて、最後の宣告を下すと云ふ嫌な役目を、京都大學の外科部長に轉嫁したのかも知れません。が、十五になつたら手術が出来ると云ふ望みは、その頃の母や妹にとつて、どれほどの慰藉でしたらう。それが破るゝに定まつて云る幻影であつたにしろ、もう二三年も續いて居たならばと思ふのです。が、妹は自分から焦せつて——その焦せることを、何人が非難することが出来るでせう——その幻滅を壞しに行つたのです。

京都から歸つて來た時の妹の姿は、今思ひ出しても、私の胸が苦しくなるほどです。何時が來たら、手術が出来ると云ふ希望は、さう云ふまぎらしや氣安めは、雲散霧消してしまつたのです。外科手術の權威と云はれた部長に依つて、妹は最後の宣告を下されたのです。彼女の生命が終る迄、彼女はその呪の符を付けて居なければならぬと云ふ、宣告を下されてしまつたのです。

あの頃の妹は、明に死を願つて居たのでせう。わづかに十三にしかならぬ少女が、人生の苦い現實を見詰めて、その前に慄へて居る有様は、いたましいと云つてよいか、可哀相と云つてよいか適當な言葉を見出し得ません。それ以來妹は、私の家の暗い三疊の茶の間に隠退してしまつたのです。自分自身人生の日の目のさゝぬ片隅に、自分を監禁してしまつたのです。妹が、京都から歸つた丁度その翌日でした。私達



の従姉——女学校の四年生でしたが——朝早くから、あたふたと私の家へ馳け込んで来ました。  
「お静さん！ おめでたう。合格よ。しかも一番だからエライわ」と、自分まで嬉しうに妹の入學試験の成績を知らして呉れました。

父も母も、私も、無論喜びました。が、妹は淋しい微笑を、一寸頬の何處かに浮べた丈です。しかもそれが消えてしまふと前よりも一層悲痛な嚴肅な蕭條たる表情が、浮んで居ました。小さい心の裡で、もう自分自身の運命に對する覺悟を、ちつと定めてしまつたらしいのです。

従姉は、やれ何を買はなければならぬの、英語は隨意科だが、やつて置いたらいいの、靴はどんなのを買へばいいのと、色々指圖をして居ましたが、妹は黙つて背いて居るばかりでした。學問好きな出来のよい妹が女學校へ、は入りたくないことがあるのですか。が、その慾望をちつと踏み堪へて居るほど、妹の羞恥心は強かつたのです。私は羞恥心の強さ弱さで、女らしいか女らしくないかの標準にさへしたい位に思つて居ます。その意味で、私のひいき眼からかも知れませんが、妹の心持に、どんなに同情してやつても足りないやうに思ふのです。彼女の全身は女らしい恥かしさで、一杯であつたのです。私は、そのことと妹を非難しようと思ひません。が私は妹がもう少し、女らしくなく、もう少し平氣な

サバ／＼した性質に生れて居たならば、女學校へもは入つたし、その後の生活も、もつと華やかであつたらうにと、今更残念に思ひます。

妹は、父母の勧めも私のすゝめも聴かずに、到頭女學校へは、は入りませんでした。殊に、自分の缺陷が、不治であるといふことを知つてからは、滅多に戸外へも行きませんでした。その時以來、二十七で死ぬ迄、家の中で自分の住家の外には、凡ての世界が存在しないやうに、外界と少しの交渉もなくその短かい一生を卒へました。母などは、私によくこんな事を云つて居ました。

「お静のやうに、あんな小さい瘤を氣にせいでもええ。顔中頬やけがある娘でも、平氣で街を歩いて居る。病氣で顔中がくづれかけて居る女でも平氣で歩いて居る。あんな小さい瘤位、誰の目にだつて着きやしないのに」

が、私は普通の女性であれば、そんなにも氣にしないかも知れないものを、命をかけて氣にして居る故にこそ、妹が一倍いとしかつたのです。一寸した肉體の缺陷のために、心から傷み抜いて居る故にこそ、私は一倍妹がいたましかつたのです。それでも、彼女が止むを得ない用で外出する時など、深い蝙蝠傘を、前が少しも見えないと思はれるほど、低めて道の端を、何者の眼からも、逃れようとするやうに、コソコソと歩いて居るのを見る度に、私の胸は痛まずには居られま

せんでした。あゝ瘤の二つや三つ、もし妹に代れるならば私の顔のどの部分にあつても、辛抱してやるのにと思つたこととせう。

が、二十に近づくに連れて、妹もだん／＼自分の運命に馴れたのでせう。それほど、差し迫つて悲しさうな容姿も現しませんでした。現世の悲惨事のために、世を逃れた尼僧の生活にも、冬日のやうに淡い幸福が、漂つて来るやうに、妹の淋しい生活にも、やつぱりさうした慎ましい然しながら清麗な幸福——とまでは行かなくとも安心とか少くともあきらめのやうなものが、萌して居たやうです。

が、女學校へは入ることを、必死に避けたやうに、結婚問題をも、懸命に拒みました。その頃まで、生きて云た父は、家の資産——と云つても三四萬圓あるか無しかです——の三分の一位までは持參金にしてやつてもいいからと云ふ考で、妹に恰好な嫁入口を探したらしいのです。が、妹は敢然として、凡ての相談を拒絶してしまひました。妹が、最後の云ひ分は、

「お嫁に行くのもいゝけれど、私のやうな不具な娘が出来ると可哀相だから」と、云ふのであります。妹は、よく自分の事を、不具と云つて居ました。瘤があることが、即ち不具であるかどうかは問題でせうが、然し妹だけはたしかにその事を不具だと思ひ諦めて居たらしいのです。

「不具な娘が出来ると可哀相だから」と云ふその云ひ分は、如何に彼女が長い間、その小さい餘分の肉塊のために苦しみを抜いたかを語つて居る、血を吐くやうな言葉だと、私は思ひます。自分が、苦しむ苦しんだ末、かうした苦しみを自分の愛兒に残す危険を考へると、身慄ひするほど恐ろしかつたのでせう。その中に、父は六年前に世を去り、私は東京の學校に在學して居たものですから、だが母の面倒を見ることに必要であつたため、結婚問題は妹の希望通り消滅してしまひました。いな父が今迄生きて居ても、妹は決してその堅い決心を離さなかつたらうと思ひます。

東京に一家を構へてから、私は度々母と妹との上京を促しました。母は、上京してもいゝと云ふやうな口吻を、時々洩して居ましたが、妹はやつぱり故郷で一生を終りたかつたのでせう。見知らぬ人と、先づ上京の時に、汽車の車室で一晝夜を送り、東京の土地の近所隣の人々と顔を合はすことが、堪らなかつたのでせう。私も後では妹の希望に委せて、母が死んだ後にも故郷で一生を安樂に暮せるやうにと、出来る丈の配慮もしてやつてありました。

私は、近頃は、二年振に一度と云ふ風に、偶にしか歸省しませんでしたから、妹の晩年の生活がどんなであつたかは知りませんでした。たゞ、三四年來、文藝に親しんで來て居つたことは、知つて居ます。ロシア文學の重な作品なども、少



しは讀んで居たやうです、従つて、私が二三年來、文壇に少しづつ、頭角を現して行つたことについては、心から欣んで呉れて居たやうであります。私はもう妹も二十七になつたし、昔のやうにあれほど顔のことを氣にする事もなく、割合平和な幸福な生活をして居るのに違ない。今度歸省したら、もう一度結婚を勧めて見よう、妹のあの羞恥心も昔ほどは烈しくはないだらうと思つて居たのです。

が、その妹は今年の初に死んでしまひました。やつぱり、例の流行性感冒で、十日ばかりの病氣で、もろくやられてしまつたのです。大抵の人が「感冒だ」と、高をくゞつて居る中に、取返しが付かなくなつたやうに、私に母が電報を打つた時には、危篤だつたらしいのです。私は、取る物も取敢へず歸郷しました。が、故郷の生れた家に着いた時には、妹は白い經かたびらに包まれて、もうすでに納棺せられてしまつた後でした。私は、棺の前に跪坐しますと、薄倅であつた妹の一生を悼む涙がさん／＼として、止め度もなく膝の上に着るのを感じました。

氣の故か、此前逢つたときとは、見違へるやうに憔悴してしまつた母は、眼を泣き張らしながら、

「お前が歸るまで、納棺すまいと思つて居たが、あまり遅くなるものだから」と、云ひ譯のやうに云ひながら、棺の蓋を取つて呉れました。

私は妹の顔を見ようと思ひました。が、それと同時に妹の一生を、臺なしにしてしまつたあの瘤を見なければならぬと思ふと、私は胸が潰れるやうな苦痛を感じずには居られませんでした。が、それでも私は元氣を鼓して妹の顔を見ました。それは、いかにも清淨な顔でした。そこには處女のまゝ死んだ女にしか、許されないやうな清淨さが、ありました。私は、妹の不幸な生涯がいつまでも／＼と、長びかずに、早く終つたことを、妹自身が却つて欣びはしなかつたかしたらとさへ思ひました。私が妹の死顔を充分見済まして、棺の蓋を持つて居る母に、もういゝと云ふ目くばせをしようと思つた時です。私はふと妹の右の頸に小さい時から、見なれて居るあの小さい隆起物がないことに氣が付きました。もし親類のものが、五六人そこに居なかつたら、私は思はず驚愕の叫びを揚げたかも知れません。然し、その時私は自分自身を、ちつと制しました。そして、自分の錯覺ではないかと思つて、ちつと死顔の顎の下を見詰めました。が、幾何見直してもありませんでした。たゞその痕跡と思はれる所に、絆瘡膏のやうなものが、大きく貼られて居るのでした。

私は黙つて名状しがたい奇怪な心持を懷いて、別室へ退きました。母も後から續いて來ました。私は何より先きに妹の顔に見た不思議な變化を、話さずには居られませんでした。

「何うしたのです。靜の瘤は、最近に療治が出来たのですか」

さう云ふと、母は泣き張らした眼に、また一杯涙を湛へました。

「いやさうぢやないんだよ。あれは、息を引き取つてから、お醫者様に頼んで、切つていたのだよ。病氣になつてから、四十度ばかりの高熱が続いたのだが、死ぬことなどは何とも思つて居ないらしいのだよ。たゞ私の顔を見ると囁語のやうに、生きて居る内に、一時間でも一時間でもいゝから、此の瘤が無くなりたいたいと云ふのだよ。あんな内氣の子だつたから、平生は何とも云はなかつたのだが、あの瘤をどんなに氣にして居たか、知れなかつたんだよ。私達も、充分あの子の心は、察して居た積だつたが、まだ察し方が足りなかつたんだよ。一旦病氣になると、半分夢中になつて、自分の本心を云ひつゞけたらしいのだよ。私もあんまり、可哀相だつたから、愈々助からないと云ふことが定まると、娘の一生の念願を叶へてやりたいと思つて、お醫者様に願つて見たのだよ。が、お醫者は、こんなに衰弱して居る時に、そんな馬鹿なことが出来るものでないと、何うしても聽いて下さらないんだよ。娘迄が手を合はして頼んでも聽いて下さらないんだよ。が、お醫者様も娘の臨終の願ひには動かされたと思ひ、それでは貴女が息を引き取つてから、望み通りに除けてあげますと、云つて下さつたのです。それだけでも、娘はどれだけ欣んだか知れはしないのです。娘が息を引き取ると、約束通り

切斷して下さつたのです。やつぱり解剖と云ふことであつたのです。家から解剖承諾書を出したりして」と、母はきれぎれに語りました。

世の中に女性の不幸は、數へ盡くされないほどあるてせう。が、わづかな肉體上の異常のために、私の妹ほど苦しんだ女は、少ないかと思ひます。物心が付いて以來、愈々臨終の死床に横はる迄の妹の一生は、小さい肉塊の恐ろしい暴虐の下に於ける、絶えざる受難であつたのです。が私は妹があくまで女らしく慎ましかに、その受難に堪へたことを賞めてやりたいと思ひます。受難の苦しみを自分一身で、引き受けて、ちつと堪へて居た女らしい力と、たしなみとを賞めてやらねばなりません。少しは、兄のひいき眼かは知りませんが、安らかに眠れ！ 靜子の魂よ。



## 島原心中

自分は、その頃、新聞小説の筋を考へて居た。それは、一人の貧乏華族が、ある成金の怨を買つて、いろ／＼な手段で物質的に壓迫される。華族は、その壓迫を切り抜けやうとして腕く。が、腕いたゞめ、却つて成金の作つて置いた罠に陥つて、法律上の罪人になると云ふ筋だつた。

自分は、その華族が、切迫詰つて、法律上の罪を犯すと云ふところを、成るべく本當らしく實際ありさうな場合にしたかつた。通俗小説などに、有り觸れたやうな場合を避けたかつた。自分は、そのために法律の専門家に、相談して見ようと考へた。

自分は、頭の中で、舊友の中で、法學士になつて居る連中を數へて見た。高等學校時代の知己で、法學士になつて居る連中は幾人も居ることは居たが、郵船會社には入つて、洋行したり、政治科を出て農商務省へ奉職したり、三麥へは入つて居る連中などばかりが、思ひ浮かんで、自分の相談に、乗つて呉れさうな、法律専門の法學士にはなか／＼思ひ當らなかつた。その中に、ふと綾部と云ふ自分の中學校時代の友人が

去年京都の地方裁判所を廢して、東京へ來て、有樂町の××法律事務所勤務して居ることを思ひ出した。上京當時、通知のハガキを呉れたのだが、その××と云ふ有名な辯護士の名前が、不思議に、ハツキリと自分の頭に、残つて居るのである。

自分は、綾部が、三高に居たときに逢つた以來、六七年振り、彼を訪ねた。彼は、學生時代と見違へるほど、色が白くなつて居た。そして、三四年の間検事をやつて居た名残が澄んだ其活氣のない、冷めたい眼の裡に残つて居た。彼は、快く自分を迎へて、自分の小説の筋に適合する癖のやうな犯罪を考へて呉れた。刑法の條文などを彼方此方參考にしながら、可なり工夫を凝して呉れたのである。その上に、彼はこんなことを云つた。

「いや。貴君が、小説家として、法律の點に、注意をして居るのは感心です。どうも、今の小説家の小説を讀むと、我々専門家が見ると、可成なり可笑しい所が澤山あるのです。懲役の刑しかないところが、禁錮になつて居たり、三年以上の懲

役の罪が二年の懲役になつて居たり、随分變なところがあるのです。それに、小説家のかく材料が、小説家の生活範圍を一步も出て居ないと云ふことは、可なり不満です。我々の註文を云へばもつと法律を背景とした事件、即ち民事刑事に關する面白い事件を、材料として大に取扱つて貰ひたいですな。一體、完全な法治國になるためには、各人の法律に關する觀念が、もつと發達しなければ駄目です。それには、もつと君達が、法律に關係のある事件を、かいて呉れて、法律と云ふものが、人間生活に、どんなに重要な意義を持つてゐるかと思ふことを、一般に知らして貰ひたいと思ふのですがね。若し、君がかく心算なら、僕が検事時代の經驗をいろ／＼話して上げてもらひと思ひます」

そんな、冒頭をしながら、彼は次ぎのやうな話を自分に、して呉れた。

× × × × ×

「俵が、大門を潜つたとき、あゝ島原とは妙だな」と、思ふと同時に、可なり激しい幻滅とそれに伴ふ寂しさを、感ぜずには居られなかつたのです。お恥しい話ですが、僕が島原へ行つたのは、その時が初です。僕は高等學校時代から大學へかけて、六年も京都に居たのですが、その時迄、昔からあれほど名高い島原を、まだ一度も見ることがなかつたのです

一二度、友人から「花魁の道中を見に行かないか」と、誘はれたことがあつたのですが、謹嚴——と云ふよりも、臆病であつた僕は、そんなところへ足踏みすることさへ何だか進まなかつたのです。

だから、大學を出て間もないその頃まで、僕の頭に描いた島原は、やつぱり小説や芝居や小唄や傳説の島原だつたのです。莊麗な建物の打ち續いた、美しい花魁の行き交うて居る錦繪にあるやうな色街だつたのです。

従つて、その日——たしか十一月の初でした——上席の檢事から、島原へ出張を命ぜられたとき、僕は自分の心に、妙な興味が動くのを抑へることが出来なかつたのです。島原へ行く、而もその朝行はれた心中の臨檢に行くと云ふのですから、僕は場所に対する興味と、事件に対する興味とで、二重に興奮して居た譯です。

「島原心中」と云ふ言葉が、小説か芝居かの題目のやうに、僕の心に美しく浮んで居たのでした。

が、俵がそれらしい大門を通りすぎて、廊の中へ駈け込んだとき、下した幌のセルロイドの窓から十一月の鈍い午後の日光の裡に、澁んだやうに立ち並んで居る、屋根の低い朽ちかけてゐるやうな建物を見たときに、それが名高い色街であると思ふ丈に、一層悲惨なあさましいやうな氣がしたのです。衰弱し切つた病人が、醫者の手から、突き放されて、死期を



待つて居るやうに、どの家もどの家も、廢類するまゝに、委せられて居るやうな気がしたのです。定紋の付いた暖簾の間から見える、家の内部までが、どれもこれも暗澹として陰鬱に、滅亡して行くものゝ姿を、そのまゝ示して居るやうに僕には思はれたのです。

俣が、横町へ折れたとき、僕の眼前に現はれた建物は、もつと悲惨でした。悲惨と云ふよりも、醜惡と云つた方が、適當でせう。どれも、これも粗末な木口を使つた安普請で、毒々しく塗り立てた格子や、襦子窓の紅殻色が、ムツとするやうな不快な感じを與へるのです。煤けた角行燈に、第二清開樓とか、相川樓などゝ書いた文字までが、田舎の遊廓にても見るやうな、下等な感じを與へました。

心中があつた樓の前には、所轄署の巡査が立つて居たので、直ぐそれと判りました。

僕が、俣から降りたときには、裁判所を出るときに、持つて居たやうな興奮も興味も残つて居ませんでした。

その樓は、此の通に立ち並んで居る粗末な二階家の一つでした。入口を這入ると、土間が京都風に奥の方へ通つて居て、左の方には家人や娼妓達の住んで居る部屋があり、右は直ぐ箱梯子になつて居て、客がそのまゝ二階へ上れるやうになつて居るのです。

心中の行はれたのは、無論二階でした。僕が、警部の出迎

へを受けて、此の箱梯子を上らうとしたとき、ふとその土間を中途で、遮つて居る淺黄色の暖簾の間から、ジロ／＼僕の顔を見て居る、此家のお主婦らしい女に、気が付いたのです。廣い額際が抜け上つて、眼が無氣味な光を持つて居る、一目見ると忘れられないやうな女でした。

僕は、その梯子段を、可なり元氣よく上つたのです。すると、先きに上つた警部は、上り詰めると急に身體を右に避けるやうにするのです。僕は、そんなことを氣にしないで、介意はず上り切つたのです。すると、梯子段を、上り切つた僕の足もとに異様な品物が——その刹那は、本當にさう思つたのです——轉がつて居るのです。が、ハツと氣が付いて見ると、僕の靴下を穿いた足は、其處の廊下に、仰向けに倒れて居る女の、振り亂した髪の毛を、危く踏むところであつたのです。その時の、僕の受けた激動は、今でも幾分かは思ひ出すことが出来るのです。よく見ると、心中はその梯子段を上つたとつゞきの四疊半で行はれたと見え、女が倒れかゝる機みに、外れたらしい障子の中の疊には、ドロ／＼と凝り固まつて居る血が、一面にこびり付いて居るのです、その血の中に、更紗か何からしい古びた蒲團が、敷き放されて居て、女の兩足は蒲團の上に、わづかばかり、かゝつて居るのでした。天井が、頭に叩へるほど低い部屋の中は、小さい明り取りの窓がある丈で、晝でも薄暗いのですが、その薄暗い片

隅には、心中前に男女が飲食したらしい井とか、徳利などがゴタ／＼片寄せられて居るのです。壁は京都の遊廓によくある、黄つばい砂壁ですが、よく見ると、突き當りの壁には、口に含んで霧にでも吹いたやうに、血が一面に吹きかかつて居るのでした。

まだ、さうした場所に、馴れなかつた僕は、一目見ると、その凄慘な情景から、ゾツと水を浴びるやうな、感じを受けました。立合の警部や書記などの手前努めて冷靜を装ひながら、先づ女の傷口を見ました。女は、見事に頸動脈を切つたと見え、身體中の血潮が悉く、その傷口から迸つたやうに胸から膝へかけて、汚れ切つたネルの寝衣を、ベト／＼に、浸した上、疊の上から廊下にかけて、一面に流れかゝつて居るのでした。が、傷口を見て居るときに、もつと僕の心を打つものは、その荒み果てた顔でした。もう確に、三十近い細面の顔ですが、その土のやうにカサ／＼した青い皮膚や、眼尻の赤く爛れた眼などを見て居ると、顔と云ふ氣はどうしても起らないのです。人間だと云ふ氣さへ起らないのです。たゞ、名狀しがたい淺ましさを、感じたのです。

死に損つた男の方は、別室に移されて居て、醫者の手當を受けて居たのです。僕が、臨検した主な目的は、相手の男を訊問して、無理心中ではなかつたか、又縱令合意の心中で

あつたにしろ、男の方に自殺補助の事實がなかつたかを確かめるためだつたのです。

二人が、遺書を認めて居ること、無理心中の疑は少しもありませんでしたが、自殺補助の疑は、十分にあるのでした。僕は、その男を臨床訊問するために、寝かされて居ると云ふ別室へ行つたのです。見ると、相手の男は、頭を角刈にした、二十歳前後の、顔の四角な、職人らしい男でしたが、咽喉の傷を、くる／＼捲いた繻帯が、頸を埋めてしまふほど、ふくらんで居ました。顔には血の氣がなく、ドロ／＼と氣の抜けたやうな眼付をして居ましたが、傷が致命傷でないことは、醫師でない素人眼にも、直ぐ判りました。

僕は、訊問にかゝる前に、警察の方で、調べた二人の身元とが、心中に至るまでの事情を、一通訊いたのです。男の方は福島縣の者とかで、西陣の職工だが、徴兵に取られて居て十二月には、入營する事になつて居たと云ふことゝ、女は鳥取縣のものであるが、今年廿九の年になるまで、十年近く鳥原で勤めて居るのだが、借金に追はれて、まだ年期が明けないで居ること、平生から陰氣な沈んだ女であること、この頃郷里の方から、母が病氣だと云ふ知らせが來たので、見舞に行きたい／＼と、口癖に云つて居ながら、勤の身として、それが果し得ないのを、口惜しがつて居たこと。男は、十月の初から通ひ初めて、その日が六七回目であつたこと、心中は午前の



七時頃に行はれ、家人達はまだ寝入つた居たので、三十分位経つて、主婦がやつと、男の呻き聲を、聞き付けたこと。主婦が駆け上つたときは、女の方はもう全く、息が絶えてしまつて居たこと、男が持つて居た短刀を、主婦がもぎ取つたこと、短刀を使ふ前に、二人が揮發油を飲んだが、死に切れなかつたこと。僕は、さうした前後の事實を聞いた後、訊問にかゝつたのでした。

僕が、訊問を始めようとすると、警部と巡查とは、その男を床の上に、坐らせようとするのです。男は、首を擧げやうとして、咽喉の傷を痛めたと見え、齒を喰ひしぼるやうにして、ぢつと、その苦痛を忍びながら起きようとするのです。「苦しければ、そのまゝでいゝよ」

と、僕が注意をしますると、警部はそれを遮るやうに、「なに、大丈夫ですとも。氣管を切つて居る丈ですから、命には別條ありません」と云ひながら、今度はその若者を叱るやうに、「さあ！ シヤンとして、氣を確にするんだぞ！ こんな傷で、死ぬことはないのだからな」

と、云ひながら、肩の所を一つポント叩くのです。若者に對する、いたゞしいと云ふ同情は、直ぐ僕の職業的良心に抑へられて居ました。僕が、訊問を始めるときには、

もう、普通の檢事の口調になつて居ました。僕は、その頃、だん／＼被告に對する訊問のコツを覚えて來て居たのです。

「さあ、これから、お前に少し訊きたいことがあるのだが、お前もな、出來たことは仕方ないことだから、何とクヨクヨ考へずに、男らしく在りのまゝに話して貰ひたいのだがなあ。お前も、これほど思ひ切つた事をやつた男だから、思ひ切つて男らしく潔く、俺の云ふことに答へて呉れないかん。いゝかい。どうしたと云つたら、どう取られる、かう云つたらかう取られるなど云ふ事を、肚の中で考へて云つたらいかん。考へて云ふと、ウソになる。ウソになると、物のつじ褻が、合はなくなる、つじ褻が、合はなくなると、本當の事迄がウソになる。いゝかい。だからお前が俺の合點の行くやうに、本當にさうかと云ふことになる、出來たことは仕方がないと云ふことになつて、結局お前の利益になるんぢや。だから素直に云つた方が、一番かしい事になるのだからな」

檢事でも、豫審判事でも、訊問を始める前には、屹度こんな風なことを云ふのです。そして、相手の心をノンビリさせて置かないと、嘘ばかり云つて困るのです。「どうだい男らしく云ふつもりかい」

かう、念を押しますと、繻帶で首の動かせないその若者は傷つた咽喉から、呻くやうな聲を出して、「男らしく申します、申します」

と答へました。が、大抵の被告は、かう答へて置きながら、嘘を吐くものです。

「女の名前は何と云ふのだい？」

「錦木と云ひます」

「何時頃から、通つて居るのぢや」

「十月の初からです」

「ぢや一月にならないのだな。今迄に何通つた」

「今度で六回目です」

「一度に幾何宛金がかゝるのぢや」

「へえ！」若者は、一寸云ひ澁んだが、痛さうに唾を吞み込んでから「六圓から十圓位までかゝります」

「お前は、工場で幾何貰つて居るのぢや」

「日に一圓五十錢位、貰ふとります」

「うむ、それの中から食費だとか風呂代だとか引くと、月に何程位残るんぢや」

「へえ、十圓位残ります」

「さうか、十圓位しか残らんで、それで月に六遍も遊んで、一度に六七圓宛も使ふと金が足らなくなる譯だな」

「へえい」

「ぢや、何か別な所で金の工面をした譯だな」

「へえい」

「誰かゝら、金の工面をして貰ふた譯だな」

「へえい！ 友達から二十圓ばかり、借りました」

「その外にないか」

「親から十圓借りました」

「うむ、合して三十圓だな。その位の借金なら、拂へないと云ふ借金ぢやないな」

「へえい」

「一體、何うしてこんな事をやつた」

若者は、暫く考へ込んで居たやうでしたが、急に咳き込んで來たかと思ふと、泡のやうな血を口から吐き出しました。氣管の傷のために、血が口の中に洩れるのです。

僕は、自分の訊問が、此青年の容態を險惡にしはしないかと思つたので、警察醫に訊きますと、彼は平氣な顔をして、「何！ 大丈夫です。どんなことをしたつて、命に別條はありません。御心配なくお続け下さい」と云ひました。僕は、それに安心して若者に云ひました。

「それ、そんな風に考へたら駄目だよ。あつさり云ふのだよ、あつさり」

若者は、唇の周圍についた血を、鼻紙で拭きながら「私は今年に兵にかゝつとりますので、入營するまでには、金でも溜めて、両親も欣ばせようと思つて居ましたのに、こんなことで金は溜りませんし、借金は出來るし、それにあの女も可哀さうな女で、國へ一度母親の見舞に歸りたい／＼云うて居



りましたけれど、歸れんやうな始末で、一層死んでしまふたらと云ふ、相談になりましたんて」

「うむ。それで一緒に死ぬ相談をしたのか。然し借金だと云つて、僅かばかりの金ぢやないか。それに、女がそれほど、國に歸りたいのならお前が、連れて歸つてやればいゝぢやないか。何も遠い所てはなし、鳥取ぢやないか」

「へえい！ それがさうはいきませんので。全く」

「さうかね、お前の云ふことも、一應尤もに思へるが、たゞそれ丈で死んだと云ふのは、何うも俺の腑に落ちないんだが。考へないで、さつぱり云うて見んか。考へて云ふと嘘になつていかん」

さう云ひますと、若者はその蒼白の顔に、一寸血の氣を湛へながら云ひました。

「命を投げ出してやりましたけに。嘘なんか決して申しません」

相手は、少し激したが、僕は冷然たる態度を以て云ひました。

「さうかね。そんなら、それでいゝが、俺にはどうも腑に落ちないんだがね。俺の腑に落ちんと云ふことは、つまり話して居る方のお前の心に、何か躊躇があるんぢやないかね。こんな時に、本當の事が云へんやうぢや、男として恥ぢやないか。何か別に譯があるんだらう、何か悪いことでもしたんぢやないか」

やないか」

「いゝや。決して悪いことなんか」

と、若者は急ぎ込んで答へると同時に、傷口から又血が洩れたのでせう、苦しさに咳き込みました。僕の心持は、その時もう職業的意識で、一杯になつて居て、青年が苦しがつても、最初ほどの同情は湧きませんでした。そればかりでなく、僕は、相手が可なり執拗なので、訊問の方面を急に變へて見ました。

「ぢや、それはそれとして置いて、一體どちらが先にやつたのか、お前の方か、それとも女の方か」

「妾が、先きへ死ぬと云ひまして、女が先きに短刀を、咽喉へ突き刺してから、今度は疊へ突き刺して私に呉れました」

「うむ。なるほど、それで一體女はどんな風に突いたんだ」

「それは、あの女が、刃の方を上に向けて、咽喉へ突き刺すと、血がダラリと流れました」

「その短刀を握つた手は、右かい左かい」

「右です」

「さうかい。それから何うした」

「それから、私が短刀を受け取つて、一突き刺したのですが、苦しくて、私は思はず立ち上つたのです」

「それから」

「私は呻つたやうに思ひます。それから夢中になつてしま

ひました」

「さうか、夢中になつたのか、それであの壁に血が注つて居るのは、何うしたのだ」

「私が、苦しきまぎれに寄りかゝつたのです」

「それから何うしたのだ」

「氣が付きますとお主婦が私の持つて居る短刀を、挽ぎとつて居たのです」

「なるほどね、さう云う譯か。あの錦木と云ふ女は、エライ女だな。然し、そりやお前、嘘ぢやないか。その女が、咽喉を突いたところを、もう一度云つて見んか」

同じ事を、二度云はせるのが、僕等が訊問の常套手段なのです。被告が、嘘を云て居れば、屹度其處に辻褃の合はないところが出来るのです。が、それにしても、咽喉に傷を持つて居る被告に、二度同じことを、繰り返させることが、可なり残酷のやうに思はれないでもなかつたのです。が、その當時僕の熾烈な職務心は、そんな心を直ぐ打ち消したのでした。それでも、若者は前の陳述と、矛盾しないやうに、同じことを繰り返しました。

「さうかね、その女が、一人でやつた！ が、お前手傳つてやりはしなかつたかね。女も可哀さうぢやないかね、どうせ二人で死んで行くのだから、女が苦しんで居れば、お前も共手を執つて、力を添へてやるのが人情ぢやないかね。それ

が、人間として美しいことぢやないかね、いゝか悪いかは、別問題として、さうあるべき所ぢやないかね」

先刻、女の屍體を、一目見たときに、僕は女が、執らかと云へば、呼吸器でもが悪いやうに、瘡せた女で、男が陳述するやうな、勇氣がある女とは、何うしても思へなかつたのです。僕は、自殺補助の事實が、あることを、最初から信じて居たのです。それに、先刻一寸見たときにも、傷口が一刀のもとに見事に突かれて居ることに氣が付いて居たのです。

「どうだい。俺には、あの女に、お前が云ふほど、勇氣があるとは何うしても思へないのだがね。そが、不思議で堪らないのだがね。何うだい。本當のことを、アツサリと云つて呉れんかな。實はお前が、突いてやつたのだらう」

若者は、明かに狼狽しながら、

「いえ、滅相なく」と打ち消しました。

「ぢや、訊くがね。あの女の咽喉の所に、掻き傷があるが、あれは何うしたんだ」

若者は、心持顔が赤くなつたかと思ふと、黙つて居ました。

「お前が、一緒に突いてやつたのぢやないか」

若者は、首を横に、微かに動きました。

「ぢや、そんな覚えはないと云ふんだな、女が、咽喉を突くとき、お前の手は女の身體に、觸れて居なかつたと云ふのかい」



「いゝえ。二人抱き合つて」  
 僕は、心の裡で、「しめた！」と叫びました。  
 「二人抱き合つて、うむ。先刻は、そんなことは云はなかつたやうだね。なるほど、二人抱き合つて」  
 「二人一緒に抱き合つて、女が咽喉を突くと、一所に轉けたのです。それで、血が出たから押へてやらうとしたのです」  
 「なるほど、お前の云ふことは、段々本當に近くなつて、来たぢやないか。が、もう少し本當でなければいかん。もう少しの所だ。もう少し本當を云へばいいのだ」  
 「それで、女が腕いて手で咽喉を、掻きむしつたのです」  
 「なるほどな。それで、掻き傷が、出来たと云ふのだな。そんなことも、有る事だから、それも本當に取れる。だけど、お前よう考へて見るがいゝぞ。普通の女と云ふものは、氣の弱い人間だぜ。鬼神のお松といふやうな、毒婦とか、乃木大將の夫人などと云ふ女丈夫なら、そら一突きで見事に死ぬかも知れん、が、あの女のやうな、身體の弱い女に、そんな事が出来るか出来んか、誰が考へても判る事ぢやないか」  
 かう云つて來ると、相手の若者は、返辭に窮したやうに、黙つてしまつたのでした。僕は、もう一息だと思ひました。  
 「何も、こんな事は、別にお前に訊かなくても、初からちやんと、判つて居ることなんだ。掛りの醫者を連れて來て居るのだから、大抵の事は、お前に訊かなくても分つて居るのだ

が、お前が本當のことを云ふ男であるか、お前に何か取柄があるかどうかと思つて、訊いて居るのだぞ」  
 かう云ひ詰めると、若者は苦しさに、身を悶へて居ましたが、  
 「あ、お役人さま、私は死にたいのです。どうぞ、私を殺して下さい！」  
 彼は、悲鳴のやうに叫ぶと、切なさうに、歎歎を始めて居ました。  
 僕は、若者を叱り付けるやうに云ひました。  
 「そんな、氣の弱いことで何うする。今が、お前の一生の中で、一番大事な時ぢやないか。今迄の間違つて居たことを改めて、生れ變つた人間として立派にやつて行く、大事な潮時ぢやないか、お前が、やつたことが悪いとしたならば、死んだ人に對しても、社會に對しても、申譯として、相當な勤を立派に果して、生れ變つて來る時ぢやないか。こんな、大切な時に、ウソを吐くやうぢや。お前はもう何の取柄もない、男子の中の屑ぢやないか。さあ、死にたいなどと、そんな氣の弱いことを云はないで、深く本當のことを云つたら、何うだ。短刀の柄の端を、少し持ち揃へてやつたとか、一緒に轉ぶときに、少し押しやつたとか。本當のことを云つて見い！」  
 「夢中で、ハッキリとは覺えて居ませんが、一緒に倒れるときに私の手が咽喉の所へ行つたかも知れません」

若者は、到頭本當のことを、喋り始めたのです。僕の面に得意な微笑が浮ぶのを何うすることも出来ませんでした。  
 「なるほどな、が、お前も自分でやつたことが分らん筈はないだらう。いや。お前はよう判つた心算で云つて居るのだから、普通に考へると、どうもよく分らん。お前の肚になつて見れば、よく判るが、普通に判るやうに云つて見んか、が嘘を云へと云ふのぢやないぞ」  
 若者は、暫く無言でしたが、漸く決心したやうに、  
 「よう考へて見ると、あれが自分で突き刺して、非常に苦しがつて居たものですから、あれの上から、のつかゝつて、短刀の柄の残つて居るところを、持つてやりました。一緒に、キユツと押しやりました」  
 「それは、孰ちの手で」  
 「右の手でやりました」  
 「その、時左の手は何うして居たのだ。まさか、左の手を上へぼんやり上げて居はすまいね。その時の姿勢は、何うだつた」  
 「實は左の手で女の首を抱へてやりました」  
 「なるほど、それで、よう物が判つた。それで、云ふことに無理がない、だから、早くから云へばよかつたのだ。それでその事には、少しも無理がない。よう判つた。が、もう一つ判らんことがある。それも一つ考へずに、アツサリ云うたら

何うだ。そりや、かうく云ふ譯だつたと、アツサリ云ふたら何うだ。無理のないやうによう判るやうに云つたらどうだ。そら、お前が何うしてかう云ふことをやつたかを序に云つて呉れ」  
 「それは、先刻申した通りです」  
 「うむ、先刻どんなことを云つたかな。もう一遍云つて見て呉れんか。先刻から澤山聽いたら、勘違をして居るかも知れん。もう一度、精しく云つて見て呉れ」  
 かう云ふのは、犯人に事實を自由する機會を作つてやる爲です。  
 「それは、兵に行く前に、金でも溜めて、両親を欣ばせようと思つて居ましたが、借金は出来ずし、それにあの女が――」  
 「さうく、先刻訊いたのは、其處だつた。其處を一つ考へずに云つて呉れ、よく世の中には、別れの辛いと云ふことがあるが、國へ歸つて兵に行くことになると、自然あの女とも別れることになるのだつたな」  
 「實は、かれこれ申上げて居ましたが、今まで申上げた事も一つですが、もう一つ他の事は、兵には入るのが嫌だつたのです。それで、私が思ひ詰めて、女に申しますと、女もそれではと申しまして、かう云ふことになつてしまつたのです。」  
 「それに相違ないか。この先、お前が違ふことを云ふと、お



前に嫌疑がかかる上に、憎しみもかゝり、結局はお前の損になるのだから」  
「その通り、決して違ありません」  
さう、云ひ終ると、若者は其の顔に、絶望の表情を浮べたかと思ふと、そのまゝ崩れるやうに、仰向けに倒れてしまいました。

彼が、自殺補助の罪を犯して居ることが、明にされたのです。自殺補助の罪は、六ヶ月以上七年以下の懲役又は禁錮です。若者の訊問が終ると、うまく問ひ落したと云ふやうな、職務意識から来る得意さと満足とが私の心の裡に湧いて来るのを禁ずることが出来ませんでした。殆ど、一時間に近い、長い訊問のために、疲れ果て、蒲團に寝かされた後も、苦しさに肩て息をして居る若者を、僕は、獵人が丁度自分の射落した獲物でも見るやうな眼付で、暫らくはちつと見詰めて居たのでした。僕の訊問の綾に、うまく引つかゝつて、案外容易に、自白してしまつた若者に、憫みを感じながら、而も相手の浅慮さを、蔑むやうな心持さへ動いて居たのです。その時に、警部が僕に近づいて来て、若者には聞えないやうな低聲で、

「一寸おいて下さい、解剖をやつて居ます」と囁きました。僕は、それを聴くと、女の屍體のある元の四疊半に歸つて行つたのです。道に、女の屍體は、蒲團の上に、眞直ぐに寝

かされて居ました。よれ／＼に垢じみた綿ネルらしい寝衣を、剃ぎ取られた姿は、前よりもつと、みじめな浅ましいものでした。胸の邊の蒼い瘡せだ皮膚には、人間の皮膚らしい弾力が少しも残つて居ないので、露はに見えて居る肋骨や、トゲ／＼しい腕の關節などが、此の女が十年の悲惨な生活を、マザ／＼と示して居るのでした。又、その身體の下半部に纏つて居る腰巻が、一目見た者が、思はず顔を背ければならぬほど、ヒドいものでした。それは、ネルでしたが、地の桃色が褪せてしまつて、所々に白い斑が出来て、それが灰色に汚れて居るのです。よく注意して見ると、それは普通の婦人がするやうに、ネルの上に、白木綿を纏ぎ足してあるのですが、その白木綿が、鼠色に黒くなつて居る所へ、迸つた血がかゝつた爲、白木綿の所までが、ネルの部分と同じやうに、汚れた桃色に見えて居たのです。

女は、見る／＼裡に、咽喉の傷口を割かれ、胸から腹部へと次ぎ／＼に割かれて行くのでした、警察醫は、鶏の料理をしてもするやうに、馴れ切つた冷静な手付きで、肺や心臓や腸胃など一通見た上で、女に肺尖加答兒の痕跡があると云ひました。

僕は、屍體の解剖を見て居る裡に、自分の氣持が鉛のやうに、重苦しくなつて来るのを感じたのです。女の營養不良の瘡せ果てた身體は、彼女の過去の苦慘な生活を、何よりも力

強く、僕の胸に投げ付けるのです。十年もの間、腕いた末に、尙かうした地獄の境目を、脱すべき曙光を見出し得ない彼女が、自殺を計ると云ふことは、當然過ぎるほど當然なことのやうに思はれて来たのです。前借と云へば、屹度三百圓か五百圓かの端金に違ひない。さうした金のために、十年の間、心も身體も、滅茶苦茶に苛なまれた彼女が、他の手段では、脱し切れない境地を、死を以て脱しようとすることは、尤も至極のことのやうに思はれたのです。現代の賣淫制度の罪惡は、賣淫その物にあると云ふよりも、かうした世界にまでも資本主義の毒が漲つて居て、賣淫者自身の血や膏が、樓主と云つたものを肥して居ると云ふことです。貧乏な人達の子女が、僅かな金の爲に、身を縛られて、樓主と云つたやうな連中の餌食になつて骨まで、舐られて居ることです。さう考へて来ると、さうした犠牲者が、その何うにもならない境地を、死を以て脱するのは、彼等が、最後の反抗であり唯一の逃路であるやうに思はれて来たのです。

かうした浅ましい身體で、かうしたみじめな服装をして、浅ましい勤をして居るよりも、一思ひに自殺する方が、この女に、どれ丈幸福であるか分らないと思つたのです。

そのときに、僕は此女の自殺を手傳つてやつたあの若者のことを考へたのです。此の女は、明に死を望んで居る、そして死ぬ方が、何よりの解脱である。この女が、自殺をしやう

として腕いて居るときに、一寸短刀を持ち添へて、やつたところが、何故犯罪を構成するのだらう。現代の社會の一番不當な間隙に、身を挟まれて苦しんで居る彼女が、死を考へることには何の無理があるだらう。又彼女が、死んだからと云つて何人が損をすると云ふのだらう。樓主が、損をすると云ふのか。否、彼は彼女の血と膏とで、もう十分舌鼓を、打つた後ではないか。我々が、彼女の死を遮るべき何の口實も持つて居ないのではないか。今縱令、彼女の死を遮り止めたところで、彼女を救つてやる如何なる方法があるだらう。それなのに、彼女が死を企てたときに、一寸その手傳ひをしたあの若者が、何故に罰せられなければならないのだらう。

その時に、僕はふと、先刻訊問の手段として、若者に云ひ聽かせた自分の言葉を思ひ出したのです。

「……女も可哀いさうぢやないかね。どうせ二人で死んで行くのだもの、女が苦しんで居れば、お前も手を執つて、力を添へてやるのが人情ぢやないか。それが、人間として、美しいことぢやないか」

自分が、手段のために云つたかうした言葉が、力強く僕の胸に跳ね返つて来たのです。あの若者のやうな場合に、あの若者のやうな態度に出ることは、何人からも肯定さるべき、自然な人情ではないか。それが、人間として美しいことではないか、それなのに、自分自身死に損つて苦しがつて居る彼



を法律は追求して、刑しなければならぬのだらうか。  
そんなことを、考へて居ると、僕は先刻、傷に惱んで居る青年を、脅したり賤したりして問ひ落して得意になつて居た自分の態度が、さもしいやうに考へられて来たのです、僕の職務的良心が、ともすればグラ／＼に崩れさうになつて居たのです。

出張したのは二時頃でしたが、凡ての手續が、片づいた頃には、日がとつぷりと暮れて居ました。僕は、引き上げようとして、俥が来るのを待つて居たときです。臨検中は、私人が二階へ上るのを、一切禁じてあつたのですが、もう凡てが終つたので、家人の上るのを許したのです。すると、待ち構へて居たやうに、一番に上つて来たのは先刻見かけた此の家のお主婦なのです。

僕の顔を見ると、平蜘蛛のやうに、お辭儀しながら、その癖、額／＼に、冷たい眼で、チロ／＼見て居たかと思ふと、云ひにくさうに、

「旦那はん。あの指輪、取つても大事おまへんか」とかう云ふのです。

「指輪！ 指輪が、何うしたのだ」

お主婦は、一寸追従笑ひをして居ましたが、

「へえ。あの子供がはめて居りますんで」

僕は、さう聞いたときに、妙な悪感を感じずには居られなかつたのです。

「ぢや、あの屍體の指には入つて居る指輪を欲しいと云ふのだな」

「へえ！ さよて」

僕は、頭から怒鳴り付けてやりたいと思つたのです。が、然し検事としての理性が僕の感情を抑へたのです。屍體から指輪を剥ぎ取ると云ふこと、それは普通な人情から云へば、どんな債権債務の關係があるにしたところで人間業ではないやうな恐ろしい事です。けれども、法律的に云へば、それは單に物の位置を移すと云ふことに過ぎないのです。

「よろしい」

僕は、さう苦り切つて答へる外はなかつたのです。お主婦は、一人では恐いからと云つて、刑事に付いて貰つて、屍體の置いてある部屋の方へ行きました。

お主婦の姿を見送つた僕の心は、憤懣とも悲しみとも、憂愁とも付かない、妙な重くろしいその癖張り裂けるやうな感情で、一杯になつて居たのです。

普通の人間が、死んだ場合は、縦令息は絶えて居ても、宛も生あるもの、如くに、生前以上に尊敬され、待遇されるのに、彼女は——生前腕きに腕いた彼女は、苛まれた上にも苛まれた彼女は——息が絶えると同時に、物自體のやうに取り

扱はれ、身に付けて居た最後の扮飾物を、生前彼女を苦しめ扱いた樓主から、奪はれなければならぬかと思ふと、彼女の薄命に對する同情の涙が、僕の眼の中に汪然と湧いて来るのを、何うすることも出来なかつたのです。

お主婦は、やがて指輪を抜いて來ました。見ると、それは高々八九圓するかしらないかの、十四金位の蒲鉾形の指輪なのです。僕は、その時ムラ／＼として、こんなことを云つたのです。

「お前、その指輪を、何うするのだ」

お主婦は、オド／＼しながら、

「あの子供に、借金が仰山ありますけに、これでも賣つて、足しにしようと思つて居るのです」

「さうか。ぢや、誰かに賣るのだな。賣るのなら俺に賣つて呉れんか。何程位するんだ、十圓なら安くないだらう」

「へえ／＼。結構です。けど、何やつてこんなものをお買になるのどす」

「まあ！ いゝし」

さう云つて、僕はその指輪を買つたのです。

その時、恰度俥がやつて來たのです。僕は、立ち上ると、お主婦が、不思議さうに見て居るにも、介意はず、錦木の部屋へは入つて行つたのです。そして主婦から買ひ取つた指輪を、元の瘡せ細つた指に入れてやつたのです。もう、十一月の半ばであるのに、屍體の上に、あせためりんす友禪の單衣し

か掛けないのが、何だか、薄ら寒さうに見えたのです。が、顔丈はまことに、眠るが如く眼を閉じて居たのが、その時の僕には、何よりの心やりでした。

僕は、僕の後から、僕が何をするのだらうと、オツ／＼見に來たお主婦に叱り付けるやうに云つたのです。

「いゝかい。此の指輪は、錦木のものぢやない。俺のものだぞ。もし、今度この指輪を取ると、ひどい目に合ふのだぞ」

僕は、お主婦が何か畏まつて、云つて居るのを聞き流して梯子段を降りたのです。

僕は、俥に乗つてから、立合の警部や刑事の手前、自分の最後の行動が、突飛であつたことを後悔したのです。が、後で悔いはしたものの、あの場合の僕は、あゝした行動をするやうな、不思議な興奮に囚はれて居たことは事實です」



# 晩年

## 一

農科大學教授永瀬秀三博士は、八百倍の顯微鏡の物體鏡に裝置してある、螢鳥賊の細胞から眼を放して、室内を見廻した。もう夫は夕暮に近かつた。何時もは、博士の研究が夜に入ると、手廻しよく瓦斯ランプに點火して行く老人の使丁が、今日は休みてゝもあるのか、誰も火を點けに来るものもなく、室内は、窓から這入る夕闇の暮るまゝに委されて居る。熱を伴はない發光體の研究——夫はもう博士が、此の四五年來、老來の力を傾倒して居た畢生の研究ではあつたが、仲間成功の域には近附かなかつた。

その日も午前二時間の講演を済してしまふと、博士は自分の研究室に歸つたまゝ、晝食の時間に這入つて來た助手の理學士と、二言、三言話した外には、机に向つたまゝ、別々な薬液を盛つた試験管の中に入れてある數疋の螢鳥賊を見詰め續けて居た。

壯年時代から博士は、ドンファンが、女から女へと戀愛の

巡禮を續けて行つたやうに、研究から研究へと、絶えざる努力を續けて行つた。その研究の経過の中に、非常に解き難い難點に逢つた時などは、博士の研究室の燈は、終夜燃え旺つて居た。或る難しい研究と取組合つて、殆ど自分の能力を極度に迄、緊張させて居る時などでも、博士の強健な意志はビクともしなかつた。其上、さうした苦しい努力が、一月も二月も、續いた後、定まつて天來の靈感と云つてもよいやうな、輝かしい思付が、必ず博士の頭の中に閃めいた。その思付に依つて改めて研究を進めると、今迄の難點と思はれた節々が熱火の上に置かれた霜のやうに解けて行くのであつた。その度毎に、博士は、勇將が不落の名城を落したやうに、蕩兒が手強かつた女を征服したやうな、烈しい快感を感じるのであつた。

實際、さうした快感の紀念物は、今でも博士の研究室に充ち充ちて居る。彼の机の一隅に置かれてある標本塚の中に、何千と云つてもいゝやうな、無數の螢鳥賊が、ウチヨ／＼と詰め込まれて居るが、その塚のレットルには Nagasenia Sei-

ntilius Berry. ——と、博士自身の名を冠した學名が記されてある。無論之は博士の研究室ばかりでの私稱ではなかつた。世界のありとあらゆる動物の標本室に、其處に螢鳥賊のある限は、夫は博士の名を冠して、呼ばれて居る筈であつた。世界のありとあらゆる動物學の著書に於て螢鳥賊が指名さるゝ限は博士の名を冠せらるべき規約であつた。夫は學者として、輝かしい榮譽には相違なかつた。が、博士が四十を超してからは、彼のライフウオークの中に、業績が一つ宛加へらるゝに従つて、博士の頭髮がその白さを加へて行つた。博士は、老衰が段々自分の身に迫つて來るのを感じた。が、我執の強い博士は、自分の老衰を信じまいとした。そして、老衰の兆候が、少しでも現はれかゝると、博士は意地になつて打ち勝たうとした。が、博士のさうした意力にも拘らず、遂四五年前迄は、幾時間も参考書と首引きをして、ピクともしなかつた博士の視力が、此の頃では、三十分も細字を見詰めて居ると、何時の間にか視野がぼ／＼として、小さい外國語の活字が蟲のやうに蠢めいたり、活字の列と列とが重つたり離れたりした。

その上、あの輝かしい思付、どんな難問題と取組んで居る時でも、最後には必ず燦然として、博士の頭腦に閃めいて來る思付が——夫に依つて、對象の難問題を見事に征服し得る思付が、此の二三年、一度も博士の頭を襲つて來る事がな

つた。螢鳥賊の發光細胞の研究——夫はさして至難とも云ふべきものでもない、博士は思つたにも拘らず、博士は何時になく此の問題に停滞して居た。やつと成功の曙光を認めたと思つて居ると、何時の間にか凡ての経過が、循環小數のやうに遊戻りして、出發點に歸つて居たりした。

二三ヶ月來、博士は、此の研究に就て、決定的な最後の實驗に取りかゝつて居た。今度の實驗に成功しない場合は、博士は、出發點たる最初の臆説を、變更しなければならぬ羽目に陥つて居た。

が、その實驗は、此の一月ばかり何んなに努力しても、少しも發展しなかつた。彼は幾度も方法を換へて見た。何の方法も、何の方法も、彼に満足を與へなかつた。が、おしまひには、何の方法が一番完全に近いのかさへ分らない程、落莫たる心持ちになつて來た。その上、二三時間も研究を續けると、頭の中が滓が溜るやうに濁つて來ると共に、身體の凡ての筋肉に重苦しい疲勞を感じるのであつた。彼は此十日ばかり自分の研究に紛らしがたい倦怠を感じて居た。博士はさうした心持を、成るべく自分で認めまいとして研究に出精したが、博士が反動的に出精すればするほど、その倦怠は反噬し始めて居た。

博士は何氣なく室内を見渡した。標本塚の置き散らかされである研究室の中は、薄暗くボンヤリと暮れかゝつて居た。



博士は勞れ切つた頭を、二三度振つて見た。が、其處には潑  
 瀾たる何物も残つて居ないやうな氣がした。博士は、少しく  
 熱があるのではないかと思つた。身體の上半身が何時もより  
 も懈く、凡ての感覺がいら／＼しく博士の心持を擾して居た。  
 博士は、起つて呼鈴を押して小使を呼んで、瓦斯燈に火を  
 入れやうと思ふ意志が、先刻から動いて居たが、さうした些  
 細な動作をする事さへ氣の進まぬ程の疲勞を感じて居た。  
 段々四邊が暗くなつて行つた。窓越しに見える校庭の雜樹  
 林が、闇を吐き出すやうに、その周圍を闇の中に包んでしま  
 った頃には、研究室の中には、標本塚の螢鳥賊が其の蓄へて  
 居た墨を、悉く流したかのやうに暗澹として暮れてしまつて、  
 博士の机の上にある、アルコール漬の螢鳥賊が、無氣味な燐  
 光を放ち始めて居た。机の上に三つと、右手の棚の上に五つ  
 か六つか置かれてある、一尺に餘る標本塚の中に、アルコー  
 ルに漬けられて居る何萬、恐らく何十萬と云つてもよい程の  
 螢鳥賊が、銘々に微かな青白い微光を洩らし始めて居た。そ  
 の蒼白い光が、部屋中を薄青く照らすと、同じ色の光を部屋  
 中にある凡ての標本塚が反射して居た。夫は博士が今迄も度  
 度經驗した事であつた。燈火のない場合、螢鳥賊の屍體が微  
 光を放つことは、何でもない現象であつた。が、今宵は蒼白  
 く無氣味な光を放つ物體が、何となく氣味悪く思はれた。殊  
 にその光の本體が、未だに博士の知識と、研究との力の及ば

ない、自然の秘密に屬して居ることが、更に博士の心を脅か  
 して居た。彼はその仄白い光をたよりに、おろ／＼室内を見  
 廻した。博士の直ぐ背後には、高さ一間にも近い硝子の壘が、  
 幾本となく置き並べられてあつた。その最も手近な一本の裡  
 には、一間に餘る鋸鯨が、その扁平な口嘴で、蓋を突き上げ  
 さうにしながら、醜い灰白色の身體をうねらせて居た。直ぐ  
 その隣の本には、紅褐色の横斑が、もうすつかり黒ずんで  
 しまつた巨大な猫鯨が、その無恰好な頭を窮屈さうに擡げな  
 がら、身體の下半身をアルコールの中に、のたうたせて居た。  
 その隣の一つには、黒褐色の袖鯨が、その二つの鰭を古着の  
 袖のやうに垂しながら、眞一つに割れた腹部を露出しながら、  
 磯の中に直立して居た。その腹の中には、もう一様に泥色に  
 變色してしまつた内臓が、ピロピロとアルコールの中に透い  
 て見えて居た。その向ふにあるのは恐らく尾長鯨であらう、  
 太い蛇のやうな尾が、硝子にピタリと密着して居た。博士は  
 茫然として、之等の鯨の一群を凝視して居た。それは十年程  
 前に博士が、鯨類の研究をした時以來、毎日見馴れて殆ど氣  
 にも止めなかつた標本である。彼は、夫に對して今迄一度も、  
 ショックを感じたことなどはなかつた。夫は博士が、學術的  
 に悉く征服してしまつた動物の屍體に過ぎなかつた。が、今  
 宵は自分の解きかねて居る螢鳥賊の、怪しい燐光に照し出さ  
 れて居る爲でもあらうか、それ等の怪奇な形態が、博士の勞

れて居る神経を、不思議に脅かし始めて居た。博士は、ふと  
 その中に交じつて居る足鯨の、青白色の物凄、腹部を見ると、  
 彼は不快な物でも見たやうに顔を背けた。が、机の上に目を  
 返すと、博士の直ぐ眼前の卓上に蒼い微光を放つ螢鳥賊の屍  
 骸が、博士の努力を嘲るやうに先刻よりも一層光力を増して、  
 光つて居るやうに思はれた。彼は、その光を避けて左の方を  
 見た。其處の標本塚には、灰色をした魚の屍體を詰めた標本  
 塚が、幾十となく並んで居た。その多くは腹を割かれて、そ  
 の内臓を淺ましく晒されて居る。その棚の一隅には、三尺も  
 ある牛鯨が、ムジャ／＼と毛の生えて居る長い觸角を左右に  
 振り立てながら、大きいアルコール壘の中に、幾匹となく蟻  
 つて居た。

博士は、研究室に充滿して居る、不快な、淺ましい動物の  
 屍骸の壓迫から逃れて、何等かの慰安を求めらるやうに、部屋  
 中を見廻した。が、何の隅にも、何の隅にも、動物の屍骸が  
 一杯に重つて居る。博士は、科學者の常として、彼は今迄か  
 うした情景から、神經の末梢をさへ刺戟されたことはなかつ  
 た。が、博士は今宵に限つて不思議に自分の心に湧いて来る、  
 自然に對する人間の無力オシバトの感じを、何うともする事が出来  
 なかつた。動物の凡ての秘密を探り盡してしまつたと云つた  
 やうな、之迄の誇が、心の裡に薄れて行くに従つて、今迄輕  
 蔑し切つて來た動物の屍骸から、妙な脅迫を受けて居る自分

に氣が附いた。その上、身體に熱があつて、嗅覺が異常に刺  
 戟され易い爲であらうか、何時もは嗅覺に馴れ切つて居るア  
 ルコールの臭——否、アルコールに漬けられた動物の死體の  
 臭氣が、堪えられないやうに、博士の鼻を襲つて來始めた。  
 永い年月の間、少しも感じなかつたその臭氣が、初めて夫を  
 喚く者が感ずるやうに饒えた腐敗物に付き纏ふやうな臭氣が  
 堪らなく不快になつて來た。彼は最終には、嘔吐をさへ感じ  
 始めやうとした。博士は先刻から無意識の中に自分の研究室  
 に對してある輕い恐怖と増悪とを、懐き初めて居た。その感  
 情を彼が自覺すると、それは、一秒一分毎に昂騰して、何時  
 の間にか彼の全身を包んでしまつて居た。彼は一刻も早く此  
 處から逃れたいと思つた。彼は、立ち上つて呼鈴を押して、小  
 使を呼ばうかと思つた。が、さう思つて立ち上る途端、彼は  
 一刻も此の部屋に居た堪れないやうな淋しさに襲はれた。  
 彼は電氣に打たれたやうに立ち上ると、其處にあつた折袍を  
 携へるや否や、逃げるやうに椅子から離れた。その時、彼が  
 折袍を取り上げやうとする、急激な動作の爲に、一本の試験  
 管が、床上に跳ね落されて、音を立て、碎けた。が、彼は、一途  
 振り返つて夫を檢べて見る氣にもならなかつた。彼は、一途  
 に部屋を出やうと焦つた。が、扉のハンドルに手を掛けた瞬  
 間、何者かに強要されたやうな心持ちで、室内を振り返つて  
 見た。螢鳥賊の怪奇な發光の爲に、醜惡な動物の屍體を含ん



だ、凡ての標本塚が、ぼんやりと光つて居た。そして、博士が、夫等に一瞥を與へた途端、その中にある凡ての動物が、一時に蠢き出したやうな幻覺を感じた。

二

博士は、研究室を後にするとボンヤリとした電燈の光が、薄暗く照して居る廊下を、足早に駆け抜けて校庭に出た。

夫は、秋の夜であつた。校内の雑木林に、ざわ／＼と冷たい風が吹き渡つて、空には凍て付いたやうな疎な星が光つて居た。彼は追はれるやうにして、校門を出た。何時もは學校から同じく郊外にある自宅迄の、十町に餘る道を、その日の研究を了へた、のう／＼とした心持で悠然と辿るのであつた。が、今宵の老教授の心の裡には、さうしたゆとりは、少しも残つて居なかつた。彼は、知らず／＼急ぎ足になる自分の歩調を何うすることも出来なかつた。

彼の心の裡には、陰惨な研究室に對して、ふと感じ始めた恐怖が、何うしても抜け切らずにゐた。銘々に、腹を割られた死魚の幻が、何うしても彼の眸から消えなかつた。二十年來見馴れた醜さ——全く平凡な、當り前の醜さが、今宵に限つて烈しい力を以て、博士の心の裡に喰ひ入つて來た。

彼は、之等の暗灰色の幻を拂ふ爲に、一時も早く自分の家へ急ぎたかつた。何か暖かいもの、何か華やかなものに纏り

付きたいやうな心持であつた。

彼は、途中の道を、平素よりは五六分も早く歩いて、家に歸つて來た。宵ながら、人通りの絶え勝ちな横町にある自分の家の、黒い門には、電燈も點つて居なかつた。潜り戸を開けると、夫に點いて居る鈴がガラ／＼と淋しい音を立てた。が、夫に對して博士の家は、空家か何かのやうに、何の反響も起らない程、森閑として居た。今迄歩いて來た戶外よりも、もつと暗い闇が、自分の家を包んで居るやうに博士は思った。玄關の障子を開けると、何時ものやうに、其處に召使ひの老婆が立つて居た。冷たい顔の女だつた。博士の顔を見ると黙つて顔を下げた。此の女は愛相口を一度さへも利いた事のない女であつた。彼女は、唯精確な機械のやうに、博士の身の廻りの用を足して居た。博士よりも、十ばかり年上の彼女は、もう二つの頬の肉が、スツカリ殺け落ちてしまつて居た。獨身主義の博士は、此の女に凡ての家政を委してあつた。旗本の娘であつたと云ふその老婆は、用事の外には博士に對して何も口を利かなかつた。博士の家に來た當時、未だ家政に馴れぬ頃には、夫でも主人の博士と打合はさぬばならぬことが、月二三回宛はあつたが、此の頃では、もうスツカリ馴れ切つてしまつて、博士の嗜好や、習慣などを、微細な點迄呑み込んでしまつた。従つて、色々な仕事は、機械的に命令を待たずに行はれて、彼女は博士と口を利く必要がなかつた。老婆

は自分の外に唯一人の女中を使つて、博士の用を何くれと、十分足して居た。研究に没頭して居る時など、博士は人から話しかけられることに依つて、緻密に整頓されて居る自分の意識が少しでも擾されるのを怖れた。初め老婆は、何かの用事で話しかけた後、博士が必ず機械嫌の悪いのを感じた。彼女は、成るべく博士に話しかけまいとした。その努力が習慣となつて、今では少しも話し掛ける必要がなかつた。彼女は、又自分の下に使つて居る小間使にも、博士に口を利くことを戒しめた。その女も、黙々として博士の手短かな命令を聽いて居た。

博士は、その夜に限つて、出迎へて居る老婆の顔から、冷めたい石膏か何かの彫像のやうな感じを受けた。夫に、彼女の横顔にある青痣が、今宵に限つて、明かに浮き上つて居るやうに、氣味悪く感じた。彼女は、何時ものやうに慎しやかに頭を下げて居た。博士の心に湧いて居る淋しさは、かうした全く機械的になつた老婆の動作には、何か知らず不満であつた。

彼は、老婆を尻目かけながら、自分の書齋に入つた。藏書の多い爲に、此處はだだびろく建てられた十二疊の、大きい部屋であつた。博士が入口の扉を閉ざすと、夫に依つて押された空気が、向ふ側の書棚のガラス戸を、ガタ／＼と力無く動かした。博士は、何時も坐り馴れた椅子に腰をかけた。

彼は、自分の家の書齋へ、這入つたならば、自分の淋しさが

いくらか紛らされはしないかと思つて居た。が、彼の期待は周囲を振り顧つて見ることに依つて、裏切られて居た。彼の坐つて居る部屋の、左手の天井にも届くやうな書棚には、黒い装幀の大きい外國語の本が、幾つも／＼並んで居て、十一月の下旬の夜には、その冷えた背革からひえ／＼とした冷氣が漂つて居るやうに思はれた。その上、ふと氣が付くと、玆にも机の一角には、幽霊海月の標本塚が置かれてある。その五尺に餘る巨大な蒼ざめた身體を、小さい塚の中に、グニヤグニヤと蟠まらせながら、長短不同の無數の觸手を、フワリと海藻か何かのやうに、身體の周圍に纏ひ付けて居る姿を見ると、博士は又忘れかけて居た不思議な氣味悪さに、再び囚はれ始めた。彼は仕方のないやうに、その怪奇な動物をチーツと見詰めて居た。見詰めて居る裡に彼は、さうした奇怪な動物を丹念に採集しながら、夫に對する研究に、青年時代を浪費して來たことが、徒勞のやうに、考へられ始めた。さうした疑惑は、此二三年來、博士の頭の中に時々浸じみ出て來る疑であつたが、今宵程、さうした疑惑が明確な形を取つて、頭の中に浮んで來たことはなかつた。彼は、標本塚から眼を外らせるやうにして、靜に瞑目した。博士の頭には、今迄自分が爲し遂げた業績が、次ぎ／＼に浮んで來た。大學を出てからの三年間を、彼は鰻の幼魚の研究に費した。夫が成功を



以つて了ると、彼は淡水魚に特有な、寄生蟲の研究をした。其の研究に彼は足掛四年の時日を費した。彼が此の研究を了つた時は、三十二の年であつた。先輩の教授達は、彼に妻帯を勧めた。が、旺盛な研究熱に囚はれて居た彼は、自分の注意を、少しでも家庭生活の方面に奪はれるのを欲しなかつた。夫からの彼の研究は、水産物の蝦、蟹、海月、鮫と移つて行つた。彼は其の一々の種類に就て、自然が其の種類の内に秘めてある秘密を、凡て探り盡したと思つて居た。夫は、自然に對する一種の勝利であつた。そして夫には、蕩兒が一人の女性から他の女性へと、其の征服を進めて行くやうな快感があつた。彼が、三十五の年になつた時、彼は再び妻帯を勧められた。が、彼は——かうした研究の快感に浸つて居た彼は、再びその勧誘に耳を傾けやうとはしなかつた。その内に四十歳が來た。獨身主義の篤學者——科學と結婚した永瀬博士——と云つたやうな賞讃が、大學の内外に傳へられ始めた。妻の代りに愛子の代りに、多くの書籍と無數の標本とが、彼の家中に充滿して居た。

博士は、もう一度室内を振り返つて見た。大學の研究室に比べると、明るい電燈の光が輝いて居る丈でも、賑かであつたが、大學の研究室で感じ始めた淋しさは、自分の書齋へ歸つて來ても、癒されなばかりでなく、益々博士の身の廻りに、鬱積し始めて居た。博士は、さうした淋びしさを感じ

ながら、自分の今迄の研究、夫が何れ程、世を利益し、自分を利益したかと云ふことを、考へて見た。彼の研究の對象であつた鰻の幼魚にしる、魚の寄生蟲にしる、鮫にしる、蝦にしる、夫は人間の本當の生活とは、殆ど何の交渉も持つて居ない動物に過ぎなかつた。殊に彼が、その研究に依つて博士號を贏得した淡水産魚寄生蟲——肉眼に見られない程の自然界の微生物の研究に、自分の壯年時代を費消して來た事が全くの徒勞ではなかつたかと、博士は疑つて見た。自然界の征服、その秘密を探究すると云つたやうな、彼の誇も、否科學全體の誇も、螢鳥賊——僅か三四分の肉體しか持つて居ない螢鳥賊の細胞に打つかると、もう一步も前へ進まれなくなつたのだ。

さう考へて來ると、さうした研究に没頭して、人間としての家庭生活も、妻の愛も、子の愛も味はずに、もう取返しつかぬ老境に身を入れたことを、博士は、淋びしく考へずには居られなかつた。博士と同じ方面に進んで居る、同僚の誰彼の事を考へて見た。が、彼等は皆、博士ほど夢中にはならなかつた。博士ほど、ムキにはなつて居なかつた。博士號でも得ると、皆いゝ加減の所で腰を落ち着けて、妻も娶れば供も儲けて、幸福な夫であり、慈夫であつた。彼は自分一人餘り、眞劔になり過ぎてやり過ぎてしまつたのではないかと思つて見た。

博士がかうした取止めもない妄想に耽つて居る時に、博士の書齋の柱に取り付けてある呼鈴が鳴つた。夫は、夕食が出來たと云ふ知らせであつた。書齋には、殆ど人を入れたくないと云ふ希望から、博士は食事の知らせを受くる爲に、呼鈴を裝置してあつたのだ。

何時もは、呼鈴の機械的な報知を聞くと、博士は、機械的に立上つて、食堂へ行くのであつた。今宵は、少しも人間味の伴はない、さうした報知を耳にすると、淋びしく焦だつて來る自分の心を抑へる事が出來なかつた。

「貴君！ 御飯でいますか」とか「お父様、御飯よ」と、云ふやうな家庭的な夕飯の知らせを聞きながら、夕飯の團圓に就く一般の主人のことを、博士は私かに思ひ浮べると、索寞たる心持になる自分を何うする事も出來なかつた。博士は、夫でも立ち上つた。食卓へでも就いて見たら、かうした淋びしさを幾らかでも、紛らすことが出來るかも知れないと思つた。が、博士が一間を隔て、居る食堂に這入ると、其處の卓には、何時ものやうに唯一人前の食事が、置き並べてあつて、夫に對しては、唯二脚の椅子丈が置かれてある。そしてその一脚には、何時ものやうに、召使の老婆が給仕の爲に黙つて坐つて居た。

博士は、空腹を感じて居る筈であつたが、食欲は少しも起らなかつた。彼は、老婆には少しも注意を拂はないやうに、

自分の椅子に腰を下した。彼は、今迄食事の時、殆ど口を利いたことがなかつた。が、この晩は、何かに向つて物が云ひたかつた。誰か人間と話がしたかつた。が、自分の眼の前には、唯一の話對手として凋びた、博士の訓練に依つて、凡ての感情を搾取されてしまつたやうな老婆が、ぼつねんと坐つて居る丈であつた。話しかけるにしても、少しも緒がなかつた。博士は、黙つて飯を食つて居た。彼は、心の裡に湧いて來る淋びしさを、飯と共に噛みしめてゐた。

博士が、漸く飯を喰ひ終る頃、何時になく訪問客があつた。博士が、此の時の訪問客を欣んだのも無理はなかつた。博士は之迄殆ど凡ての訪問客を謝絶して居た。殊に夜中はさうであつた。且つて農科大學長が、態々新任の挨拶旁々、博士を訪問して來た時にさへ、玄關拂を喰はした事が、博士の學者氣質と硬骨とを現す逸話として、太學内に傳へられたことがあつた。が、今宵は、その訪客が、何んな低級な、何んな下らない用事で來たにしる、博士は會つて見たいと云ふ氣がした。彼は、女中が、紋切形の謝絶の言葉を述べて居るのを横越しに聞くと、飯を喰ひさしにして、玄關へ飛び出して行つた。

「やあ！ 先生でいますか」と、その男は玄關先の薄闇の中で、丁寧に頭を下げた。ほの暗い火光で透かして見ると、夫は、且つて博士の下に、助手として働いて居た事のある笹



山と云ふ理學士であつた。  
「やあ、笹山君か」と、博士は懐しみの籠つた、歡喜に近い聲を上げた。笹山理學士は、寡黙な老年の博士が、今迄にないやうな人懐い顔色と言葉とを、自分に對して投げて居ることを、寧ろ訝しくさへ思つた。

「今大學の方へ参りました處が、お歸りになつたさうですから、續いて此方へ伺ひました。先生は夜中は客にお會ひにならないと云ふ噂を聞いて居ましたから、如何かと存じましたが、實は差迫つて用事が出来ましたので」と、彼は、不意な訪問を衷心から謝して居るやうであつた。

「いやあ、そんなことがあるのですか。君のやうな人は何時だつて歓迎します。さあ、何うか通つて呉れ給へ。今夕飯を食つて居ますが直ぐ済みますから、少々お待ち下さい」と云ひながら、博士は、理學士を自分の書齋に導いた。

博士は自分の空莫な家を、華やかな人間の世界から、見捨てられて居る洞窟か何かのやうに、感じ始めて居た所であつたから、若い理學士の訪問して來たことを、何んなに欣んだか判らなかつた。少くとも自分と四五年間、同じ研究室の中で、顔を見合して居た此の男に於て、自分の感じ始めて居る今宵の淋びしさを、少しは理解して貰へるかも知れないと思つた。

博士は、手早く食事を終つて、書齋に出て行つた。師弟の

間に久瀨を叙する挨拶が交はされた。理學士は繼て、言葉を改めると、

「實は、先生の二十五年勤續祝賀會の事ですが、慇々先生に贈呈する油繪も、すつかり出来上りましたので、來週の土曜日あたりに、上野の精養軒で祝賀會を催したい積りてゐますが、先生の御都合は如何てゐますやうか」と、云つた。

博士は、相手の言葉を聴くと、深い失望を感じずには居られなかつた。半生の生活に對する疑惑と寂寥とを、少しでも此の男に訴へたいと思つて居たのに、相手から思ひがけもなく、自分の半生に對する祝賀會に就ての相談を持ちかけられたのであつた。

博士は、不快な報知をでも聞いたやうに、心持肩を翠めた。二十五年勤續の祝賀會など、自分の半生が、果して人間の本當の生活として、他から祝賀されるべきものであるかどうかと思つて見た。自分が、今宵、はからずも夫に就いて消しがたい淋びしさを感じ始めて居る自分の之迄の生涯の道程が、果して夫程祝賀されるべきものであらうかと思つた。

「あゝ、あの話ですか。今年の春、初めてあの話が出た時、何だか僕は有耶無耶に聴き流した積りでしたが、もうそんなに進んで居るのですか。僕の勤續を祝つて呉れる！こんな、やくざな半生を祝つて呉れる。僕は此頃今迄の生活を、つくづく後悔し始めて居るのです」と、云ふと博士は、かすれた

やうな聲を出して笑つた。

「いや御謙遜をなさつては困ります。先生の勤續祝賀會の催しを各方面に通知しました處、非常な賛成でありました。祝賀會の當日には、文部大臣も、大學總長も臨席せられると云ふ内諾を、得て居るやうな次第でゐります」  
「ふむ／＼と、博士は聴き流した。

「文相も、祝辭を讀まれると云ふ事ですが、日本動物學會でも、會として先生の爲に、祝文を奉呈しやうと云ふ計畫ださうでゐます。門下生の祝文は、私が總代として讀むことになつて居ます」と、理學士は、老教授の光榮を自分のものでもあるかのやうに、ニコ／＼欣んで居た。

老教授は、理學士の人の好きさうな欣びを見ながら、何だか、くすぐつたいやうな寂莫を感じて居た。自分の半生が徒勞であつたのではないかと、つく／＼疑ひ始めて居る時に、自分の心持とは全く没交渉な、お祭り騒ぎ的な賞讃を浴びせやうとする周圍に、世間に、博士は、素直に感謝しようと思ふ心持は起らなかつた。彼は、何うかして祝賀會から逃れたと思つた。が、祝賀會から逃がれるよりも、自分の現在の生活から逃れる方が、もつと重大な事ではあるまいかと思つた。彼は暫く考へてから、急に決然として、

「よろしい！ 當日は必ず出席します。何うか諸君によろしく云つて呉れ給へ」と、冷めたい聲で云ひ放つた。

三

十一月も押し詰つた最後の土曜日に、永瀨博士の爲に、二十五年勤續の祝賀會が開かれた。定刻の五時が近づく頃には、精養軒の廣庭は、フロツクコートを着た老教授達や、學校を出たばかりの若い學士や、金銀の學生で一杯に埋まつて居た。新任になつてから間もない政黨出身の文相が、半白の鬚髯を扱きながら、周圍に愛嬌を振り蒔いて居た。教育家出身の貴族院議員や、教育事業に熱心な實業家の顔も見えて居た。四百に近い會衆は、此の目出度い祝賀會に際して、何の屈托もなささうに談笑して居た。

五時を少し廻つた頃に、着席を求め振鈴が、鳴り響いた。皆は廣場に設けられた式場に着いた。司會者が、開會の挨拶をした。と、嵐のやうな拍手に迎へられて、永瀨博士は、その白髪交じりの頭を、正面の壇上に現はした。之迄、見馴れて居る顔であるにも拘はらず、農科の卒業生など迄が、物珍らしげに博士の顔を仰ぎ見た。まして會衆は、熱狂に近い程の喝采を、科學界の權威たる此老博士に浴せかけたのである。發起人總代の近藤博士が立つて、博士自身の肖像と研究費として五千圓を、博士に贈呈することを報告した。

文相が立つて、簡単な形式的な祝辭を朗讀した。總長の祝辭が之に續いた。一生を學術の研究に捧げ、討究倦まず……



とか、研究室を以て家となし、終身娶らず……など云ふ言葉が、深い感動を會衆に與へた。殆ど、總長の祝辭と同じやうな意味を、學長がその祝辭に於て、述べた。夫に續いて、五十通にも餘る祝辭や祝文や祝電が朗讀された。

永瀬博士は、會衆の席を離れて、自分たゞ獨り會衆に向つて坐つて居た。今迄も、此の同じ場所へ勤続祝賀を受けた教授達は、大抵は夫人と並んで主人公の席に着いて居た。殊に、

つい半月ばかり前に、茲て祝賀會を受けた今井法學博士などは、四十を越しては居るものゝ、美しい面影を残して居る夫人と、六七人に餘る子女を伴ふて、賑やかに祝賀を受くる主人公の席に着いて居た。その時の、今井博士の華やかな身邊を見た人達は、今永瀬博士の孤影悄然たる姿を見て、博士が科學的研究の爲に一生を捧げて、終身娶らなかつた學者的壯烈さに對して、敬虔な感嘆を懷かすには居られなかつた。

が、博士に對して、賞讃の辭が積まれ、感謝の言葉が重なつて行くにつれ、彼の面は何時の間にか蒼白になり、焦々した表情の皺が、額の左右に深く刻まれ始めた。

一時間に近い程、續いた祝辭祝文の朗讀が了ると、會衆は息を凝らして、博士の答辭を待つて居た。

博士は、その身體から、凡ての生氣を抜き取られた人間のやうに、力なく立ち上つて、二三歩前方に進んだ。白髪的光る疎な頭髪を、電燈の光に振翳しながら、會衆に面して立つ

て居た。憔悴が、今宵に限つて、歴々とその瘠せた双頬に現はれて居た。顔色が蒼ざめて居るのにも拘はらず、二つの眸のみが、異様の興奮を以て輝いて居た。會衆の期待を裏切つて、博士の顔には欣びの表情が、微塵も現はれて居なかつた。博士の顔の筋肉は、悉く硬化してしまつたやうであつた。時時思ひ出したやうにビク／＼と口の邊が、軽く痙攣するばかりであつた。

博士の言葉は、冷めたく微かな顫へを帯びて居た。

「私は只今、文部大臣を初、皆様の祝辭を戴いて、今更無爲に費した半生が顧みられて、慚愧に堪へないのであります」と、云つて博士は、暫く言葉を切つた。會衆は、博士の言葉を極度な謙遜として、満場を動搖して烈しい喝采を送つた。

「私の成し得た僅かの業績に比べますと、皆様のかうした御好意は過分至極なものであります。私が壯年時代から、今日迄全力を盡くして成し得たことも、今から考へますと、微微として無意義に近いものです。まして今後の私が諸君が今お述べになつたやうな期待に添ふことは、全く不可能のやうに思はれます。總長からのお言葉の中には、今後益々老來の勇を振つて、研究を續けて呉れよと云ふお言葉がありましたし、諸君が研究費として、五千圓を私に贈與されたと云ふことも、矢張りかうした意味からだらうと思ひますが、私は今年でもう五十九歳です。もはや、此上研究を續けて行く何等

の餘力もありません。實は、此の二十五年祝賀を記念とし、老後の光榮とし、之を機會に、大學の方を辭職いたすことに、決心いたしました。本夕、此席へ参ります前に、大學の方へ寄りまして、辭職届を書記の手元迄、提出して置いたやうな次第であります。従つて、私に贈られました研究費は、もはや私がお受けいたすべきものでないと思ひますから、之は農科大學の動物學教室の研究費として、お受けすることに致します」と、云ひながら博士は靜に頭を下げた。

其處に、目に見えない、然し可なり烈しい嵐が會衆の間に吹き起つて居た。會衆は、烈しい幻滅を感じて居た。が、その幻滅は悲壯で、而も可なり烈しい感動を伴ふて居た。暫くは凡てが沈黙であつた。やがて、氣が付いたやうに二三ヶ所て拍手が起つた。それが、暫らくたゆたふて居る裡に、やがて満場の潮のやうな拍手を惹き起した。一般の會衆は、學界の名譽を双肩に擔ふて居る博士の勇退的な辭職を、高潔な心理から出たものとして、賞讃の拍手を送らずには居られなかつた。

自分の席に就いた博士は、黙々として此の喝采を浴びて居た。

博士の突然な辭職を知つた總長や、學長の顔には、大きな狼狽の色が見えて居た。彼等は食卓に就いた後も、瀕りに首を鳩めて、ヒソ／＼と善後策を講じて居るらしかつた。

會衆の散會するよりも、一步先立つて會場を辭した博士は、上野の山下から新宿行き電車に乗つた。

二三週間以來の決心を、思ひ切つて遂行した博士は、晴々したやうな自由な心持に、浸つて居た。自分を繋いだ灰色の鎖から、初て解放されたやうな愉快を感ぜずには居られなかつた。然しそれと同時に、長い間の生活の殻を打ち捨てた残り惜しいやうな淋びしさが、心の底に潜んで居るのを感じた。

彼は、電車に揺られながら、老後の計を考へて居た。三年前から、懇請されて居る養鰻株式會社の、顧問になることを決心しやうと思ひ始めて居た。博士は、心の裡で大學教授から、會社の顧問になると、世間では、さうした轉職を、成金熱に浮かされた結果として、墮落呼ばはりするかも知判らないと思つた。さう思つた時、博士は、淋しい苦笑が自分の双頬に浮び上るのを感じた。



たちあな姫

——ある慷慨家の手記より——

十一月の終か、十二月の初頃でした。私は、その日珍らしく社から早く歸つて來ました。退社の時刻は、大抵六時——どんなに早くつても五時だつたのですが、其日に限つて、四時頃に社を出たやうに思ひます。

その頃は、江戸川縁の西江戸川町に住んで居ました。琴の師匠の部屋を借りて妻と一緒に暮して居たのです。その日、私は社から歸つて來ますと、久し振りで銭湯へ行きました。そして、ゆつたりとした氣持になりました。夕飯を喰べてしまつたのが、七時頃でしたらうか。私は、妻を連れて、神樂坂へでも、散歩に行かうかと思ひましたが、久し振りで湯に入つた故か、何となく眠氣がさして、此儘床には入つて、肩の凝らない雑誌でも、讀まうかと云ふ氣にもなりました。丁度その時でした。自轉車が、表で止まつたかと思ひますと『木村さん！電報！』と云ふ聲を、聴きました。

『電報！』と云ふ聲を聴く度に、私はいつも國に居る年の寄つた両親の事が電のやうに、頭の中に閃めくのです。そして『父キトク』だとか『母キトク』など云ふ文句が、ハツト

胸を衝くのでした。だから、私は電報と云ふ聲を聞いてから、夫を受取る迄の短くはあるが、然し不快な焦燥の四五秒が可なり嫌でした。私は、その日も何時もの通り不快なシヨクを受けながら、配達夫のは入つて來るのを待ちました。まだ若い配達夫は、表の戸をガタ／＼開けたかと思ふと、

『木村さん、電話郵便です。』と、云ひながら赤い小さい紙片を差出しました。何だ！電話郵便かと、私は何時も電話郵便の配達夫が、電報の聲を僭するのを、不當に思ひましたが、夫でもそれが電報でなくて電話郵便であるのを知ると、心が急に落着くのを覺えました。一體誰から來た何の用だらうと、思ひながら、私はその電話郵便を急いで讀みました。

『キフヨウアリ、スグデンワニカ、レ』と、ありまして、發信人の番號は新橋の五七〇番で、夫は紛れもなく私の勤めて居る新聞社の編輯用の電話でした。私は、『おや／＼』と思ひました。久し振りにいゝ心持になつて、早くから寝やうとして居る所を、引張り出されては堪らないと思ひました。一層のこと、何處かへ外出して居たことにして、十時を過ぎてか

ら電話をかけ、わざと急用の間に合はないことにしてやらうかと、思ひましたが、まだ社には入つて一年にもならない頃でしたから、そんな狡猾なことを、やる勇氣はありません。其上、急用と云はれて見ると、何だか氣が／＼りなので、私は不精無精で電話をかけに外へ出ました。が、電話をかける氣にはなりませんでしたもの、不當に呼び出された事に依つて、可なり焦々して居ました。電話と云つても、その近所では半町ばかり行つたすし屋にあるばかりでしたが、そのすし屋とも僅かな顔馴染で、電話を借りることは、一寸不快でしたがそれでも七八町もある自動電話へ行くのは、何う考へても業腹なので、私はやつぱりすし屋で借りる事にしました。亭主や女房などは、私の顔を、ジロ／＼見て居ましたが、幸ひ出前持の小僧が、私の顔を覚えて居ましたので、割合氣持よく電話を借りることが出來ました。が、私の心持は、休息に入らうとするところを、ムザ／＼と呼び出された爲に、可なり平かでありませんでした。交換手に番號を云つてからも、仲々先方て出なかつたので、私は益々いら／＼して、いつも電話で聞き馴れた社の交換臺の小供の聲がすると、私はいきなり、『何うして、もつと早く出ないのだ。』と、思はず險しい聲で怒鳴り付けました。私の聲を、ちゃんと知つて居る小供は、ドギマギしたやうでしたが、

『七番へですか』と、氣を利かして訊ねました。七番と云ふ

のは、社内電話で編輯の番號でした。『判つて居るぢやないか。』と、私は前と同じやうな、險しい聲を出しました。暫くすると、あゝもし／＼木村さんですかと、云ふ夜の編輯の佐藤君の聲が聞えました。

『急用と云ふことですが。一體何です。』と、私の聲は可なり荒々しく切口上でありました。『何うも、お呼び出して済みません。』と、佐藤君は何時もより丁重な言葉で謝りながら『實は、今夜の八時半に、露國の廢帝の皇女のタチアナ姫が、東京驛へ着くのですが、甚だお氣の毒ですが、之から一つ行つて下さいませんか。』と、云ひました。私は、夫を聞くと、何だ馬鹿／＼しいと思ひました。尤も二三日前から、西伯利亞のトボリスクに幽閉されて居た廢帝の皇女のタチアナ姫が、トボリスクを脱出して、米國へ渡る爲に、日本へ向ふと云ふ電報が、ハルビンや長春から二三通來て居ました。が、夫は荒唐無稽な流言に近いものと見做されて居ましたが、その日の前日には、つい手近の京城から、やつぱり同じ意味の電報が來ましたし、その日の午前には下の關から『タチアナ姫は露廢帝らしき人物と共に、只今當地通過、今夜午後八時半東京驛着の汽車にて東上せり』と云ふ電報が來て居たので、若しかすればと云ふ疑はあつたのです。が、その電報なら私が社に居た頃に、もう編輯で問題になつて居たものです。



『あ。……タチアナ姫の事ですか、それなら午前中から判つて居るのぢやありませんか。何うして私が社に居る時に云つて下さらないのです。』と、用を云ひ付けられた腹癩せに、私は佐藤君を詰りました。

『何うも濟みません。實は山崎君に頼む積で居たのですが、何時の間にかあの人か歸つてしまつて居ないので。それに山崎君の家は中野ですから、之から呼び出すのも大變なのです。何うです、貴君に行つていただくことは出来ませんか、外に英語の出来る人が居ないんです。お歸りになつて居る處をお呼び立てしてすみませんが。』と、佐藤君はいかにも、當惑したやうに頼むのです。一體その山崎と云ふ男が外人係と云ふ格で、外人に關する外交は、引き受けて居たのですが、一人て手が廻りかねるので、時々私が助けて居たのです。今日も恐らく編輯の方の考では、山崎か、てなければ私を、タチアナ姫の迎へにやる積で居たのを、私は四時になるかならない内に、そつと歸つてしまつたし、山崎も何時の間にか居なくなつたので、編輯の方で周章で出したのだと思はれるのです。が、夫にしても午前中に判つて居た事に對する手配りを怠つて居たのは、確かに編輯の手落ちと思ひましたから、私は内心頗る不満でした。

『私が行くことは、行つてもいいですが。タチアナ姫は、英語を話すでせうか。』と、云ひました。露國の皇女ですから、佛

蘭西語を話すことは、判つて居ましたが、英語を話すか何うかは可なり怪しいと思はれたのです。

『さうです、それが問題ですな。』と、佐藤氏も當惑の苦笑を洩したやうでしたが、『でも隨員の中には、一人位英語を話す人が居ると思ふのですが、一つまあ損にして行つて下さる譯には行きませんか。』と、佐藤氏は如何にも氣の毒さうに云ひました。雲を掴むやうな問題で、薄寒い晩に東京驛のプラットホーム迄引き出されることは、可なり苦痛でありましたが、職業柄是非もない事ですから、

『それなら行く事は、行つて見ませう。』と、私は不精無精に電話を切つてしまひました。

すし屋から外へ出ますと、戸外には木枯と云つてもよさうな寒い風が、江戸川傍の葉の落盡した櫻並樹を吹いて居ました。私は家に歸ると、妻をせき立て、洋服に着更へました。その時は、八時二十分位前でしたから、東京驛へ行くのには充分な時間はあつたのです。

電車へ乗つた後も、私はタチアナ姫が來ると云ふ事が、可なり馬鹿らしいやうに思はれて仕方がありませんでした。トボリスクで過激派の嚴重な監視の下に居る皇女が、無事に脱出して、長い西伯利亞鐵道の各驛を、見咎められる事なくして、通過したと云ふ事は、有り得べからざる不可能事のやうに思はれました。が、一方ハルビンから、奉天から京城か

ら、下の關から逐次に『タチアナ姫來る』の、電報が來て居る以上、夫に對して幾何かの信用を置かない譯にも行きませんが、若し事實タチアナ姫が八時三十分の列車で、到着したとすれば、何うだらうと思ひました。私は職業上タチアナ姫に話しかけなければなりません。露國皇帝の高貴な皇女に、プラットホームで、直接に話しかける。流麗な佛語でもならばともかく、ブロークンに近い英語で、無儀に話しかける。私は夫を考へると、ぐすぐつたやうな可笑しいやうな、夫かと云つて一種ロマンチックな氣持にならずには居られませんでした。やつぱり、かうした機會もあるのだから、佛語を少しでも覚えて置けばよかつた、學生時代にお役目のやうに講義を聴き放しにしたことが、一寸残念のやうにも思はれました。

東京驛前で、電車を降りると、あの廣い驛前の空地は、寒い風に吹き拂はれたやうに、人一人通つて居りませんでした。私は、外套の襟を立てながら急ぎ足で、驛内へはいると、入場券を買つてプラットホームへ急ぎました。まだ汽車の着く迄には、十分位間がありました。

プラットホームにも、人影は極く稀でした。出迎へと思はれる男女が五六人、プラットホームの中央の、待合室内に寒むさうに腰かけて居ました。私は、タチアナ姫が來る以上各新聞社の記者や寫眞部の連中の顔も、見えるだらうと豫期して居ましたが、まだ一人もそれらしい者は來て居ませんでした。

した。その裡に、八時三十分が近づくと、寫眞班の連中が、一人集り二人集り何時の間にか、六七人にもなつて居ました。顔こそ見知らないが、自分と同業の人らしい風采の男が、五六人プラットホームを彼方此方と歩いて居るのが、目に付きました。各社で警戒して居る以上、ヒョツとすると、タチアナ姫は來るのかも知れないと思ひました。さう思ふと、大帝國の皇帝の内親王と仰がれた人が、幽閉の地から身を以て逃れ寂しい薄幸な亡命の旅に上つて、異國の停車場の初冬の夜に、悄然として下車すると云ふ悲劇的な、然しロマンチックな情景が、二三分の中に起るのかと思ふと、私は自分の胸があるセンチメンタルな興奮に閉ざされるのを感じました。それと同時に、曾つて内親王であつた人に、一體どう話しかけてよいか、また先方が英語を話さなければ何うしようかと、云つたやうな職業上の不安を感じない譯には行きませんでした。

さうかうして居る内に、夜の闇の中に段々近づいて來る、列車の轟々たるどよめきが、聞え始めました。私は、その刹那以前よりも一倍烈しい焦燥と興奮とを感じました。見ると、寫眞班の連中もカメラの用意をし、助手は閃光器を右の手に高く差し上げながら、一等車の降りさうな箇所と覺しい所を、物色しながら、その方へ雪崩れを打つて動き出しました。私は、彼等のいかにも騒々しい動作に、一寸反感を感じましたが、職業上彼等と行動を共にしない譯には行きません。その内



に、汽車はブラットフォームを揺がせて、巨獣のやうな烈しい呼吸をつきながら、到着しました。列車の動揺のまだ止まない内に、一等車の窓近く群がり寄りながら、車内を物色しました。そこに土耳其帽を被つた五十位の露人と、その妻らしき婦人と、三人の娘らしい女が居りました。が、此の五人連の一行は、皆如何にも幸福さうで窓から首を出しながら、快活に赤帽を呼んで居る容子など、その中の一人が、タチアナ姫であるなどは夢にも思はれませんでした。

「後尾の二等室に居るのだ。」と、寫眞班の一人が呼んで、走り出すと、皆は風聲鶴唳と云ふ有様で、バタ／＼と下車しかけて居る乗客を押し分けながら、列車の後方を目掛けて駆け出しました。私は少し馬鹿／＼しくなりましたが、然し各社の連中が馳け出す以上、馳け出さない譯には行きませんでした。が、後尾の二等室を覗いて見ますと、いかにも容姿の閑雅な二十三四の外國婦人が、窓から半身を出して居るのが見えしました。

「やあ！ タチアナ姫だ。」と、寫眞班の一人がかう叫び廻すと、皆はカメラを一齊にその婦人の方に差し向けました。すると、その途端、記者らしい一人の男が、

「何だ馬鹿しい／＼。子供を連れて居るぢやないか。」と、云ひました。よく見ると、可愛い五つばかりの娘が、その婦人の傍から、首だけ出して窓外の物々しい騒擾を、珍らしげに

見て居るのです。いかに、タチアナ姫が脱出に苦心をしたと云つても、過激派の眼を眩ます爲に、幼児を携帯して居るなど、は想像も及ばないことでした。寫眞班の連中は、失望して元の一等車の方へ引き返さうとしました。その時でした。

丁度一等車の前あたりで、ポーンと云ふ烈しいマグネシウムの爆發の音が聞えました。「やつぱり先刻の五人連だ。」と、一人が云ふと、寫眞班の連中は、必死になつてその方へ馳けつけて行きました。ポーン／＼と云ふ、烈しいマグネシウムの爆發が絶間なく續きました。私は、再び胸の詰るやうな興奮を感じました。やつぱりタチアナ姫は居たのだと思ひました。が、その活劇の場所へ来て見ますと、寫眞班の連中の的になつて居るのは、先刻の五人連の一行の中の一番年上の娘でした。が、その女がタチアナ姫でしようか。寫眞班がカメラを向けると、巧みに身體を躲しながら、避けて居るばかりでなく、いかにも可笑しさうに笑ひ崩れて居りました。

亡命の内親王とは、似ても似つかぬ女でした。が、寫眞班の連中は、先方が避ければ避けるほど、完全にカメラの中に収めやうと、執拗く後を追かけて居ました。又その姉妹に年下の二人の娘までが、からんてキヤツ／＼と笑ひながら、逃げて行くところは、何かの喜劇の場面のやうに思ひました。私は「とんだタチアナ姫だ」と思ひましたが、職責上確める必要があると思ひましたから、土耳其帽を被つた露西亞人が、

娘達の後から急いでブラットフォームを去らうとするのに、やつと追付いて、

「失禮だが、貴君は英語を話せるか。」と、英語で訊きました。すると、その露西亞人は、微笑を含みながら、

「ノウ。」と、答へたまふ、ずん／＼歩いて行きます。その微笑はやゝ皮肉を帯びた微笑で、もう下の關以來度々此の一行が、タチアナ姫云々の嫌疑を、受けたことを明らかに語つて居るやうでした。私は、その上追及する氣にもなりません

が、全體として私の感じた興奮は、さう不快なものではありませんでした。私は社へ電話をかけた後、更けて行く寒い晩をさう不平も起さないうで、自分の家へ歸つて来ました。

翌日の新聞を見ますと、『東京驛頭の喜劇』など、云ふ二段ヌキの表題で、昨夜の光景を面白く書き立て、ある新聞もありました。中には『タチアナ姫と誤られたる婦人』と題して昨夜の年上の娘の寫眞を、載せて居る新聞もありました。諸新聞の記事を綜合して見ますと、此一行はハルビン邊から絶えず、タチアナ姫の一行と間違はれて、方々で喜劇の種を蒔いて來たらしいのです。

露西亞の皇室に、四人の内親王があると云ふことは、前から知つて居ましたが、タチアナ姫と云ふ名に特に親しみを覺えたのは、此事件があつてからです。従つて私は此事件があつ

て以來、その當時トボリスクに幽閉されて居た露廢帝の一家に就いて、人一倍の注意を拂ふやうになりました。

此の事件があつてから、一月ばかり経つた頃でした。私は倫敦ロイテルが『タチアナ姫は、米國に向ふ途中倫敦に來れり』と、報じて居るのを見ました。私は、タチアナ姫が、トボリスクを脱出したのは、兎に角本當で、日本へ來ると云ふのは嘘で、その實は英國へ渡つたのだと知つて、此の薄倖な皇女の爲に欣ばずには居られませんでした。

その後、暫くしてから露廢帝の一族が、トボリスクからエカテリンブルクに遷されたことを知りました。その電報が來た時、私は露國大使館を訪うて、書記官か誰かにエカテリンブルクの位置などを、訊いたことを覚えて居ます。

その後、二月も経つた頃でせう。露廢帝が過激派の爲めに弑逆されたと云ふ電報が、世界の耳目を駭かしました。確か前皇太子も同時に毒手に倒れたと云ふ電報だつたと思ひます。私が、その電報を携へて露國の大使館を訪問しますと、若い書記官が、顔を蒼白に變へながら『恐ろしい事です』と、たゞ一言云つたのを覚えて居ます。が、あゝ、した烈しい革命のあつた以上、皇帝の身にかうした慘禍が、振りかゝつて來ることとは、逃れがたいことではあるまいかと思ひました。

が、その報知に接してから、五六月も経つた頃です。露廢帝一家のことなどは、世界の人達がいづのまにか忘れてしま



つたやうに私も忘れて居ました。夫は、確か、十月のある晩の事でした。その頃本郷の眞砂町に引越して居た私は、妻と一緒に本郷の通に買物に行きました。三丁目の角の店屋で、妻が履物を買つて居る裡に、私は何時も買ひ馴れた夕刊新聞を買ひました。

私は、何心なく社會部面に目をやりますと、ふと其處に『エカテリンブルグの慘劇』と云ふ、二段抜きの記事が目につきました。そして脇表題は『露廢帝一家の悲惨なる最期』と、付いて居ました。

私は、かうした記事に對しては、最初から面を反むけて讀むまいかと思ひましたが、人間の好奇心はその事が殘虐なれば、殘虐なるほど尙喰られるものです。私は、不快な然しながら興奮した心持で讀み始めました。夫は、私が生れて以來讀んだ色々な記述の中で、最も殘忍な慘虐な事を、記したものであつたかも知れません。露廢帝の一族が、エカテリンブルグのある家の地下室で、獸の如き過激派の手に依りて慘殺された實相が、可なり精細に書かれて居ました。その内の一節に『之等十一人の番兵は、毎夜皇女達を拉して階下に連れ行きて凌辱したるも、廢帝は之を如何ともし難かりき』と書いてありました。私は茲まで讀んで來ると、胸の中に湧いて來る烈しい義憤を抑へることが出来ませんでした。が、私はあの夕チアナ姫文は、露廢帝の一家の中で一番自分に馴染

深いあの夕チアナ姫文は、米國へ逸早く逃れた爲、此の悲惨な運命から逃れ得たうらうと、夫をせめてもの慰めとして讀み續けて行くと、一番最後に『夕チアナ姫は一彈を受けたるも死切らざりし爲、彼等は銃床を以て之を撲殺したり』と、ありました。

私は、茲まで讀んで來ると、自分の胸中が云ひ知れぬ憤と悲みで一杯になるのを感じました。日本へ來ると云ふ噂が嘘であつた如く、倫敦へ行つたと行ふ噂も嘘なのでした。東京驛頭で、滑稽な喜劇が夕チアナ姫の名に於て、行はれて居た時にも、姫はトボリスカの修道院の暗い一室に、暗憺たるその日その日を暮して居たのでした。

私は、無論ロマノフ家に對して何等の恩怨がある譯でもなく、帝政を讚美し過激主義を排斥するものでありませんでした。又、廢帝の一族が、何んな殘虐な運命に逢はふと、私の實生活はその爲に寸毫も、影響を受ける譯でもありませんでした。併し、私の感情は此の記事の爲に、底深く抉ぐられたやうに思ひました。つい昨日迄は、内親王であつた人達が、名もない過激派の番兵の爲めに、辱しめを受けた上に、豚の如く撲殺されたと云ふことは、何う考へ直しても諦めが付きませんでした。『露國の一億に近い民衆が、自由を得る爲めの犠牲だ』と、考へ直して見ましたが、ロマノフ家の専制に少しも關係のない女性が、生命ばかりでなくその貞操迄も蹂躪

さるゝと云ふことは、何う考へても忍び得ないことだと思ひました。今度の戦争の爲めには、幾百萬人と云ふ人間が死んで居る。その内、二人や三人の人間が、帝王の血を持つて居やうが居まいが、何でもないではないかとも、思ひ直して見ました。が、何故、之等の内親王が、戦争で死んだ者の中で一番慘酷な死方をしなければならなかつたのでせうか。かう考へて來ると、私の胸の中の快々たる憤は、何うしても抑へることが出来ませんでした。

私は、一緒に連れ立つて居る妻が、何かと買物の話をするのを聴き流しながら、何うかして不快な憤に對する排け口を見出さうとしましたが、夫は排け口のない憤で何うしても夫が口に出ないのでした。かうした慘酷な無殘な事が、人類の世界に行はれたと云ふことを、口にするさへ、不快で堪らなく思ひました。私は、なまじかうした事實を妻に話して彼の女の心持を傷けることが、不親切のやうに思はれましたので、その夕刊をむしやくしやに揉んで、傍の溝の中に何氣ないやうに捨て、しまひました。

が、新聞は捨て、しまつても、その記事の活字の一字々々迄が、頭の中に刻み込まれたやうに明瞭に浮んで來るのです。廢帝一族の最期の有様が、色々な情景となつて頭の中に浮んで來るのです。自分の實生活とは、何等の關係がないにも拘はず、私はその頃に之程心を刺戟されたことは、ありません。

自分で、今迄信じて居た人間性の制限が——どんな悪人でも之以上の事は、爲し得まいと思はれる人間性の制限が、無殘に破られた爲かも知れません。人間の不幸の極限、どんな事があつても夫以上の不幸が、世界に存在はずまいと思はれる不幸の極限が、之等の人々に依つて撤廢された爲かも知りません。佛のルイ十六世夫妻の死、英のチャールズ二世の最期なども悲惨と云へば悲惨でせうが、そこに悲劇的な美しさが、感ぜられないことはありません。が、露廢帝一族の最期には、あさましい現實があるばかりです。自分の皇女が、過激派の手に苛なまれるのを見て居た廢帝の、心持ほど心持を持たされた人が、世界に夫ほど澤山存在したとは思はれませんでした。

私は、その晩遅く迄眠むられませんでした。翌日起きて見ましたが、その不快な心持は、少しも緩和しては居ませんでした。私は、かうした凄惨な事に對して、何の新聞か義憤の叫びか、同情の聲を擧げるだらうと、其の日の朝刊新聞を見ましたが、もう何等の實権も無くなつて居た、廢帝の身の上などには、何んな事件が起らうと、介意はないかのやうに、夫に就いての批評や意見などは、一行も見當りませんでした。

夫から二三日の間、私は友人に逢ふ度に、若し相手が此の問題に觸れたなら、自分の心の中に抑へて居る憤慨を、洩し